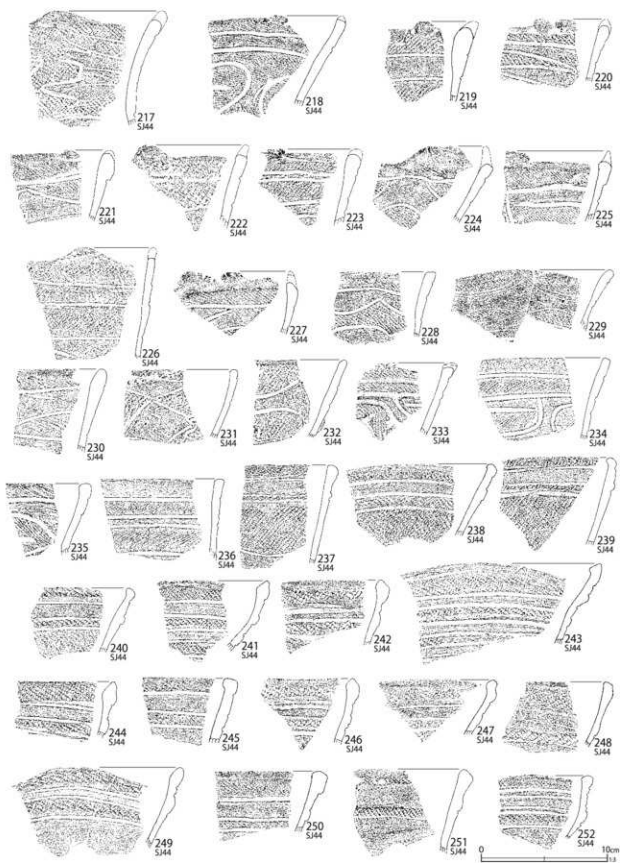
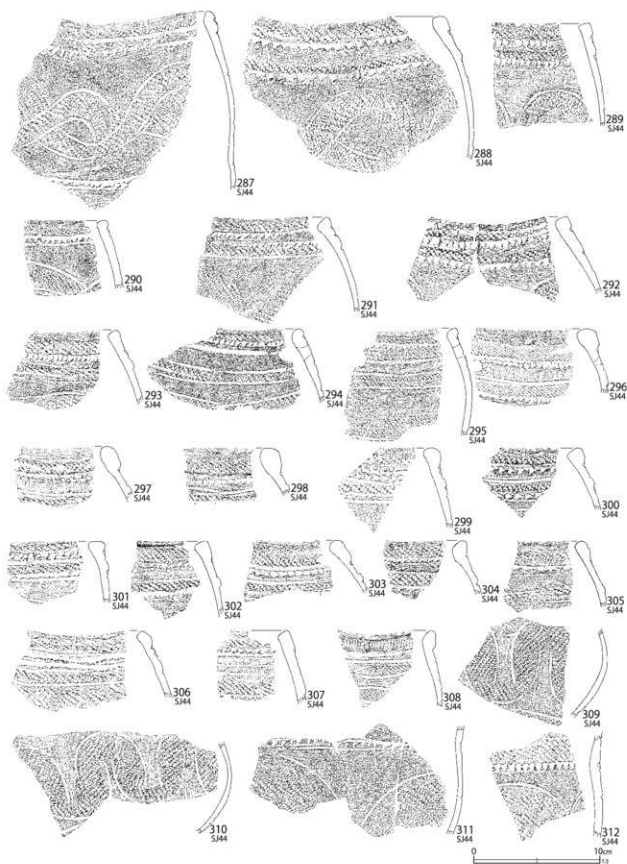




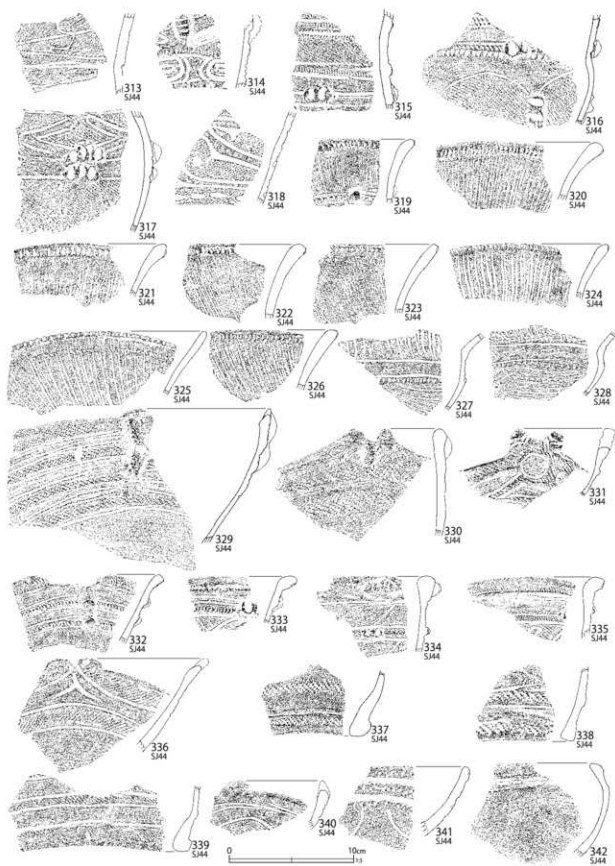
第280図 住居跡出土土器 (90)



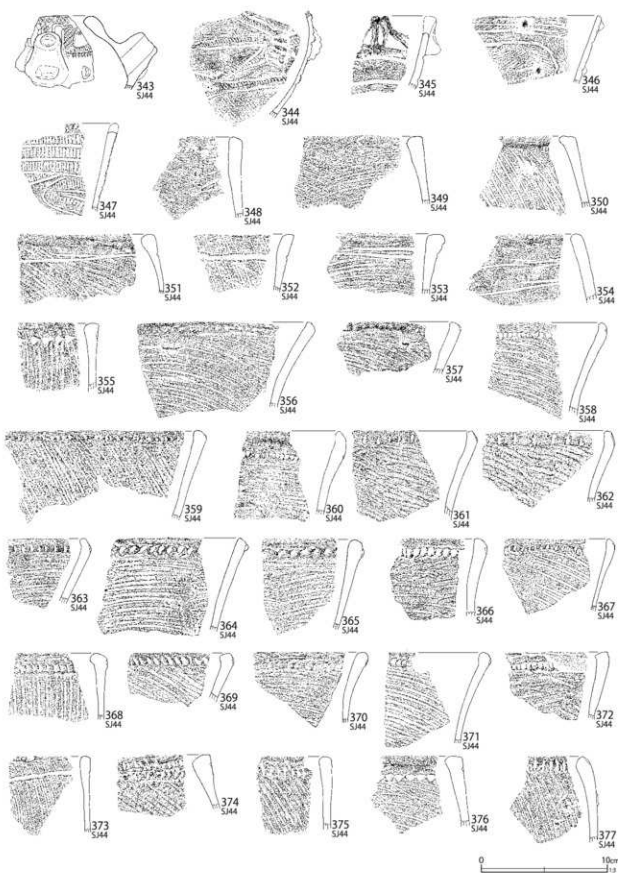
第281图 住居跡出土土器 (91)



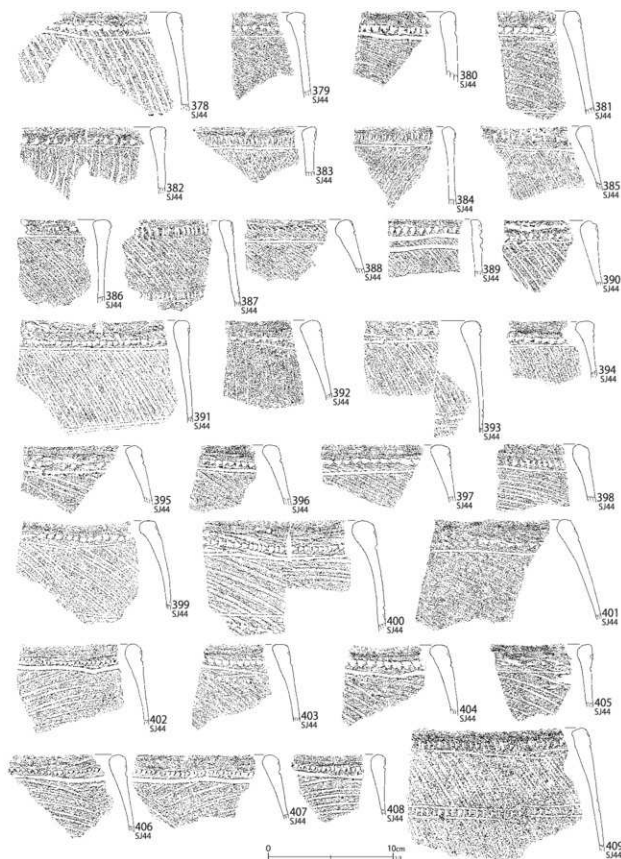
第282図 住居跡出土土器 (92)



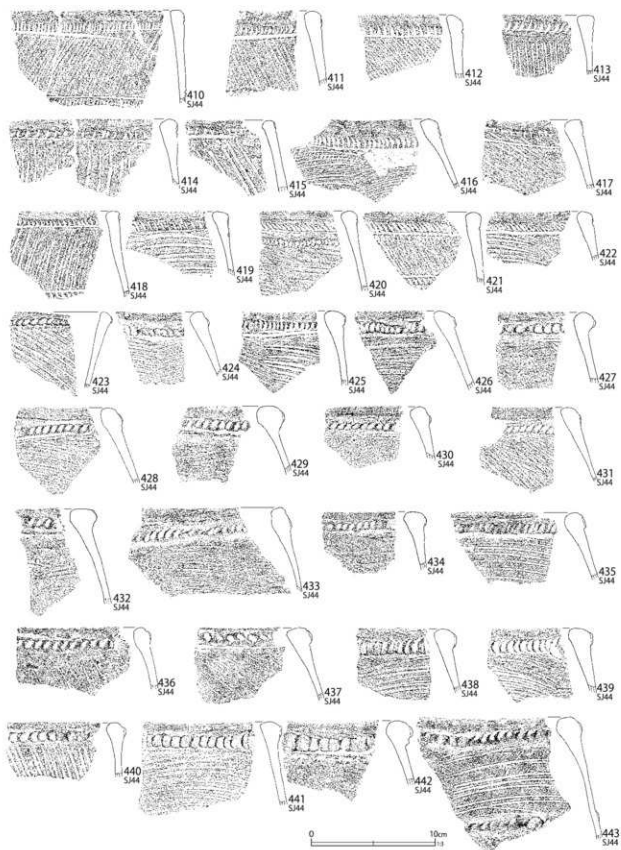
第283図 住居跡出土土器 (93)



第284図 住居跡出土土器 (94)



第285図 住居跡出土土器 (95)



第286図 住居跡出土土器 (96)



第287图 住居跡出土土器 (97)



第288圖 住居跡出土土器 (98)



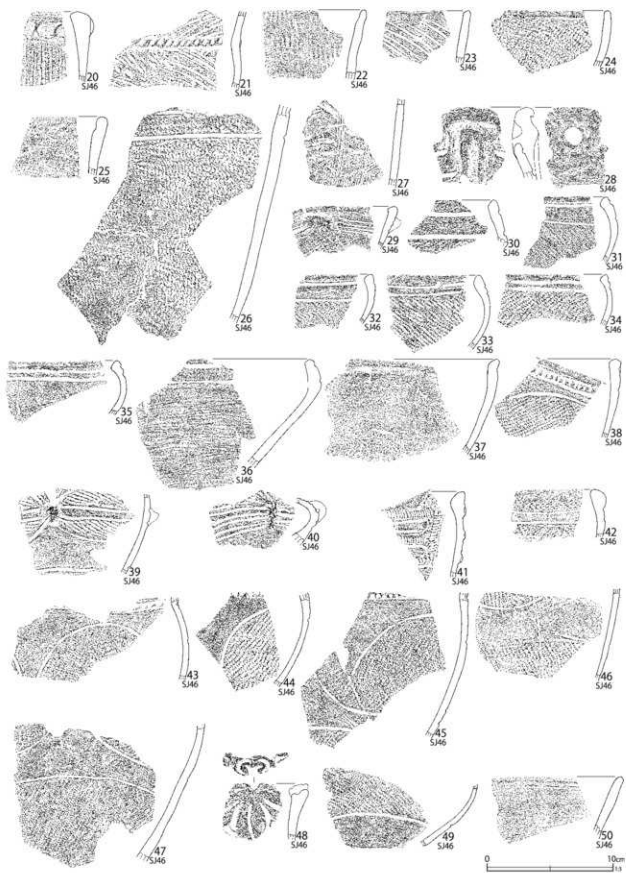
第289图 住居跡出土土器 (99)



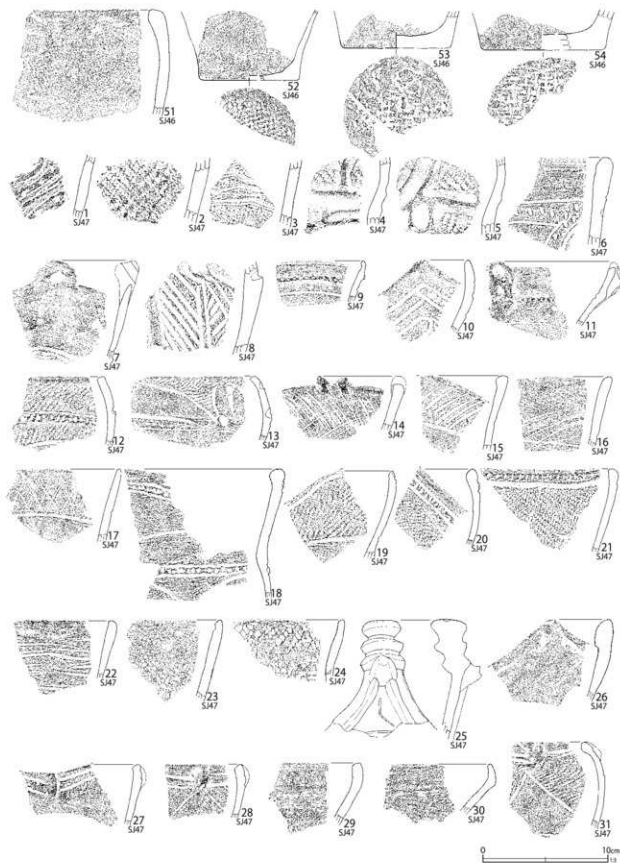
第290図 住居跡出土土器 (100)



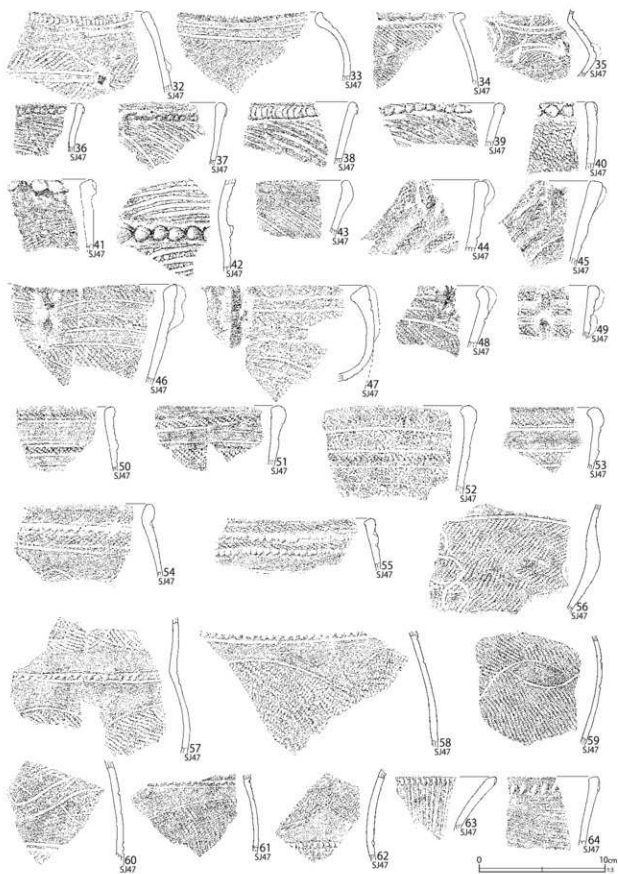
第291图 住居跡出土土器 (101)



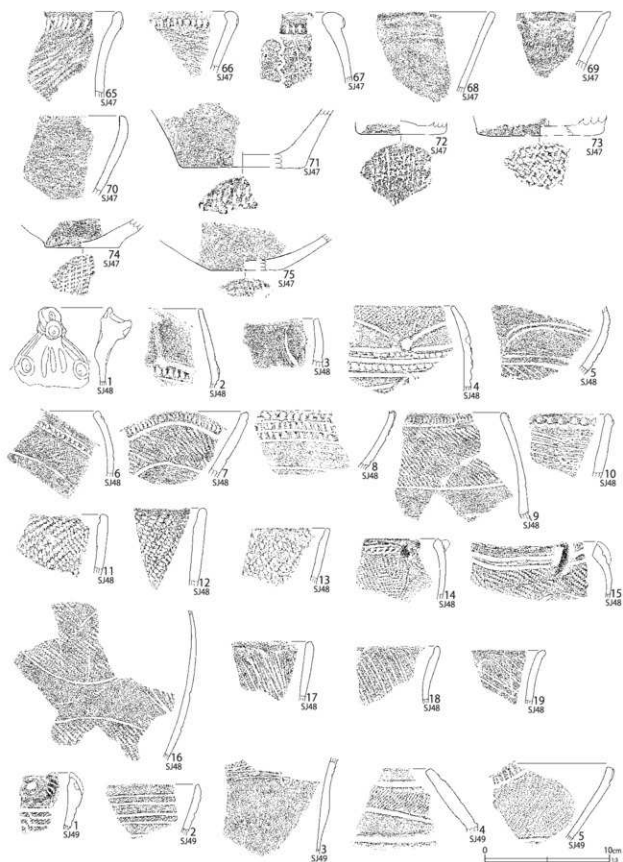
第292图 住居跡出土土器 (102)



第293図 住居跡出土土器 (103)



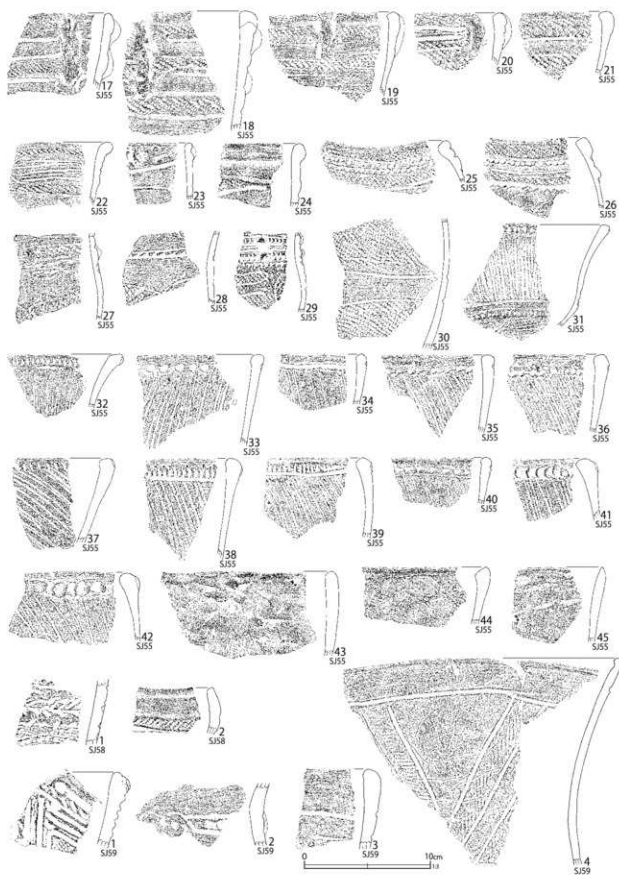
第294図 住居跡出土土器 (104)



第295図 住居跡出土土器 (105)



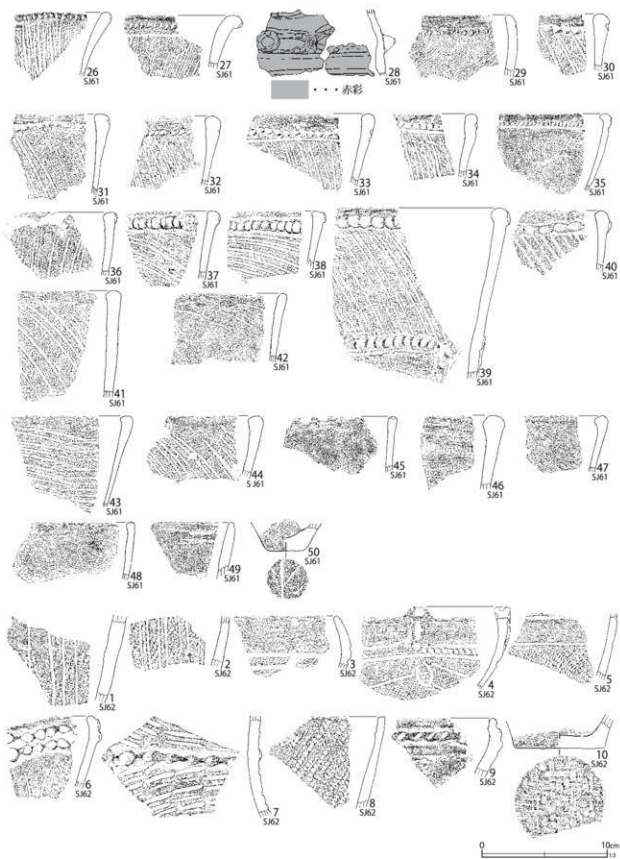
第296図 住居跡出土土器 (106)



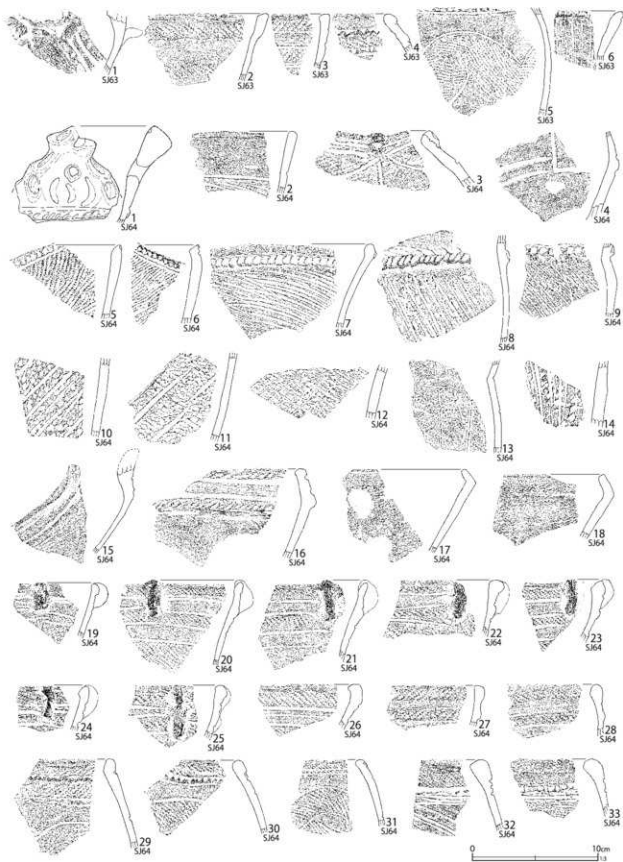
第297图 住居跡出土土器 (107)



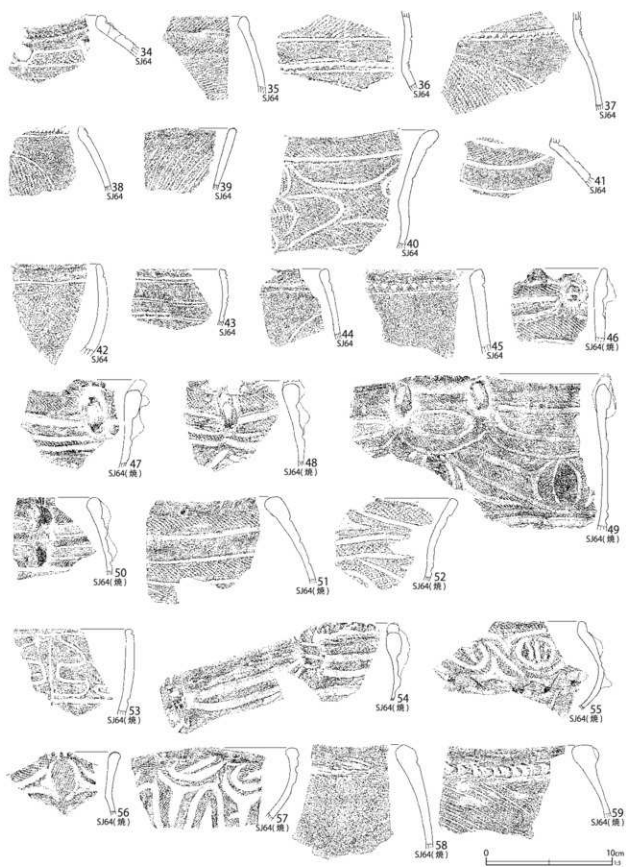
第298図 住居跡出土土器 (108)



第299図 住居跡出土土器 (109)



第300図 住居跡出土土器 (110)



第301図 住居跡出土土器 (111)



第302图 住居跡出土土器 (112)

(2) 土壇出土土器

第45号土壇出土土器 (第308図)

1は紐線文の土器で、曾谷式の粗製深鉢である。

2は安行3b式の大波状口縁深鉢である。波頂部は逆台形の突起に大小の豚鼻突起を重畳させ、帯縄文で三角形区画文を構成する。

3は水平口縁の深鉢で、口縁外面に縄文を施文して頸部に無文帯を持つ。晩期安行式の土器である。4は安行3b式で、注口土器の胴上半部である。

5・6は安行式の粗製土器で、後期末葉～晩期前葉の土器である。5は口縁外面に段を持って刻みを巡らせ、胴部は条線上に縦位の平行沈線文を描く。6は口縁に刻み隆帯を巡らせ、縦位の紡錘文を描いて列点文を充填する。7・8は無文の内湾口縁である。

第46号土壇出土土器 (第308図)

1は砲弾形の深鉢で、安行3a式である。口縁外面に帯縄文で弧状の区画を巡らせ、刻みを持つ横瘤を配する。2・3は水平口縁で、安行3a式であろう。4は浅鉢で、入り組み三叉文を描くものとみられる。安行3a～3b式である。5は砲弾形の粗製深鉢で、口縁外面に刻み隆帯を巡らせ、胴部は無文地に弧線文を描く。晩期安行式に伴う土器であろう。

第47号土壇出土土器 (第308図1、第308図)

第308図1は注口土器と思われる。口縁部～胴上半部まで残存する。口縁部には隆帯を巡らせて、突起を配する。頸部と胴部との境には眼鏡状隆帯を巡らせている。安行3a～3b式であろう。

第308図は破片資料である。

1は堀之内2式である。3単位波状口縁の深鉢口縁部で、刻み隆帯を巡らせ、波頂部にドーム状の突起を配する。2・3は安行1式で、2は大波状口縁深鉢、3は水平口縁深鉢である。4は砲弾形の深鉢で、口縁外面に帯縄文を巡らせて、胴上半部は無文地に弧線文を描く。晩期安行式であ

う。7も砲弾形の深鉢胴上半部であろう。上に帯縄文、下に押し引き文の区画を巡らせ、半円形の擦り消しモチーフを上下対向させている。後期末葉～晩期初頭の土器である。

5は水平口縁の深鉢で、蛇山系の文様を描く安行3b式である。6は浅鉢で、安行3a～3b式であろう。7は台付き鉢の脚台部で、後期安行式である。

8～18は安行式の粗製深鉢である。8は口縁部に装飾を持たず、9・10は口縁に押し引き文を巡らせる土器で、いずれも安行1式であろう。

11は押し引き文+沈線、12・13は刻み目文+沈線の区画を配する。後期安行式に伴うものか。14は口端に押圧を施し、器面に条痕を施す。15・17は半裁竹管状工具の刻みを施した隆帯、16は押圧隆帯を巡らせる。いずれも晩期前葉の土器であろう。18は擦り消し文様を描く安行3b式である。

19は台付き鉢の脚台部で、下端に凹線を巡らせる。晩期安行式であろう。20は無文の底部で、後期前葉～中葉の土器であろう。

第277号土壇出土土器 (第308図2、第308図)

第308図2は完形の注口土器である。扁平な円盤状の胴部から、内傾する頸部～口縁部が立ち上がる。口縁直下に多段の沈線を巡らせて刻みを施す。頸部には縄文を施文し、胴部は無文である。大洞C1式であろう。第308図は破片資料で、称名寺式であろう。

第280号土壇出土土器 (第308図3、第309図)

第308図3は無文の深鉢で、口縁部～胴中段まで残存する。口縁直下に段を持ち、口唇断面先細りとなる。胴上半部に粗いナデ調整を残す。

第309図は破片資料である。

1は堀之内1式、2は加曾利B2式である。3～8は安行3d式である。3は水平口縁上に小突起を持って、上面に短沈線を配する。胴部には入り組み文を中心とした文様を描く。4は波状口縁で、やはり入り組み文を描くものとみられる。

5は水平口縁で、口端上に沈線を巡らせる。胴部には鉤状のモチーフを描いている。6は浅鉢とみられ、胴部に5に類似の鉤状モチーフを描いている。7は扁平な三叉文を描く胴部である。8は台付き鉢で、同心円文を描く脚台部である。

9・10はいずれも細密沈線を地文とする。9は前浦系の文様を描く広口壺の肩部で、楕円形の区画内部に「の」の字文を描く。区画の接点には肉彫り風の三叉文を充填している。10は台付き鉢の脚台部である。球胴状で、下端が外に張り出すものとみられる。平行沈線の曲線的なモチーフを細密沈線で埋める。安行3c～3d式であろう。

11は浅鉢ないし台付き鉢であろう。口端上面及び内面に沈線を巡らせ、小突起を等間隔に配する。胴部には直線化した雲形文を描く。胴部内面にも1条の沈線を巡らせる。大洞C2式であろう。

12は折り返し口縁の深鉢である。口唇断面は先細りで、外面に指頭圧痕、内面に輪積み痕を残す。胴部には焼土工具先端を用いた粗い縦方向の調整痕を残す。13は口縁内湾する無文深鉢で、いずれも晩期安行式期の土器である。

第282号土壌出土土器 (第309図)

1は紐線文の深鉢で、胴部にはごくまばらな縄文を施文して横位の条線を施文する。加曾利B3～曾谷式に伴うものであろう。2は安行3a～3b式である。口縁下に弧線文を巡らせる。3は安行3b式で、上下に対向する弧状モチーフの間隙に対向三叉文を描いて、縄文を充填する。4は後期安行式の粗製深鉢で、口縁やや内湾して刻み目文を巡らせ、胴部に斜位の条線を施文する。

5・6は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う土器である。5は外面に指頭圧痕を残しており、折り返し部分の末端が外に反り返っている。6は丸みを帯びた折り返し口縁である。

7～9は無文土器である。7は頸部がくびれて口縁外屈し、輪積み痕を残す。8は浅鉢で、外面平滑に研磨する。9は砲弾形の深鉢で、比較的薄

手の器壁に寛による粗い調整痕を残す。

第283号土壌出土土器 (第309図)

1は口端部を欠失するが、キャリパー形の深鉢である。口縁外面に軽微な段を形成し、平滑に研磨している。胴上半部は無文地に浅い格子目文を描いている。曾谷式であろう。2は前浦式の粗型的な文様を描く安行3c式期の土器であろう。3は姥山系の深鉢で、安行3b式である。

4は安行式の粗製深鉢で、口縁外面に三角形の列点文を巡らせる。安行3c式に伴う土器か。

第285号土壌出土土器 (第309図)

遠部第一類で、曾谷～安行1式であろう。半裁竹管状工具の刻みを伴う隆帯を巡らせ、無文地に密な条線を施文する。

第287号土壌出土土器 (第303図4～第305図17、第309～310図)

第303図4は精製深鉢で、口縁部～胴下半部にかけて残存する。口唇断面肥厚して、口端上面は平坦に整形し扁平な一對の瘤を貼り付ける。頸部は縄文帯、胴上半部に幅の狭い文様帯を持って、単沈線の波頭文を描く。文様帯下端は帯縄文で区画する。安行3b式である。

5は細密沈線文の土器で、口縁部～胴中段まで残存する。砲弾形の器形で、口端上の一部に刻みを持つ。胴上半部に幾何文を描き、綾杉状の細密沈線を施文する。安行3b式である。

6は砲弾形の深鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。口縁直下に文様帯を持ち、上端を単沈線、下端を平行沈線で区画する。斜行する平行沈線文を巡らせて内部に米粒上の列点を描く。上下の区画に沿って弧状文を巡らせて内部に縄文を施文し、半円形の擦り消しモチーフを構成している。安行3c式であろう。

7は台付き鉢である。胴部中段～脚台との接続部分にかけて残存する。胴部中段には入り組み三叉文を描いて縄文を施文し、胴下半部は縄文帯となる。8・9は浅鉢である。8は口縁部～頸部に

かけて残存する。やや内湾しつつ開く口縁で、口端上に2～3個1単位の小突起を配する。無文で、胴部との境に沈線を巡らせる。

9は胴上半部～底部にかけて残存する。無文扁平の胴部で、頸部との境に沈線を巡らせる。

10～12は折り返し口縁の無文深鉢である。いずれも胴上半部に最大径を持つ砲弾形の器形で、口縁部～胴下半部にかけて残存する。10は口唇断面著しく肥厚し、口縁直下に丸みを帯びた段を持つ。篋状工具のナデ調整を施している。11は口唇断面角頭棒状で、外面に段を持つ。12は頸部がわずかに屈曲して口縁直立し、口唇断面先細りで、外面に段を持つ。

17は無文の深鉢で、口縁部～底部まで残存する。胴上半部に最大径を持ち、頸部が屈曲して、口縁は直立する。口端上に円形の貼り瘤を2個一対、4単位配している。13は無文深鉢胴部である。14～16は無文の深鉢底部である。

第309～310図は破片資料である。

1は加曾利B 3式の浅鉢である。胴上半部が丸く張り、口縁内湾して、外面に縄文帯を持つ。2は同時期の波状口縁深鉢である。口縁外面に2段の刻み目文を巡らせる。3は曾谷式の瓢形深鉢である。口縁外面に平行沈線文を巡らせて矮小な縦瘤を配する。

4は水平口縁深鉢で、安行3 b式である。水平口縁で、2個1単位の小突起を配し、口縁外面に縄文帯を持つ。胴部には単沈線で波頭文ないし入り組み文を描く。5・6もこれと類似の土器で、同一個体の可能性がある。

7は細密沈線の土器で、砲弾形の深鉢である。窓枠状の区画内部に弧線文を描く特有の幾何文を描き、細密沈線文を充填する。安行3 b式であろう。8も砲弾形の深鉢で、安行3 c式である。斜行文内部に列点文を描き、間隙を上下対向する弧線文で埋めて縄文を施文する。

9は折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴う

土器である。粘土紐を貼り付けて、そのまま内面のみ圧着したような粗雑なつくりで、強く外面に張り出している。10は無文の底部で、後期前葉～中葉の土器であろう。

11～13は製塩土器である。11・12は口縁部で、いずれも指頭で摘み出したような断面先細りの口唇である。11は篋状工具のナデ調整を施すが、12・13は輪積み痕を残している。

第288号土壌出土土器（第305図18、第310図）

第305図18は無文深鉢胴部である。篋状工具のナデ調整を、横～斜め方向に施している。

第310図は破片資料である。1は称名寺式である。2は疎な地文縄文上に横帯文を描き、半裁竹管状工具の波状文を垂下させる土器で、加曾利B 2式の遠部第三類である。3は加曾利B 2式の浅鉢であろう。盲孔と短沈線を持つ突起を配し、口縁外面に帯縄文、内面に凹線を巡らせる。4は後期安行式の砲弾形深鉢である。

5～10は晩期安行式である。5・6は外屈する深鉢口縁部で、5は縄文を持たず、口端上に小突起を配する。安行3 b～3 c式か。6は口縁外面に縄文を施文する。安行3 b～3 c式であろう。

7は安行3 b式である。波状口縁で、口縁に沿って平行沈線を巡らせ、鋭利な工具の刺突文を充填する。8も波状口縁深鉢で、帯縄文で三角形区画文を描く安行3 b式であろう。

9は円孔を中心に玉抱き三叉文を描く台付き鉢の脚台部で、安行3 a式である。10は擦り消し文様を描く砲弾形深鉢で、安行3 b式であろう。

11・12は安行式の粗製深鉢で、11は折り返し口縁上に列点文を巡らせ、12は押王隆帯を巡らせる。いずれも後期末～晩期前葉の土器であろう。13・14は無文土器である。13は砲弾形深鉢で、外面に輪積み痕を残した粗雑な折り返し口縁である。14は口端部に棒状工具の押圧を巡らせる。

第288・289号土壌出土土器（第310～311図）

1は安行1式の瓢形深鉢である。2は安行3 b

式の大波状口縁深鉢で、逆台形の突起前面に2段の豚鼻突起を配する。3・4は砲弾形深鉢で、3は無文地に刻みを持つ横瘤を配する安行3b～3c式、4は口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて刻みを持つ横瘤を配する安行2～3a式である。

5は頸部で屈曲して外屈する口縁で、口端上に突起が存在したものとみられる。安行3a～3b式である。6は安行3c式で、山形波状口縁に平行沈線の弧状モチーフを描いて米粒状の列点文を充填する。7は帯縄文と弧状の沈線を巡らせる薄手の胴部で、安行3a～3b式であろう。

8～11は安行式の粗製深鉢である。8は折り返し口縁に三角形の列点文を巡らせる。9・10は口縁外面に押圧隆帯を巡らせる。11は口縁外面に段を持って、刻み目文を巡らせる。

12は無文の砲弾形深鉢で、口縁外面に段を持つ。13は東北系の土器で、大洞BC式か。

第289号土壙出土土器 (第306図19・第306図20、第311図)

第306図19は大洞系の深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。胴部が張り出して頸部で屈曲し、口縁は直線的に外反する。水平口縁で粒状の小突起が並び、口縁直下に平行沈線を巡らせている。胴上半部には多段の平行沈線を巡らせ、中段に刻みを施している。頸部と胴部中段以下に縄文を施文する。一部に綾線文がみられる。大洞C1式であろう。

20は台付鉢で、胴下半部～脚台との接合部まで残存する。縄文を施文し、脚台との接点に平行沈線を巡らせている。安行3a～3b式であろう。

第311図は破片資料である。

1は曲線的な擦り消しモチーフで、粗大な無節縄文を施文する。前涌系の土器か。2は大波状口縁深鉢で、胴部中段に楕円形の区画文を巡らせて、刻みを持つ横瘤を配する。安行3a～3b式であろう。

3は無文地に単沈線の入り組み文を描く土器で、安行3b～3c式である。4は浅鉢で、沈線間に単列・複列の列点文を充填する安行3c式である。5は安行3b式の細密沈線文土器で、小波状口縁の波頂部に押圧を施す。6は安行式の粗製深鉢で、口縁外面に連続押圧を伴う隆帯を巡らせる。

7は東北系の浅鉢口縁部で、大洞BC式であろう。8・9は地文縄文のみの深鉢胴部で、綾線文を重畳させており、やはり大洞系の土器であろう。

10・11は無文土器である。10は胴張りで頸部屈曲し、口縁が短く外反する。11は薄手の器壁で、口端外屈する。

第290号土壙出土土器 (第306図21)

第306図21は無文の深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾する。折り返し口縁で、口唇断面先細りとなる。

第291号土壙出土土器 (第311図)

加曾利B3式の浅鉢である。口縁外面に平行沈線を巡らせ、胴上半部を縄文帯とする。

第292号土壙出土土器 (第311図)

1は安行式の大波状口縁深鉢で、波頂部に刻みを持つ縦瘤を配し、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせる安行3a式である。2は擦り消し文様を描く土器で、安行3a～3b式であろう。

3は安行式の粗製深鉢である。口縁外面に押圧隆帯を巡らせ、胴上半部に平行沈線文を描いて、列点文を充填する。安行3b式か。4は砲弾形の深鉢で、口縁部に裝飾を持たず、横位の条線を施文する。安行3b式以降の粗製土器であろう。

第293号土壙出土土器 (第311図)

1～3は安行式の砲弾形深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、1・2は刻みを持つ縦瘤を配する。安行2～3a式であろう。

4は安行3c式である。平行沈線の曲線的なモチーフで、内部に三角形の刺突文を充填する。5

は無文地に浅い沈線で粗雑な三叉文を描く。やはり安行3c式か。6は無文の浅鉢で、晩期前葉～中葉の土器であろう。

第294号土壙出土土器 (第311図)

1～4は加曾利B2式である。1は精製深鉢で、横帯文に括弧状のモチーフを配する。2は無文地に格子目文を描く口縁部で遠部第四類である。3は粗雑な地文縄文上に条線を描く遠部第一類、4は紐線文の口縁部で、疎な縄文を施文し、内面に2条の沈線を巡らせる。

第296号土壙出土土器 (第311図)

1は半円形の擦り消しモチーフを巡らせる土器で、安行3a～3b式か。2は安行3c～3d式であろう。

第297号土壙出土土器 (第311図)

無文折り返し口縁の深鉢で、晩期の粗製土器であろう。

第298号土壙出土土器 (第311図)

1は曾谷式の浅鉢であろう。内湾口縁で、外面に縄文を施文し、平行沈線を巡らせる。2は加曾利B3式の浅鉢胴中段に帯縄文を巡らせ、若干の無文部を挟んで丸底の底面も縄文帯となる。

第299号土壙出土土器 (第312図)

いずれも紐線文の土器で、加曾利B式の粗製土器である。1は口縁部で粗い縄文を施文する。2は胴部中段のくびれ部分で押圧隆帯を巡らせ、粗い地文縄文上に斜位の条線を施文する。

第300号土壙出土土器 (第312図)

後期安行式の粗製深鉢である。口縁に押し引き文+沈線の区画を描き、斜位の条線を施文する。

第301号土壙出土土器 (第312図)

1・2は安行1式である。1は山形波状口縁で、縦帯と帯縄文の区画を重畳させる。2は瓢形深鉢で、帯縄文+押し引き文の区画に円形の貼り瘤を配する。

3～5は安行3b式の台付き鉢であろう。3は波状口縁で、口縁部と胴下半部に縄文帯を持って、

間隙に入り組み三叉文を描く。4はこれと同一個体とみられる胴下半部である。5も山形波状口縁で、波頂部に双頭状の突起を配する。口縁外面にはステッキ状のモチーフを巡らせて、頸部の区画線との間に縄文を施文する。

6は安行3c式の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、頸部屈曲して口縁直立する。口縁外面には多段の列点文を巡らせ、胴部にも平行沈線+列点文の区画を巡らせる。

7は安行1式の粗製深鉢であろう。口縁外傾して外面に刻み目文を巡らせ、胴部は無文地に斜位の条線を施文する。8は無文土器で、縦位のケズリ調整の後、平滑に研磨している。

第304号土壙出土土器 (第312図)

1は後期安行式の精製深鉢胴部で、複数の押し引き文を巡らせている。2は同時期の粗製深鉢で、押し引き文+沈線の区画を巡らせる口縁部である。3は加曾利B3～曾谷式の口縁部で、外面に3条の沈線を巡らせる。

第305号土壙出土土器 (第312図)

1は早期末葉の土器であろう。0段多条の原体で急角度の羽状縄文を構成する。2は諸磯a式で、半截竹管状工具の平行沈線を重畳させる。

第306号土壙出土土器 (第306図22、第312図)

第306図22は堀之内2式の精製深鉢で、口縁部～胴部中段まで残存する。胴部～口縁にかけて外反しつつ開く朝顔形の深鉢である。3単位の波状口縁で、口縁外面に隆帯や突起を持たず、胴上半部にパネル文を描く。

第312図は破片資料である。

1は加曾利EⅢ式、2は称名寺～堀之内1式である。3・4は堀之内2式である。平行沈線でパネル文を描いて縄文を充填する。3は口縁部で、口端部内屈し、刻み隆帯の区画は省略している。

5・6は擦り消し縄文の胴部で、後期の土器であろう。7は加曾利B式の粗製土器である。

第308号土壙出土土器 (第312図)

1は加曾利BⅢ～Ⅳ式、2は堀之内2式である。
3は後期安行式の粗製深鉢で、押し引き文+沈線の区画を巡らせる口縁部である。

第310号土壌出土土器 (第306図23)

大洞系の注口土器で、底部を欠失する。胴部は扁平円盤状で、中段が屈曲してB突起を巡らせる。頸部は内傾しつつ立ち上り、扁平化した羊歯状文を描く。口縁上の注口部に対応する部分のみB突起を配している。大洞C1式か。

第312号土壌出土土器 (第312図)

1は安行3c式で、波状口縁の深鉢である。複列の列点文を伴う平行沈線で三角形の区画を構成し、大柄の三叉文を配するものとみられる。

2・3は安行3c～3d式である。4は2個一対の突起を配する無文の口縁部で、晩期安行式に伴う土器であろう。

第314号土壌出土土器 (第313図)

2・3は堀之内2式の精製深鉢胴部、1は縄文のみの深鉢胴部で、同時期のものであろう。

第315号土壌出土土器 (第313図)

1は安行式の砲弾形深鉢口縁部であろう。2は加曾利B2式の鉢で、口縁直下に縄文を施文している。3は加曾利B3式の瓢形深鉢であろう。口縁に刻み目文を巡らせ、胴上半部に対向弧線文を描いて縄文を施文する。4は無文の深鉢口縁部で後～晩期の土器である。

第318号土壌出土土器 (第306図24・25、第313図)

第306図24は浅鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。胴上半部が「く」の字に張り出し、平行沈線+列点文を巡らせる。胴上半部に粗放な弧線文を巡らせて縄文を施文し、交点に括弧状のモチーフを配している。加曾利B2式である。

25は深鉢で、胴部中段のみ残存する。破片上方に平行沈線+列点の区画が巡る。全面に縦位の研磨を施すが、区画に接する部分のみさらに横位の研磨を重ねている。加曾利B2式であろう。

第313図は破片資料である。

1～6は加曾利B2式の精製深鉢である。胴上半部に横帯文や弧線文を巡らせて、括弧状のモチーフを重畳させる。

7・8は水平口縁の深鉢で、胴上半部に横帯文を描いて、7は平行沈線の斜行文、3は弧線文を巡らせている。加曾利B2式か。

9は加曾利B2式で遠部第一類である。粗雑な縄文を施文する。胴部中段に押圧隆帯の区画を巡らせて、区画から上の半み截竹管状工具の短沈線を重畳させる。

10は地文縄文のみの深鉢口縁部で、後期前葉～中葉の土器であろう。11・12は無文の底部である。いずれも後期前葉～中葉の土器とみられ、11は据張りの深鉢、12は浅鉢の可能性はある。

第319号土壌出土土器 (第313図)

1は安行1式の粗製深鉢であろう。外反口縁で、無文地に斜位の条線を施文する。2は瓢形深鉢で、口縁外面に刻み目文を巡らせる。加曾利B3～曾谷式である。3は横位の沈線文を巡らせる胴部で、加曾利B式であろう。

第326号土壌出土土器 (第313～314図)

1は称名寺式、2～6は堀之内1式であろう。7～11は堀之内2式である。7・8は外反口縁で、朝顔形の精製深鉢である。胴上半部に三角形のパネル文を描く。口縁に隆帯の区画はみられない。9はパネル文の一部、10は入り組み文であろう。11は集合沈線により粗雑なパネル文を描く。

12は表裏に条痕文を施文する口縁部で、早期後半の土器であろう。

第327号土壌出土土器 (第306図26、第314図)

第306図26は水平口縁の深鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。胴部中段にくびれを持ち、口縁外反する。口唇断面肥厚して、内面に稜を形成する。

口縁外面に篋状工具の刻みを巡らせ、胴部中段には同一工具の平行沈線+刻みの区画を巡らせる。区画の上下に方向を変えた条線を施文するが、

条線の間隙にごくまばらな縄文が観察される。加曾利B3～曾谷式に伴う粗製土器であろう。

第314図は破片資料である。

1・2は堀之内1式、3は堀之内2式である。4は加曾利B1式で、横帯文と口縁外面の区画との間に「の」の字状の単位文を配する。5～7は加曾利B2式である。5は水平口縁の浅鉢、6は胴部が「く」の字に張り出す鉢、7は胴部に斜行沈線文が巡る遠部第二類である。

8は曾谷式である。キャリバー形の深鉢で、胴上半部と下半部にそれぞれ斜行沈線文を巡らせる。器面は平滑に調整している。

9・10は紐線文の土器で、加曾利B3～安行1式であろう。疎らな縄文を施文した上に密な横位の条線を施文している。11は安行1式の粗製深鉢であろう。口縁やや外傾して口唇断面肥厚し、外面に1条の沈線を巡らせている。地文は縦位の条線である。

第328号土壙出土土器（第307図27、第314図）

第307図27は水平口縁の深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴上半部に最大径を持ち、口縁強く内湾する。口唇断面肥厚し、外面に段を形成する。横楕円の区画を2段に巡らせて、接点には蛇行沈線文と括弧状のモチーフを交互配置する。前浦式ないしこれに先行する時期の土器であろう。

第314図は破片資料である。

1は諸磯a式である。横位の平行沈線と小波状文を交互施文する。2は曾谷式である。胴部中段のくびれを挟んで、上下に鋭利な工具の斜行沈線文を配置する。

3は水平口縁の深鉢で、安行1式であろう。口縁外面に帯縄文と幅広の凹線の区画を巡らせている。

4は無文の深鉢口縁部で、口端に小突起を配する。晩期安行式に伴うものであろう。

5は安行1式の瓢形深鉢で、帯縄文と押し引き

文の区画を巡らせ、胴上半部に対向弧線文を描いて縄文を施文する。6は精製深鉢の胴部中段で、後期安行式に伴うものであろう。

第329号土壙出土土器（第314図）

安行1式の瓢形深鉢である。口縁外面に帯縄文と押し引き文の区画を巡らせる。

第331号土壙出土土器（第307図28、第314図）

第307図28は楕円形の浅鉢で、口縁部～底部まで残存する。緩やかな4単位の波状口縁で、波頂部に対をなす鱗状突起を配する。胴部には2段の紡錘文と鋸歯文を交互配置する。安行2式である。

第314図は破片資料である。

1は精製深鉢の胴部で、後期安行式である。多段の帯縄文を巡らせ、胴上半部に斜行沈線文を施文する。

2は安行2式の台付き鉢胴下半部で、横位の弧状沈線を施文し、上端を帯縄文で区画して豚鼻突起を配する。

3は砲弾形深鉢である。折り返し口縁直下に鋭利な工具の平行沈線を巡らせ、胴上半部には条線を施文する。後期末～晩期前葉の土器であろう。

第338号土壙出土土器（第314図）

1は砲弾形深鉢ないし注口土器で、安行3a式である。水平口縁上に刻みを持つ縦瘤と突起を重ねさせる。胴上半部には擦り消し縄文による対向三叉文を描くものと思われる。2は砲弾形の深鉢で、安行3a～3b式であろう。

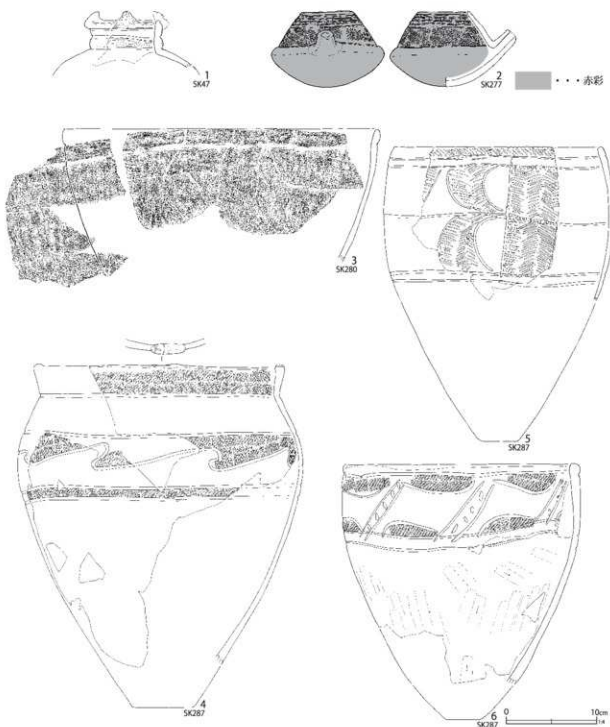
3・4は安行式の粗製土器である。砲弾形の深鉢で、後期末～晩期前葉の土器であろう。3は口縁外面に押し引き文と沈線の区画を巡らせる。4は口縁部に装飾を持たない土器で、胴部に斜位の条線を施文する。

5は砲弾形の精製深鉢胴部である。胴部中段に対向弧線文を巡らせて縄文を充填し、上は半截竹管状工具の刻みを持つ隆帯、下を横位の沈線で区画する。胴下半部には粗雑な斜位の条線を施文する。晩期前葉の土器であろう。

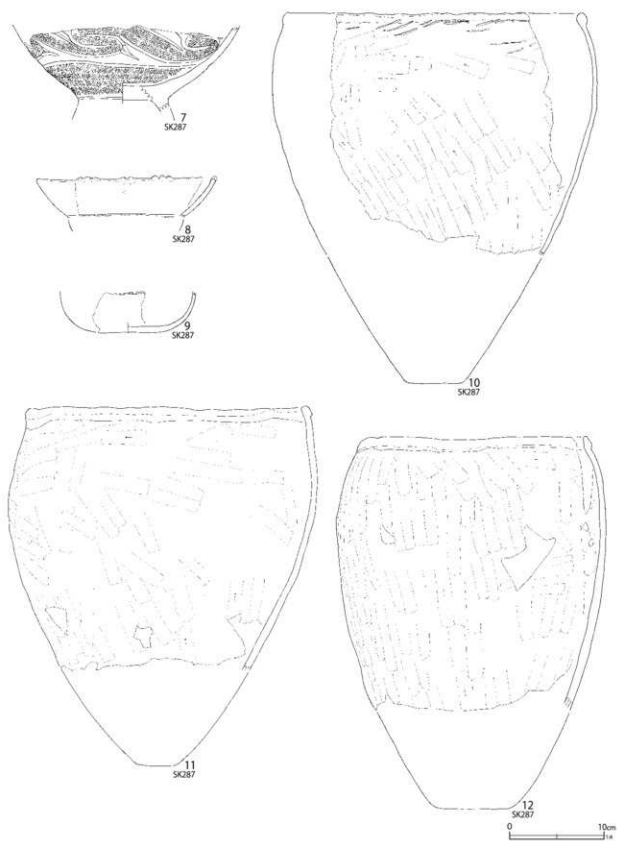
第43号住居跡内第5号土壇出土土器 (第307図29)

第307図29は安行式の精製深鉢で、胴下半部～底部まで残存する。胴下半部には対向弧線文を描

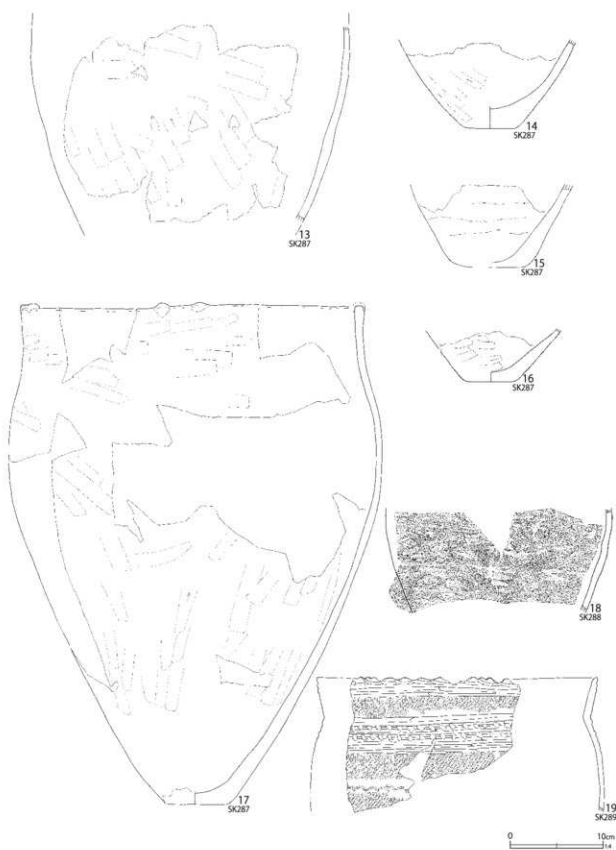
いて縄文を充填する。底部付近は縄文帯となって、上端を横位の沈線で区画する。



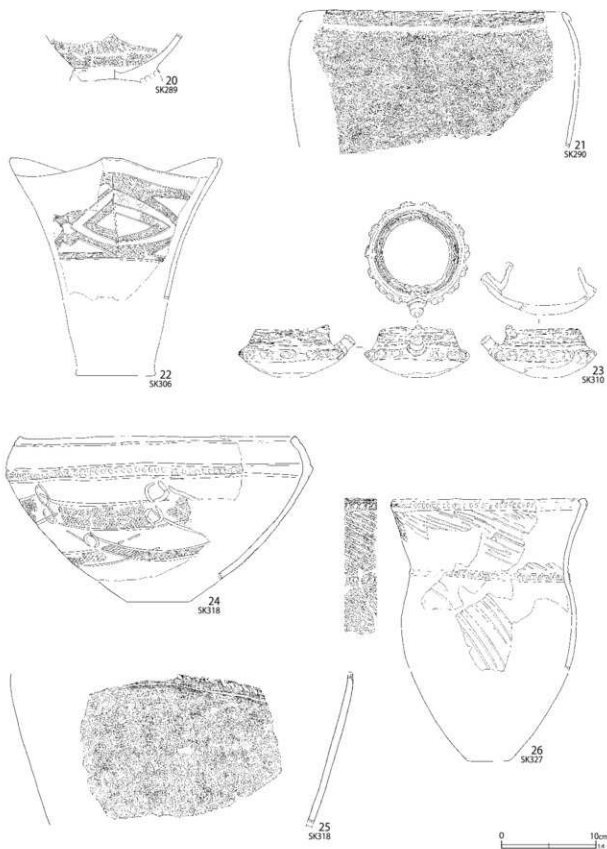
第303図 土壇出土土器 (1)



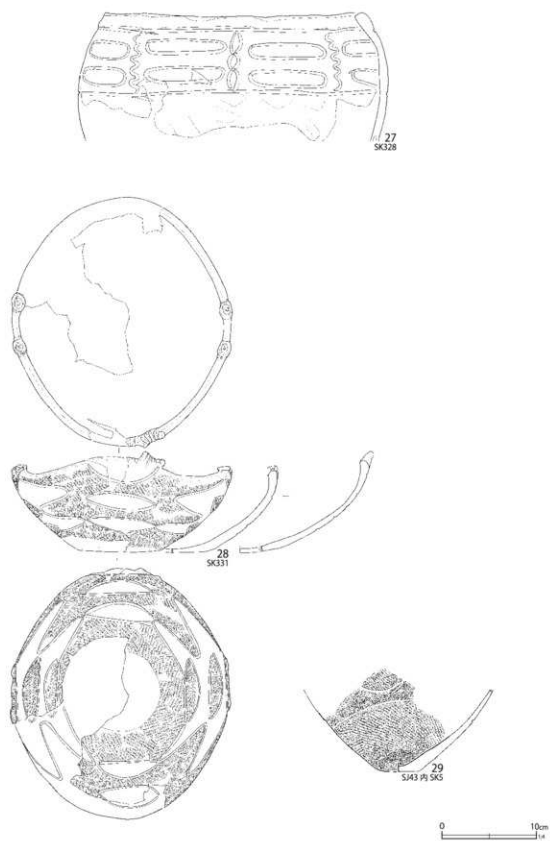
第304図 土曜出土土器（2）



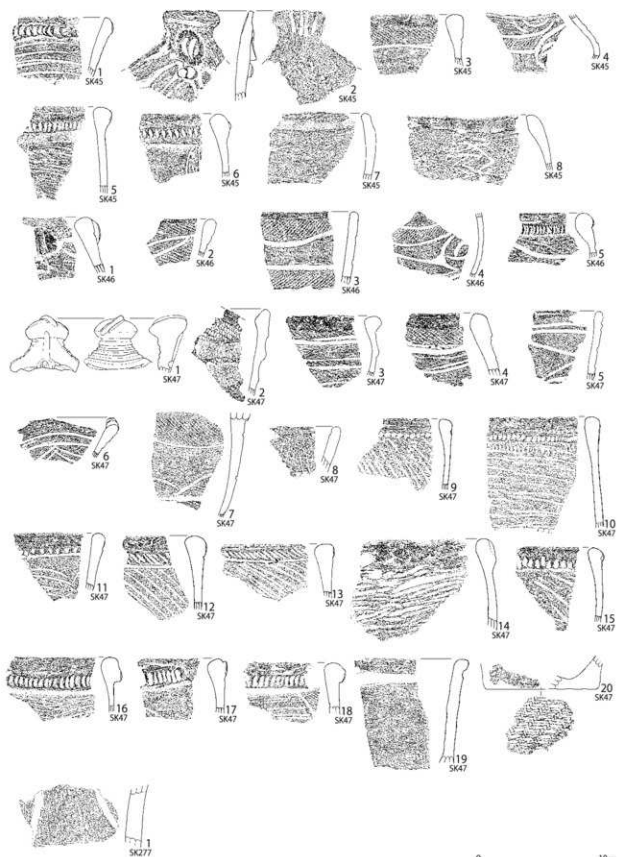
第305図 土壌出土土器 (3)



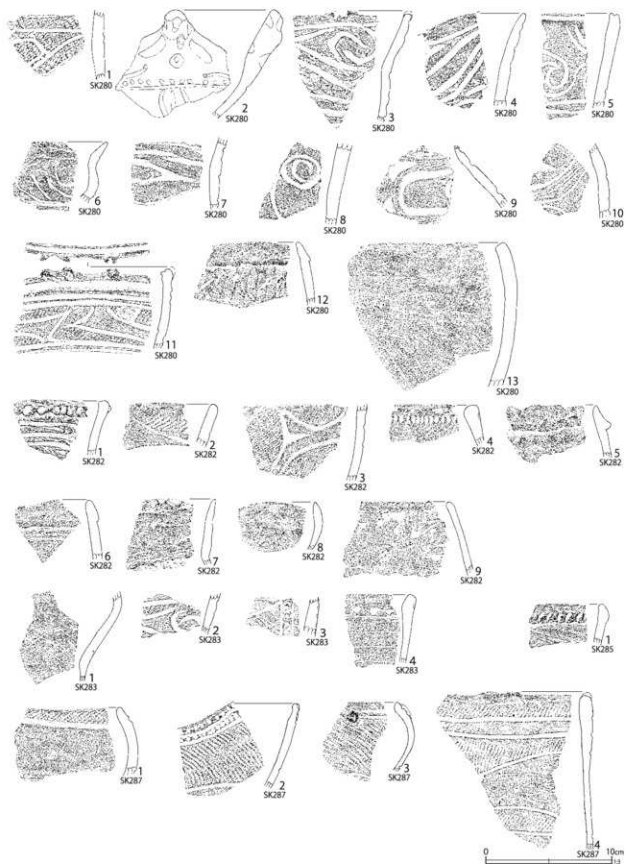
第306图 土曜出土土器(4)



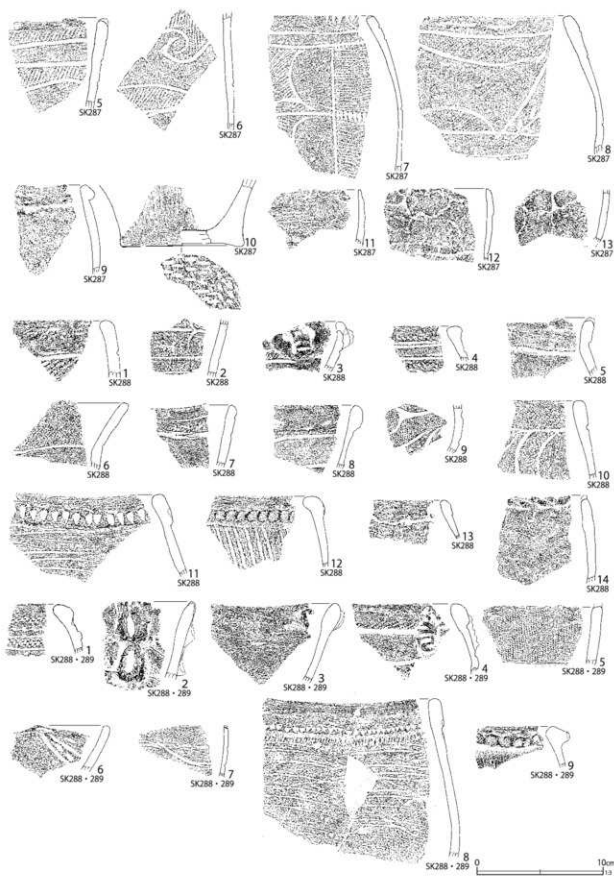
第307図 土壇出土土器 (5)



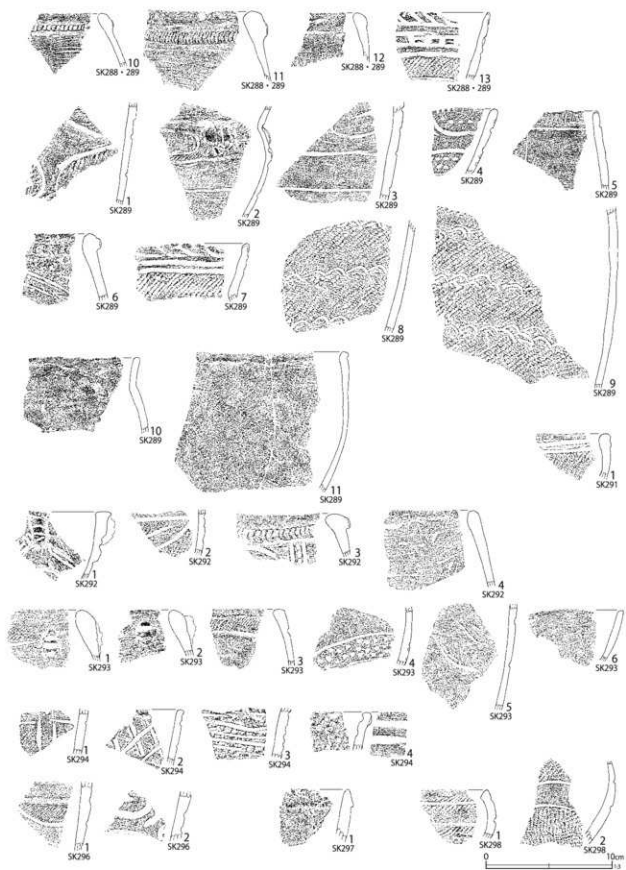
第308図 土曜出土土器 (6)



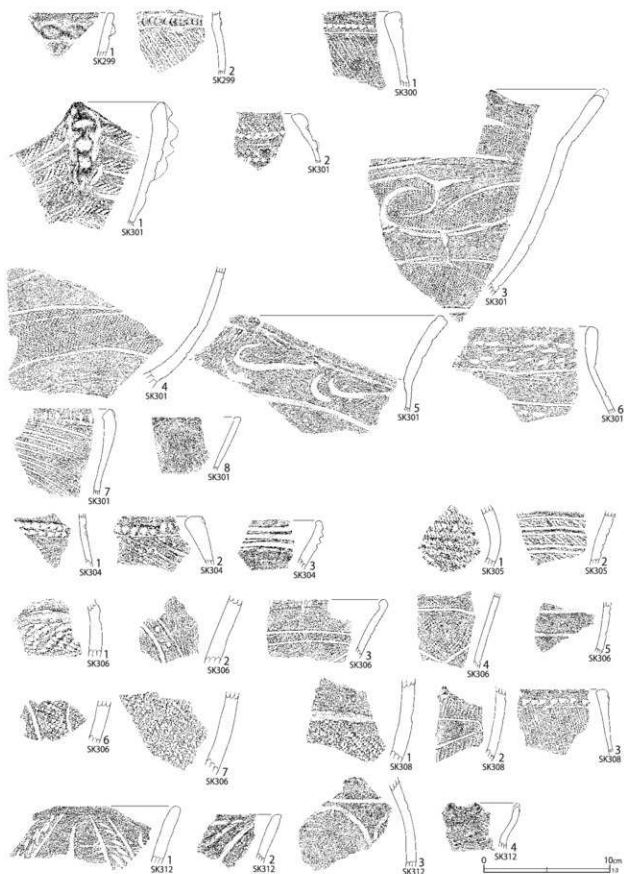
第309図 土壌出土土器 (7)



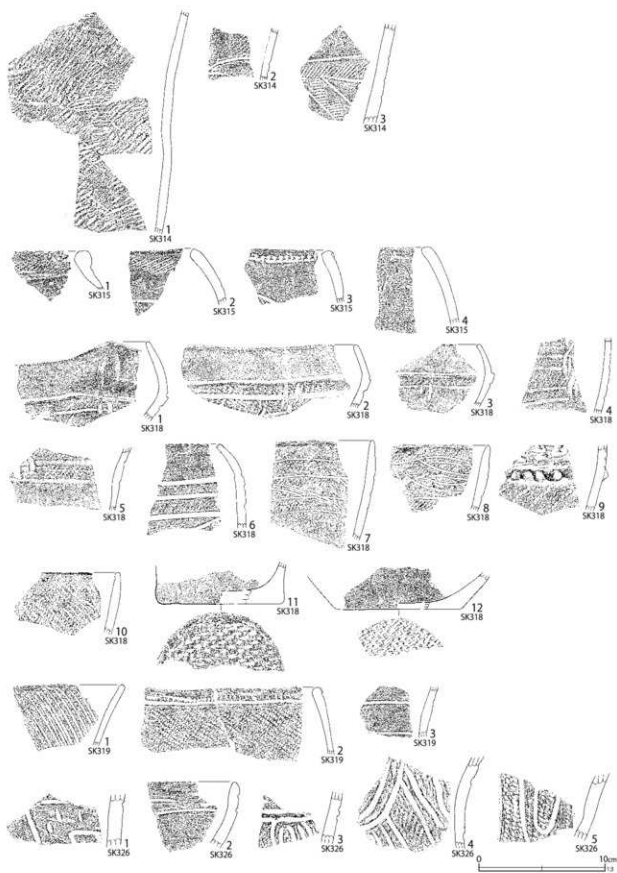
第310図 土壇出土土器（8）



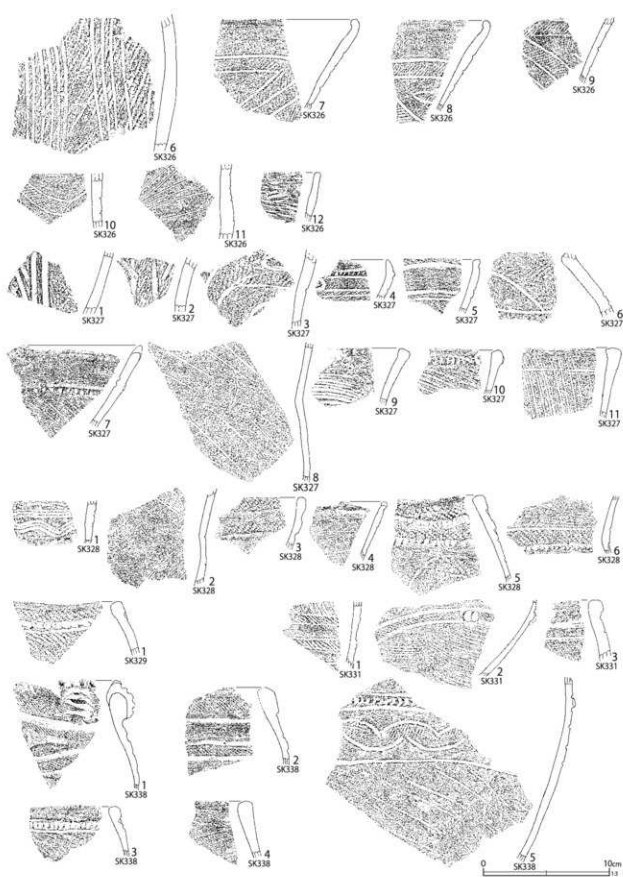
第311図 土曜出土土器 (9)



第312図 土曜出土土器 (10)



第313図 土坑出土土器 (11)



第314图 土壙出土土器 (12)

(3) 遺物集中出土土器

遺物集中9出土土器 (第315図1～第316図4、第319図)

1～4は無文の深鉢である。1は胴部中段を欠失する。胴上半部に最大径を持ち、頸部はくびれて口縁短く外屈する。水平口縁で、口端に5個1単位の押圧を配する。

2は胴部中段以下を欠失する。胴上半部に最大径を持ち、頸部はくびれて、口縁は内湾しつつ立ち上がる。3は口縁～胴部中段まで残存する。緩やかに内湾しつつ立ち上がり、頸部は屈曲して、口縁短く外反する。

4は砲弾形の深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾する。口端上面は平坦に整形している。

第319図は破片資料である。1は大波状口縁深鉢で、安行3b式である。幅広い帯縄文で三角形区画文を描く。2は同心円文を中心に三叉文を描く。安行3a～3b式の鉢ないし注口土器か。

3は細密沈線文の土器で、安行3b式であろう。4・5は安行式の粗製深鉢である。4は平行沈線間に列点文を充填し、5は擦り消し文様を描く。いずれも安行3b式であろう。

遺物集中10出土土器 (第316図5～第317図9、第319図)

第316図5～8は無文の深鉢である。5は胴下半部を欠失する。胴上半部に最大径を持ち、頸部は「く」の字にくびれて、口縁は短く内湾する。水平口縁で、2個1単位の山形突起を配する。

6は折り返し口縁の深鉢である。胴下半部を欠失する。胴上半部に最大径を持ち、口縁は軽微に屈曲して直立する。口端上面を平坦に整形している。7は底部を欠失する。砲弾形の深鉢で、胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して、口端上面を平坦に整形している。8は無文の深鉢底部である。9は台付き鉢の脚台部で、安行3b式である。中段がやや膨れる円筒形で、下端部は屈曲して直線

的に開く。三角形の透かしによる入り組み三叉文を描いて縄文を充填し、中央に円孔を穿つ。

第319図は破片資料である。

1は安行3b式の大波状口縁深鉢である。波頂部に豚鼻突起を重ねさせ、胴部に帯縄文で三角形区画文を描く。2は同心円文と菱形の区画文を描く姥山系の土器で、やはり安行3b式であろう。

3は晩期安行式の粗製土器で、口縁に押し引き文と沈線文を巡らせる。地文条線は持たない。4は無文の砲弾形深鉢で、晩期の土器であろう。

遺物集中12出土土器 (第317図9～15、第319～320図)

第317図10は砲弾形深鉢ないし注口土器で、安行3a式であろう。口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴上半部に最大径を持ち、口縁は内湾する。水平口縁で、刻みを伴う縦瘤を配して円孔を穿つ。胴上半部に縦瘤を配して入り組み文で連繋し、余白を三叉文で埋めている。

11は精製深鉢で、口縁部と底部を欠失する。胴部中段に軽微な屈曲を持つほかは変化に乏しい単調な器形で、幅広い帯縄文を多段に巡らせている。安行3a～3b式であろう。

12～14は安行式の粗製土器である。胴上半部に最大径を持って口縁内湾する砲弾形深鉢である。いずれも晩期前葉の土器とみられる。12は口縁部～底部まで残存する。口縁部と胴上半部に刻み隆帯を巡らせ、間に弧線文を描いている。

13は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁部と胴上半部に刻み隆帯を巡らせ、縦位の蛇行沈線文を挟んで対弧文を描く。14は口縁部～胴上半部まで残存する。縦位の蛇行沈線文を挟んで括弧状のモチーフを描く。地文条線を持たない。

15は無文の深鉢胴下半部で、晩期の土器であろう。

第319～320図は破片資料である。

1・2は紐線文の土器で、加曾利B～曾谷式であろう。口縁外面に押圧隆帯を巡らせ、ごく浅い

地文縄文の上に密な条線を施文する。1は遠部第一類、2は遠部第三類である。

3～6は大波状口縁深鉢で、安行3a式である。胴上半部は帯縄文で三角形区画を描いて交点に豚鼻突起を配し、胴部中段には帯縄文の区画を多段に巡らせて豚鼻突起を配する。7は水平口縁深鉢で、やはり安行3a式であろう。口縁に縦瘤と豚鼻突起を重畳させて、帯縄文を巡らせる。

8は小型の浅鉢で、安行3a式であろう。双頭状の波状口縁で外面に弧状の区画を巡らせ、直線的な玉抱き三叉文を描く。9・10・12は台付き鉢で、安行3a～3b式であろう。9は帯縄文の区画を多段に巡らせて豚鼻突起を配する。10は胴下半部に縄文帯を持ち、上下を沈線で区画する。12は口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、胴部中段に横瘤を配して入り組み文と三叉文を描く。

13～19は晩期安行式に伴う粗製土器である。砲弾形の深鉢で、口縁内湾し口唇断面肥厚する。13は口縁外面に列点文と沈線を巡らせる。14～17は刻み隆帯や押圧隆帯を巡らせて、胴上半部に文様帯を持つ。18は胴部破片で、胴上半部に押圧隆帯を巡らせて、上下に方向の異なる条線を施文する。19は条線施文の底部で、底面の網代痕を掻き消したものとみられる。

遺物集中16出土土器（第318図16～20、第320図）

第318図16は水平口縁の精製深鉢で、口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴部中段に最大径を持って、胴上半部はほぼ直立し、口縁外反する。水平口縁上に2個一對の縦瘤を配し、鱗状の突起で連結する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、胴上半部は縦S字の沈線文を斜行沈線で連繫し、余白に三叉文を配する。安行3a式である。

17は砲弾形の深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。口縁著しく肥厚して、外面に刻み隆帯を巡らせる。胴上半部には縦位の蛇行沈線文を上下対向する弧線文で連繫して縄文を充填し、刻み隆帯を挟んで胴部中段にも対向弧線文を巡らせ

る。胴下半部には斜位の条線を施文する。安行3a～3b式か。

18は台付き鉢で、体部のみ残存する。緩やかに内湾しつつ開く単調な器形で、口縁に縄文帯を持ち、胴上半部には入り組み文を描いて、余白に三叉文を配する。安行3a式であろう。

19は浅鉢である。緩やかな波状口縁で、波頂部に矮小化した豚鼻突起を配し、これを起点に左右に弧線文を巡らせる。胴部には曲線の擦り消し文様を描いている。安行3b式か。

第320図は破片資料である。

1は精製深鉢胴部で、安行3a式である。胴上半部には東北地方の新地式の流れをくむ入り組み文を描くものとみられ、文様帯下端は帯縄文で閉塞して、胴下半部には条線を施文する。2は台付き鉢の体部である。入り組み文を描いて余白を三叉文で埋め、縄文を充填する。3・4は安行式の粗製深鉢で、内湾口縁の外面に押圧隆帯を巡らせ、3は胴上半部に平行沈線文を描いている。

5は内湾口縁の無文深鉢である。6～9は製塩土器で、口唇断面は、6・7が水平に切り離したような角頭棒状、8は鋭角な外削ぎ状、9は指頭で摘み出したような先細りとなっている。

遺物集中18出土土器（第320図）

1・2は安行3c式である。胴部中段に1は平行沈線と列点文、2は平行沈線の区画を巡らせ、胴下半部には連続弧線文を巡らせる。3は無文の深鉢口縁部で、晩期の土器であろう。

遺物集中19出土土器（第318図20・第320図）

第318図20は扁平な碗型の浅鉢である。口縁外面に平行沈線を巡らせ、底面には大柄の巴文を描き、縄文を施文する。口縁外面と内面を赤彩している。

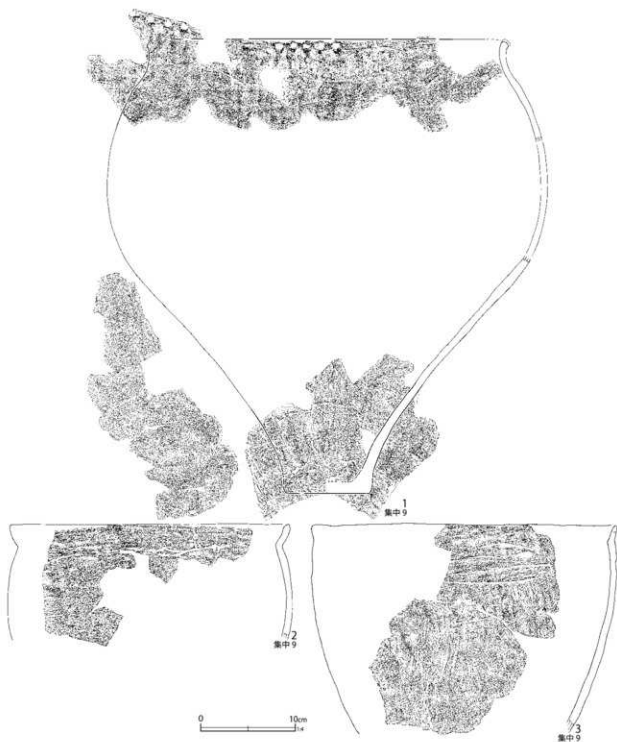
第320図は破片資料である。

1・2は加曾利B2式の粗製土器である。いずれも粗い縄文を地文とする。1は反外口縁で、外面に押圧隆帯と半角竹管状工具の沈線を巡らせる

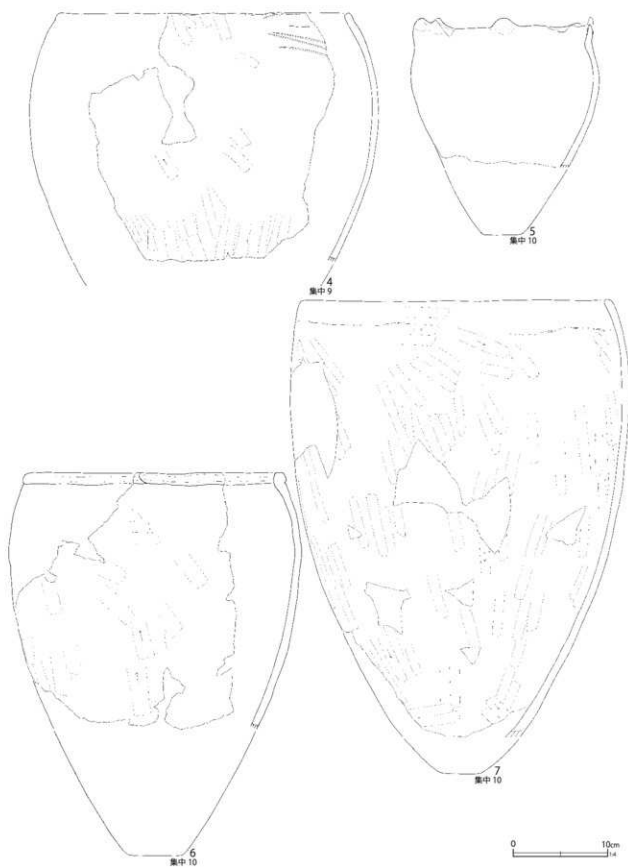
遠部第一類、2は胴上半部に横帯文を巡らせる広口壺形の土器で遠部第三類であろう。

3は加曾利B3式である。口縁外面に刻み目文を巡らせて、胴上半部に曲線的な磨り消し文様を

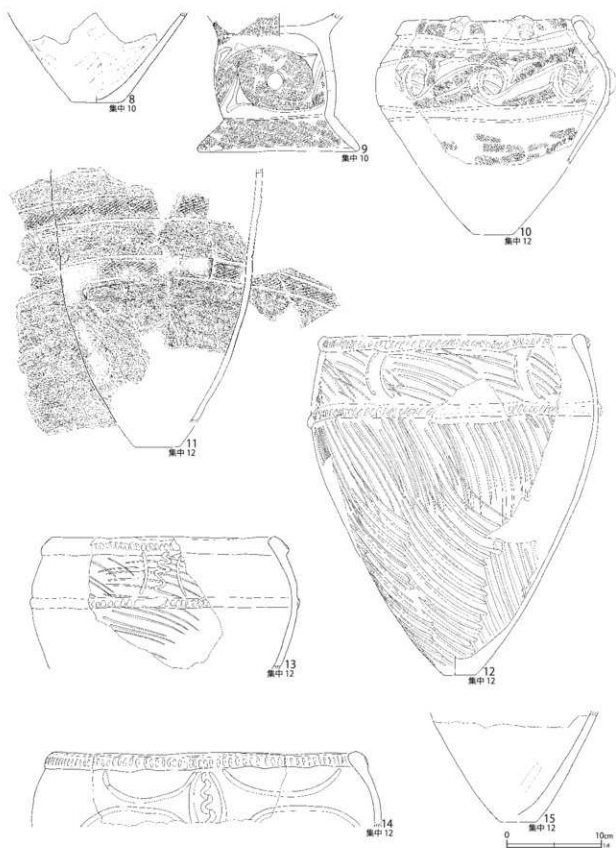
描く。4は精製深鉢の胴部で、中段に平行沈線+刻み目文の区画を巡らせ、弧線文を巡らせて縄文を充填する。加曾利B3～曾谷式であろう。



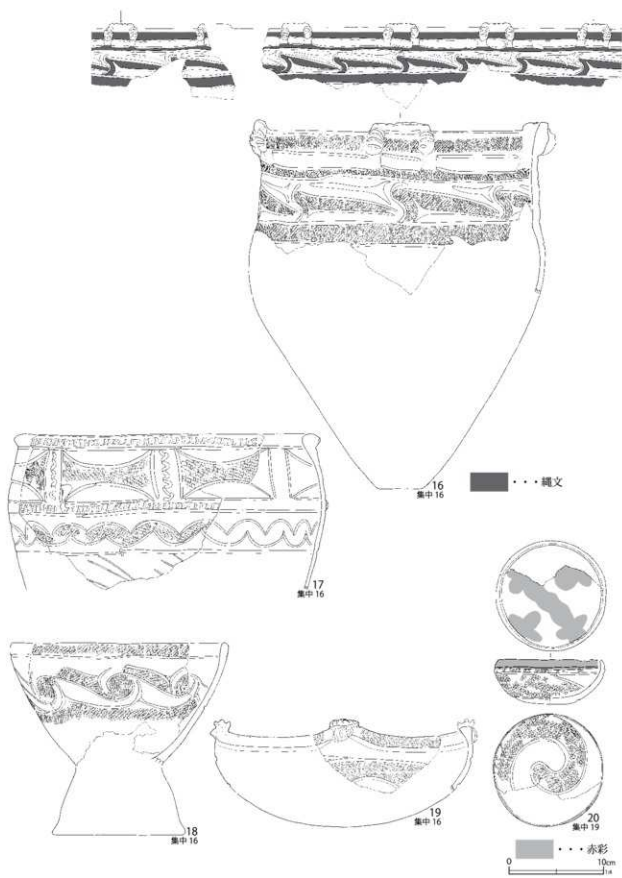
第315図 遺物集中出土土器（1）



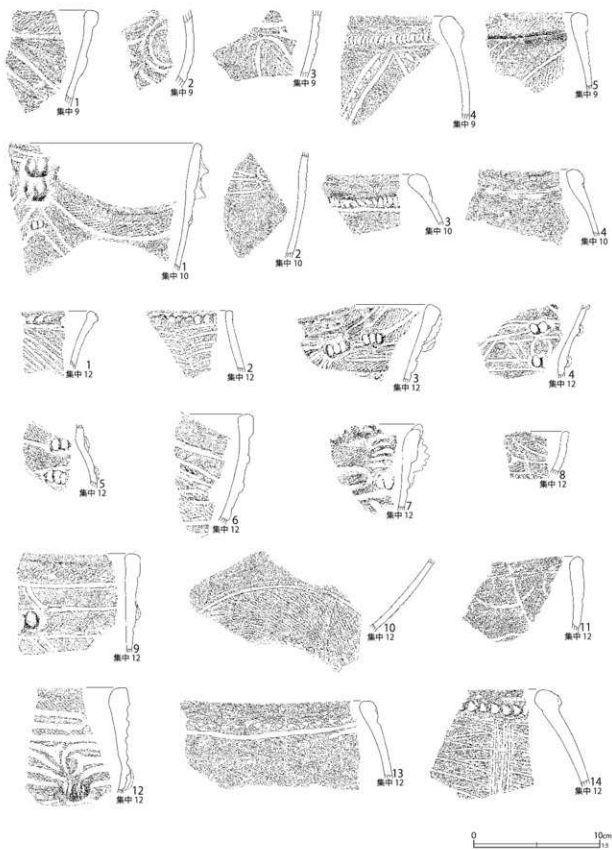
第316図 遺物集中出土土器（2）



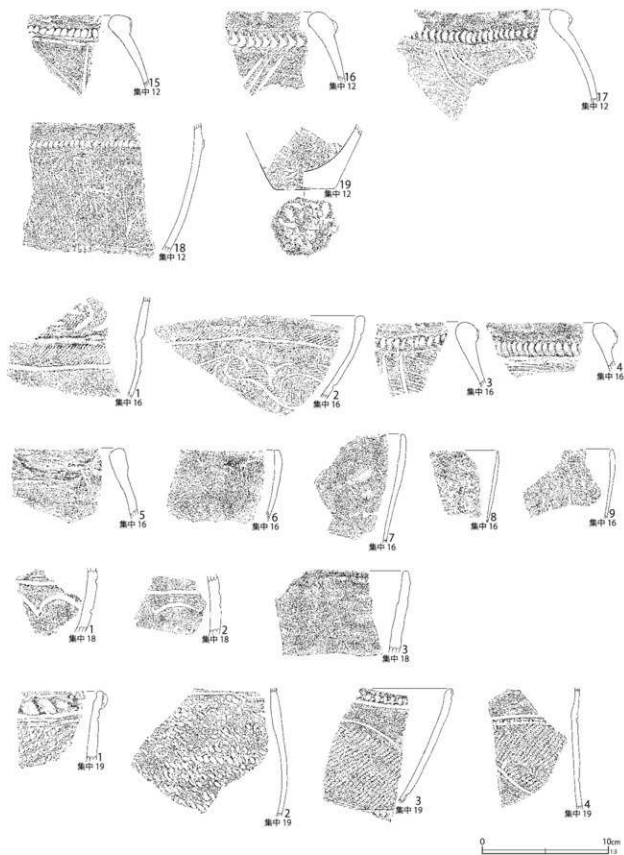
第317図 遺物集中出土土器（3）



第318図 遺物集中出土土器（4）



第319図 遺物集中出土土器 (5)



第320図 遺物集中出土土器 (6)

(4) 埋壺出土土器

第1号埋壺出土土器(第321図1)

1は無文の深鉢である。やや丸底気味で、胴上半部に最大径を持ち、全体に丸みを帯びた倒卵状のプロポーシオンである。口縁は内湾して口唇断面著しく肥厚し、分厚い折り返し口縁となる。

胴上半部には横方向、胴部中段以下では縦方向の寛撫でを加えている。胎土には多量の礫と赤褐色のシャモットを混入している。

晩期安行式に伴う粗製土器と考えられる。

第2号埋壺出土土器(第321図2・3)

2は後期安行式の粗製深鉢である。胴部中段に最大径を持ち、頸部が若干くびれて、口縁は軽微に外反する。口唇断面は肥厚して、内面に稜を形成している。

口縁外面と胴部中段に押し引き文の区画を巡らせる。地文条線は縦位方向に施文する。底部は削り込まれ、やや上げ底状となっている。

3は壺ないし注口土器の口縁部～頸部とみられる。直線的に開く逆門錐形のプロポーシオンで、口唇断面は肥厚し、口端上面を平坦に整形している。口縁外面には横方向の入念な研磨を施している。

胴部との境には帯縄文の区画を巡らせて、楕円形の貼り瘤を配する。部分的に赤色顔料の付着がみとめられ、本来は赤彩されていたものと考えら

れる。

東北地方の後期後葉の新地式の影響下にある土器であろう。

第3号埋壺出土土器(第321図4・5)

4は安行式の粗製深鉢である。底部を欠失する。胴下半部が丸く張り、中段から口縁にかけてほぼ直立する。口唇断面は肥厚して、内面に稜を形成する。

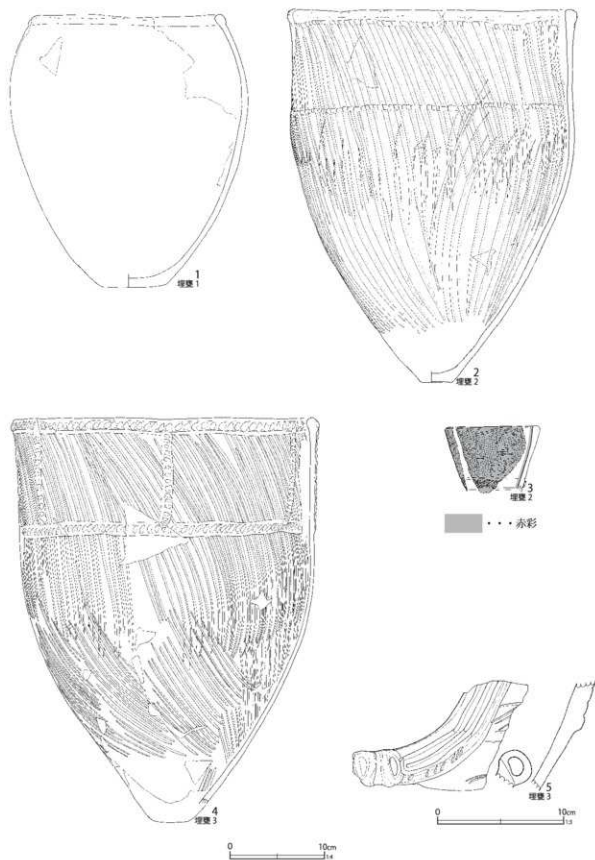
口縁外面と胴部中段に押圧隆帯の区画を巡らせている。胴上半部には縦位の押圧隆帯を等間隔に配して、上下の区画の間を連繫している。地文条線は口縁～胴部中段までは縦位方向、それ以下では斜位に施文している。

胴下半部を中心に二次焼成の風化が甚だしい。内面には胴下半部には黒色、胴部中段から上には白色の物質が付着している。

後期末葉～晩期初頭の土器であろう。

5は高井束式の大波状口縁深鉢口縁部である。波底部に横位の貫通孔を持つ橋梁状の把手を配し、波頂部にも大型の突起・把手を持つものとみられる。

口縁外面に隆帯による楕円形区画文を巡らせて斜位の刻みを施す。区画内部には沈線を巡らせる。胴上半部は横位の沈線で多段に分帯しており、内部には平行沈線で樹枝状のモチーフを描くものとみられる。



第321図 埋篋出土土器

(5) 掘立柱建物跡出土土器

第2号掘立柱建物跡出土土器 (第323図)

1～3はP2から出土した土器である。1は称名寺式の深鉢胴部で、J字文の一部である。2・3は加曾利B2式で、2は精製深鉢、3は粗雑な地文縄文上に横帯文を描く遠部第三類であろう。

4・5はP3から出土した土器で、いずれも加曾利B2式である。4は3単位波状口縁の精製深鉢で、頸部が「く」の字に内屈し、帯縄文を巡らせる。5は紐線文を巡らせる遠部第一類である。

6～11はP4から出土した。6・7は安行1式の精製土器で、6は水平口縁深鉢、7は砲弾形深鉢である。

8は安行3a式の砲弾形深鉢で、刻みを持つ横瘤を起点として帯縄文の区画を巡らせる。9は櫛状入り組み文を描く胴下半部で、後期安行式の瓢形深鉢であろう。

10は縄文施文の外反口縁で、安行3a～3b式であろう。11は水平口縁に沿って弧状の区画を巡らせ、間隙に三叉文を配する土器で、安行3a式である。

第3号掘立柱建物跡出土土器 (第322図・第323図)

第322図1はP4から出土した曾谷式の浅鉢である。口縁直下に1条の沈線を巡らせ、U字状の貼り付け文を配する。胴上半部に縄文帯を持って、下端を1条の沈線で区画する。

第323図は破片資料である。

1～9はP3から出土した土器である。1は帯縄文で三角形の区画を構成する土器で、安行3a～3b式であろう。2は安行1式の水平口縁深鉢で、帯縄文の区画に縦瘤を配する。3は細密沈線文を描く砲弾形深鉢で安行3b式である。

4・5は条線のみのお縁部で、曾谷～安行1式である。6・7は粗雑な地文縄文を施文する口縁部で加曾利B式の粗製土器であろう。

8・9は無文の深鉢で、晩期前葉の土器であろう。8は折り返し口縁、9は表裏に輪積み痕を残す。

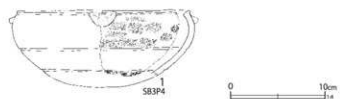
10～12はP4から出土した。10は内湾口縁で、外面に段を持って縄文を施文する。安行3a～3b式であろう。11は安行1式の瓢形深鉢で、帯縄文と押し引き文の区画を巡らせる。12は晩期安行式の粗製土器で、地文条線を持たず、内湾口縁の外面に押し引き文と沈線を巡らせる。

第4号掘立柱建物跡出土土器 (第323図)

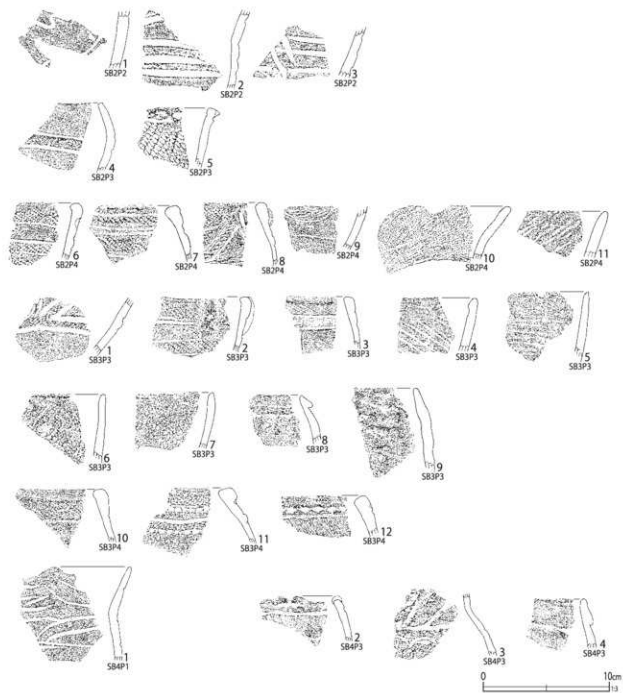
1はP1から出土した。安行3d式の波状口縁深鉢で、粗雑な沈線文を描く。

2～4はP3から出土した。2は水平口縁上に2個1単位の小突起を配し、口縁外面に平行沈線文を巡らせる。安行3c～3d式であろう。

3はくびれを持つ胴部中段で、粗雑な沈線文を描き、連続弧線文を巡らせる。安行3d式であろう。4は折り返し口縁の深鉢で、晩期前葉の土器であろう。



第322圖 掘立柱建物跡出土土器 (1)



第323圖 掘立柱建物跡出土土器 (2)

(6) 柱穴列出土土器

第4号柱穴列出土土器 (第324図)

1～3はP1から出土した。1は矢羽沈線を描く胴部で、加曾利B2～曾谷式である。2は横位の区画内部に格子目文を描く土器で、加曾利B式に伴う粗製土器である。3は粗い地文縄文上に横位の条線を描く粗製土器で、加曾利B3～曾谷式であろう。

4はP8から出土した。「く」の字に内屈する口縁で、外面に平行沈線文を巡らせる。曾谷式であろう。

5～9はP23から出土した。6・7は同一個体で、安行1式の砲弾形深鉢である。8は大波状口縁深鉢で、安行3b式であろう。5・9は無文の深鉢で、晩期前葉の土器であろう。

10～12はP27から出土した。10は加曾利B式の粗製土器で、粗い縄文を施文して口縁内面に沈線を巡らせる。11は安行式の粗製土器で、口縁内湾して口唇断面著しく肥厚し、外面に押し引き文+沈線文の区画を巡らせる。12は折り返し口縁の無文深鉢で、晩期前葉の土器である。

13～16はP35から出土した。13は外反口縁で、口端上に沈線を巡らせる。口縁外面に縄文を施文して、頸部との境を沈線で区画する。安行3a～3b式であろう。

14は無文地に姥山系の文様を描く土器で、安行3c式である。15は平行沈線+列点文の区画と連続弧線文を巡らせる胴部中段で、安行3c式であ

ろう。16は折り返し口縁に指頭押圧を加える無文土器で、晩期前葉の粗製土器であろう。

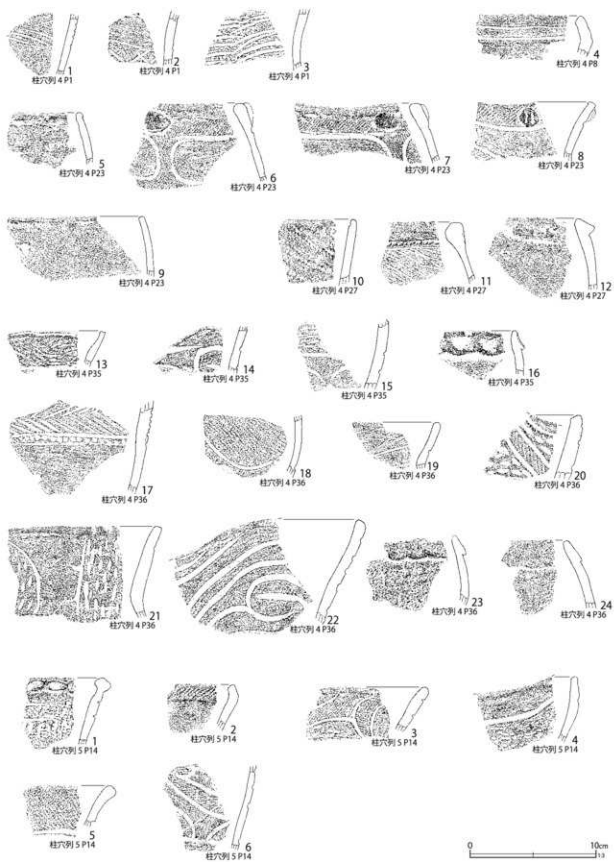
17～24はP36から出土した。17は矢羽沈線を巡らせて、下端を平行沈線+刺突文で区画する。加曾利B2式である。18は対向弧線文を描く胴下半部で、後期安行式の精製深鉢とみられる。

19は安行式の大波状口縁深鉢だが、地文縄文を矢羽状の細密沈線に代替する安行3b式である。20は大波状口縁深鉢で、帯縄文で三角形の区画を構成し、余白を米粒状の列点で埋めている。安行3c式であろう。21は安行3c式の水平口縁深鉢で、平行沈線間を米粒状の列点で埋めている。22は安行3d式の大波状口縁深鉢で、対向3叉文を描く。23・24は指頭押圧を伴う折り返し口縁の深鉢で、晩期前葉の土器であろう。

第5号柱穴列出土土器 (第324図)

すべてP14から出土した。1は加曾利B2式で、外反口縁に押圧隆帯を巡らせ、地文縄文上に疎らな条線を描く遠部第一類である。2は曾谷式で、内屈する口縁外面に縄文を施文して頸部は無文帯とする。

3は安行3a式である。玉抱き3叉文を描く口縁部である。4は大波状口縁深鉢で、口縁に沿って弧状の区画を巡らせ、刺突文を充填する。安行3b式であろう。5は縄文を施文する外反口縁で、安行3a～3b式である。6は壺の頸部とみられる。東北系の土器で、K字文を描く大洞BC式期の土器であろう。



第324图 柱穴例出土土器

(7) 焼土跡出土土器

焼土跡3出土土器 (第325図1、第327図)

第325図1は無文の深鉢である。口縁部～底部まで残存する。単調に内湾しつつ立ち上がる紡錘形の胴部で、口縁内湾して口唇断面肥厚し、内面に軽微な段を形成する。底面も曲面となっており不安定である。

第327図は破片資料である。

1は安行3 a 式の水平口縁深鉢である。帯縄文の区画を巡らせ、刻みを伴う縦縞を配する。2は砲弾形深鉢で、安行3 a 式であろう。口縁部と胴部中段に押し引き文を巡らせる。胴上半部は上下の弧線文を組み合わせて縄文を充填する。3は砲弾形の粗製深鉢で、口縁外面に段を持ち、斜位の条線を施文する。晩期前葉の土器であろう。

焼土跡5出土土器 (第327図)

1は安行式の粗製深鉢である。口縁内湾して、押し引き文+沈線の区画を巡らせる。器面は著しく被熱し、還元状態となっている。

焼土跡7出土土器 (第325図2・3、第327図)

第325図2は後期安行式の粗製深鉢で、胴下半部を欠失する。緩やかに内湾しつつ立ち上がって口縁直立し、口唇断面肥厚する。口縁外面に単沈線、胴部中段に平行沈線を巡らせ、全面に縦位の条線を施文している。

3は精製深鉢の胴下半部と考えたが、瓢形土器や注口土器の可能性もある。全面に縄文を施文し、底部周辺の縦位の研磨を施している。

第327図は破片資料である。

1は称名寺式である。内屈する波状口縁で、胴部に直線的な擦り消し文様を描いている。2は後期初頭の加曾利E系の土器で、胴部の擦り消し文様が口縁部に貫入している。

焼土跡8出土土器 (第327図)

1は堀之内2式である。波状口縁の精製深鉢で、口端上に内文を持つ小突起を配し、4条の刻み隆帯と2段の8の字状貼り付け文が重畳している。

2は刻み隆帯の区画を持つ安行2式で、注口土器とみられる。

3は安行3 b 式であろう。刻みを持つ2個の縦縞の間の区画に細密沈線文を地文として刺突文を充填している。4～6は安行3 a 式で、いずれも大波状口縁深鉢の口縁部である。4は波頂部に縦長の豚鼻突起を重畳させ、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせる。5・6は上面に小渦文を描く突起を配する。胴上半部にはいずれも対向三叉文を配する。

7は晩期安行式の粗製土器で、口縁と胴部中段に刻み隆帯を巡らせて、胴上半部に平行沈線の弧状モチーフを描いている。

焼土跡9出土土器 (第325図4、第327図)

第325図4は砲弾形の深鉢で、口縁部～胴部中段まで残存する。口縁外面に刻みを持つ横縞を配し、平行沈線で区画を構成して、対弧状の沈線の区切りを設ける。縄文は施文しない。安行2～3 a 式であろう。

第327図は破片資料である。

1・2は安行3 b 式の大波状口縁深鉢である。1は波頂部に矮小化した豚鼻突起を配し、これを起点に蛇行沈線文を垂下させている。2は帯縄文により三角形区画文を構成する。

3は安行3 a 式で、付け鉢の口縁部とみられる。押圧を伴う縦縞を起点に弧状の区画を巡らせて縄文を充填し、間隙に三叉文を配する。4は水平口縁の深鉢で、安行3 a～3 b 式であろう。口縁直下に縄文帯を持ち、胴上半部に擦り消し文様が展開する。

5は安行3 a 式で、付け鉢の胴部であろう。円形刺突文を中心として単沈線の入り組み文を描き、余白を三叉文で埋めている。6は砲弾形の深鉢で、折り返し口縁上に斜位の刻み目文を巡らせ、地文条線を持たない。晩期安行式に伴うものである。

焼跡13出土土器 (第327図)

1は紐線文の土器で、遠部第二類である。外反口縁で、刻み隆帯を巡らせ、ごく浅い地文に、半截竹管状工具の条線を施文している。加曾利B3～曾谷式期の土器であろう。

2は安行1式の砲弾形深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、扁平な縦瘤を配する。3は安行3a～3b式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、口端上には上面に巴文を描く小突起を配する。

4は晩期安行式の粗製深鉢である。内湾口縁で、外面に押圧隆帯を巡らせ、胴上半部に平行沈線文を描く。条線は施文しない。5は無文の深鉢で、やはり晩期の土器であろう。内湾口縁で、口唇断面肥厚し外面に段を持つ。

焼跡14出土土器 (第325図5・6、第328図)

第325図5は晩期安行式の粗製土器である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。内湾口縁で、口唇断面肥厚して内面に段を持つ。浅い横位の条線を施文する。6は無文の深鉢胴下半部で、やはり晩期安行式に伴うものであろう。

第328図は破片資料である。

1は安行1式の砲弾形深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を重畳させ、上下2段の縦瘤を配する。2は大波状口縁深鉢で、安行3b式であろう。三角形区画文は波頂部を起点とする弧状モチーフへと変化しており、接点に豚鼻突起を配する。

3は帯縄文の弧状モチーフが巡る水平口縁で、やはり安行3b式であろう。4は砲弾形の深鉢である。無文で、器面に輪積み痕を残す。口縁外面には押圧を伴う貼り瘤を配する。天神原式に伴う土器で、安行3b～3c式であろう。

5・6は無文の砲弾形深鉢で、口唇断面肥厚して外面に段を形成する。7も無文の土器で、浅鉢の可能性もある。いずれも晩期の土器であろう。

焼跡15出土土器 (第328図)

1は加曾利B2式で、3単位波状口縁の深鉢に

付される突起である。2は安行1式の水平口縁深鉢で、帯縄文の区画に縦瘤を配する。3は曾谷～安行1式の粗製土器で、外反口縁で口端に刻みを巡らせ、密な条線を施文する。

焼跡19出土土器 (第328図)

1は加曾利B3～曾谷式の瓢形土器である。口縁外面に押し引き文+沈線の区画を巡らせ、胴上半部を縄文帯とする。2は無文の口縁部で、頸部屈曲し、胴部との境に凹線を巡らせる。口端上には2個1単位の小突起を配する。3は晩期安行式の粗製土器である。内湾口縁で口唇断面肥厚し、横位の条線を施文する。

4～6は製塩土器である。4は口縁部で、口唇断面は篋で切り落としたように水平に整形されている。5は胴下半部で、極めて径の小さい底部から緩やかに内湾しつつ立ち上がる。底面には木葉痕の一部らしきものが観察される。6は底部で、5に比べやや急角度で立ち上がる。胴部の器壁は極めて薄く、底面には篋状工具の調整痕を残している。

焼跡20出土土器 (第328図)

1は堀之内2式である。口縁外面に刻み隆帯と8の字状貼り付け文を配し、胴部に帯縄文のパネル文を描く。2は加曾利B3～曾谷式であろう。山形波状口縁で、波頂部に刺突を加えて双頭状にしており、また、口端上に凹線を巡らせている。胴部には斜行沈線文を描いている。

3は安行1式の大波状口縁深鉢である。山形波状口縁で、帯縄文の区画を重畳させ、上下2段の縦瘤を配する。4は後期安行式の瓢形深鉢である。胴部中段にくびれを持って押し引き文+沈線の区画を巡らせ、胴下半部には櫛状の入り組み文を描いている。

焼跡21出土土器 (第325図7～9)

7は曾谷式の深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。緩やかに外反しつつ開き、口縁直下で「く」の字に内屈する。8は無文の深鉢

で、口縁部～胴上半部にかけて残存する。内湾口縁で、口唇断面肥厚し、外面に段を形成する。9は無文の胴下半部で底面丸底気味の不安定な器形である。

焼土跡23出土土器 (第328～329図)

1は堀之内式である。口縁外面に指頭圧痕と沈線を巡らせ、胴部には縄文を施文して蛇行沈線を垂下させる。2は水平口縁深鉢、3・4は砲弾形深鉢で、いずれも安行1式であろう。

5は安行3a～3b式である。胴部がソロバン玉状に張り出す浅鉢で、三叉文を基調とした文様を描く。6は胴上半部が張り出す鉢で、加曾利B3～曾谷式であろう。

7は安行3a～3b式で、丸底の浅鉢胴下半部であろう。8は後期安行式の粗製土器で、口縁外面に半截竹管状工具の平行沈線を巡らせ、斜位の条線を地文とする。

9・10は晩期安行式の粗製土器である。内湾口縁で、口唇断面肥厚する。9は口縁外面に段を持って押し引き文を巡らせる。胴部には斜位の条線を施文する。

10は半截竹管状工具の刺突を巡らせ、無文地に平行沈線の弧状モチーフを描いている。

11は製塩土器の胴部である。

焼土跡24出土土器 (第329図)

1は安行2～3a式の水平口縁深鉢である。口端上に半円形の突起を配して刻みを持つ縦線を付し、口縁外面に帯縄文の区画を描く。2は晩期安行式の粗製土器であろう。口縁外面に鋭利な工具の刺突文と沈線を巡らせ、胴部には斜位の条線を施文する。

焼土跡25出土土器 (第329図)

安行3a～3b式で、口縁に沿って弧状の区画を巡らせて縄文を施文している。

焼土跡26出土土器 (第329図)

後期安行式の水平口縁深鉢で、口縁外面に刻み隆帯の区画を巡らせている。

焼土跡27出土土器 (第326図10～18、第329～330図)

第326図10は安行1式の大波状口縁深鉢である。口縁部～胴下半部まで残存する。口縁外面に帯縄文の区画を重畳させ、縦線を配する。11・12は安行1式の水平口縁深鉢で、口縁部～胴中段まで残存する。口縁外面に帯縄文の区画を持って縦線を配し、胴上半部には半円形の擦り消しモチーフを描き、平行沈線+押し引き文の区画を挟んで対向弧線文を描く。

13・14は安行式の瓢形深鉢である。13は口縁と胴下半部が残存する。胴中段にくびれを持って沈線+押し引き文の区画を巡らせ、上下に半円形の擦り消しモチーフを描く。14は胴中段のみ残存する。平行沈線+押し引き文の区画を巡らせ、胴下半部に櫛状入り組み文を描く。いずれも後期安行式とみられるが、器形や文様構成が崩れている。13はやや時代が下る可能性もある。

15は後期安行式の精製深鉢胴下半部である。平行沈線+押し引き文の区画を巡らせ、半円形の擦り消しモチーフを描く。16は深鉢底部で、立ち上がり角度が大きいため、瓢や注口土器など特殊な器形になる可能性がある。横位の条線を施文するが、底部付近は無文で縦位の研磨が目立つ。

17は後期安行式の粗製土器で、口縁～胴中段にかけて残存する。口縁直立して口唇断面肥厚し、口端上面は平坦に整形している。口縁外面に押し引き文+沈線の区画を巡らせ、胴中段にも同様の区画を持つものとみられる。

18は台付き土器の脚台部で、下端部に縄文帯を持つ。安行3a～3b式であろう。

第329～330図は破片資料である。

1は堀之内1式である。波状口縁で、波頂部に上下一対の盲孔を伴う突起を配し、口縁外面に刻み隆帯を巡らせている。2は堀之内2式で、口縁外面に2段の刻み隆帯を巡らせる。

3は加曾利B1式で、浅鉢である。口唇断面外削ぎ状で、口縁直下に集約された横帯文を描いて

いる。4は加曾利B式の半粗製土器で、胴上半部に格子目文を描いている。

5～8は曾谷・高井東式である。5は大波状口縁深鉢で、口縁内屈して外面に平行沈線を巡らせ、波底部に舌状の突起を配している。胴部には鋭利な工具の矢羽状沈線を描いている。6もこれに類似の口縁部である。

7は無文の水平口縁深鉢で、口縁外面に軽微な段を持ち、「ノ」の字状の貼り付け文を配している。8は小型の壺ないし注口土器であろう。球胴状で、口縁外面に平行沈線を巡らせて縄文を施文し、横位の貫通孔を持つ小突起を配している。

9～34は安行1式である。

9～13は大波状口縁深鉢で、9は扇状突起と円孔を持つ波頂部、10以下は波底部である。口縁に沿って帯縄文の区画を重畳させ、縦瘤を配する。14～22は水平口縁の深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配するが、14のみ区画が2段構成となっており、瘤も上下2段に貼り付けている。

15・17は胴上半部に半円形の区画を巡らせ、縄文を充填している。21～24は瘤を持たないが、同時期の土器であろう。23は浅鉢の可能性もある。24は区画が2段構成で、胴部中段に横位の条線を施文している。

25～30は瓢形深鉢の口縁部である。口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせる。31は同じ器形の胴部で、中段のくびれに沿って押し引き文を巡らせ、胴上半部に櫛状入り組み文を描いている。32は精製深鉢の胴部で、大波状口縁深鉢に伴

うものか。

33・34は台付き鉢で、33は縦位の条線を施文する口縁部である。34は胴部に刻み隆帯を巡らせて円形の貼り瘤を配する。

35～39は紐線文の土器で、加曾利B～曾谷式に伴う粗製土器である。口縁内傾する39は広口壺形の遠部第三類、他は遠部第一類である。

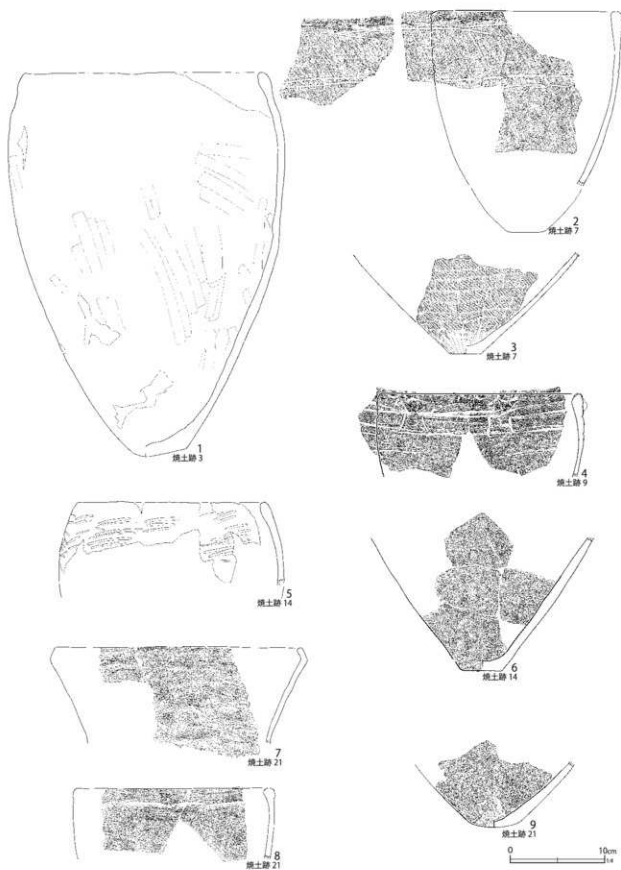
口縁外面に押圧隆帯を巡らせ、粗い地文縄文上に条線を施文する。37～39は半裁竹管状工具を使用する。39は縄文の条を上下方向に揃え、横位の平行沈線文を等間隔に巡らせている。

40～47は安行式の粗製深鉢である。外反口縁で、口縁外面と胴部中段に押し引き文を巡らせる。40・41は安行1式、42・43も後期安行式に伴うものであろう。

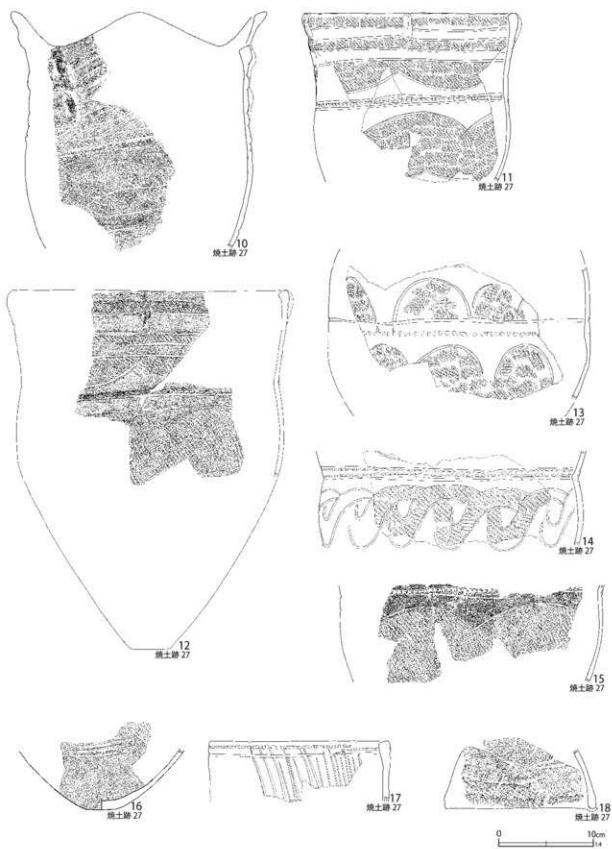
44以下は後期末葉～晩期前葉の土器である。44・45は口縁外面に押圧隆帯を巡らせる。46は胴上半部にも押圧隆帯の曲線文を描く。47は口縁部と胴部中段に押し引き文+沈線の区画を巡らせ、胴上半部には丸棒状工具の太い沈線で対弧文+列点文を描き、地文条線を施文しない。

48は口縁直下に凹線を巡らせ、胴部には櫛歯状工具の非常に細かい条線を矢羽状に施文する曾谷式であろうか。

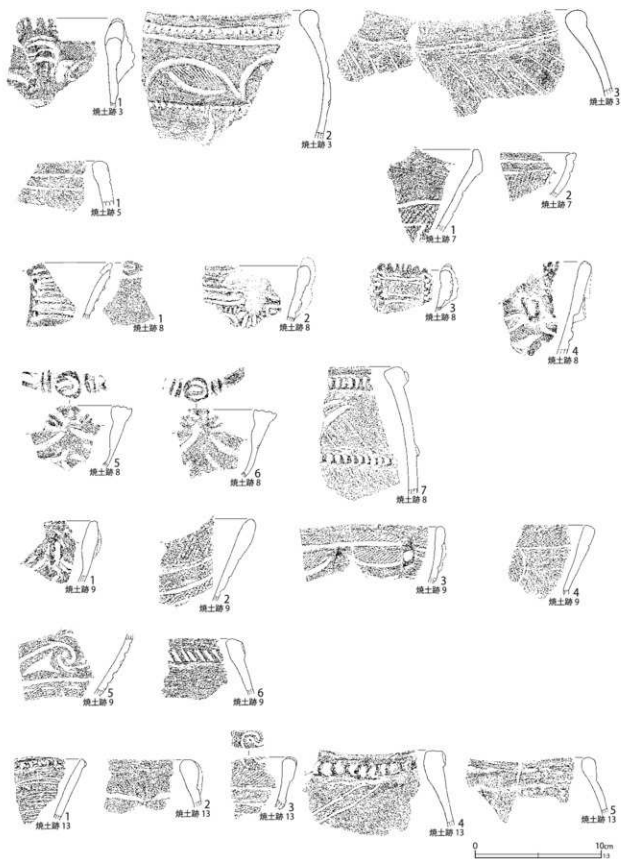
49～53は無文の口縁部である。後期前葉～晩期にかけての各時期の土器が含まれるものと思われる。49は篋状工具の非常に粗い調整痕を残す。50・51は単純な外反口縁で、51は口唇断面やや肥厚する。52・53は口縁内面に断面三角形の稜を巡らせる土器で、加曾利B2～曾谷式であろう。



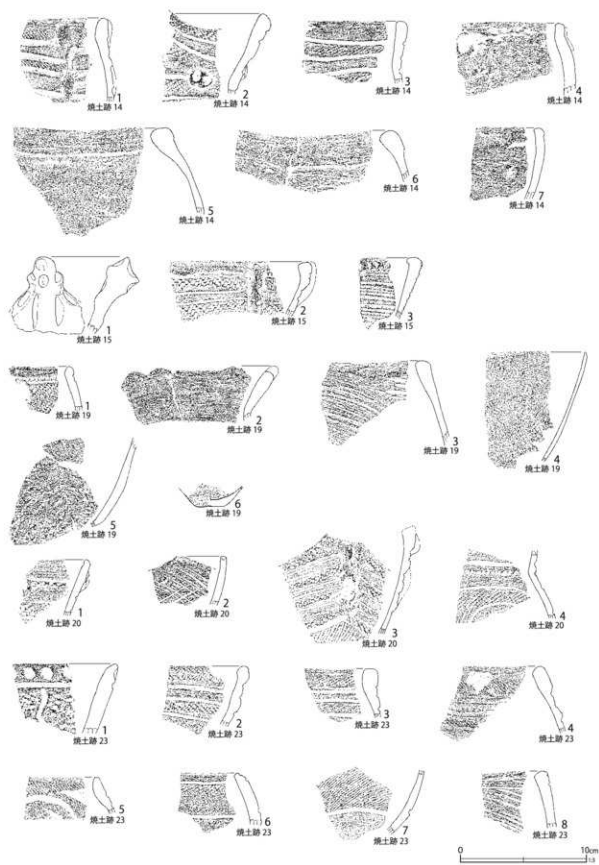
第325図 焼土跡出土土器（1）



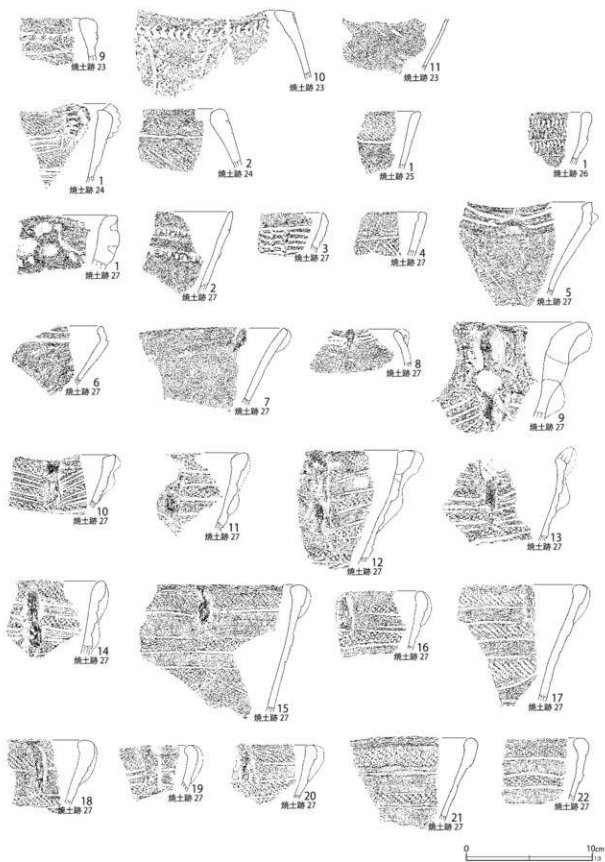
第326図 焼土跡出土土器 (2)



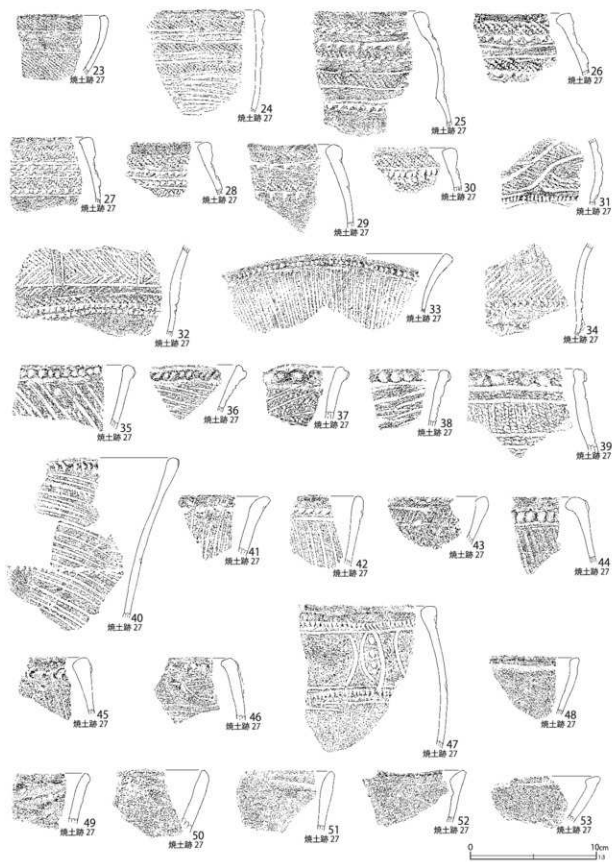
第327图 烧土器出土土器 (3)



第328図 焼土跡出土土器(4)



第329圖 燒土跡出土土器 (5)



第330圖 燒土跡出土土器 (6)

(8) 粘土塊出土土器

粘土塊 1 出土土器 (第331図 1・2、第332図)

第331図 1・2 は無文の深鉢である。1 は口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴部は直線的に開いて、頸部屈曲し、口縁はほぼ直立する。2 は胴下半部まで残存する。胴上半部に最大径を持ち口縁内湾する砲弾形の深鉢である。

第332図は破片資料である。

1 は安行 1～2 式の砲弾形深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画と縦線を配する。2 は安行 3a 式で、双頭状の小波状口縁である。波頂部を起点として弧状の区画を巡らせて縄文を施文し、間隙に三叉文を描くものとみられる。

3 は安行 3 a～3 b 式の浅鉢とみられる。水平口縁上に 2 個 1 単位の小突起を配し、外面に沈線を巡らせる。

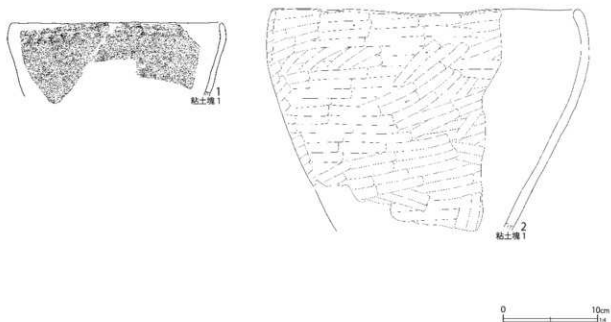
4 は安行式の粗製深鉢で、内湾口縁に押圧隆帯を巡らせ、胴上半部に擦り消し文様を描く。安行 3 b 式に伴うものであろう。

5 は製塩土器の胴部で、外面に輪積み痕を残し、内面は風化が著しい。

(9) グリッドピット出土土器 (第334～336図)

F-5 P10 (第334図)

安行 3 d 式の深鉢胴上半部である。無文地に沈線で三角形区画文由来の文様を描く。



第331図 粘土塊出土土器 (1)



第332図 粘土塊出土土器 (2)

F-6 P4 (第334図)

堀之内1式の深鉢胴部である。地文縄文上に集合沈線が弧状のモチーフを描いている。

G-5 P65 (第334図)

1は堀之内式であろう。水平口縁で、無文地に横位の沈線を巡らせる。2は加曾利B2式で、粗製土器の遠部第一類である。粗い地文縄文上に半截竹管状工具の条線を施文し、胴部中段に押圧隆帯を巡らせる。3は無文の砲弾形深鉢で、晩期安行式に伴う土器であろう。

G-5 P69 (第334図)

1は加曾利B2式である。無文の口縁部で内面に凹線を巡らせ、口端上面は平坦に整形している。2は同時期の粗製深鉢胴下半部で、粗い縄文を施文した上に条線を描いている。

G-5 P79 (第334図)

1は加曾利B2式である。内湾する水平口縁で、口縁外面に帯縄文を巡らせ、括弧状のモチーフを配している。2は無文の口縁部で、胴部中段にごく浅い縦位の条線がみられる。加曾利B～曾谷式に伴うものか。

G-5 P85 (第334図)

1は加曾利B3式である。水平口縁で、口唇外面に刻みを巡らせ、幅広の縄文帯を持って上下を沈線で区画し、頸部には無文帯を持つ。2は粗い縄文を施文する加曾利B式の粗製土器である。

G-5 P101 (第334図)

1は加曾利B2式で、3単位波状口縁の深鉢である。胴部中段に平行沈線+列点文の区画を巡らせ、胴上半部には上下対向する弧線文を描いて、間隙に縄文を施文する。

G-5 P110 (第334図)

1は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を描いて縦瘤を配する。2は晩期安行式に伴う粗製深鉢である。内湾口縁の砲弾形深鉢で口縁外面に段を持ち、篋状工具の刺突を巡らせる。地文条線は施文しない。3は無文の砲弾

形深鉢で、晩期安行式に伴う土器であろう。

G-5 P119 (第334図)

1は加曾利B～曾谷式であろう。口縁外面に縄文を施文して、下端を横位の沈線で区画し、頸部は無文帯とする。2は晩期安行式に伴う粗製土器であろう。胴部中段にくびれを持って平行沈線+刺突文の区画を巡らせ、上下で方向を変えた条線を施文する。3も晩期安行式の粗製土器で、内湾口縁で口端に刻み目文を巡らせ、胴部に縦位の条線を施文する。

G-5 P131・133 (第334図)

1は無文地に横位の平行沈線を描く口縁部で、安行3b～3c式であろう。2は安行1式の瓢形深鉢で、帯縄文と押し引き文の区画を巡らせる。

G-6 P42 (第334図)

地文縄文上に不規則な単沈線を描く深鉢胴部で、加曾利B2式の粗製土器遠部第一類である。

G-6 P44 (第334図)

1は縄文のみの深鉢で、内面に沈線を巡らせる。加曾利B1式の粗製土器であろう。2は安行1式の波状口縁深鉢である。山形波状口縁で、帯縄文の区画を2段に構成し、波頂部に縦長の貼り瘤を配する。頸部は無文となる。立ち上がりが緩やかで内面の調整が丁寧であることから、浅鉢や台付き鉢である可能性も考えられる。

3は安行3a～3b式の大波状口縁深鉢である。胴部中段に帯縄文を巡らせて、胴上半部には擦り消し縄文による三角形区画文を描き、半円形の擦り消しモチーフを巡らせて豚鼻突起を配する。

4は堀之内2式の精製深鉢で、帯縄文のパネル状区画文を描いて、区画内部に集合沈線による重圈文を施文する。5は晩期安行式の粗製土器で、口縁外面に縄文を施文して横位の沈線で下端を区画し、胴部に斜位の条線を施文する。

G-6 P46 (第334図)

地文縄文上に格子目文を描く粗製深鉢胴部で、

加曾利B 2式の遠部第四類である。

G-6 P56 (第334図)

安行1~2式の水平口縁深鉢である。帯縄文の区画を巡らせて、ごく浅い刻みを伴う縦線を配する。頸部は無文である。浅鉢や台付き鉢の可能性もある。

G-6 P63 (第334図)

1は安行3c式である。平行沈線+列点文の区画で器面を分割し、左右に平行沈線の弧状モチーフを描くものとみられる。2は無文折り返し口縁の深鉢で、晩期安行式に伴うものであろう。

G-6 P70 (第335図)

1・2は晩期安行式の水平口縁深鉢で、帯縄文の区画を巡らせる。3・4は加曾利B 2式である。3は内湾口縁で、胴上半部に横帯文を描く。4は胴部破片で、多段化する横帯文の一部であらう。

5は晩期安行式の粗製深鉢口縁部である。内湾口縁で外面に段を持って寛状工具の刻みを巡らせ、胴上半部には斜位の条線を施文して、平行沈線の括弧状モチーフを描いている。

G-6 P74 (第333図1、第335図)

第333図1は安行3b式の浅鉢である。口縁を欠失する。頸部と胴下半部に横位の沈線を巡らせて文様帯上下を区画し、単沈線の入り組み文を描いて、下方の区画線との間に縄文を施文する。

第335図は破片資料である。

1は安行3b式である。大波状口縁の波底部で、円形の貼り瘤を配し、口縁に沿って弧線文を巡らせる。胴上半部には帯縄文の弧状モチーフを2段に巡らせ、下端の区画線との接点に縦長の豚鼻突起を配する。

2は晩期安行式の粗製深鉢である。内湾口縁で外面に段を持ち押し引き文を巡らせる。胴部にはごく浅い条線を施文している。

3は無文地に平行沈線文を描く土器で、安行3c~3d式。4は無文の口縁部で、晩期安行式に伴うものであろう。

G-6 P88 (第335図)

堀之内1式である。口端上に平行沈線を巡らせて、胴部には縄文を施文する。

G-6 P117 (第335図)

1は縦位の条線を施文して押窪隆帯を巡らせる深鉢胴部で、安行式の粗製土器であらう。2は後期安行式の台付き鉢である。口縁外傾し、口唇断面肥厚して口端外屈する。扁平な刻み隆帯を間隔を置いて重畳させている。

G-6 P125 (第335図)

堀之内2式の浅鉢口縁部である。外面は無文で良好に研磨され、内面には平行沈線を巡らせて縄文を施文する。

G-6 P144 (第335図)

1は安行3b式である。「く」の字に外反する口縁部で、頸部の無文帯との境に段を持つ。口縁外面に細密沈線文を施文する。2は無文の深鉢口縁部で、晩期安行式に伴う土器であらう。

G-6 P156 (第335図)

1は加曾利B 2式で、遠部第三類である。2は無文の口縁部で、後期の土器であらう。

G-6 P158 (第335図)

内湾する水平口縁で、内面に稜を持つ。口縁直下にごく浅い平行沈線を巡らせる。曾谷式であらう。

G-6 P168 (第335図)

外屈する水平口縁で、口端上に対をなす小突起を配する。口縁外面に縄文を施文し、頸部は無文である。安行3a~3b式であらう。

H-5 P1 (第335図)

1は内湾する水平口縁で、粗い横位の縄文を施文する。加曾利B式の粗製土器であらう。2は胴部中段に無文帯を持ち、上下に斜行沈線文を描く。加曾利B 2式である。

3は0段多糸の原体を用いた横位の羽状縄文を施文し、胎土に繊維を含む。早期末~前期初頭の土器であらう。

H-5 P15 (第335図)

無文地に横位の平行沈線を描く土器で、安行3c～3d式であろう。

H-5 P60 (第335図)

無文の深鉢で、製塩土器であろう。外面に輪積み痕と、成形時の指頭痕を残している。口唇断面先細りで、口端上面は平坦に整形されている。

H-5 P61 (第335図)

外屈する水平口縁で、口端上に小突起を配する。口縁外面には鋭利な工具による複列の列点文を巡らせ、頸部に横位の沈線を巡らせている。安行3b～3c式であろう。

H-5 P65 (第335図)

1・2とも紐線文の土器である。胴部中段に押圧隆帯を巡らせ、上下に横位の条線を描いている。縄文は施文しない。曾谷～安行1式の粗製土器であろう。

H-5 P71 (第335図)

1は外反する水平口縁で、口縁直下に横位の沈線を巡らせ、胴部には幅広いの平行沈線で粗雑なパネル文を描く。口縁内面に凹線を巡らせている。堀之内2式である。

2は砲弾形の深鉢口縁部である。口唇断面肥厚して折り返し口縁となる。口縁外面に縄文を施文し、頸部は無文である。安行3a～3b式であろう。

H-5 P84 (第335図2)

無文の深鉢で、口縁部と胴下半部を欠失する。胴上半部に最大径を持つ砲弾形の深鉢で、晩期安行式に伴う土器であろう。

H-6 P43 (第335図)

安行2式の台付き鉢で、緩やかに内湾しつつ立ち上がる水平口縁である。口縁外面および胴下半部帯縄文を巡らせ、胴部中段には上下対をなす貼り瘤を配して、左右に紡錘文を描く。

H-6 P144 (第335図)

黒浜式である。水平口縁で、口端外屈し、口唇

断面先細りとなる。口縁直下から粗い縄文を施文しており、胎土に多量の繊維を混入する。

I-6 P4 (第335図)

1は加曾利B式の粗製土器である。内湾口縁で、口縁直下から横位の縄文を施文する。2はキャリバー形の深鉢である。水平口縁で、胴上半部は直線的に開いて頸部で屈曲し、口縁直立する。口端は外屈して内面に稜を形成する。口縁外面にはごく浅い2段の凹線を巡らせている。胴部には斜位の粗い調整痕を残している。曾谷式であろう。

I-6 P5 (第335図)

キャリバー形の深鉢である。水平口縁で、胴上半部は直線的に開いて頸部で屈曲し、口縁は短く直立する。口端は外屈して内面に稜を形成する。口縁直下にごく浅い凹線を巡らせている。曾谷式であろう。

I-6 P60 (第336図)

いずれも堀之内1式である。1は縄文施文の胴部で、蛇行沈線を垂下させる。2も全面に地文縄文を施文し、胴部中段に平行沈線+列点文の区画を2段に巡らせて、胴下半部に集合沈線を垂下させる。

I-6 P96 (第336図)

1は丸く張り出す胴部で、加曾利B2式である。地文縄文上に矢羽状沈線を巡らせ、横位の沈線で下端を区画して、それ以下の縄文を擦り消している。

2は口縁直下の破片とみられる。半截竹管状工具の平行沈線を2段に巡らせ、胴部には縄文を施文する。加曾利B3～曾谷式の水平口縁深鉢であろう。

I-6 P102 (第336図)

1は横帯文を描く胴部で、左端に区切り文の一部を見ることができ。

I-6 P149 (第336図)

1は3本沈線の横帯文で、括弧状の短沈線を上下に重畳させる。いずれも加曾利B2式である。

I-6 P163 (第333図3・第336図)

壺形土器とみられるが、頸部と底部を欠失する。円盤形の扁平な器形で、胴部中段に平行沈線+刺突文の区画を巡らせる。晩期中葉の土器であろう。

1は堀之内1式である。盲孔を起点として口縁下に1条の沈線を巡らせ、胴部に縄文を施文する。2は口縁下に3本沈線を巡らせ、胴部にも3本沈線の弧状モチーフを垂下させている。やはり堀之内1式と考えられる。

3は斜行沈線文を方向を変えて多段に巡らせる胴部で、加曾利B2式の遠部第2類であろう。

I-6 P244 (第336図)

いずれも堀之内2式である。1は外反口縁で、口端部内屈する。胴部には幅広い平行沈線でパネル文を描き、刻み隆帯を持たない。2はやはり幅広い平行沈線によるパネル文の一部であろう。

I-6 P245 (第336図)

加曾利B2式である。1は3単位波状口縁の深鉢とみられる。胴部中段にくびれを持ち、胴上半部に弧線文を巡らせて縄文を施文する。2も胴上半部の弧線文だが、縄文の施文がごく浅く、疎らである。

I-7 P22 (第333図4、第336図)

第333図4は台付き土器の脚台部で、体部との接合部と下端部を欠失する。直線的に開く円錐形の脚台で、文様・透かしを持たない。晩期安行式に伴う土器であろう。

第336図は破片資料である。

1は加曾利B2式で、3単位波状口縁の深鉢である。表裏に盲孔を持つ左右非対称の突起を配し、胴部に弧線文を巡らせて、括弧状の短沈線文を重畳させる。2は瓢形深鉢で、加曾利B3～曾谷式である。口縁に沿って平行沈線+刺突文の区画を巡らせ、胴上半部に対向弧線文を描いて縄文を施文する。

3は加曾利B2式で、遠部第3類である。口縁に沿って押圧隆帯を巡らせ、地文縄文上に平行沈

線文を巡らせて、半裁竹管状工具によるコンパス文を2本一組で垂下させる。口縁内面には横位の沈線を巡らせる。

4も加曾利B2式である。水平口縁で、口唇断面は外削ぎ状である。口縁外面に平行沈線を巡らせ、斜行沈線文を巡らせる。口縁内面には1条の沈線を巡らせる。

5は水平口縁の深鉢で、鋭利な工具によるごく浅い集合沈線文を縦位に施文する。口縁内面には1条の沈線を巡らせる。加曾利B3～曾谷式であろう。6は縄文施文の深鉢で、加曾利B式に伴うものであろう。

I-7 P53 (第333図5)

曾谷式の瓢形深鉢である。胴部中段にくびれを持ち、最大径が胴下半部に存在する。口縁外面に刻み目文を巡らせて円孔を穿ち、胴上半部には2段の横帯文を描いて縦瘤を配する。胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を施文し、沈線の接点に円形の貼り瘤を配する。胴下半部は縄文帯としているが、底部付近は無文である。

I-7 P62 (第333図6～9、第336図)

第333図6・7はいずれも精製深鉢胴下半部である。いずれも縄文を施文し、底部付近は縦方向の研磨を施して地文を擦り消している。6は胴部中段の無文部との境を横位の沈線で区画している。曾谷～後期安行式の精製深鉢であろう。

8は曾谷式の浅鉢である。やや縦につぶれた半球形のプロポーションで、口縁がわずかに内湾する。口縁外面に平行沈線を巡らせて「ノ」の字状の貼り付け文を配し、胴上半部と下半部を縄文帯として、中段の無文部との境を横位の沈線で区画している。

9は注口土器で、胴上半部を欠失する。胴部中段がソロバン玉状に張り出し、この部分に注口部が作り出される。無文で、全体に入念な研磨を施しており、底面には網代痕を残している。曾谷・高井東式であろう。

第336図は破片資料で、いずれも安行式の精製深鉢胴部である。

1は胴下半部で、対向弧線文を描いて縄文を施文する。2も胴下半部で対向弧線文を描き、底部付近は縄文帯となって、上端を沈線で区画する。

J-6 P2 (第336図)

1は高井東式の大波状口縁深鉢である。口縁に沿って刻み隆帯+沈線文の区画を巡らせ、波底部に対弧状の突起を形成する。胴部には鋭利な工具による斜行沈線文を描いている。

2は瓢形深鉢で、加曾利B3～曾谷式であろう。口唇断面肥厚して、口端上を平坦に整形している。口縁外面に平行沈線の区画を巡らせ、胴上半部は縄文帯とする。

3は晩期安行式の粗製土器である。内湾口縁で、口唇断面肥厚する。口縁外面に押圧隆帯と沈線を巡らせる。胴上半部には斜位の条線を施文し、対弧状のモチーフを描いている。

J-6 P3 (第336図)

加曾利B2式である。水平口縁で、直線的に開いた胴部が口縁直下で「く」の字に屈曲し、口端外屈する。盲孔を起点として頸部に沈線を巡らせ、胴部には多段の横帯文を描いて括弧状のモチーフを重畳させる。

J-7 P30 (第336図)

安行式の粗製深鉢で、口縁内湾して口唇断面肥厚し、外面に押圧隆帯を巡らせて、胴部に斜位の条線を施文する。

J-7 P36 (第336図)

1は堀之内2式である。外反口縁で口端内屈し、波状口縁の波頂部に8の字状貼り付け文を配

する。胴部には帯縄文でパネル状区画文を描いている。

2は安行2式の大波状口縁深鉢である。胴上半部に刻み隆帯で三角形区画文を描き、隆帯の接点に豚鼻突起を配する。胴部中段には矢羽状沈線文を巡らせる。

3は安行式の粗製深鉢で、口縁内湾して口唇断面肥厚し、外面に押圧隆帯を巡らせて、胴部に斜位の条線を施文する。

J-7 P159 (第336図)

深鉢底部である。比較的径の大きい裾張りの底部で、堀之内～加曾利B式であろう。底面に網代痕を残している。

J-8 P11 (第336図)

曾谷式の水平口縁深鉢口縁部である。口縁外面に帯縄文+凹線の区画を巡らせて、「ノ」の字状の貼り付け文を配する。頸部には若干の無文帯を挟んで縄文を施文する。

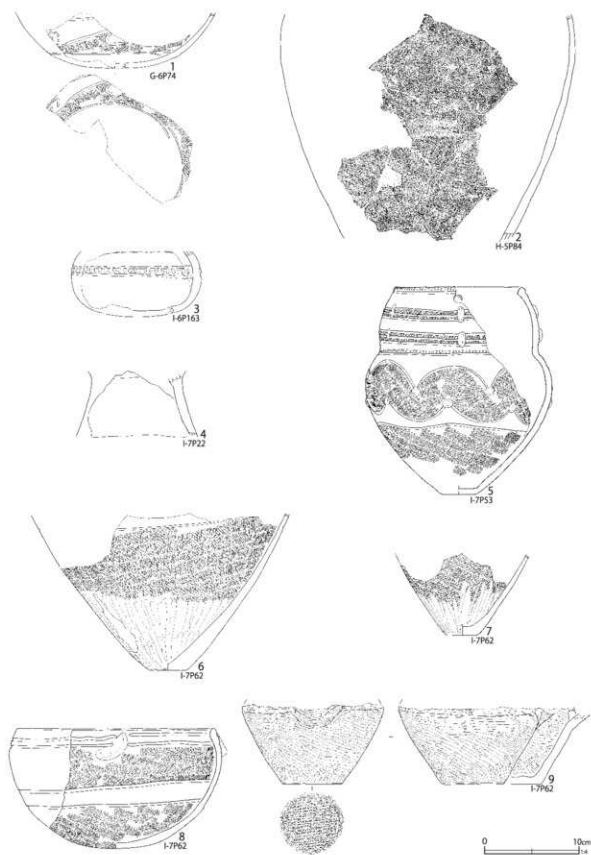
J-8 P28 (第336図)

1は瓢形深鉢で、曾谷～安行1式である。口縁外面に押し引き文+沈線の区画を巡らせて、胴上半部は縄文帯としている。

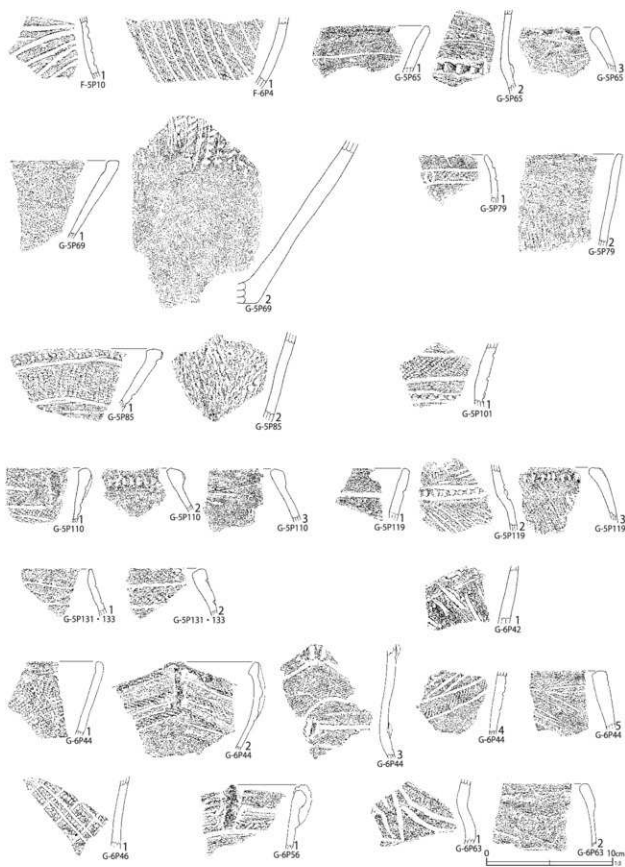
2・3は紐線文の深鉢で、口縁外面に押圧隆帯を巡らせている。2は外反口縁で、胴部に斜位の条線を密に施文する。曾谷～安行1式であろう。3は内湾口縁で、粗い縄文を施文する。加曾利B式に伴う土器である。

J-8 P41 (第336図)

諸磯b式である。刻みを伴う浮線文で地文縄文上に三角形区画文を描き、内部も浮線文で埋めている。



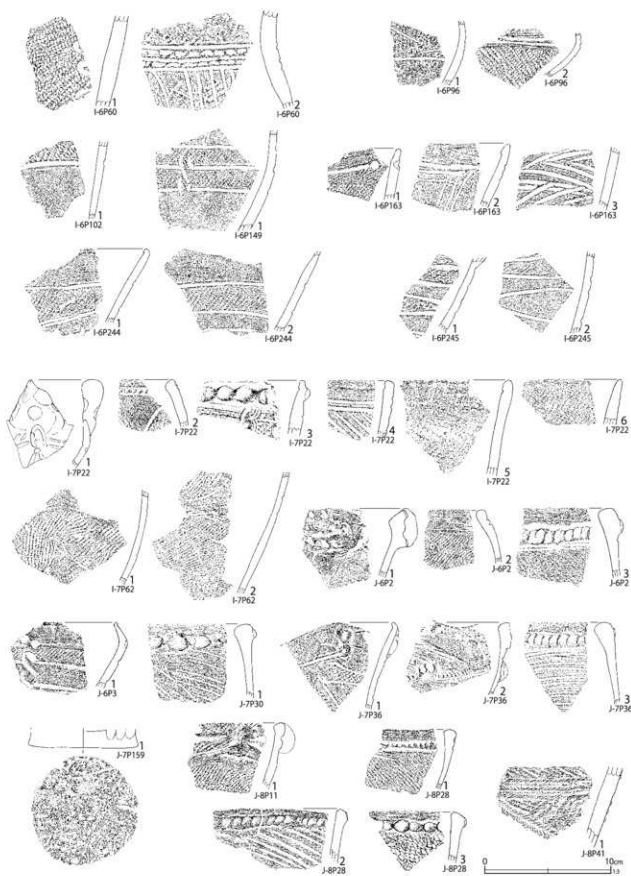
第333図 グリッドビット出土土器 (1)



第334図 グリッドピット出土土器 (2)



第335図 グリッドピット出土土器 (3)



第336図 グリッドピット出土土器（4）

第15表 遺構出土土器観察表(1) (第191~197図)

非定形品は 〇 つき、単位はcm (小数点第一位まで)						
遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類
S114	1	—	22.0	22.6	—	俵谷～安行1式
S137	2	—	—	(14.4)	—	晩期前葉
S137	3	—	—	(12.8)	—	新葉系
S137	4	—	(36.0)	(36.0)	—	後期安行式
S137	5	—	—	(15.0)	—	晩期
S138	6	—	(24.0)	(26.2)	—	安行1式
S138	7	—	(39.8)	(44.4)	—	安行2式
S138	8	—	(21.0)	(24.8)	—	後期末葉～晩期初頭
S138	9	—	(21.4)	(21.4)	—	安行3b～3c式
S138	10	9.3	(30.6)	(30.6)	(11.0)	安行3a～3b式
S140	11	—	(33.2)	(33.6)	—	安行3a式
S140	12	—	(26.0)	(27.8)	—	安行3a式
S140	13	16.5	12.8	12.8	2.2	安行3a式
S140	14	—	(29.3)	(29.6)	—	安行3a式
S140	15	—	(28.0)	(28.8)	—	安行3a式
S140	16	—	—	(23.5)	—	安行3a式
S140	17	—	—	(22.6)	—	安行3a式
S140	18	—	(28.0)	(28.5)	—	安行1式
S140	19	—	(23.0)	(25.0)	—	安行1式
S140	20	—	(24.8)	(29.8)	—	安行2式
S140	21	—	(20.0)	(23.0)	—	安行2式
S140	22	—	(25.0)	(28.0)	—	安行1式
S140	23	—	—	16.4	4.9	安行1式
S140	24	—	(25.0)	(31.6)	—	安行1式
S140	25	—	(21.0)	(28.5)	—	安行1式
S140	26	—	—	(18.4)	—	安行2式
S140	27	23.8	(21.0)	(21.0)	5.0	安行3a式
S140	28	—	—	(26.0)	6.4	晩期前葉
S140	29	—	—	(20.3)	(4.6)	安行式
S140	30	—	—	(16.6)	2.3	安行式
S140	31	—	(33.6)	(33.6)	—	加曾利B3～俵谷式
S140	32	—	(24.2)	(30.8)	—	安行式
S140	33	—	(24.0)	(31.0)	—	安行式
S140	34	—	(28.0)	(31.0)	—	安行式
S140	35	—	(27.0)	(32.0)	—	安行式
S140	36	—	(30.2)	(36.0)	—	安行式
S140	37	—	(24.0)	(25.2)	—	安行式
S140	38	—	31.4	(33.4)	—	安行式
S140	39	—	(28.0)	(33.0)	—	安行式
S140	40	—	(30.0)	(33.0)	—	安行式
S140	41	—	(21.8)	(30.8)	—	安行式
S140	42	—	(25.4)	(32.2)	—	安行式
S140	43	—	—	(20.0)	4.0	安行式
S140	44	—	—	(19.0)	4.0	安行式
S140	45	—	—	(34.8)	3.8	安行式
S140	46	—	—	(18.2)	3.4	安行式
S140	47	—	—	(12.4)	4.0	安行式
S140	48	—	—	(16.0)	2.5	安行式
S140	49	—	—	(13.6)	(3.0)	安行式
S140	50	—	—	(16.0)	2.5	安行式
S140	51	—	—	(19.0)	3.6	安行式
S140	52	—	—	14.8	14.8	安行式
S140	53	—	—	(16.5)	—	安行式
S140	54	—	(22.0)	(28.0)	—	安行3a式
S140	55	—	—	(30.0)	—	安行3a式
S140	56	—	(31.0)	(32.0)	—	安行3c式
S140	57	—	(22.6)	(22.6)	—	安行式
S140	58	—	—	(14.0)	—	安行式

第16表 遺構出土復元土器観察表(2) (第197～204図)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	非定形品は○つき、単位はcm(小数点第一位まで)		図版
					底径	分類	
S140	59	-	-	(20.2)	12.0	安行式	96-7
S140	60	8.6	(26.6)	(26.6)	-	安行3 a 式	96-8
S140	61	5.8	(13.4)	(13.4)	-	安行3 c 式	97-1
S140	62	4.6	19.4	19.4	-	晩期前葉	97-2
S140	63	4.4	15.8	15.8	-	安行3 a 式	97-3
S140	64	-	-	(18.6)	-	安行3 a 式	97-4
S140	65	-	-	(32.0)	-	晩期前葉	97-5
S140	66	21.1	(15.0)	(25.0)	5.0	安行3 b 式	97-6
S140 (焼)	67	-	-	(18.4)	10.0	安行式	97-7
S140 (焼)	68	-	(28.6)	(31.0)	-	安行式	97-8
S140 (焼)	69	-	(13.4)	(16.4)	-	晩期前葉	98-1
S140 (焼)	70	5.1	(15.8)	(15.8)	-	大塚原式	98-2
S143	71	-	(32.8)	(32.8)	-	加曾利B 3 式	98-3
S143	72	-	(16.8)	(16.8)	-	加曾利B 1 式	98-4
S143	73	-	(21.2)	(21.2)	-	安行1 式	98-5
S143	74	-	(16.4)	(16.4)	-	安行2 式	98-6
S143	75	-	(20.6)	(20.6)	-	安行2 式	98-7
S143	76	-	(13.8)	(13.8)	-	安行3 a 式	98-8
S143	77	-	(31.0)	(31.0)	-	安行3 a 式	99-1
S143	78	-	(29.0)	(29.0)	-	安行3 a 式	99-2
S143	79	15.4	14.2	14.2	2.7	安行2 式	99-3
S143	80	-	29.0	29.0	-	安行2 式	99-4
S143	81	-	(24.5)	(25.5)	-	曾谷式	99-5
S143	82	-	(19.4)	(20.0)	-	曾谷～安行1 式	99-6
S143	83	-	(28.2)	(28.2)	-	曾谷～安行1 式	99-7
S143	84	-	(16.0)	(16.0)	-	安行2 式	99-8
S143	85	-	20.2	20.2	-	安行2 式	100-1
S143	86	-	-	(20.2)	-	晩期前葉	100-2
S143	87	-	(25.6)	(25.6)	-	晩期前葉	100-3
S143	88	-	(22.6)	(22.6)	-	晩期前葉	100-4
S143	89	-	(23.6)	(25.0)	-	安行1 式	100-5
S143	90	-	(23.3)	(25.0)	-	安行2 式	100-6
S143	91	-	(19.0)	(25.3)	-	安行式	100-7
S143	92	-	(23.3)	(24.8)	-	安行2 式	100-8
S143	93	-	(17.5)	(18.0)	-	安行2～3 a 式	101-1
S143	94	-	(22.4)	(29.0)	-	安行3 a 式	101-2
S143	95	-	(18.5)	(19.1)	-	安行3 a 式	101-3
S143	96	-	(19.6)	(28.6)	-	安行3 a 式	101-4
S143	97	-	-	(28.0)	-	安行3 b 式	101-5
S143	98	-	(20.0)	(20.5)	-	安行3 c 式	101-6
S143	99	-	(22.4)	(22.4)	-	安行3 c 式	101-7
S143	100	-	-	(20.2)	-	曾谷～安行1 式	101-8
S143	101	-	-	(10.6)	4.0	安行1 式	102-1
S143	102	-	(20.8)	(20.8)	-	安行式	102-2
S143	103	-	(26.0)	(27.0)	-	安行式	102-3
S143	104	-	(21.5)	(22.6)	-	安行式	102-4
S143	105	-	(27.8)	(28.2)	-	安行式	102-5
S143	106	-	(18.2)	(18.9)	-	安行式	102-6
S143	107	-	(20.2)	(21.6)	-	安行式	102-7
S143	108	-	(30.2)	(32.3)	-	安行式	102-8
S143	109	-	(28.4)	(29.4)	-	安行式	103-1
S143	110	-	(27.8)	(28.8)	-	安行式	103-2
S143	111	-	(28.0)	(30.7)	-	安行式	103-3
S143	112	-	(34.0)	(37.8)	-	安行式	103-4
S143	113	-	(24.1)	(25.2)	-	安行式	103-5
S143	114	-	(28.0)	(30.8)	-	安行式	103-6
S143	115	-	28.3	(30.8)	-	安行式	103-7
S143	116	-	(28.0)	(29.8)	-	安行式	103-8

第17表 遺構出土復元土器観察表(3) (第205~210図)

非定形品は 〇 つき、単位はcm (小数点第一位まで)						
遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類
S143	117	—	(31.0)	(32.2)	—	安行式 104-1
S143	118	—	(27.6)	(28.6)	—	安行式 104-2
S143	119	—	(28.5)	(30.0)	—	安行式 104-3
S143	120	—	(33.0)	(33.1)	—	安行式 104-4
S143	121	—	(24.0)	(25.6)	—	安行式 104-5
S143	122	—	(26.4)	(29.8)	—	安行式 104-6
S143	123	—	(25.2)	(26.3)	—	安行式 104-7
S143	124	—	(29.8)	(32.0)	—	安行式 104-8
S143	125	—	(23.6)	(24.0)	—	安行式 105-1
S143	126	—	(30.4)	(34.5)	—	安行式 105-2
S143	127	—	(20.2)	(20.4)	—	安行式 105-3
S143	128	—	—	(21.4)	4.5	安行式 105-4
S143	129	—	—	(19.4)	4.4	安行式 105-5
S143	130	—	—	(12.9)	5.8	安行式 105-6
S143	131	—	—	(16.0)	3.5	安行式 105-7
S143	132	—	—	(18.0)	3.5	安行式 105-8
S143	133	—	—	(14.1)	3.0	安行式 106-1
S143	134	—	—	(14.7)	4.0	安行式 106-2
S143	135	—	—	(13.6)	3.6	安行式 106-3
S143	136	—	—	(14.1)	4.9	安行式 106-4
S143	137	—	—	(17.4)	3.0	安行式 106-5
S143	138	—	—	(11.5)	3.8	安行式 106-6
S143	139	—	—	(10.0)	3.0	安行式 106-7
S143	140	—	—	(9.7)	3.8	安行式 106-8
S143	141	—	(22.0)	(22.0)	—	晩期 107-1
S143	142	—	(15.8)	(16.8)	—	安行 3 a 式 107-2
S143	143	—	—	(18.0)	—	晩期前葉 107-3
S143	144	—	—	(14.0)	—	晩期前葉 107-4
S143	145	—	—	(9.4)	—	後期末～晩期初頭 107-5
S143	146	—	(25.2)	(31.0)	—	曾谷式 107-6
S143	147	—	(22.4)	(22.4)	—	安行 2 式 107-7
S143	148	—	(13.2)	(13.2)	—	晩期前葉 107-8
S143	149	—	(22.0)	(22.0)	—	安行 3 b 式 108-1
S143	150	—	(21.4)	(21.4)	—	安行 3 a 式 108-2
S143	151	—	(23.6)	(23.8)	—	安行 3 a 式 108-3
S143	152	—	(15.8)	(15.8)	—	安行 3 c 式 108-4
S143	153	—	—	(17.3)	8.0	晩期前葉 108-5
S143	154	—	—	(10.0)	3.0	晩期前葉 108-6
S143	155	—	—	(14.2)	4.0	晩期前葉 108-7
S143	156	5.7	13.6	13.6	1.5	後期末～晩期初頭 108-8
S143	157	—	-12.6	(20.0)	—	安行 3 a 式 109-1
S143	158	—	(19.2)	(19.6)	—	安行 2 式 109-2
S143 (俵)	159	—	(27.4)	(27.8)	—	安行 3 a 式 109-3
S143 (俵)	160	—	(32.8)	(32.8)	—	安行 2 式 109-4
S143 (俵)	161	—	(17.6)	(17.6)	3.5	晩期前葉 109-5
S143 (俵)	162	—	(21.0)	(22.6)	—	安行 1 式 109-6
S143 (俵)	163	—	(26.0)	(27.2)	—	安行 1 式 109-7
S143 (俵)	164	—	(28.0)	(29.8)	—	安行 1 式 109-8
S143 (俵)	165	—	(24.1)	(27.2)	—	晩期前葉 110-1
S143 (俵)	166	—	(26.0)	(26.2)	—	後期末～晩期初頭 110-2
S143 (俵)	167	—	—	(22.6)	—	晩期前葉 110-3
S143 (俵)	168	—	—	(14.6)	—	晩期中葉 110-4
S143 (俵)	169	5.2	11.2	11.2	—	晩期中葉 110-5
S143 (俵)	170	—	(16.0)	(16.0)	—	安行 3 c 式 110-6
S143 (俵)	171	—	—	(18.4)	—	晩期前葉 110-7
S143 (俵)	172	—	(26.6)	(26.6)	—	安行式 110-8
S143 (俵)	173	—	(24.0)	(25.8)	—	安行式 111-1
S143 (俵)	174	—	(29.4)	(31.6)	—	安行式 111-2

第18表 遺構出土復元土器観察表 (4) (第210～216図)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	非完形品は () につき、単位はcm (小数点第一位まで)		図版
					底径	分類	
SJ43 (傳)	175	-	(26.0)	(27.4)	-	晩期	図版
SJ44	176	-	(18.6)	(18.6)	-	加賀利B3式	111-3
SJ44	177	-	(20.8)	(21.0)	-	曾谷・高井東式	111-4
SJ44	178	-	-	(33.0)	-	曾谷・高井東式	111-5
SJ44	179	-	11.0	11.0	-	曾谷・高井東式	111-6
SJ44	180	-	(35.0)	(37.8)	-	曾谷・高井東式	111-7
SJ44	181	-	(34.6)	(37.0)	-	曾谷・高井東式	111-8
SJ44	182	-	(29.1)	(30.6)	-	曾谷・高井東式	112-1
SJ44	183	-	(30.0)	(30.0)	-	曾谷・高井東式	112-2
SJ44	184	-	(17.8)	(17.8)	-	曾谷・高井東式	112-3
SJ44	185	-	(12.2)	(12.2)	-	曾谷・高井東式	112-4
SJ44	186	-	(29.8)	(30.2)	-	曾谷・高井東式	112-5
SJ44	187	-	(18.1)	(18.1)	-	曾谷・高井東式	112-6
SJ44	188	-	(32.2)	(33.8)	-	曾谷・高井東式	112-7
SJ44	189	-	(22.0)	(22.0)	-	曾谷・高井東式	112-8
SJ44	190	-	(19.0)	(19.2)	-	安行3 a 式	113-1
SJ44	191	-	27.8	27.8	-	安行1 式	113-2
SJ44	192	-	(15.4)	(15.4)	-	安行1 式	113-3
SJ44	193	-	(29.2)	(29.6)	-	安行3 a 式	113-4
SJ44	194	-	(24.8)	(32.6)	-	安行2 式	113-5
SJ44	195	-	(24.4)	(28.0)	-	安行1～2 式	113-6
SJ44	196	-	(24.0)	(34.4)	-	安行1～2 式	113-7
SJ44	197	-	(15.8)	(19.4)	-	安行2 式	113-8
SJ44	198	-	(22.0)	(22.4)	-	曾谷～安行1 式	114-1
SJ44	199	-	(21.8)	(24.6)	-	曾谷～安行1 式	114-2
SJ44	200	-	(22.4)	(26.8)	-	曾谷～安行1 式	114-3
SJ44	201	-	(12.2)	(14.9)	-	曾谷～安行1 式	114-4
SJ44	202	-	-	(20.8)	4.7	曾谷～安行1 式	114-5
SJ44	203	-	-	(19.3)	(4.7)	曾谷～安行1 式	114-6
SJ44	204	-	-	(20.6)	-	曾谷～安行1 式	114-7
SJ44	205	-	-	(18.4)	-	安行3 a 式	114-8
SJ44	206	-	-	(25.2)	-	安行式	115-1
SJ44	207	-	-	(33.2)	-	安行式	115-2
SJ44	208	-	-	(29.9)	-	安行式	115-3
SJ44	209	-	-	(29.0)	-	安行式	115-4
SJ44	210	-	-	(21.2)	3.8	安行式	115-5
SJ44	211	-	-	(18.2)	4.0	安行式	115-6
SJ44	212	-	-	(13.5)	3.8	安行式	115-7
SJ44	213	-	-	(12.2)	(4.3)	安行式	115-8
SJ44	214	-	(18.8)	(18.8)	-	安行式	116-1
SJ44	215	-	(15.5)	(16.5)	-	安行式	116-2
SJ44	216	-	(16.0)	(16.0)	-	安行3 b 式	116-3
SJ44	217	-	(20.1)	(20.1)	-	安行式	116-4
SJ44	218	-	(26.2)	(26.2)	-	安行式	116-5
SJ44	219	-	(23.8)	(23.8)	-	安行1 式	116-6
SJ44	220	-	(24.0)	(25.0)	-	安行1 式	116-7
SJ44	221	-	(31.7)	(32.5)	-	安行2～3 a 式	116-8
SJ44	222	-	-	(12.2)	-	安行1 式	117-1
SJ44	223	-	-	(17.6)	(17.6)	後期安行式	117-2
SJ44	224	-	-	15.0	15.0	晩期安行式	117-3
SJ44	225	-	(22.4)	(24.0)	-	晩期安行式	117-4
SJ44	226	-	(17.8)	(18.0)	-	加賀利B3式	117-5
SJ44	227	-	(31.4)	(31.6)	-	加賀利B3～曾谷式	117-6
SJ44	228	-	14.6	(15.4)	-	曾谷式	117-7
SJ44	229	-	(18.2)	(18.2)	-	高井東式	117-8
SJ44	230	7.2	12.4	12.4	-	曾谷～安行1 式	118-1
SJ44	231	-	-	(10.2)	(7.2)	曾谷～安行1 式	118-2
SJ44	232	-	(17.0)	(17.0)	-	安行2 式	118-3
						曾谷～安行1 式	118-4

第19表 遺構出土復元土器観察表(5) (第216~221図)

非定形品は 〇 つき、単位はcm (小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
S144	233	-	(27.6)	(28.2)	-	安行3a式	118-5
S144	234	-	(26.0)	(26.0)	(9.8)	安行2式	118-6
S144	235	-	(24.5)	(25.1)	-	不明	118-7
S144	236	-	-	(18.4)	(5.4)	晩期	118-8
S144	237	-	(8.6)	(12.0)	-	新地系	119-1
S144	238	-	(25.0)	(25.0)	-	安行式	119-2
S144	239	-	(19.4)	(20.0)	-	安行式	119-3
S144	240	-	(23.4)	(24.6)	-	安行式	119-4
S144	241	-	(30.0)	(30.6)	-	安行式	119-5
S144	242	-	(24.0)	(25.6)	-	安行式	119-6
S144	243	-	(21.0)	(21.8)	-	安行式	119-7
S144	244	-	(27.0)	(29.8)	-	安行式	119-8
S144	245	-	(27.0)	(28.6)	-	安行式	120-1
S144	246	-	(25.0)	(27.0)	-	安行式	120-2
S144	247	-	(24.0)	(24.2)	-	安行式	120-3
S144	248	-	30.3	30.3	-	曾谷~安行1式	120-4
S144	249	-	(33.9)	(33.9)	-	加曾利B3式	120-5
S144	250	-	(28.2)	(28.6)	-	安行式	120-6
S144	251	-	(32.4)	(34.2)	-	安行式	120-7
S144	252	-	(25.0)	(30.0)	-	安行式	120-8
S144	253	-	(27.0)	(29.0)	-	安行式	121-1
S144	254	-	(20.2)	(21.6)	-	曾谷式	121-2
S144	255	-	(26.0)	(26.0)	-	後期安行式	121-3
S144	256	-	-	(13.2)	5.6	加曾利B~曾谷式	121-4
S144	257	-	-	(17.0)	3.7	安行式	121-5
S144	258	-	-	(18.0)	5.0	安行式	121-6
S144	259	-	-	(15.4)	4.0	安行式	121-7
S144	260	-	-	(8.8)	4.0	安行式	121-8
S144	261	-	-	(19.2)	5.4	安行式	122-1
S144	262	-	-	(15.2)	7.0	安行式	122-2
S144	263	-	-	(13.3)	(4.2)	安行式	122-3
S144	264	-	-	(17.0)	4.6	安行式	122-4
S144	265	-	-	(8.6)	4.0	安行式	122-5
S144	266	-	-	(16.2)	7.5	加曾利B3式	122-6
S144	267	-	-	(10.1)	6.6	加曾利B3式	122-7
S144	268	-	-	(10.9)	7.3	加曾利B3式	122-8
S144	269	-	-	(11.4)	7.6	加曾利B3式	123-1
S144	270	-	-	(9.5)	7.3	加曾利B3式	123-2
S144	271	-	-	(14.9)	4.3	安行式	123-3
S144	272	-	-	(12.3)	3.5	安行式	123-4
S144	273	-	-	(18.2)	17.0	堀之内~加曾利B式	123-5
S144	274	-	-	(9.2)	(8.7)	堀之内~加曾利B式	123-6
S144	275	-	-	(8.4)	7.4	堀之内~加曾利B式	123-7
S144	276	-	-	(8.0)	7.8	堀之内~加曾利B式	123-8
S144	277	-	-	(12.0)	8.8	堀之内~加曾利B式	124-1
S144 (倭)	278	-	(23.4)	(32.2)	-	安行2~3a式	124-2
S145	279	-	(32.4)	(32.9)	-	加曾利B2式	124-3
S145	280	-	-	(34.2)	-	加曾利B3式	124-4
S145	281	-	(25.6)	(25.6)	-	曾谷式	124-5
S145	282	-	(24.0)	(24.0)	-	加曾利B3式	124-6
S145	283	-	(20.1)	(20.1)	-	加曾利B3式	124-7
S145	284	-	-	(22.1)	-	高井東式	124-8
S145	285	-	(21.8)	(21.8)	-	安行1式	125-1
S145	286	-	-	(28.0)	-	安行式	125-2
S145	287	-	-	(25.0)	-	安行式	125-3
S145	288	-	-	(21.8)	4.0	安行式	125-4
S145	289	36	(27.4)	(27.4)	4.7	安行1式	125-5
S145	290	-	(36.0)	(36.0)	-	安行1式	125-6

第20表 遺構出土復元土器観察表(6) (第221~226図)

非完形品は()つき。単位はcm(小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
S145	291	6	(20.1)	(20.1)	(8.2)	不明	125-7
S146	292	-	(20.0)	(23.2)	-	加曾利B2式	125-8
S146	293	-	(21.4)	(21.4)	-	加曾利B3式	126-1
S146	294	-	(23.6)	(25.2)	-	安行1式	126-2
S146	295	-	-	(18.4)	-	曾谷~安行1式	126-3
S146	296	-	-	(23.0)	-	曾谷~安行1式	126-4
S146	297	-	-	-	-	曾谷・高井東式	126-5
S146	298	-	(25.8)	(27.2)	-	加曾利B3式	126-6
S147	299	-	(28.6)	(29.6)	-	加曾利B3式	126-7
S147	300	-	(16.4)	(16.4)	-	加曾利B3式	126-8
S147	301	-	(25.8)	(26.4)	-	曾谷式	126-9
S147	302	10.3	(23.0)	(23.0)	-	曾谷式	127-1
S147	303	-	(22.6)	(24.6)	-	加曾利B3式	127-2
S147	304	-	(13.8)	(13.8)	4.8	曾谷式	127-3
S147	305	-	(26.0)	(26.0)	-	安行1式	127-4
S147	306	-	(22.4)	(28.4)	-	後期安行式	127-5
S147	307	-	(29.0)	(36.0)	-	後期安行式	127-6
S147	308	-	(23.6)	(23.6)	-	安行1式	127-7
S147	309	-	(28.0)	(29.0)	-	安行1式	127-8
S147	310	-	-	(11.2)	(4.2)	安行式	128-1
S147	311	-	-	(10.8)	(4.0)	不明	128-2
S148	312	-	-	(28.2)	-	堀之内2式	128-3
S148	313	-	(30.0)	(30.0)	-	曾谷式	128-4
S149	314	-	(37.2)	(38.1)	-	加曾利B3~曾谷式	128-5
S149	315	-	(27.6)	(33.0)	-	加曾利B3~曾谷式	128-6
S149	316	-	(17.8)	(17.8)	-	曾谷式	128-7
S149	317	-	-	(10.0)	4.0	不明	128-8
S151	318	-	-	(33.3)	-	安行3c~3d式	128-9
S151	319	-	-	(31.3)	-	曾谷~安行1式	129-1
S155	320	-	-	(29.8)	-	安行1式	129-2
S155	321	-	(16.0)	(16.8)	-	安行1式	129-3
S155	322	-	(14.3)	(14.3)	-	新地式	129-4
S155	323	-	(28.6)	(28.6)	-	安行1式	129-5
S155	324	-	(18.4)	(18.8)	-	晩期前葉	129-6
S155	325	-	(28.0)	(28.8)	-	安行1式	129-7
S156	326	-	-	(17.9)	3.0	曾谷~安行1式	129-8
S156	327	-	-	(14.6)	3.0	晩期安行式	129-9
S156	328	-	-	(21.5)	(4.4)	曾谷~安行1式	130-1
S159	329	-	(20.4)	(20.4)	-	堀之内2式	130-2
S160	330	-	(17.0)	(19.0)	-	加曾利B2式	130-3
S161	331	-	-	(19.8)	-	高井東式	130-4
S161	332	-	(28.0)	(30.0)	-	安行1式	130-5
S161	333	-	(20.4)	(23.2)	-	安行1式	130-6
S161	334	-	(21.0)	(22.4)	-	安行1式	130-7
S161	335	-	-	(30.2)	-	安行1式	130-8
S161	336	-	-	(30.0)	-	後期安行式	131-1
S161	337	-	-	(18.6)	3.6	安行式	131-2
S161	338	-	(18.1)	(18.1)	-	安行1式	131-3
S161	339	-	(13.9)	(13.9)	-	曾谷式	131-4
S161	340	-	-	(24.2)	-	安行1式	131-5
S161	341	5.8	12.2	12.2	3.8	安行1式	131-6
S161	342	-	-	(12.8)	5.0	不明	131-7
S161	343	-	(27.6)	(28.7)	-	安行1式	131-8
S161	344	-	(23.5)	(24.2)	-	安行1式	131-9
S163	345	-	(20.0)	(20.6)	-	曾谷式	132-1
S163	346	-	(11.6)	(11.6)	-	後期後葉	132-2
S164	347	-	(28.0)	(28.6)	-	曾谷式	132-3
S164	348	-	(26.4)	(28.0)	-	安行式	132-4

第21表 遺構出土土器観察表(7) (第227・303~307・315~318図)

非定形品は 0 つき、単位はcm (小数点第一位まで)						分類	
遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径		図版
S164	349	-	-	(19.7)	4.0	安行式	132-5
S164	350	-	-	(14.0)	4.2	安行式	132-6
S164	351	-	-	(11.3)	3.0	安行式	132-7
S164	352	-	-	(20.6)	3.7	晩期安行式	132-8
S164 (俵)	353	-	(28.4)	(29.8)	-	安行3 a 式	132-9
S164 (俵)	354	-	(36.0)	(39.2)	-	安行式	133-1
S164 (俵)	355	-	(20.7)	(24.0)	-	安行式	133-2
S165	356	-	(18.4)	(18.8)	-	曾谷式	133-3
S165	357	-	(20.1)	(24.6)	-	安行1 式	133-4
S165	358	-	(24.0)	(28.4)	-	安行式	133-5
SK47	1	-	(7.8)	(14.5)	-	安行3 a ~ 3 b 式	133-6
SK277	2	8.3	5.6	12.6	-	大淵C 1 式	133-7
SK290	3	-	(35.1)	(35.1)	-	晩期	133-8
SK287	4	-	(27.7)	(31.6)	-	安行3 b 式	133-9
SK287	5	-	(23.0)	(25.3)	-	安行3 b 式	134-1
SK287	6	-	(25.8)	(26.3)	-	安行3 c 式	134-2
SK287	7	-	(24.0)	(24.0)	-	安行3 b 式	134-3
SK287	8	-	(18.8)	(18.8)	-	安行3 b ~ 3 c 式	134-4
SK287	9	-	(14.2)	(14.2)	6.0	安行3 b ~ 3 c 式	134-5
SK287	10	-	(32.2)	(34.2)	-	晩期	134-6
SK287	11	-	30.4	32.6	-	晩期	134-7
SK287	12	-	(24.6)	28.5	-	晩期	134-8
SK287	13	-	-	(34.0)	-	晩期	135-1
SK287	14	-	-	(18.2)	4.8	不明	135-2
SK287	15	-	-	(17.3)	5.3	不明	135-3
SK287	16	-	-	(14.4)	4.8	不明	135-4
SK287	17	54	(36.4)	(40.2)	6.5	安行3 b ~ 3 c 式	135-5
SK288	18	-	-	(24.1)	-	晩期	135-6
SK289	19	-	(30.1)	(31.6)	-	大淵C 1 式	135-7
SK289	20	-	-	(14.4)	-	安行3 a ~ 3 b 式	135-8
SK290	21	-	(28.8)	(30.8)	-	晩期	136-1
SK306	22	-	(22.4)	(22.4)	-	堀之内2 式	136-2
SK310	23	-	7.1	11.4	-	大淵B C ~ C 1 式	136-3
SK318	24	-	(29.0)	(32.8)	-	加曾利B 2 式	136-4
SK318	25	-	-	(36.1)	-	加曾利B 2 式	136-5
SK327	26	-	(20.8)	(20.8)	-	曾谷式	136-6
SK328	27	-	27.9	(32.2)	-	前溝式	136-7
SK331	28	-	(26.5)	(26.5)	-	安行2 式	136-8
S143内SK5	29	-	-	(20.0)	3.5	安行式	137-1
集中9	1	-	(38.0)	(43.4)	9.0	安行3 b ~ 3 c 式	137-2
集中9	2	-	(29.5)	(29.9)	-	安行3 b ~ 3 c 式	137-3
集中9	3	-	(32.2)	(32.2)	-	安行3 b ~ 3 c 式	137-4
集中9	4	-	(31.0)	(37.0)	-	晩期	137-5
集中10	5	-	18.4	19.9	-	安行3 a ~ 3 b 式	137-6
集中10	6	-	(27.8)	(31.0)	-	晩期	137-7
集中10	7	-	32.6	35.9	-	晩期	138-1
集中10	8	-	-	(18.7)	5.0	不明	138-2
集中10	9	-	-	17.0	16.5	安行3 b 式	138-3
集中12	10	-	(20.6)	(24.8)	-	安行3 a 式	138-4
集中12	11	-	-	(22.4)	-	安行3 a ~ 3 b 式	138-5
集中12	12	36	(28.6)	(31.4)	3.2	安行式	138-6
集中12	13	-	(26.2)	(28.0)	-	安行式	138-7
集中12	14	-	(34.2)	(37.0)	-	安行式	138-8
集中12	15	-	-	(17.6)	3.4	晩期	139-1
集中16	16	-	31.0	(31.6)	-	安行3 a 式	139-2
集中16	17	-	(32.4)	(33.6)	-	安行3 a ~ 3 b 式	139-3
集中16	18	-	(23.0)	(23.0)	-	安行3 a 式	139-4
集中16	19	-	(30.0)	(34.2)	-	安行3 b 式	139-5

第22表 遺構出土復元土器観察表(8) (第318・321・322・325・326・331・333図)

非完形品は()つき。単位はcm (小数点第一位まで)

遺構名	番号	器高	口径	最大径	底径	分類	図版
集中19	20	4.7	11.0	11.7	4.0	安行3b式	139-6
埴輪1	1	-	(20.9)	(25.2)	6.7	晩期前葬	139-7
埴輪2	2	39.5	(30.6)	30.6	3.0	後期安行式	139-8
埴輪2	3	-	(10.0)	(10.0)	-	後期安行式	140-1
埴輪3	4	-	32.5	32.5	-	安行式	140-2
SR3	1	-	(18.3)	(19.2)	-	曾谷式	140-3
埴土跡3	1	40.4	(26.2)	29.4	-	晩期	140-4
埴土跡7	2	-	(20.2)	(20.2)	-	後期安行式	140-5
埴土跡7	3	-	-	(24.0)	3.2	安行式	140-6
埴土跡9	4	-	(21.2)	(21.8)	-	安行2～3a式	140-7
埴土跡14	5	-	(20.0)	(23.6)	-	晩期安行式	140-8
埴土跡14	6	-	-	(23.3)	4.1	晩期安行式	141-1
埴土跡21	7	-	(26.0)	(27.2)	-	曾谷式	141-2
埴土跡21	8	-	(21.4)	(21.4)	-	晩期	141-3
埴土跡21	9	-	-	(16.7)	-	不明	141-4
埴土跡27	10	-	-	(24.0)	-	安行1式	141-5
埴土跡27	11	-	(23.0)	(23.3)	-	安行1式	141-6
埴土跡27	12	-	(29.0)	(29.0)	-	安行1式	141-7
埴土跡27	13	-	-	(27.6)	-	後期安行式	141-8
埴土跡27	14	-	-	(28.7)	-	後期安行式	142-1
埴土跡27	15	-	-	(28.0)	-	後期安行式	142-2
埴土跡27	16	-	-	(17.6)	3.0	安行式	142-3
埴土跡27	17	-	(19.2)	(19.2)	-	後期安行式	142-4
埴土跡27	18	-	-	(16.0)	(16.0)	安行3a～3b式	142-5
粘土塊1	1	-	(22.0)	(23.0)	-	晩期	142-6
粘土塊1	2	-	(33.0)	(34.3)	-	晩期	142-7
G-6 P74	1	-	-	(21.0)	-	安行3b式	142-8
H-5 P84	2	-	-	(31.0)	-	晩期安行式	143-1
1-6 P163	3	-	-	(13.8)	-	晩期中葬	143-2
1-7 P22	4	-	-	(12.8)	-	晩期安行式	143-3
1-7 P53	5	21.9	(13.2)	(19.7)	3.6	曾谷式	143-4
1-7 P62	6	-	-	(25.6)	3.7	曾谷～後期安行式	143-5
1-7 P62	7	-	-	(14.0)	3.2	曾谷～後期安行式	143-6
1-7 P62	8	12.8	(20.9)	(22.5)	-	曾谷式	143-7
1-7 P62	9	-	-	16.4	6.4	曾谷・高井東式	143-8

2. 土製品

(1) 住居跡出土土製品

土偶 (第337図～第341図)

1はみみずく土偶で、第38号住居跡から出土した。右腕から右胸部にかけての部分である。胸部前面に対向三叉文を描いて縄文を施文し、みぞおち付近から腕にかけて刻み隆帯を貼り付けている。背面と肩の上面に同心円文を描く。赤彩されている。現存部分の高さ50cm、幅82cm、厚さ38cm、重さ660gである。

2～8は第40号住居跡から出土した。

2はみみずく土偶で、両脚を欠損する。前方および左右に鱗状の結髪表現を配し、顔面を刻み隆帯で開繞する。眉は水平で、鼻は鼻腔の表現を持つ。胸部から両肩にかけて、単沈線列を伴う鱗状の隆帯を貼り付けている。背面には単沈線の入り組み文を2段に描き、縄文を施文している。現存部分の高さ124cm、幅106cm、厚さ44cm、重さ315gである。

3・4はみみずく土偶の結髪である。3は前後左右に山形の突起を配するが、すべて上向きに取り付けられている。現存部分の高さ24cm、幅80cm、厚さ42cm、重さ405gである。

4も前後左右に鱗状の突起を配するが、全体にやや背面向きに取り付けられている。上額部には横位の刻み隆帯を貼り付けている。赤彩されている。現存部分の高さ48cm、幅72cm、厚さ38cm、重さ754gである。

5はみみずく土偶で、胴部から右脚の一部が残存している。胸部にV字状の刻み隆帯を貼り付けて、これに沿って押し引き文を巡らせている。背面には入り組み三叉文を配し、腰部に横位の沈線を描いている。現存部分の高さ68cm、幅66cm、厚さ30cm、重さ1126gである。

6は山形土偶とみられる左腕である。なで肩で、手首の外縁に刻みを施して外に反り返った指

先を表現している。肩部に粗雑な沈線文を描いている。現存部分の高さ42cm、幅30cm、厚さ24cm、重さ237gである。

7・8はみみずく土偶の左脚である。いずれも横位の平行沈線文を描いて縄文を施文し、縦位の短沈線による指の表現を持っている。7は前後の隆起によって爪先とかかとを明瞭に表現しており、縦の平行沈線で指を表現している。足裏は平坦である。現存部分の高さ32cm、幅26cm、厚さ30cm、重さ191gである。8は爪先側が軽微に突出する。平行沈線で足指を表現する。現存部分の高さ34cm、幅24cm、厚さ20cm、重さ165gである。

9～26は第43号住居跡から出土した。

9はみみずく土偶で、結髪・右耳・左手・下半身を欠損する。顔の輪郭は帯縄文で表現し、両眼の間に刻み隆帯を配して鼻の表現としている。胸部には逆三角形の区画を描いて入り組み文を配し、みぞおちから両肩にかけて隆帯を貼り付けて縄文を施文している。背面には菱形の区画を描いて入り組み文を配する。

現存部分の高さ72cm、幅70cm、厚さ20cm、重さ766gである。

10は小型のみみずく土偶である。頭部と上半身の一部が残存する。結髪を持たず、顔の輪郭は刻み隆帯でハート形に形成しており、円形の貼り付け文で両目と口を表現し、鼻の表現を持たない。胸部に入り組み文を配し、後頭部から背面にかけて粗雑な入り組み文を重畳させている。縄文は施文しない。

現存部分の高さ44cm、幅44cm、厚さ16cm、重さ256gである。

11はみみずく土偶で、胸部から右脚の一部までが残存する。胸部に入り組み文を描き、みぞおちから両腕にかけて単沈線列を伴う鱗状突起を貼り付けている。右腰表面に入り組み文を描き、背面

中央に入り組み三叉文を描いている。

現存部分の高さ64cm、幅68cm、厚さ30cm、重さ795gである。

12は系統不明の土偶で、頭部を欠損する。なで肩でがに股、左脚の爪先と右脚のかかとがやや上がっており、左脚から前に一歩踏み出すか、踊っているような表現となっている。円形の貼り瘤で両乳房を、中央刺突を伴った貼り瘤で膨らんだ腹部を表現し、また股間にも小突起を伴っている。両脚付け根の側縁に隆帯を貼り付け、腰部背面にも横位の隆帯を貼り付けている。

乳房の下に横位の平行沈線を描き、背面中央に菱形の区画を描いて中央に小渦文を配している。現存部分の高さ106cm、幅100cm、厚さ34cm、重さ3143gである。

13はみみずく土偶で、右腰から右脚にかけて残存する。腰は横に張り出して脚部との間に段を持ち、平行沈線文を描く。腰部前面に三角形の沈線によるパンツ状の表現がみられる。腰部側縁には楕円形の区画文を描く。

現存部分の高さ78cm、幅38cm、厚さ34cm、重さ853gである。

14はみみずく土偶の左腰部である。側面・背面に密な横位の集合沈線文を施文しており、内股部分のみ縦位の集合沈線文を施文している。脚部前面に縦位の刻み隆帯を貼り付け、背面は刻み隆帯の三角形区画文を描いている。現存部分の高さ62cm、幅54cm、厚さ28cm、重さ637gである。

15はみみずく土偶で、腰部から両脚が残存する。腰部前面にはV字状の刻み隆帯を貼り付けており、表裏・側縁ともに平行沈線＋円形刺突列の区画を多段に巡らせている。足首にはくびれを持って平行沈線＋円形刺突文を巡らせ、足指は表現していない。

現存部分の高さ84cm、幅68cm、厚さ42cm、重さ1618gである。

16はみみずく土偶で、右肩～右腕部分である。

胸部から肩にかけて単沈線列を伴う鱗状突起を貼り付けている。腕は板状の肩部から下向きに張り出す小突起として表現されている。現存部分の高さ24cm、幅24cm、厚さ28cm、重さ114gである。

17は系統不明の土偶右腕である。なで肩で、上下に横位の平行沈線文を施文する。背面側が磨減している。現存部分の高さ40cm、幅36cm、厚さ28cm、重さ218gである。

18はみみずく土偶の右脚とみられる。腰部が外に張り出し、爪先が前方に張り出して、単沈線による足指の表現を持つ。脚の外側と内側に同心円文を描くほか、足裏にも同心円文を配する。現存部分の高さ36cm、幅34cm、厚さ24cm、重さ212gである。

19は山形土偶とみられる右腕である。なで肩で、手首にくびれを持って手先が外に張る。肩部表面に横位の平行沈線文を描く。現存部分の高さ50cm、幅26cm、厚さ24cm、重さ219gである。

20はみみずく土偶の腰部～左脚である。腰部は板状に張り出して平行沈線が巡る。脚部前面には単沈線列を伴う鱗状の突起が垂下する。足首は軽微にくびれ、足先が前面に張り出して、集合沈線による足指の表現を持つ。現存部分の高さ68cm、幅44cm、厚さ34cm、重さ528gである。

21はみみずく土偶の右脚であろう。内股以外に横位の集合沈線文を描いており、爪先は突出して足指の表現は持たない。足裏は比較的広く、平坦である。現存部分の高さ42cm、幅24cm、厚さ32cm、重さ307gである。

22はみみずく土偶の左脚先端部である。足首がくびれて帯縄文を巡らせ、爪先と踵が突出して足裏は丸味を持つ。現存部分の高さ36cm、幅38cm、厚さ46cm、重さ400gである。

23はみみずく土偶の右脚である。表裏に縦位の平行沈線文を描き、足首はくびれて1条の沈線を巡らせる。爪先は突出して、短沈線で足指を表現するものとみられる。現存部分の高さ34cm、幅

24cm、厚さ18cm、重さ134gである。

24～26は床面焼土上層からの出土である。

24はみみずく土偶の右肩である。胸部から肩にかけて半沈線列を伴う鱗状突起を貼り付けている。背面には沈線により三角形区画文を描くものとみられる。現存部分の高さ46cm、幅70cm、厚さ36cm、重さ903gである。

25は小型の土偶右腕～肩部である。肩が張り、手首がくびれ、手先が外側へ水平に突出して、平行沈線により指を表現している。現存部分の高さ30cm、幅26cm、厚さ34cm、重さ195gである。

26はみみずく土偶で、左腰部～左脚部である。内股を含むほぼ全面に縄文を施文し、腰部に平行沈線文を巡らせる。足首には平行沈線文を巡らせ、足先は無文で、爪先や踵・足指の表現は持たない。足裏には網代裏らしきものを残している。現存部分の高さ74cm、幅42cm、厚さ28cm、重さ683gである。

27は山形土偶の左腕部であろう。第44号住居跡から出土した。肩が張り、手首がくびれ、手先が外側へ水平に突出している。上腕部には横位の平行沈線文を施文する。肩部は前面に平行沈線文の菱形モチーフを、背面に矢羽状沈線文を描いている。現存部分の高さ52cm、幅34cm、厚さ32cm、重さ452gである。

28・29は第44号住居跡から出土した。

28は筒形土偶とみられ、頭部を欠損する。変化に乏しい円柱～円錐形で、丸棒状工具により上方から胴部中段に達する縦穴を穿っている。この縦穴は筒形土偶本来の中空構造を模したものとみられる。胴上半部と下半部に横位の多条沈線文を巡らせ、胴部中段に平行沈線による粗雑なパネル文を描いている。底面は丸底で、放射状の沈線文を描

いている。

現存部分の高さ86cm、幅58cm、厚さ58cm、重さ2214gである。

29は床面焼土上層からの出土で、小型の土偶左腕部とみられる。なで肩で、比較的外側へと張り出す。手首にくびれを持ち、手先は外へと軽微に張り出すが、指の表現は持たず、文様も施文していない。現存部分の高さ32cm、幅40cm、厚さ44cm、重さ332gである。

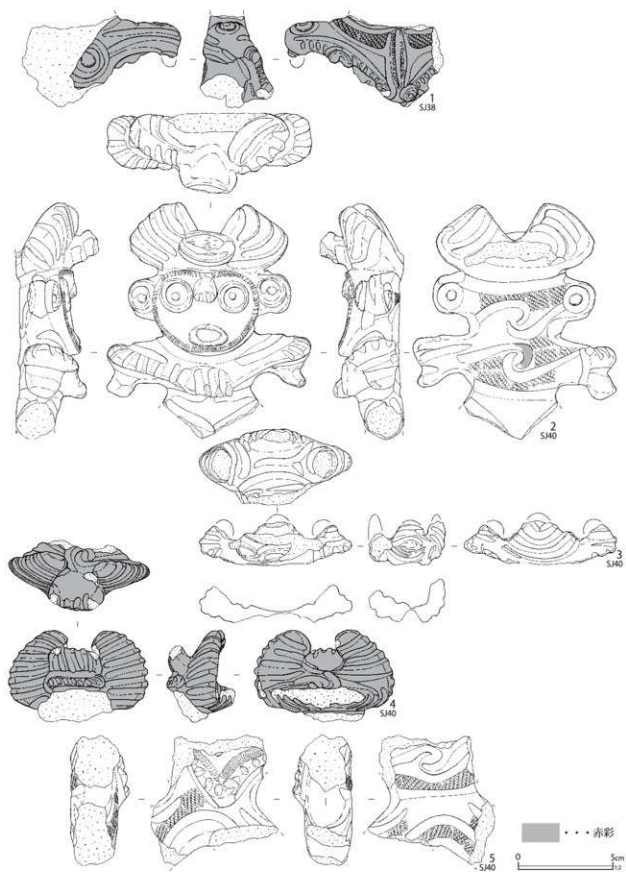
30は第45号住居跡から出土した中空みみずく土偶の左脚である。大腿部に眼鏡状隆帯を巡らせて上下に三叉文と弧線文を描き、隆帯下部の外側に円孔を穿つ。足首には帯縄文を巡らせて、円盤状の足部に接続する。足部の周囲には放射状の沈線文を描き、爪先側のみ2個の押圧で足指を表現している。

現存部分の高さ110cm、幅64cm、厚さ72cm、重さ2763gである。

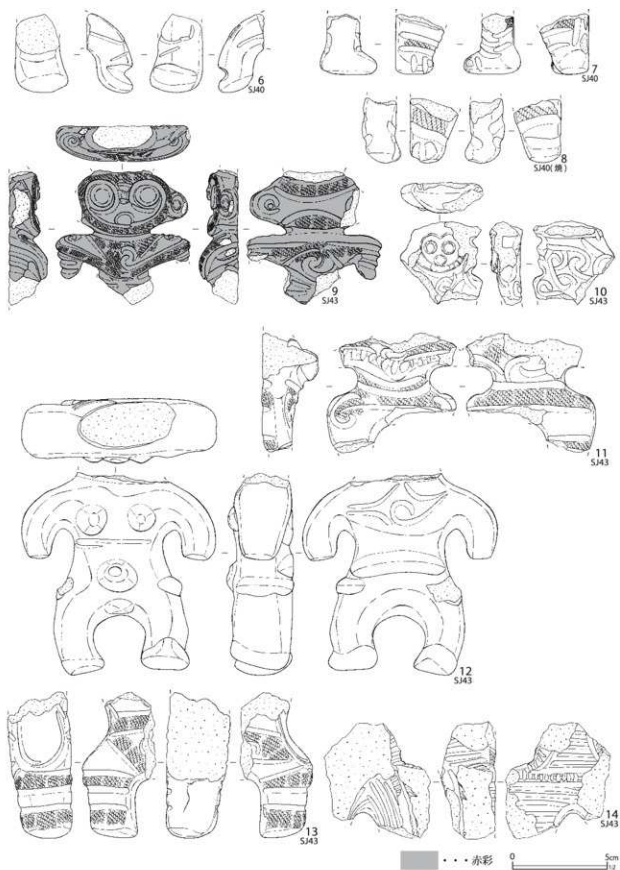
31は第48号住居跡から出土した。系統不明の土偶左脚とみられる。無文で、足先は円錐状に広がり、爪先側を欠損するが刻みによる足指表現が存在した可能性がある。足底には網代裏を残している。上方から足首まで達する縦穴を穿っており、芯材の痕跡か、中空構造を象徴的に模したものである可能性もある。

現存部分の高さ40cm、幅38cm、厚さ42cm、重さ527gである。

32はみみずく土偶の左耳で、第65号住居跡から出土した。全面に同心円文を描いて、中心部と周縁部に小突起を巡らせている。これは本遺跡で出土した土製耳飾りにも共通する文様である。背面には同心円文を描く。現存部分の高さ44cm、幅32cm、厚さ28cm、重さ276gである。



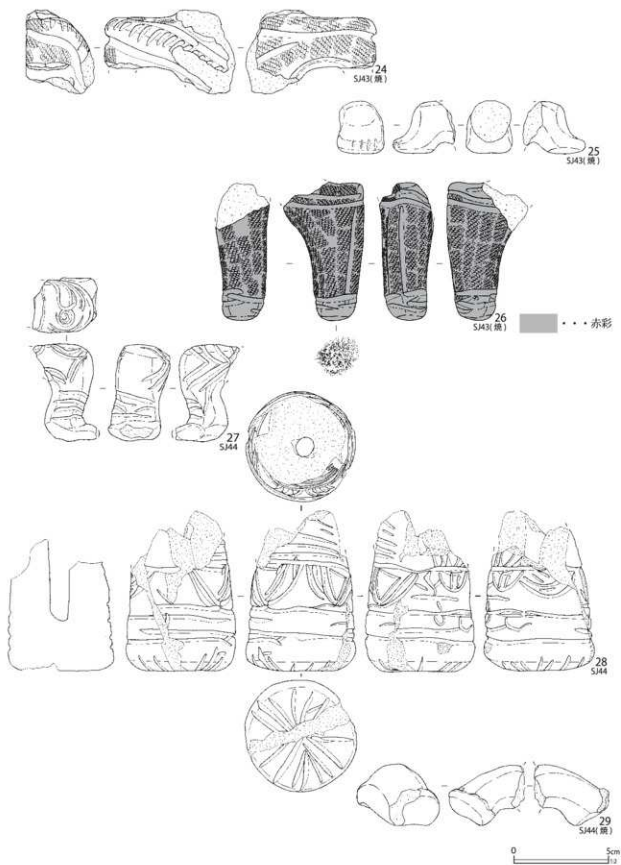
第337图 住居跡出土土製品 (1)



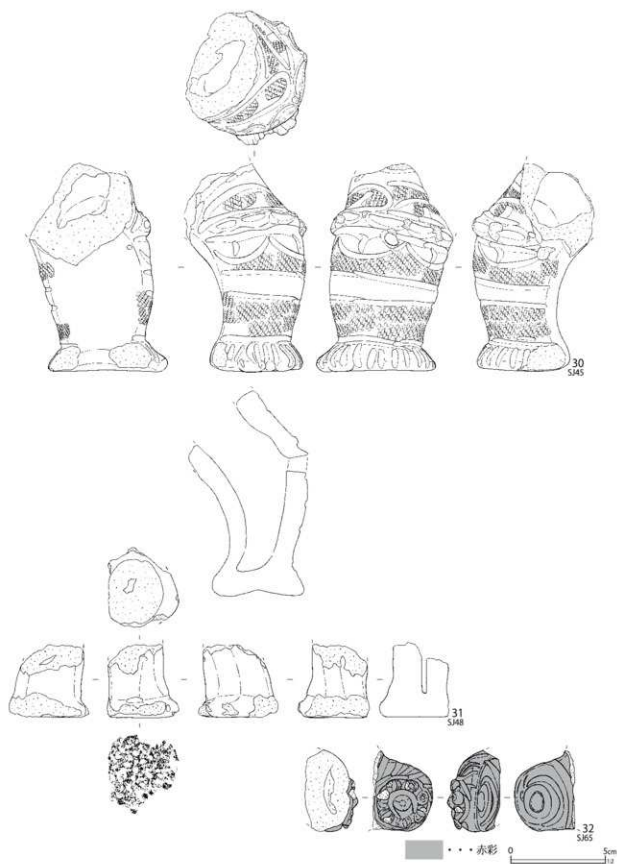
第338図 住居跡出土土製品（2）



第339图 住居跡出土土製品(3)



第340図 住居跡出土土製品(4)



第341图 住居跡出土土製品 (5)

耳飾り (第342図～第349図)

土製の耳飾りは、以下の分類に基づいて整理した。

I：白形

A：装着部が凹まないもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：装着部が凹むもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

II：栓形

A：貫通孔を持たないもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：貫通孔を持つもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

III：環状

A：断面長方形ないし丸棒状のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：断面三角形のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

C：断面「く」の字状ないし弧状のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

D：断面鉤状のもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

IV：台形

A：上面透かしを持たないもの

ア：無文のもの

イ：有文のもの

B：上面透かしを持つもの

V：「千網型」タイプ

33～36は第38号住居跡から出土した。33は白形無文で装着部が凹まないタイプである。34～36は白形有文で、四方に工字文を配する共通の浮線文を描く。

37～58は第40号住居跡から出土した。

37・38は白形無文で、37は装着部にも上下面にも凹みを持たない。39は白形で、上面中央に突起を持ち、その四方にも突起を持ったようだが剥落している。

40・41は環状無文で断面丸棒状であり、装着部の凹みがほとんどみられない。

42・43は環状で断面が「く」の字に反るタイプで、42は無文、43は上端に刻みを巡らせている。

44・45は環状で断面三角形のタイプである。44は無文、45は上端に刻みを巡らせる。

46～50は環状で断面鉤状のタイプで、肥厚する上端内面に文様を描くものが多い。46～48は肥厚の度合いが小さく、文様はほとんど単調な沈線文である。49・50は上端内面が大きく張り出すタイプで49は無文、50はわらび手状のモチーフを沈線で連繋する。

51は台形無文で、上面がドーム状に張り出す。52は台形有文のタイプで、浮線文により3方向に工字文を描く。53～56は台形で透かし文様を持つタイプである。54・55は共通の三つ巴文を描き、サイズも近いことから対をなす可能性がある。

57・58は床面焼土上層からの出土である。57は環状・断面三角形で無文、58は環状・断面鉤形で、上端に刻みを巡らせ、わらび手文に沿って鋭利な工具の刺突列を描く。

59は第42号住居跡から出土した。小破片だが、台形で上面に透かし文様を持つタイプであると考えられる。

60～147は第43号住居跡から出土した。

60～65は白形で無文のタイプである。60・64は装着部の凹みを持たない。62・63は直径に対し高さの卓越する栓状に近いタイプである。66は白形

有文のタイプで、上面中央部に1箇所、円周上に5箇所の突起を持つ。

67~74は環状で断面丸棒状のタイプで無文のものである。装着部の凹みはほとんどみられない。上端と下端で厚みに違いのあるものは、厚いほうを上と考えた。

75・76は環状で断面丸棒状かつ有文のものである。75は環状というよりは貫通孔を持つ白形、ないし栓形と考えるべきかもしれない。装着部の凹みは存在しない。上面・下面ともに刺突列を巡らせ、側面も上端と下端に刺突列・沈線の区画を巡らせている。

77・78は環状・断面三角形で無文のものである。79~86は環状・断面三角形で有文のものを一括した。文様は内面中段の稜線から上に位置している。80は四方に豚鼻突起を配して、刻み・沈線で連繋する。

81は四方に入り組み文を配して、対向三叉文で連繋している。82はU字状の貼り付け文を刻み・沈線で連繋する。83は小渦文を対向三叉文で連繋する。84・85は小破片だが、何らかの単位文を刻み・沈線で連繋するものとみられる。86は上面外縁に配した小突起を刻み隆帯でU字状に縁取っている。

87~93・95は環状で断面が「く」の字状、ないし外反りの弧を描くもので、かつ無文のものである。内面に稜線を形成するものは、稜線のある側を上と考えた。

94・96~102は環状・断面「く」の字状で有文のものである。94は内面上方にごく浅い沈線を巡らせるものである。

96~99は豚鼻様の突起を配するもので、97・99はこれを刻み目文で連繋している。100・101は刺突・刻み目を持つ小突起を沈線で連繋するものとみられる。102は小渦文を持つ小突起を刻み目・沈線で連繋する。突起の内面に剥落を持つことから、透かし文様のタイプであった可能性もある。

103~113は環状・断面鉤形で無文のタイプである。104・105は全体に断面長方形で内面に段を持つものだが、ここに含めた。

114~126は環状・断面鉤形で有文のタイプである。上端から内面の稜線に至る曲面に文様を描いている。

114は完形品で、入り組み文を描く小突起を1箇所に配し、内面に沈線を巡らせている。117・123も三叉文を基調とする文様を描き、左右に「ハ」の字状の沈線を置いて、菱形の区画を構成する。

115・118・119は対向三叉文を基調とする文様で、119は三叉文の間に生じた区画内を鋭利な工具による刺突文で充填している。122は波頭文を描く小突起を4箇所に配置し、対向三叉文によって連繋する。

125は刺突文を伴うW字状の貼り付け文の一部か。126は4箇所の豚鼻突起を沈線で連繋する。

127は台形無文のタイプと考えた。有文のものと比較して、天板部分の厚さが卓越している。128は台形有文のタイプで、上面外周に刻みを持つ貼り瘤を巡らせている。透かし文様を持たないものと考えたが、129のように貫通孔を持つ可能性もある。

129~140は台形有文で上面に透かし文様を持つタイプである。129は中央に貫通孔を持って、円形の貼り瘤を二重に巡らせる。131は天板部分の中央が円錐状に盛り上がり、四方から貫通孔を穿つもので、全面に細かな刺突が施される。133は扁平な白形タイプに貫通孔を穿つものとも解される。中央に円錐形の突起を配して、周囲に4箇所の楕円形の透かしを配し、豚鼻様の突起を巡らせる。

130・132・134~140は環状タイプの上端を橋梁状に接続したものと解される。130は無文で、径の小さい環状タイプの上端を1本の粘土紐でシンプルに接続したものである。

有文のものについては、環状部と橋梁部の接続

部分に何らかの単位文を配するものが典型的である。134は三叉状の橋梁部の付け根に豚鼻様の単位文を配している。140も橋梁部の付け根に豚鼻突起を配する。

単位文を挟んで対向三叉文を描くものも多くみられ、135は刺突を伴う小突起を挟んで対向三叉文を描く。139は十字文を挟んで橋梁部を含む3方向に三叉文を描く。

136・137は橋梁部に十字文を描く鳥状の小突起を配するもので、138もこれに類似する。

141~147は床面焼土上層からの出土である。

141は白形で装着部に凹みを持つタイプである。無文で、全面に成形時の指頭痕を残す。142・143は環状・断面「く」の字状で有文のタイプである。142は刻みを持つ小突起を起点に刻み+沈線を巡らせ、143は内面上半部に区画文を描いている。

144~147は環状で断面鉤形のタイプである。144は無文である。145は入り組み文を起点に沈線を巡らせる。146はわらび手文を起点に刻み+沈線を巡らせる。147は豚鼻突起を対向三叉文で連繋するものであろう。

148~163は第44号住居跡から出土した。148は栓形で貫通孔を持たない。無文だが、上面中央に凹部を持つ。

149・150は環状・断面丸棒状で無文のタイプである。装着部の凹みを持たないが、150は上端部のみ軽微に外反している。

151~153は環状で断面三角形・無文のものである。152は貫通孔を持つ白形とも解される。上端外縁部に焼成後に生じた数箇所の刻みを持つ。153は内面に平坦面を持つ断面台形ともいえるタイプだが、本群に含めた。

154・155は環状で断面「く」の字状のタイプで、

いずれも有文である。154は平行沈線間に3本沈線の単位文を配するが、これは小渦文の崩れたものであろう。155は豚鼻突起を挟んで対向三叉文を配し、外縁に刻みを巡らせる。

156・157は環状・断面鉤形で無文のタイプである。158~161は有文のタイプで、158は何らかの単位文を対向三叉文で連繋するものとみられる。159は平行沈線によるシンプルな単位文である。

160は刺突文を伴う小突起をワンポイント的に配する。161は押し引き文の三叉状モチーフを平行沈線で連繋し、外縁部に刻みを巡らせる。

162・163は床面焼土上層からの出土である。162は環状・断面鉤形で無文のタイプである。163は環状・断面鉤形で有文のタイプで、天板部分に透かしを伴っている。

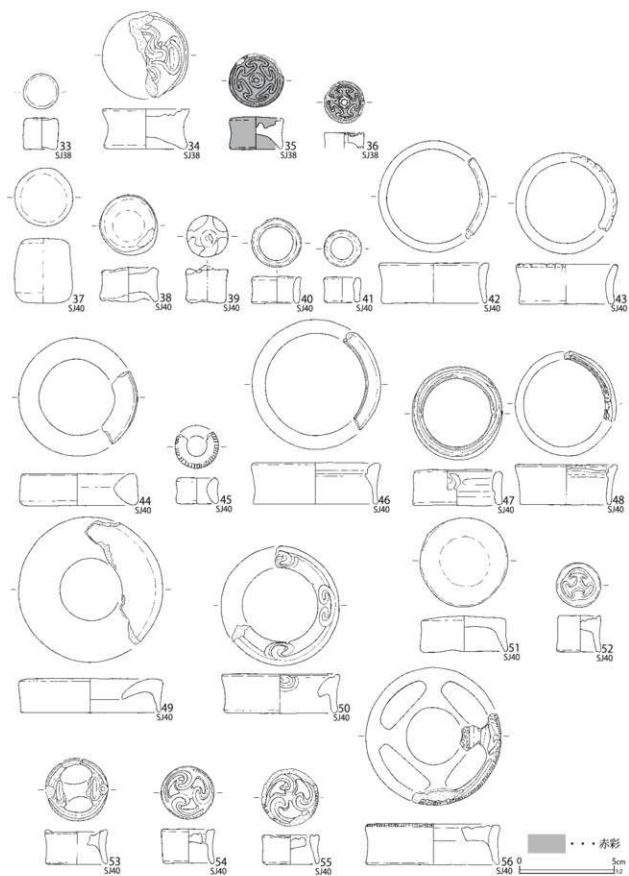
164~168は第45号住居跡から出土した。

164~166は環状・断面「く」の字状で無文のもの。167・168は環状・断面鉤状で有文のタイプである。167は同心円を持つ楕円形の突起を上面に配する。168は肉彫り風の渦巻モチーフを対向させ、沈線で左右連繋するものと思われる。

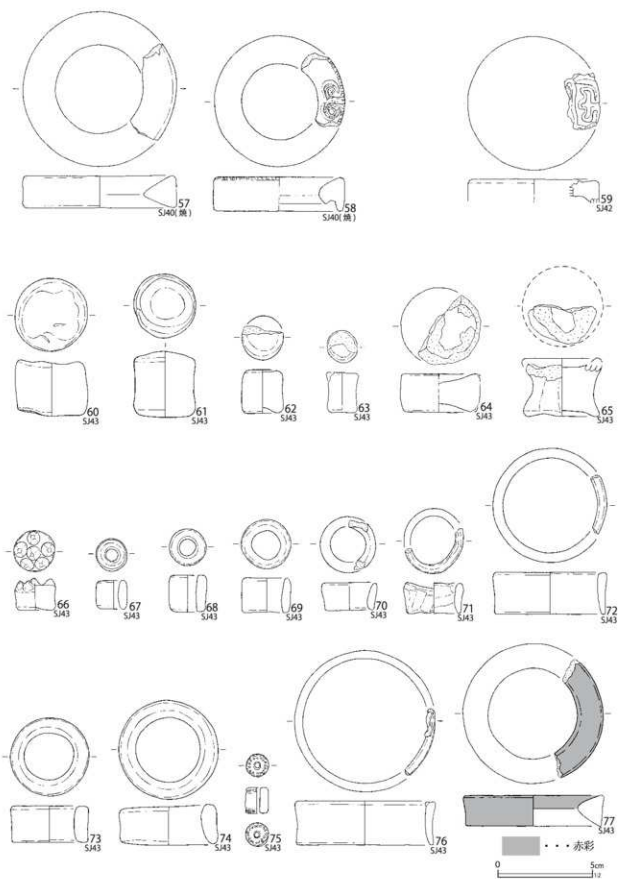
169は第48号住居跡から出土した。完形品で白形無文のものである。装着部がV字に凹み、上下面にもすり鉢状の凹部を持って、極めて軽量にくられている。

170は第50号住居跡から出土した。完形品で白形無文のものである。白形で装着部がV字に凹み、上下面に凹部を持つ。

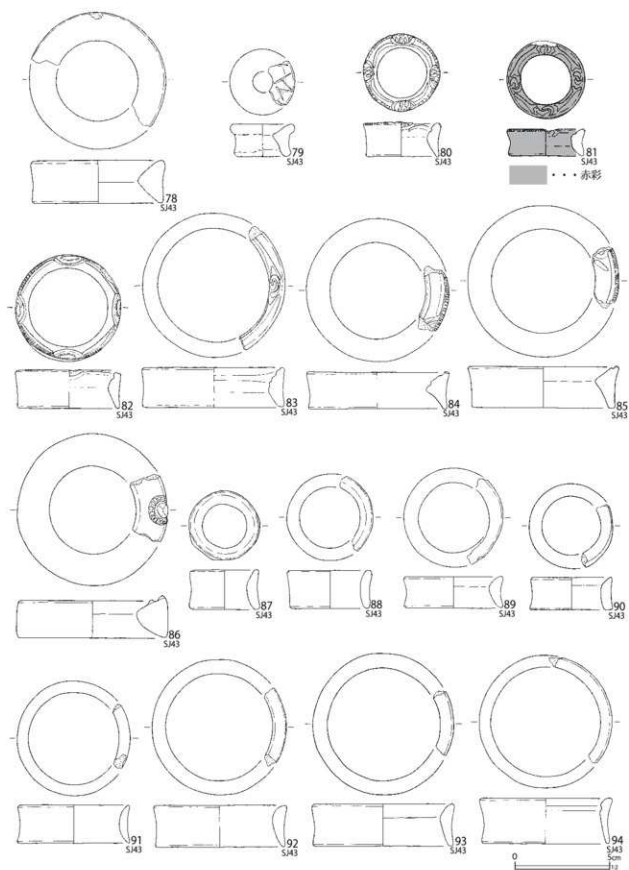
171・172は第64号住居跡から出土した。いずれも環状で断面「く」の字状のタイプである。直径に対し高さが卓越する171は、貫通孔を持つ白形とも解される。



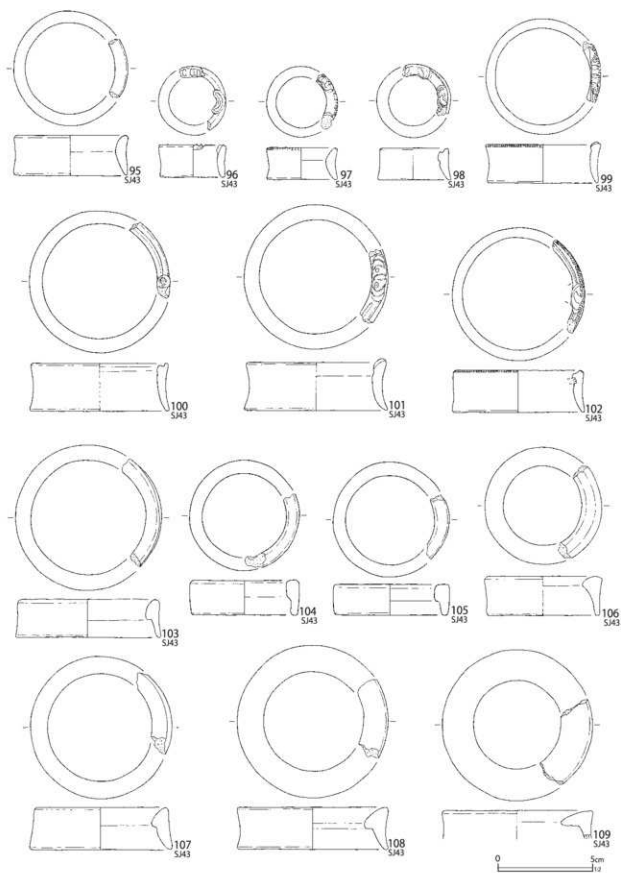
第342图 住居跡出土土製品 (6)



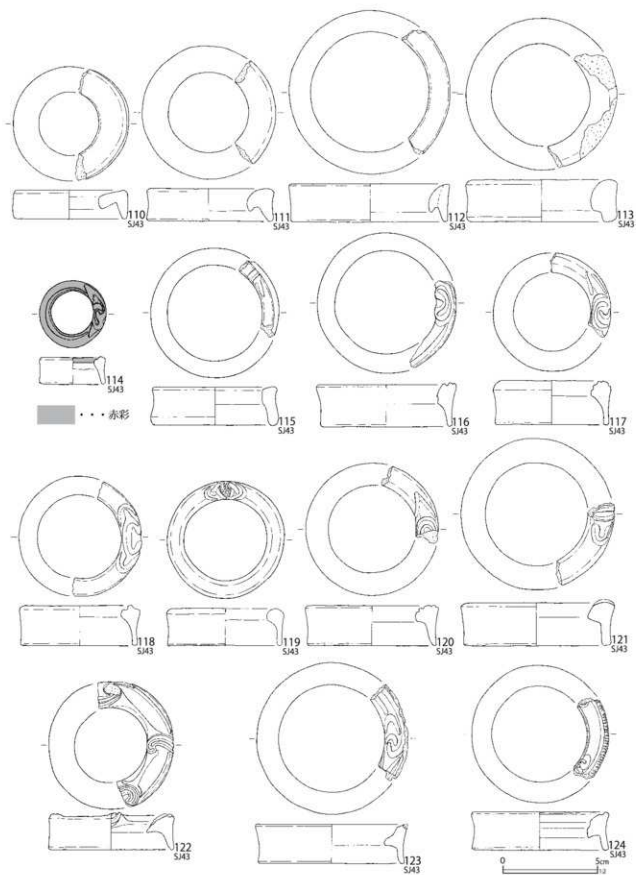
第343図 住居跡出土土製品 (7)



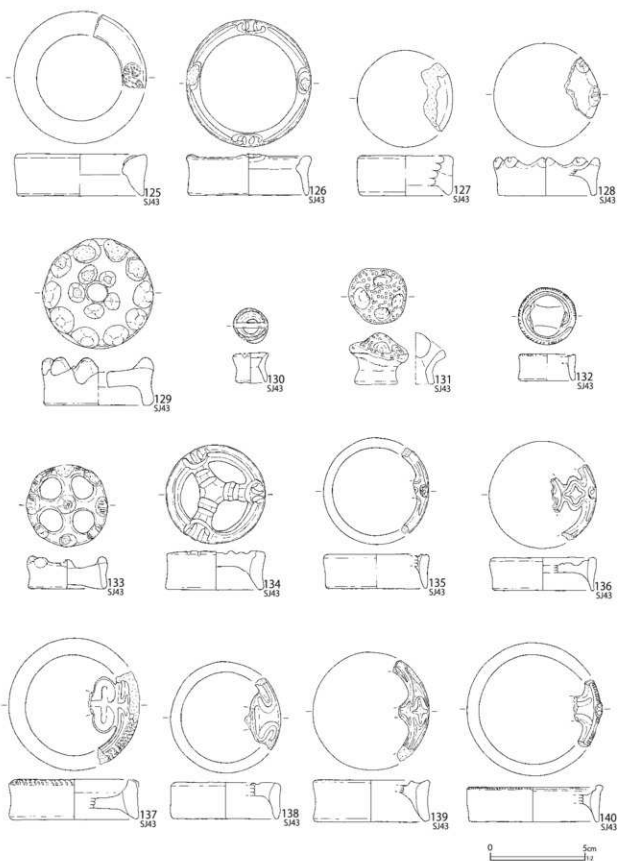
第344图 住居跡出土土製品(8)



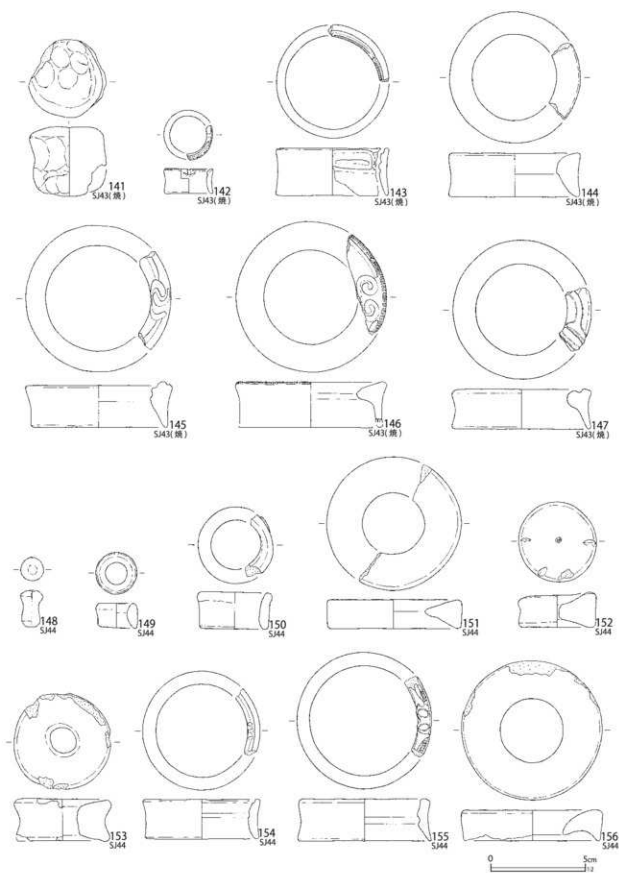
第345図 住居跡出土土製品 (9)



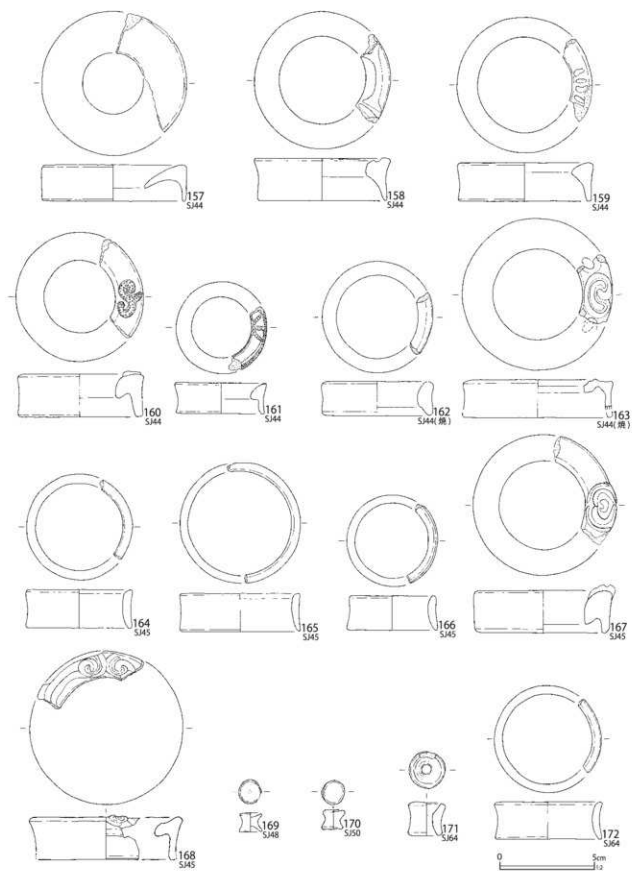
第346图 住居跡出土土製品 (10)



第347図 住居跡出土土製品 (11)



第348图 住居跡出土土製品 (12)



第349図 住居跡出土土製品 (13)

土製円盤（第350図～第359図）

今回の発掘調査で出土した土製円盤については、大きく2つのタイプに分けることができる。

I 類：磨製タイプ

土器片を打ち欠いて円形に整形し、周縁部に研磨を施して、文字通りの円盤状に再加工したもの。

従来の定義での「土製円盤」である。

II 類：打製タイプ

土器片の周縁部から中央部に向かう複数回の打撃が観察できるもの。

突起・隆帯などを打撃により人為的に取り除いたと判断できるものや、肥厚した口縁部の裏側を欠き取ったとみられるものも含まれる。

I 類とは異なり、必ずしも形態が「円形」であることを認定基準としない。

II 類の加工痕は、あたかも石器における剥離面のような外観を呈している。

また、明瞭な切り合いを持って重複しており、土器片に対して執拗に打撃が繰り返されたことを物語っている。

この I・II 類の土製円盤を、素材となっている土器片の部位、その他の属性により以下のとおり細分する。

A：口縁部

ア：突起を持つ口縁

イ：隆帯を巡らせる口縁・折り返し口縁

ウ：断面肥厚する口縁

エ：その他の口縁

B：胴部

ア：突起を持つ胴部

イ：隆帯を持つ胴部

ウ：その他の胴部

C：底部

D：その他・部位不明

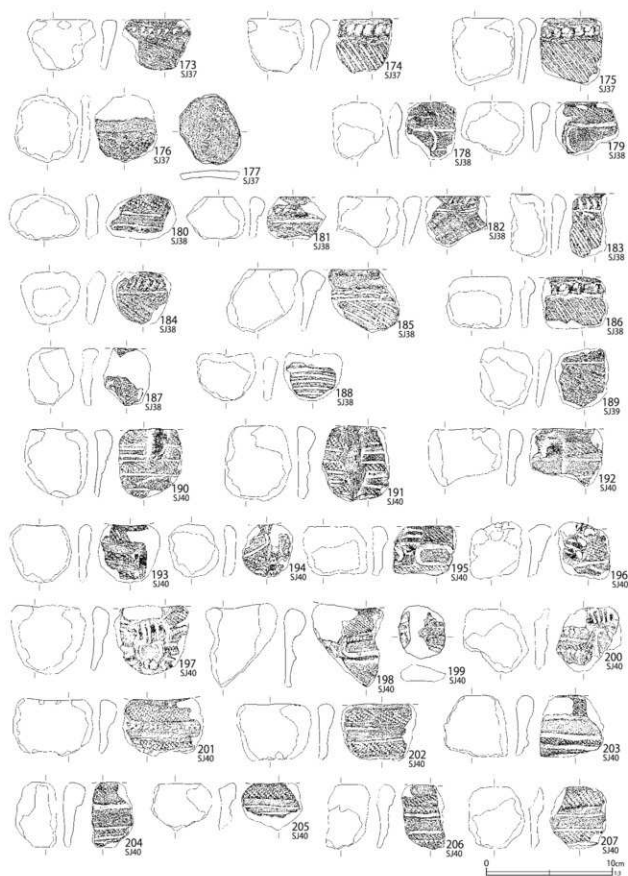
掲載資料の法量と分類は第25～27表にまとめた。一見して、口縁部の破片を使用した II A 類が多数を占める傾向が見て取れる。

また、II A 類ア～ウでは、突起や隆帯が存在する表面だけではなく、口端部内面の隆起に打撃が集中する傾向も顕著である。

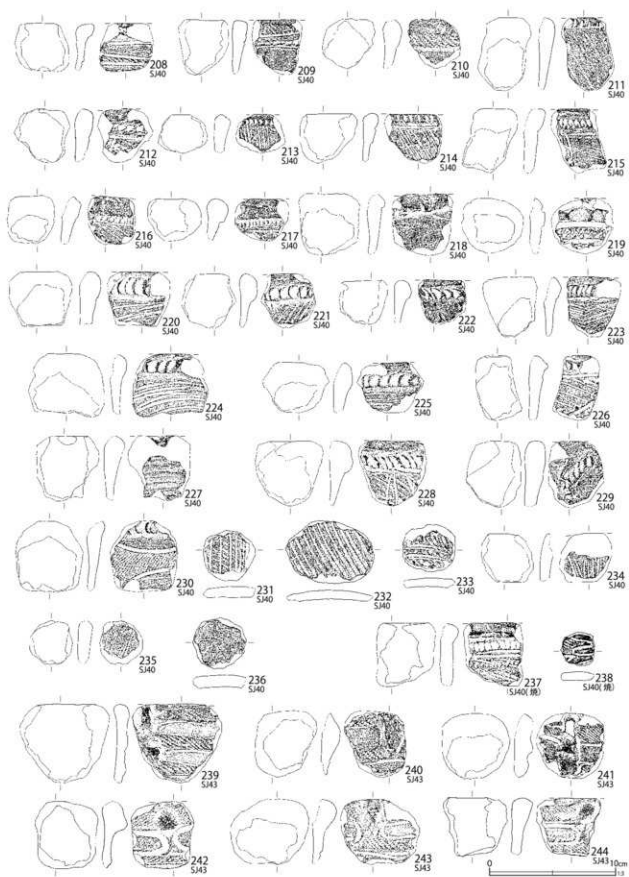
こうした傾向は、II 類土製円盤の成因や用途に密接に関わっている可能性が高い。

使用する土器片の時期は、判別可能なものについては安行1式と思われるものが多く、安行2～晩期安行式のものも若干目に付く。

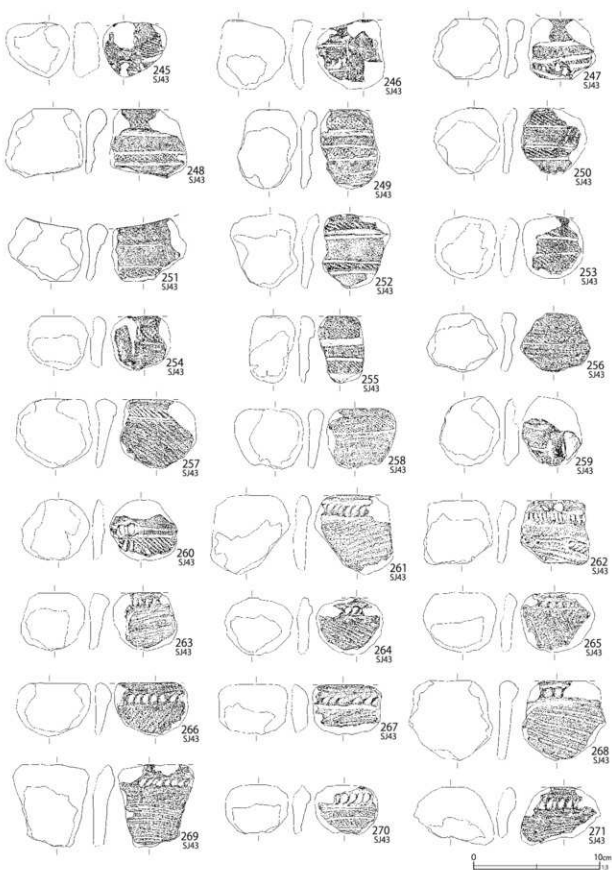
定量的な分析とその評価は、第VI章に1項を設けて行うこととする。



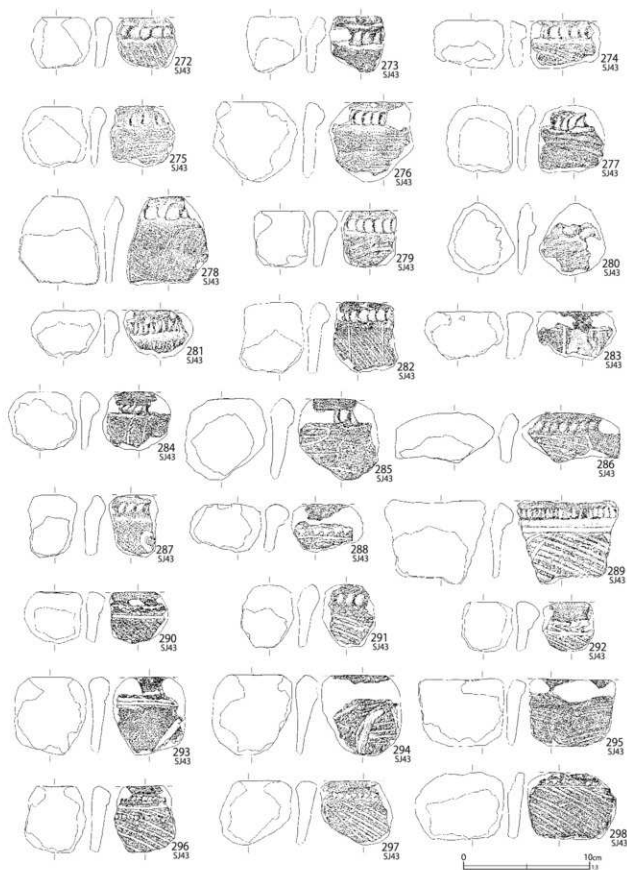
第350図 住居跡出土土製品 (14)



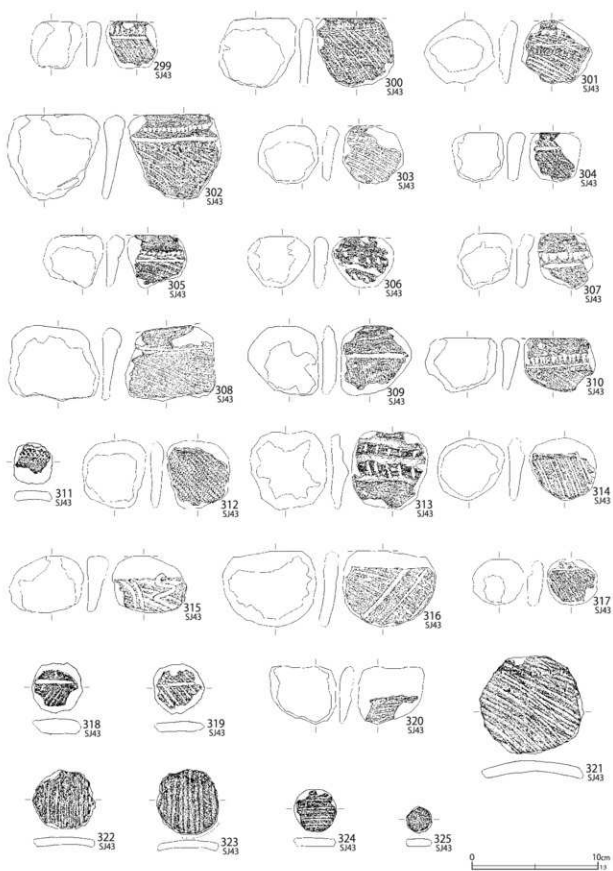
第351图 住居跡出土土製品 (15)



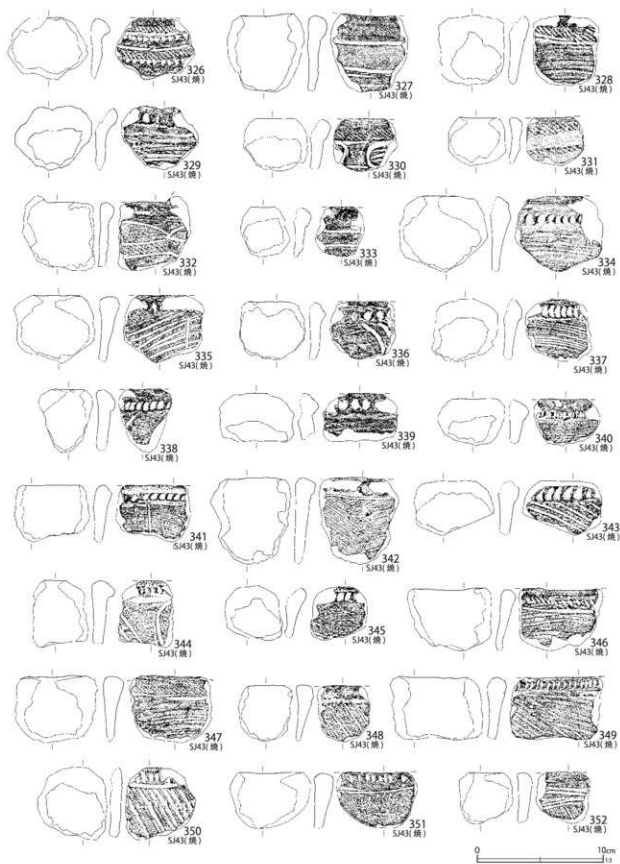
第352図 住居跡出土土製品 (16)



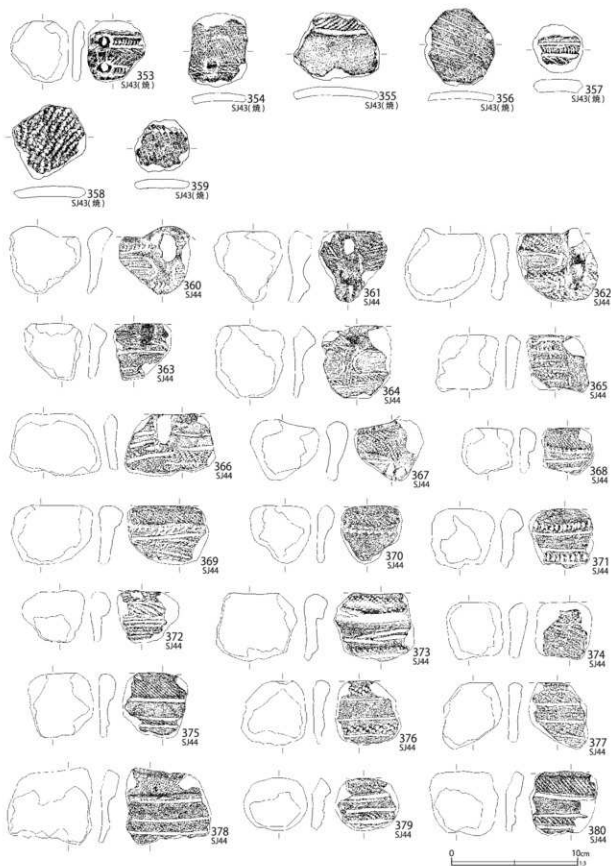
第353图 住居跡出土土製品 (17)



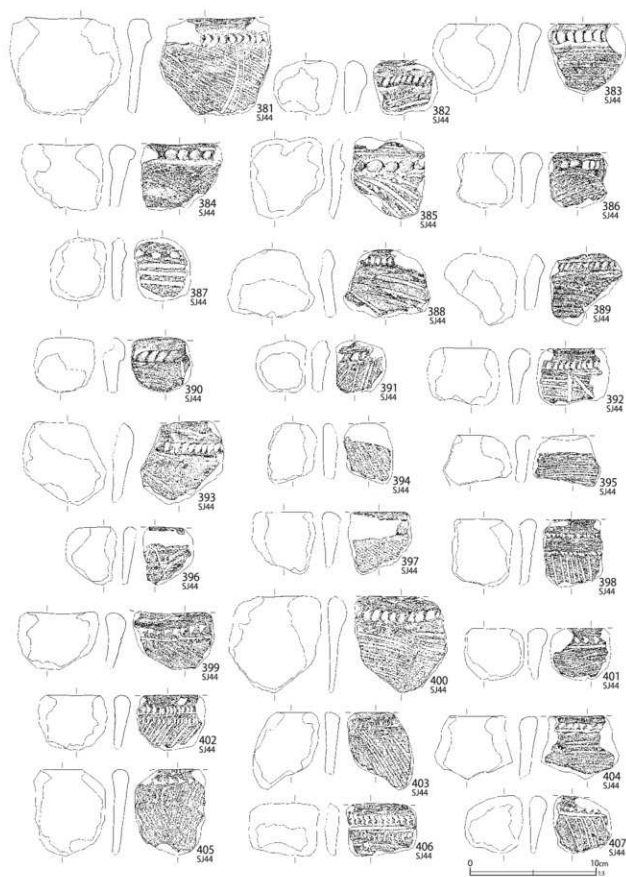
第354図 住居跡出土土製品 (18)



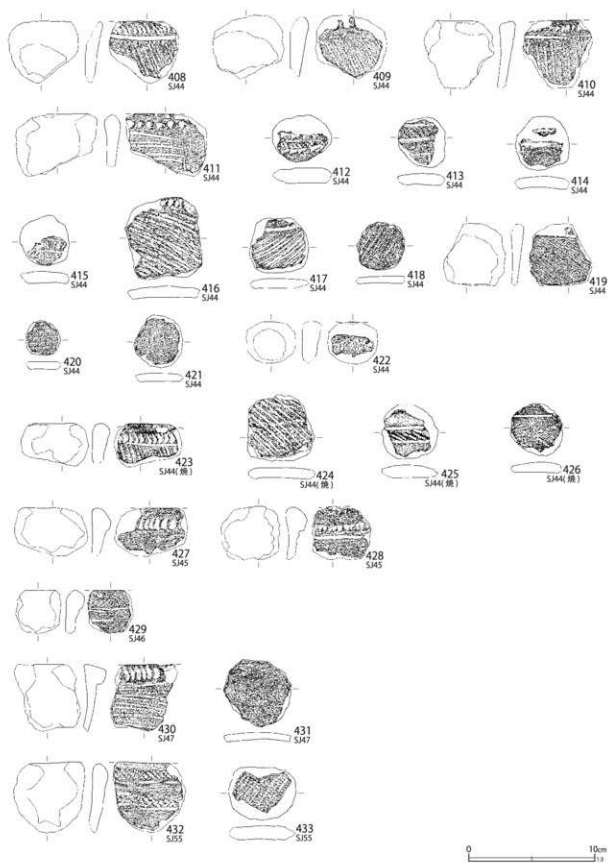
第355図 住居跡出土土製品 (19)



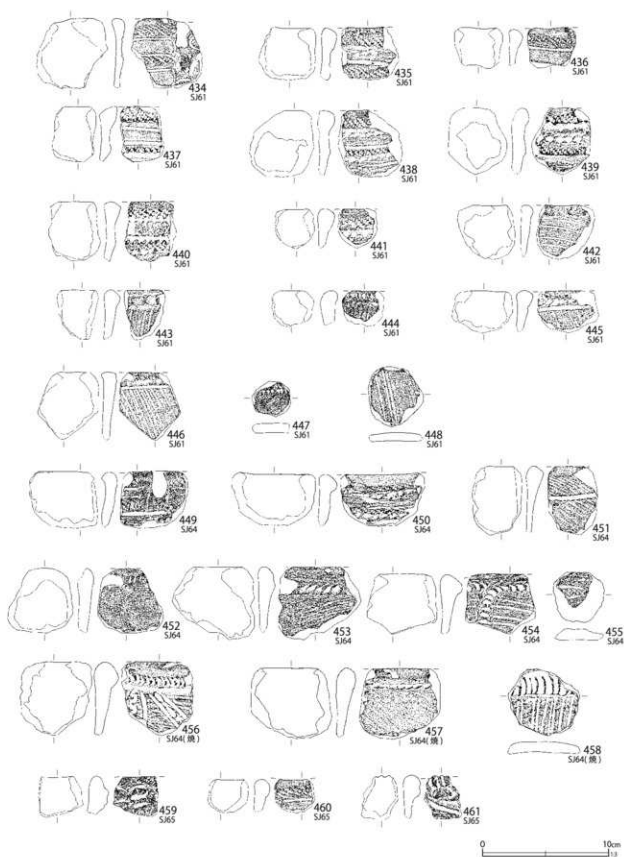
第356図 住居跡出土土製品 (20)



第357图 住居跡出土土製品 (21)



第358図 住居跡出土土製品 (22)



第359图 住居跡出土土製品 (23)

その他の土製品 (第360図～第366図)

462・463は第37号住居跡から出土した。

462はミニチュア土器である。安行1式の台付き鉢を模したもので、底部と脚台部を欠失する。直線的に開く盃形の器形で、口端部がわずかに外屈する。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、上下2段の貼り瘤を5単位配して、対弧状の短沈線で上下連繋する。現存高41cm、最大径102cm、重さ1340gである。

463は異形土器である。楕円形の浅鉢ないし蓋で、長軸両端に一对、両側縁に3個ずつ、合計8個の突起を配する。文様は描いておらず、成形時の指頭痕が残っている。

アカニシやサザエなど、突起を持つ貝類などをイメージしたものと思われる。巻貝を模した異形土器は東北地方の新地式にみられ、本資料も後期後葉のものと考えられる。

長径87cm、幅52cm、厚さ28cm、重さ426gである。

464は第38号住居跡から出土したミニチュア土器である。安行2式の異形台付き土器を模したもので、底面を除く体部を欠損する。3方向に突出する円口を持ち、間隙に鱗状の突起を配する。下端部は円錐状に張り出している。全体に集合沈線文を施文し、体部との境に横位の沈線を巡らせている。現存高54cm、最大径60cm、重さ916gである。

465は土鉢である。縦断面楕円形・横断面円形の鉢形で、十文字に溝を巡らせている。時期は不明である。長径33cm、幅22cm、厚さ21cm、重さ186gである。

466～476は第40号住居跡から出土した。

466・467は土版である。466は土偶的な人体表現のある土版で、頭部側の一端のみ残存する。楕円形の刻み隆帯で顔の輪郭を表し、横「3」の字状の隆帯で眉毛を、刻みを持つ縦帯で鼻を表現している。目・口の表現はみられない。背面には平行沈線による粗雑な入り組み文を描いている。安行3a～3b式期のものであろう。長さ51cm、

幅61cm、厚さ25cm、重さ833gである。

467は長方形の土版で、上端3分の1程度を欠損するものとみられる。

四辺が直線で構成され、厚さも一定な直方体である。肉彫り風の陰刻で文様を描いており、前面は正中線を挟んで対向三叉文を重畳させ、間隙に弧線文を描いて、下端部のみ入り組み文を描いている。背面と側面には粗雑な入り組み文と弧線文を描いている。

安行3a～3b式のものであろう。長さ69cm、幅62cm、厚さ33cm、重さ1970gである。

468は手燭形土器である。口縁部と把手のほとんどを欠損する。容器部分は平面観円形で、緩やかに内湾しつつ立ち上がる。底面は周辺部が髑状に張り出しており、扁平板状の把手に接続する。文様は施文しておらず、時期は不明である。

長さ115cm、幅86cm、厚さ51cm、重さ2658gである。

469・470はミニチュア土器である。469は異形台付き土器の口縁部である。口端上に刻み目を持ち、上面および側面に鱗状の突起を配する。突起間を刻み隆帯で弧状に連繋し、胴部には集合沈線文を描いて、透かし文様を持つ。安行2式に伴うものか。

470は砲弾形深鉢ないし注口土器を模したものと思われる。口縁外面と胴部中段に沈線を巡らせて文様帯を構成し、粗雑な弧線文を描く。上方の区画線に沿って豚鼻突起を配して円孔を穿つ。胴下半部には連続弧線文を巡らせるものとみられる。内面に輪積み痕を残すなど粗雑な造りだが、安行3b～3c式期のものと考えられる。現存高47cm、最大径78cm、重さ195gである。

471は異形土器である。楕円形の浅鉢だが、長軸側一端がやや幅広で、平面観水滴型に近くになっている。

幅広な側を「船先」と仮定して、上下一対の貼り瘤を船先および両舷の前方寄りに配している。

文様は描いておらず、成形時の指頭痕を残している。魚など何らかの水生物や、水鳥をイメージしたものであろう。

全体にオレンジ色に変色して白色の付着物を生じており、二次的な火熱を受けている可能性がある。突起の特徴から、後期安行式のものと考えられる。

長さ111cm、幅55cm、高さ23cm、重さ619gである。

472～475は手づくね土器である。不整形・無文で、全体に輪積み痕や成形時の指頭痕を残している。472・473は鉢で、472は尖底、473は丸底である。474・475は台付き土器で、474は1箇所に貫通孔を伴う山形突起を配している。いずれも時期は不明である。

現存高 (cm) / 最大径 (cm) / 重さ (g) は以下のとおりである。

472=29/56/427

473=24/33/157

474=29/48/226

475=27/56/301

476は漆塗りの堅櫛である。棒状の材を並べて何らかの方法で固定し、漆で固めたものとみられるが、残存状態が悪く詳細は不明である。

477～491は第43号住居跡から出土した。

477は動物型土製品である。頭部と右前肢・後肢の一部を欠損する。背中と後頭部にたてがみ状の隆起を持つが、顔面の表現はみられない。背面には粗雑な円文を描く。

強い二次的な火熱を受けており、変形し、多数の亀裂を生じている。また、還元により灰色に変色している。

たてがみの表現から、イノシシをかたどったものと考えた。時期は不明である。

長さ84cm、幅44cm、厚さ39cm、重さ878gである。

478も動物型土製品と考えたが、破損しており原形不明である。棒状の粘土を芯材として粘土板

を巻き付けて成形している。比較的精選した粘土を用いており、表面は平滑に仕上げられており、焼成も悪くない。

顔の表現が残っており、具体的に何をかたどったものかは不明だが、鱗を思わせる突起が存在するため、イノシシか海獣の可能性がある。時期は不明である。現存部分の長さ97cm、幅50cm、厚さ31cm、重さ1084gである。

479～482は手燭形土器である。

479は容器部分の底部付近のみ残存する。胴部の立ち上がりがかほとんど残存していないが、沈線文を描き、複数の円孔を穿っている。

周面に鱗状の突起を巡らせていたものとみられるが、すべて欠失しており、意図的に打ち欠いている可能性もある。底面には把手の短軸方向に沿って入り組み文を描いており、把手部分にも連続的に描かれていたものと考えられる。器面を入念に研磨し光沢を生じている。安行3b式に伴うものであろう。

現存部分の長さ63cm、幅79cm、厚さ15cm、重さ771gである。

480～482は把手である。480は平面親台形で、容器部分に向かって末広がりに開く。横断面楕円形でほぼ扁平だが、手元部分の左右の角がわずかに上方に反っている。

短軸方向の平行沈線をはさんで山形の沈線文を描いている。表側のみごく浅い縄文を残し、平行沈線間のみ入念に研磨して地文を擦り消している。手元側の末端に一對の貫通孔を持ち、沈線で半円形に囲われている。裏面は風化が著しいが表面と同様の沈線文を描いており、縄文も施文されていた可能性がある。安行3a～3b式に伴うものであろう。

481は平面親楕円形で、比較的厚みのある把手である。手元側に横方向の貫通孔を穿っている。表面は粗雑な沈線文を描いて手元側の末端を横位の沈線で区切って無文とし、裏面には稲妻状の沈

線文を描いている。時期は不明だが、裏面の文様から曾谷・高井東式に伴う可能性がある。

現存部分の長さ53cm、幅33cm、厚さ16cm、重さ339gである。

482は把手の末端で、一側縁を欠損している。割れ口が摩耗して丸味を帯びており、砥石的に転用している可能性がある。

平面観台形で、手元側の末端は肥厚して反り返り、一対の貫通孔を穿っている。表面には対向三又文と弧線文、裏面には平行沈線文を描き、ごく浅い縄文を施文する。全体に入念な研磨を施し、光沢を生じている。安行3a～3b式に伴うものであろう。

現存部分の長さ54cm、幅48cm、厚さ24cm、重さ450gである。

483は異形土器である。両耳土器で、何らかの生物をイメージしている可能性がある。

円形の粘土板を底部として短い粘土紐を不規則に継ぎ合わせて胴部を立ち上げており、側壁の両端を縦に揃い出して穿孔することで左右対称の把手としている。底面は平坦で、短軸方向に湾曲している。

一側面に菱形の区画文、別の側面には3個の同心円文ないし入り組み文を描き、底面にも沈線文を描くが、成形・施文とも非常に粗雑である。

二次的な火熱による風化がみられるが、本来は全面研磨されていたものとみられる。底面には木葉痕とみられる筋状の圧痕を残している。

時期は不明だが、側面の菱形区画文を埴山系の文様と考えるなら、安行3b式に伴う可能性がある。

長径83cm、短径47cm、高さ33cm、重さ493gである。

484は異形台付き土器である。ほぼ同サイズの体部と器台部を接続しており、中段がややくびれる円筒形の単調なプロポーションである。

体部は口縁部と底部付近に眼鏡状隆帯を巡ら

せ、胴上半部に弧線文を巡らせて胴下半部に縄文を施文する。また、2段の円孔列を交互配置している。器台部には弧線文を組み合わせた波頭状のモチーフを連続して描いて、接点に中央盲孔を伴うボタン状の貼り付け文を配している。文様などから安行3b式に伴うものと考えられる。

二次的な火熱を受けて淡紅色に変色して亀裂を生じており、部分的に還元による青灰色の変色が観察される。

高さ100cm、最大径76cm、重さ2176gである。

485は床面下から出土したもので、ミニチュアの台付き鉢である。蓋状の体部に円錐形の脚台を接続していたものとみられ、境に隆帯を巡らせている。水平口縁で、外面に対張状の突起を配するほかは文様を施文していない。突起の形態から曾谷・高井東式に伴うものと思われる。高さ76cm、最大径89cm、重さ703gである。

486はミニチュアの台付き鉢脚台部である。半球状のプロポーションで、体部との接点は風化により失われている。文様は描いておらず、成形時の指頭痕を残している。下端部はナデ調整を施しているが、部分的に網代痕らしきものを残している。時期は不明である。

現存高28cm、最大径52cm、重さ608gである。

487・488は手づくね土器である。いずれも無文で、時期は不明である。

487は高台を持つ鉢である。全体に成形時の指頭痕を残している。高台部は底部の粘土を揃い出して形成しており、体部に比較して器壁は極端に薄くなっている。

高さ47cm、最大径49cm、重さ655gである。

488は丸底の鉢である。不整な半球状のプロポーションで、底面に指頭による凹孔を持つ。また、繊維束とみられる圧痕が等間隔に並んでおり、制作時の敷物の痕跡と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整を施しており、光沢を生じている。

高さ28cm、最大径41cm、重さ168gである。

489はボタン状の土製品である。手づくねでつくられており、平面観は不整な円形、表面に指頭痕を残し、底面のみ平坦である。粘土塊を何らかの平坦面に押しつけたものとみられ、周縁部に焼成前に生じた亀裂を残している。時期は不明である。直径34cm、厚さ15cm、重さ175gである。

490・491は床面焼土中から出土した。

490は手燭形土器ないしスプーン形の土製品である。長軸方向に断裂した把手と、容器部分の側壁の一部が残存している。把手は平面観長方形で、手元側の末端が上方に反っている。

容器部分は底部が把手よりさらに下へと丸く張り出しており、口縁側も把手上面より上に内湾しつつ立ち上がっている。口唇断面は先細り状である。

全体に窺状工具のナデ調整を施しており、把手部分および容器部分外面では長軸方向、内面では横位に巡るような調整痕が顕著である。文様は施文しておらず、時期は不明である。

現存部分の長さ74cm、幅38cm、厚さ28cm、重さ277gである。

491は異形台付き土器で、胴部中段～胴下半部が残存している。胴部中段が「く」の字に張り出すソロバン玉状の器形で、刻みを持つ横瘤を配して弧状の刻み隆帯を巡らせる。瘤の上下には円孔を配する。胴下半部には縦位の集合沈線文を施文している。安行2式に伴うものであろう。

現存高37cm、最大径85cm、重さ344gである。

492～499は第44号住居跡から出土した。

492・493は手燭形土器である。492は容器部分のみ残存する。水平口縁に4単位の山形突起を配し、渦巻き文と入り組み文を描いて、弧状の擦り消し帯で連繫する。底部周辺には刻みを持つ鱗状突起を配して、1箇所を把手と接続する。

底面には弧状の沈線による三角形の区画を構成し、中央に入り組み文を描いている。安行3b式に伴うものであろう。

現存部分の長さ68cm、幅69cm、高さ49cm、重さ1060gである。

493は把手である。平面観長方形で、手元側がわずかに狭くなって一對の貫通孔を穿ち、また上方に反っている。表裏および側縁部に縄文を施文しており、容器部分との境に1条の沈線を巡らせる他は文様を持たない。

裏面の目顕著な磨滅がみられるが、これは使用状況を反映するものであるかもしれない。時期は不明だが、晩期前葉の可能性が高い。

現存部分の長さ84cm、幅52cm、厚さ16cm、重さ673gである。

494・495は性格不明の土製品である。粘土板の上面内側に隆帯を巡らせ、その内側を浅いすり鉢状に凹ませたものとみられる。形態的には手燭形土器の容器部分に似るが、側壁をほとんど立ち上げない点が異なっている。

平面観は494が円形、495は胴張りの方形であるものとみられ、494のほうが底面が分厚くなっている。文様を持たず、時期は不明である。

496は異形台付き土器で、体部のみ残存する。ソロバン玉状の器形で、胴部中段が「く」の字に張り出して、平行沈線を巡らせ、横楕円形の透かしを等間隔に配して、鋭利な工具の刺突文を施文する。

口唇断面は肥厚して、口端上面および外面に沈線を巡らせ、刺突文を施文する。胴上半部は縄文帯となっている。胴下半部は無文で、脚台部との境には隆帯を巡らせる。安行3b式に伴うものであろう。

現存高52cm、最大径72cm、重さ418gである。

497・498は小型の吊り手土器で、いずれも吊り手部分である。

497は頂部～体部への接続部分付近にかけて残存する。吊り手は扁平な板状で、側縁部および外面に刻み隆帯を巡らせる。頂部には盃状の突起を配して、左右の吊り手方向に貫通孔を穿つ。また、

側縁部の刻み隆帯が三角形に突出する。

全面被熱して、部分的に灰色の変色がみられる。曾谷・高井東式に伴うものであろう。

498は吊り手頂部から体部に向かう中段付近とみられる。扁平板状で、背面には長軸方向の凹線が巡り、鋭利な工具の刺突文を施文している。凹線を跨いで橋梁状の把手を配し、刺突文を施文する。時期は不明だが、後期中葉～後葉のものであろう。

499・500はミニチュア土器である。499は無文の鉢である。半球状のプロボーションで、水平口縁上に4単位の小突起を配するが、すべて欠失している。底面は丸味を帯びるが、胴部との境界に稜を持っている。

文様は持たず、成形時の指頭痕や篋状工具の調整痕を残している。時期は不明である。

高さ34cm、最大径58cm、重さ683gである。

500は尖底である。緩やかに内湾しつつ立ち上がる紡錘形で、縦位の粗い集合沈線文を施文する。これは安行式の深鉢の地文条線をイメージしたものと考えられ、後期後葉～晩期前葉のものと考えられる。

現存高27cm、最大径41cm、重さ216gである。

501は土鉢である。短軸側断面楕円形の、扁平な鉢形で、平坦面側に十文字に溝を巡らせている。時期は不明である。長径46cm、短径31cm、厚さ23cm、重さ327gである。

502は土玉である。断面はほぼ円形で中央に貫通孔を持つ管状の玉である。時期は不明である。長さ13cm、幅08cm、重さ09gである。

503は第45号住居跡から出土した。サイズを除けば安行1式の水平口縁深鉢を忠実に再現している。

口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦縞を配する。胴部中段には平行沈線・押し引き文の区画を巡らせる。胴下半部には対向弧線文を描き、底部

付近には縄文を施文して、上端を沈線で区画している。

高さ112cm、最大径119cm、重さ2779gである。

504～508は、503の内部から出土した黒曜石で、すべて未使用の転石とみられる。重量は、

$504 = 154\text{g} \cdot 505 = 277\text{g} \cdot 506 = 253\text{g}$

$\cdot 507 = 286\text{g} \cdot 508 = 167\text{g}$ である。

509は第46号住居跡から出土した小型の吊り手土器で、完形品である。体部の口縁上に1本の粘土紐を橋梁状に渡して吊り手としている。

体部は直線的に開く盃状で、円筒形の台高を付している。文様は施文しない。

吊り手は扁平板状で、背面に平行沈線文を描いて縄文を施文する。頂部に盃状の突起、体部との接続部とその中間部に鱗状の突起を配し、すべてに對をなす貫通孔を穿っている。紐通しを意図したものとも考えられるが、紐擦れを思わせる痕跡は観察できない。

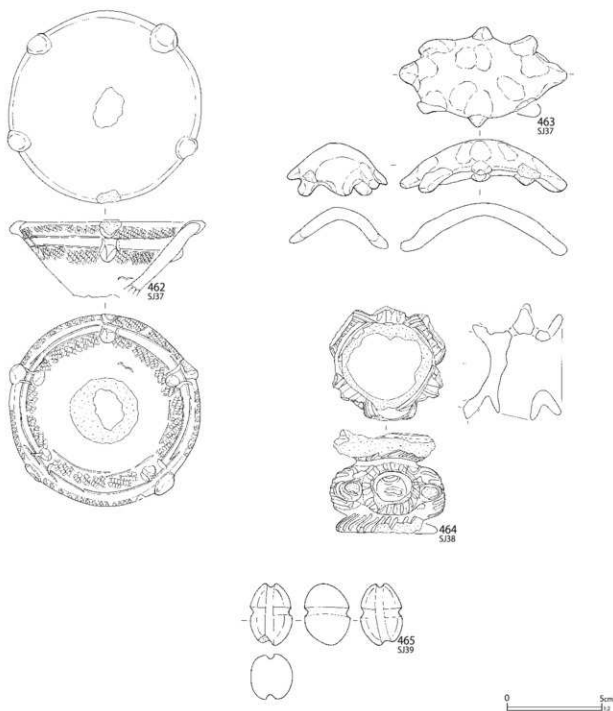
曾谷・高井東式に伴うものであろう。高さ71cm、体部の高さ33cm、最大径95cm、重さ1585gである。

510は第47号住居跡から出土した。棒状の土製品の一部で、文様を持たず、時期は不明である。

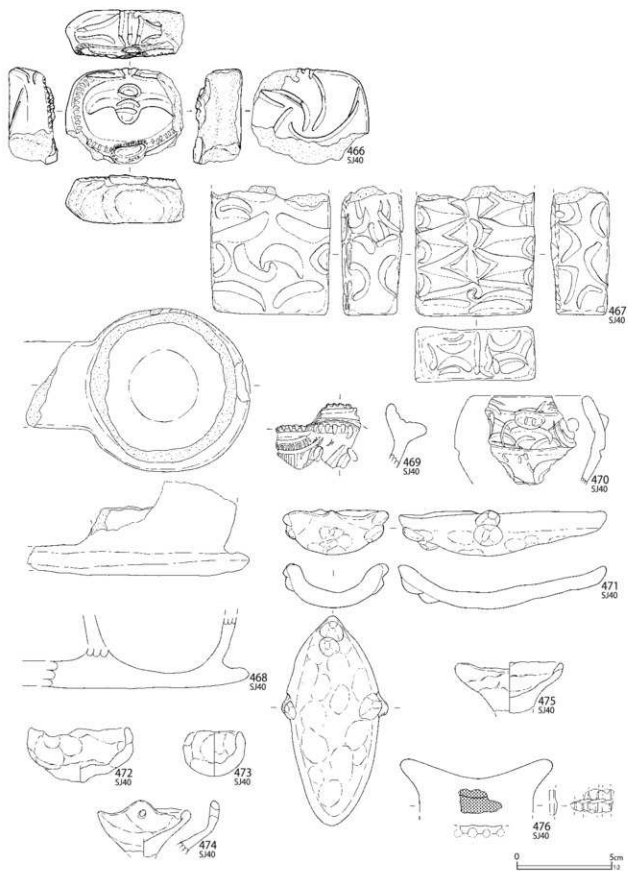
511はミニチュア土器で、第59号住居跡から出土した。サイズを除けば堀之内1式の精製深鉢を忠実に再現している。

キャリバー形の深鉢だが、胴部のくびれの位置が高く、胴下半部が紡錘形に張っており、器形的には北陸の南三十稲葉式に類似する。水平口縁に沿って横位の沈線と刻み目文を巡らせ、1箇所に横8の字状の突起を配して、上下二対の貫通孔を穿っている。胴部には縄文を施文し、集合沈線の懸垂文を垂下させて、間隙には集合沈線による波状や倒卵状のモチーフを描き、同心円文を配している。光沢を帯びた黒色の器壁で、焼成は良好である。

高さ83cm、最大径55cm、重さ908gである。



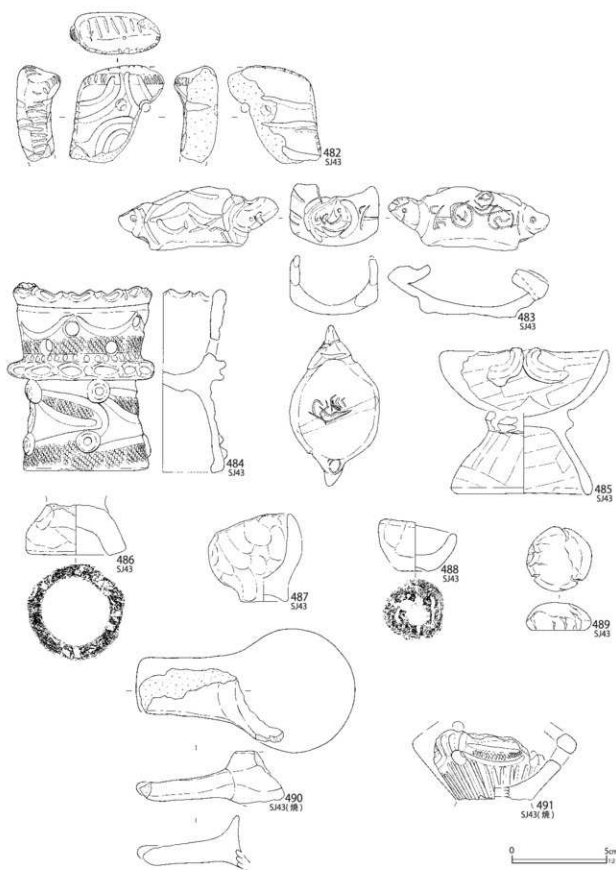
第360图 住居跡出土土製品 (24)



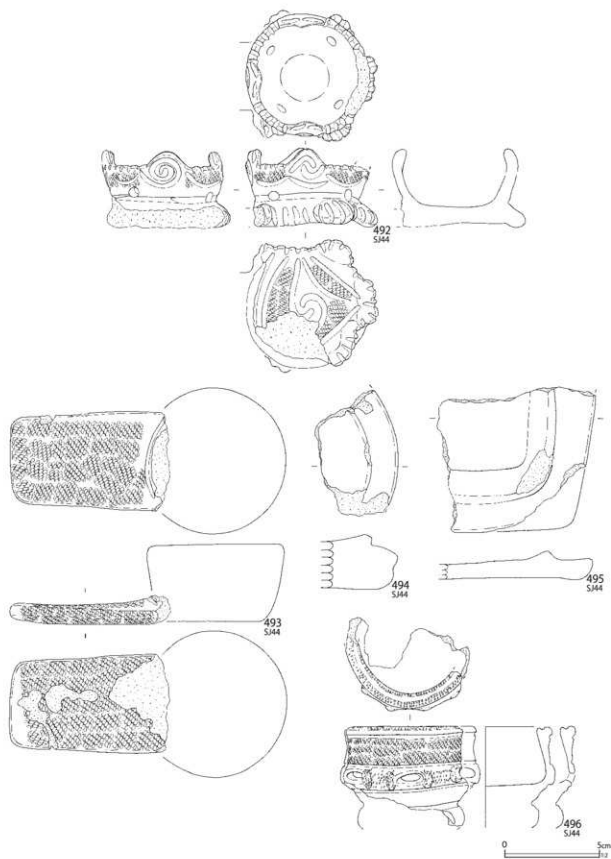
第361図 住居跡出土土製品 (25)



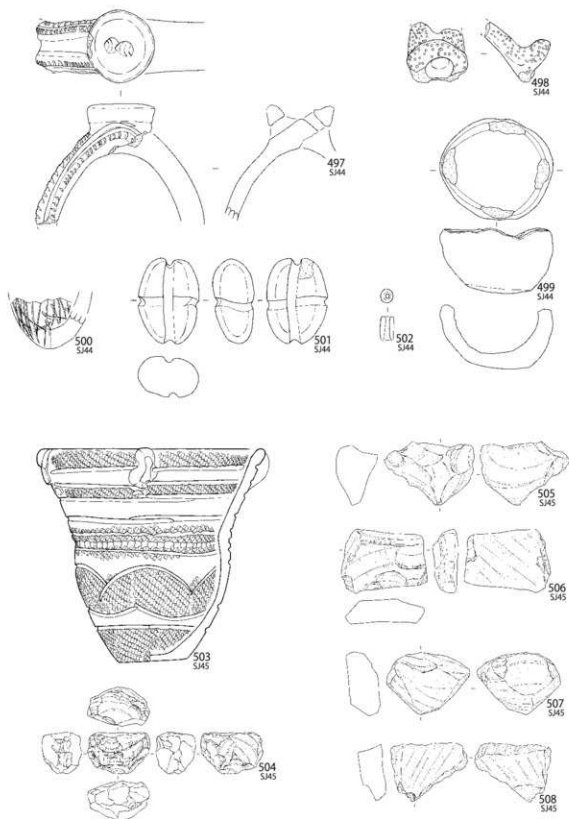
第362図 住居跡出土土製品 (26)



第363図 住居跡出土土製品 (27)

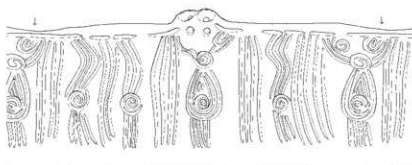
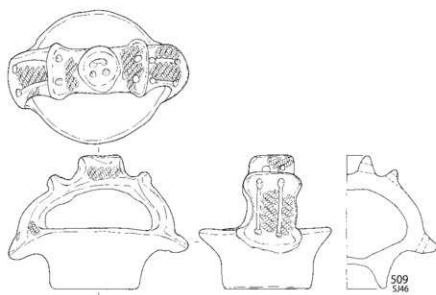


第364图 住居跡出土土製品 (28)



* 504 ~ 508 はミニチュア（深鉢）から出たもの

第365図 住居跡出土土製品 (29)



第366图 住居跡出土土製品 (30)

(2) 土壇出土土製品 (第367図)

耳飾り

分類基準についてはV-2、- (1)を参照されたい。また、法量は第24表にまとめた。

1は第47号土壇から出土した。環状・断面三角形で有文のタイプである。

内面上半部に段を持ち、紡錘文を挟んで半肉彫り状の対向三叉文を巡らせている。安行3b式の土器に共通の文様であり、同時期のものと考えられる。

2は第282号土壇から出土した。千網型の耳飾りである。

精選した粘土を用い、薄手かつ精緻な造りである。器壁は暗黄褐色で、焼成は良好である。

内外面ともに赤色顔料が付着しており、本来は全体が赤彩されていたものと考えられる。安行3a～3b式期のものではあろう。

3は第296号土壇から出土した。台形で上面に透かし文様を持つタイプである。

外面上端部が折り返し状となっており、ここに肉彫り風の文様を描き、鋭利な工具の刺突文を施文している。

全体に赤色顔料が付着しているが、特に上半分の文様施文部で顕著である。

安行3a～3b式期のものではあろう。

4は第329号住居跡から出土した。台形で上面透かし文様を持つものである。

環状の断面「く」の字の耳飾りの上端部を、橋梁状の粘土帯で十字に連繋しており、中央に貫通孔を持つ。

環状部と橋梁部の接続部分には豚鼻様の突起やわらび手状モチーフを配している。安行3a～3b式期のものではあろう。

5は第331号土壇から出土した。環状・断面鉤

状で有文のタイプである。

工字文の左右に対向三叉文を配した肉彫り風の単位文を内面上段1箇所配する。内面下半部に微量の赤色顔料が付着しており、本来は赤彩されていたものと考えられる。安行3c～3d式に伴うものか。

6は第338号土壇から出土した。白形で装着面が凹む無文のタイプである。

上下面に凹みを持ち、中央が平坦となっている。全体に成形時の手づくねの凹凸を残している。時期は不明である。

土製円盤

磨製・打製の各タイプが出土している。法量・使用部位などは第27表に示した。

8・9がⅠ類の磨製品、10～12がⅡ類の打製品である。

10は安行1式の大波状口縁深鉢で、口縁部文様帯の一部を使用している。表面の縦瘤や隆帯を打ち剥がし、裏面の両側縁にも執拗に打撃を加えている。

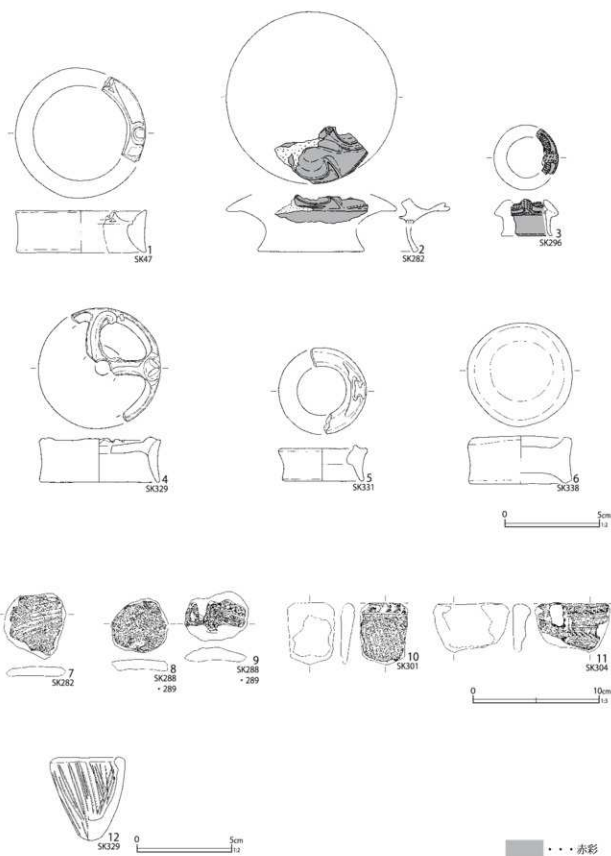
11は後期安行式の粗製深鉢口縁部を素材とし、口端裏面の隆起を打ち欠いて剥ぎ取っている。12は安行1式の水平口縁深鉢口縁部を使用し、口縁外面の縦瘤を打ち剥がしている。

その他の土製品

12はミニチュア土器である。尖底の深鉢形で、底部～胴部にかけて内湾しつつ立ち上がる。水平口縁で、口端はわずかに内屈して、内面に段を持つ。

器面は平滑に整形されており、鋭利な工具による縦方向の条線を全体に施文している。安行式の粗製深鉢をイメージしたものと考えられ、後期後葉～晩期前葉のものと考えられる。

高さ4.4cm、最大径4.0cm、重さ30.9gである。



第367図 土壙出土土製品

(3) 遺物集中出土土製品 (第368図)

掲載したものは、すべて遺物集中12から出土したものである。

土偶

小型のみみずく土偶で、頭部と左脚を欠損する。手足に比べ胴の短い寸詰まりのプロポーションで、肩と大腿部が横に大きく張り出す。

胸には縦位の刺突列を挟んで対向三叉文を描いており、みぞおちから腕にかけて刻み隆帯を貼り付けている。肩の上面には入り組み文を描き、手先は下向きの小突起として表現している。

脚には横位の平行沈線を描いており、足は踵と爪先が張り出し、縦位の沈線で足指を表現している。爪先をやや前方に上げた状態であり、失われた右脚と合わせて、何らかの所作を表している可能性がある。背面には渦巻き文を描いている。

晩期前葉のものと考えられる。現存部分の高さ62cm、幅64cm、厚さ28cm、重さ588gである。

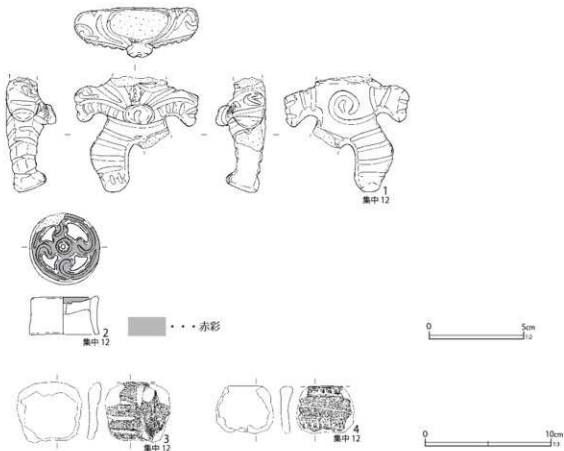
耳飾り

分類基準についてはV-2、- (1)を参照されたい。また、法量は第24表に記した。

台形で上面に透かし彫りを持つタイプである。中央に貫通孔を持つ円文を配し、四方から伸びたわらび手文がこの円文を支持する構成となっている。透かしは上面の粘土板を切り抜いてつくられており、環状部の内面に痕跡を残している。晩期前葉のものであろう。

土製円盤

いずれも打製品で、3は縦瘤を持つ安行1式の口縁部を使用している。詳細は第44表を参照されたい。



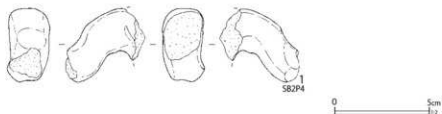
第368図 遺物集中出土土製品

(4) 掘立柱建物跡出土土製品 (第369図)

土偶

1は第2号掘立柱建物跡のP4から出土した。山形土偶の右腕とみられる。なで肩で、腕はほぼ真横に伸び、肘で下方に屈曲する。手先は欠損するが、外側へと反っている。

表面の腋部に沈線がみられるほかは、文様を持たない。後期～晩期の土偶であろう。現存部分の長さ39cm、幅4.1cm、厚さ2.1cm、重さ270gである。



第369図 掘立柱建物跡出土土製品

(5) 柱穴列出土土製品 (第370図)

土偶

1は第4号柱穴列のP23から出土した。みみずく土偶の結髪であろう。丸みを帯びた板状で両面に集合沈線文を描くが、扁平な側を背面と考えた。

後期末葉～晩期前葉の土偶であろう。現存部分の長さ30cm、幅30cm、厚さ1.1cm、重さ90gである。



第370図 柱穴列出土土製品

(6) 焼土跡出土土製品 (第371図)

土偶

焼土跡27から出土した。系統不明の土偶で、右腕から肩部にかけての部分とみられる。肩が張り、腕が大きく横に張り出して、手先は下向きの小突起として表現している。

表面に横位の平行沈線、裏面に横U字状の沈線文を描いて、内部に円形の刺突文を施文する。現存部分の高さ34cm、幅50cm、厚さ26cm、重さ387

gである。

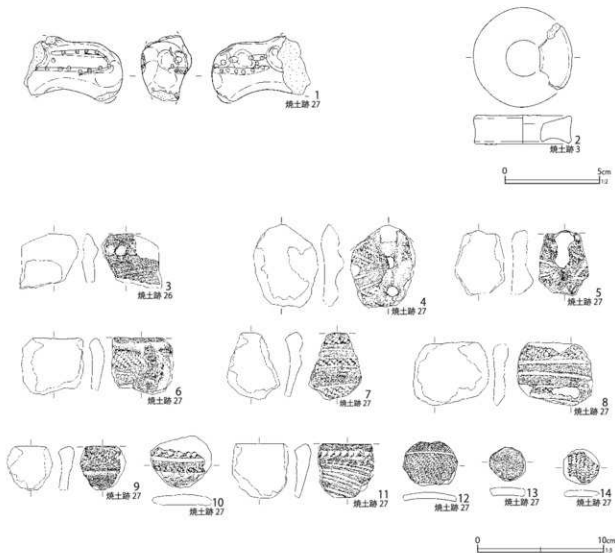
耳飾り

分類基準についてはV-2. - (1)を参照されたい。また、法量は第24表に記した。

焼土跡3から出土した。断面鉤形で無文のタイプである。時期は不明である。

土製円盤

磨製・打製の各タイプが出土している。詳細は第27表を参照されたい。



第371図 焼土跡出土土製品

(7) グリッドピット出土土製品 (第372図)

すべて J-7 P.36から出土した。

不明土製品

1は性格不明の土製品である。四方に窓を持つ中空構造で、吊り手土器の吊り手部分に類似する。断面観察では、やや湾曲した凸面に取り付けられていたものが剥離したと思われる。

土器の突起の一部か、土偶の結髪部分の可能性はある。時期は不明だが、後期～晩期のものと考えられる。現存高4.3cm、最大径3.4cm、重さ32.2gである。

耳飾り

2は環状・断面鉤形で無文の耳飾りである。内

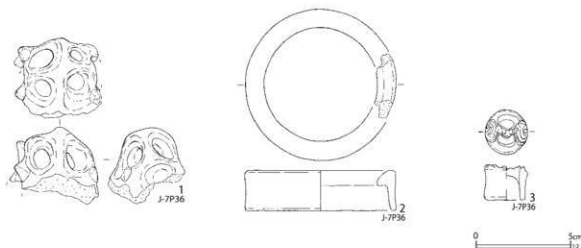
面への突出は小さく、装着部にごく弱い凹みを持つ。

時期は不明だが、後期～晩期のものと考えられる。

3は台形で上面に透かし文様を持つ。直径に対し高さが卓越し、装着部に凹みを持つ。

天板に2箇所の楕円形の透かしを切り出して、橋梁部を形成している。環状部と橋梁部の接点に、左右で方向を変えた波頭状の浮線文を配し、橋梁部の中央にも浮線文を配する。

時期は不明だが、後期～晩期のものと考えられる。



第372図 グリッドピット出土土製品

第23表 遺構出土耳飾り観察表(1) (第342~348図)

非完形品は()つき、残存値は[]単位はcm/g (小数点第一位まで)													
遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類	遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類
SJ38	33	1.8	1.7	1.7	6.7	I-B-ア	SJ43	94	(7.0)	(6.5)	2.4	10.5	III-C-イ
SJ38	34	4.6	4.0	2.1	25.0	I-A-イ	SJ43	95	(6.0)	(5.8)	2.1	4.5	III-C-イ
SJ38	35	2.8	2.6	1.7	9.6	I-A-イ	SJ43	96	(3.6)	(3.3)	1.7	5.5	III-C-イ
SJ38	36	2.1	2.0	(0.9)	3.9	I-A-イ	SJ43	97	(3.7)	(3.5)	1.7	3.1	III-C-イ
SJ40	37	3.0	2.6	3.4	42.8	I-B-ア	SJ43	98	(3.9)	(3.6)	1.7	5.0	III-C-イ
SJ40	38	3.1	2.9	1.8	17.4	I-A-ア	SJ43	99	(6.1)	(5.7)	2.0	4.0	III-C-イ
SJ40	39	2.2	2.0	2.0	10.1	I-A-イ	SJ43	100	(7.4)	(7.0)	2.5	8.0	III-C-イ
SJ40	40	2.6	-	1.4	5.8	III-A-ア	SJ43	101	(7.6)	(7.0)	2.5	8.8	III-C-イ
SJ40	41	2.0	1.9	1.3	3.9	III-A-ア	SJ43	102	(7.2)	(6.8)	1.2	7.5	III-C-イ
SJ40	42	(5.8)	(5.4)	2.1	5.5	III-C-イ	SJ43	103	(7.7)	(7.5)	2.0	11.5	III-D-ア
SJ40	43	(5.4)	(4.9)	2.1	6.5	III-C-イ	SJ43	104	(5.8)	(5.6)	1.8	7.0	III-D-ア
SJ40	44	(6.2)	(6.1)	1.6	9.7	III-B-ア	SJ43	105	(6.1)	(5.9)	1.6	4.9	III-D-ア
SJ40	45	2.2	2.1	1.4	4.6	III-B-イ	SJ43	106	(6.2)	(6.0)	2.1	10.9	III-D-ア
SJ40	46	(6.8)	(6.4)	2.2	9.4	III-D-イ	SJ43	107	(7.5)	(7.1)	2.2	9.5	III-D-ア
SJ40	47	4.7	4.6	1.9	22.1	III-D-イ	SJ43	108	(8.0)	(7.7)	2.2	10.4	III-D-ア
SJ40	48	(5.4)	(4.8)	2.1	5.6	III-D-イ	SJ43	109	(8.0)	-	[1.5]	10.3	III-D-ア
SJ40	49	(7.6)	(7.3)	1.8	19.0	III-D-ア	SJ43	110	(6.0)	-	1.5	17.8	III-D-ア
SJ40	50	6.2	5.8	2.1	25.6	III-D-イ	SJ43	111	(6.7)	(6.5)	1.7	14.5	III-D-ア
SJ40	51	4.6	4.4	1.8	25.9	IV-A-ア	SJ43	112	(8.5)	(8.3)	2.0	15.9	III-D-ア
SJ40	52	2.3	2.2	1.9	10.2	IV-A-イ	SJ43	113	(8.0)	(7.8)	2.2	28.1	III-D-ア
SJ40	53	3.3	3.1	1.8	10.8	IV-B	SJ43	114	3.5	3.4	1.4	10.8	III-D-イ
SJ40	54	2.8	2.6	1.8	9.6	IV-B	SJ43	115	(6.8)	(6.4)	2.0	8.4	III-D-イ
SJ40	55	3.0	2.8	1.5	8.6	IV-B	SJ43	116	(7.4)	(7.0)	2.2	9.5	III-D-イ
SJ40	56	(7.0)	(6.8)	2.1	14.0	IV-B	SJ43	117	(6.2)	(5.9)	2.3	12.4	III-D-イ
SJ40(焼)	57	(8.2)	(8.1)	1.7	14.4	III-B-ア	SJ43	118	(6.4)	(6.1)	2.1	17.1	III-D-イ
SJ40(焼)	58	(7.0)	(6.8)	1.8	11.2	III-D-イ	SJ43	119	6.2	6.0	2.0	30.3	III-D-イ
SJ42	59	(7.0)	-	[1.3]	7.8	IV-B	SJ43	120	(7.0)	(6.7)	2.1	10.9	III-D-イ
SJ43	60	3.6	-	2.8	48.6	I-B-ア	SJ43	121	(8.1)	(7.7)	2.3	14.0	III-D-イ
SJ43	61	3.3	3.1	3.5	48.8	I-A-ア	SJ43	122	(6.6)	(6.5)	1.9	20.5	III-D-イ
SJ43	62	2.2	2.1	2.3	10.5	I-A-ア	SJ43	123	(8.0)	(7.6)	2.1	9.8	III-D-イ
SJ43	63	(1.7)	1.4	2.1	5.8	I-A-ア	SJ43	124	(7.2)	(6.9)	2.0	9.0	III-D-イ
SJ43	64	(4.2)	(3.8)	2.0	18.6	I-B-ア	SJ43	125	(7.0)	(6.8)	2.2	14.5	III-D-イ
SJ43	65	(4.3)	(3.3)	[2.7]	16.7	I-A-ア	SJ43	126	6.6	6.3	2.1	24.9	III-D-イ
SJ43	66	2.1	2.0	1.7	8.6	I-A-イ	SJ43	127	(5.0)	-	2.1	10.6	IV-A-ア
SJ43	67	1.6	-	1.5	4.4	III-A-ア	SJ43	128	(5.6)	(5.2)	2.0	5.8	IV-A-イ
SJ43	68	2.0	1.8	1.9	7.3	III-A-ア	SJ43	129	5.9	5.6	2.5	63.5	IV-B
SJ43	69	2.5	-	1.8	11.1	III-A-ア	SJ43	130	2.0	1.5	1.6	3.9	IV-B
SJ43	70	(3.0)	(2.6)	1.5	2.4	III-A-ア	SJ43	131	3.1	2.0	2.7	13.5	IV-B
SJ43	71	3.4	2.8	1.6	4.2	III-A-ア	SJ43	132	3.0	2.9	1.4	8.1	IV-B
SJ43	72	(6.0)	(5.8)	2.2	4.7	III-A-ア	SJ43	133	4.2	4.0	1.5	21.6	IV-B
SJ43	73	4.1	4.0	1.9	23.6	III-A-ア	SJ43	134	5.2	5.0	2.0	35.2	IV-B
SJ43	74	5.1	5.0	2.1	36.3	III-A-ア	SJ43	135	(5.6)	(5.4)	1.8	6.1	IV-B
SJ43	75	1.2	-	1.4	2.8	III-A-イ	SJ43	136	(5.6)	(5.3)	1.7	6.6	IV-B
SJ43	76	(7.4)	(7.1)	1.8	6.4	III-A-イ	SJ43	137	(6.9)	(6.7)	2.1	18.5	IV-B
SJ43	77	(7.4)	(7.2)	1.6	16.8	III-B-ア	SJ43	138	(5.8)	(5.7)	2.9	7.6	IV-B
SJ43	78	7.1	6.8	2.2	40.9	III-B-ア	SJ43	139	(6.2)	(5.9)	2.2	13.4	IV-B
SJ43	79	(3.4)	(2.8)	1.7	3.8	III-B-イ	SJ43	140	(7.2)	(6.9)	1.8	5.7	IV-B
SJ43	80	4.2	3.8	1.9	17.2	III-B-イ	SJ43(焼)	141	(4.0)	3.3	3.7	59.5	I-A-ア
SJ43	81	4.2	3.8	1.4	12.1	III-B-イ	SJ43(焼)	142	(2.6)	(2.5)	1.3	1.3	III-C-イ
SJ43	82	5.6	5.4	2.0	23.7	III-B-イ	SJ43(焼)	143	(6.0)	(5.8)	2.5	6.2	III-C-イ
SJ43	83	(7.6)	(7.4)	2.1	16.2	III-B-イ	SJ43(焼)	144	(7.0)	(6.7)	2.3	12.7	III-D-ア
SJ43	84	(7.5)	(7.2)	1.9	6.1	III-B-イ	SJ43(焼)	145	(7.8)	(7.2)	2.4	14.4	III-D-イ
SJ43	85	(8.0)	(7.6)	2.1	7.4	III-B-イ	SJ43(焼)	146	(8.0)	(7.5)	2.2	13.2	III-D-イ
SJ43	86	(8.0)	(7.8)	2.2	13.3	III-B-イ	SJ43(焼)	147	(7.4)	(7.1)	2.1	7.7	III-D-イ
SJ43	87	3.7	3.5	2.1	16.4	III-C-ア	SJ44	148	1.2	0.8	1.9	2.7	II-A-ア
SJ43	88	(4.5)	(4.2)	2.0	6.2	III-C-ア	SJ44	149	2.2	2.1	1.3	4.5	III-A-ア
SJ43	89	(5.3)	(5.0)	1.6	5.5	III-C-ア	SJ44	150	(3.9)	(3.6)	1.9	5.7	III-A-ア
SJ43	90	(4.4)	(4.2)	1.7	6.2	III-C-ア	SJ44	151	7.1	6.9	1.5	30.0	III-B-ア
SJ43	91	(5.9)	(5.7)	2.0	5.0	III-C-ア	SJ44	152	4.1	4.0	1.7	32.7	III-B-ア
SJ43	92	(7.0)	(6.8)	2.2	8.0	III-C-ア	SJ44	153	5.1	4.4	2.2	51.0	III-B-ア
SJ43	93	(7.5)	(7.3)	2.2	5.9	III-C-ア	SJ44	154	(6.2)	(5.9)	2.1	5.4	III-C-イ

第24表 遺構出土土師器観察表(2) (第348・349・368・372図)

非定形品は()つき、残存値()単位はcm/g(小数点第一位まで)

遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類	遺構名	番号	径1	径2	高さ	重量	分類
SJ44	155	(7.0)	(6.7)	2.2	7.7	III-C-イ	SJ48	169	1.2	0.8	1.0	1.1	I-A-ア
SJ44	156	7.5	7.2	1.6	59.8	III-D-ア	SJ50	170	1.2	0.8	1.1	1.5	I-A-ア
SJ44	157	(7.7)	—	1.9	17.5	III-D-ア	SJ64	171	2.0	1.6	1.8	5.4	III-C-ア
SJ44	158	(7.2)	(6.7)	2.2	11.5	III-D-イ	SJ64	172	(5.7)	(5.4)	1.9	4.4	III-C-ア
SJ44	159	(7.1)	(6.9)	2.0	9.1	III-D-イ	SK47	1	(6.9)	(6.7)	2.2	12.9	III-B-イ
SJ44	160	(6.7)	(6.5)	2.4	16.9	III-D-イ	SK282	2	(9.0)	(7.0)	[1.6]	8.8	N
SJ44	161	(4.8)	(4.5)	1.6	5.3	III-D-イ	SK296	3	(3.4)	(2.5)	1.9	2.0	IV-B
SJ44(焼)	162	(6.0)	(5.8)	1.8	5.5	III-D-ア	SK329	4	(6.4)	(6.1)	2.3	19.3	IV-B
SJ44(焼)	163	(8.0)	(7.8)	1.6	5.7	III-D-イ	SK331	5	4.7	4.1	1.7	12.9	III-D-イ
SJ45	164	(5.6)	(5.4)	2.0	6.8	III-D-イ	SK338	6	5.6	5.2	2.5	85.6	I-A-ア
SJ45	165	6.3	6.2	2.0	11.9	III-C-ア	集中口2	2	3.7	3.5	2.0	18.5	IV-B
SJ45	166	(4.8)	(4.5)	1.8	5.5	III-C-ア	焼土跡3	2	(5.2)	(5.0)	1.5	9.1	III-D-ア
SJ45	167	(7.5)	(7.1)	2.2	25.7	III-C-ア	J-7 F96	2	(8.0)	(7.9)	2.1	5.9	III-D-ア
SJ45	168	(8.2)	(7.4)	2.3	16.8	III-C-ア	J-7 F96	3	2.3	2.1	1.8	7.0	IV-B

第25表 遺構出土土製円盤観察表(1) (第350~352図)

非定形品は()つき、単位はcm/g(小数点第一位まで)

遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
SJ37	173	打	5.5	24.0	II-A-ウ	SJ40	216	打	4.5	19.1	II-A-イ
SJ37	174	打	5.3	26.1	II-A-イ	SJ40	217	打	4.4	22.0	II-A-イ
SJ37	175	打	6.2	32.6	II-A-イ	SJ40	218	打	5.7	39.1	II-A-イ
SJ37	176	打	5.5	21.4	II-B-ウ	SJ40	219	打	4.9	26.1	II-A-イ
SJ37	177	磨	5.6	18.9	I-B-ウ	SJ40	220	打	5.5	36.2	II-A-イ
SJ38	178	打	4.5	21.2	II-A-イ	SJ40	221	打	4.6	26.3	II-A-イ
SJ38	179	打	5.5	28.1	II-A-イ	SJ40	222	打	4.2	19.8	II-A-イ
SJ38	180	打	5.6	23.7	II-B-ウ	SJ40	223	打	5.2	20.5	II-A-イ
SJ38	181	打	4.6	17.2	II-A-イ	SJ40	224	打	6.3	31.8	II-A-イ
SJ38	182	打	5.2	26.2	II-A-イ	SJ40	225	打	5.3	29.4	II-A-イ
SJ38	183	打	5.5	18.4	II-A-イ	SJ40	226	打	5.3	24.6	II-A-イ
SJ38	184	打	4.7	26.2	II-A-ウ	SJ40	227	打	5.9	35.3	II-A-イ
SJ38	185	打	6.7	41.1	II-A-イ	SJ40	228	打	5.5	43.9	II-A-イ
SJ38	186	打	5.7	23.5	II-A-イ	SJ40	229	打	5.3	38.3	II-A-イ
SJ38	187	打	4.9	19.2	II-A-ウ	SJ40	230	打	5.9	33.3	II-A-イ
SJ38	188	打	4.7	24.2	II-B-ウ	SJ40	231	磨	4.1	15.4	I-B-ウ
SJ39	189	打	5.3	23.5	II-A-ウ	SJ40	232	磨	7.1	30.6	I-B-ウ
SJ40	190	打	6.3	35.1	II-A-ア	SJ40	233	磨	4.4	14.4	I-B-ウ
SJ40	191	打	5.9	45.2	II-A-ア	SJ40	234	打	4.8	17.2	II-A-エ
SJ40	192	打	6.0	37.5	II-A-ア	SJ40	235	打	3.7	14.4	II-B-ウ
SJ40	193	打	5.2	32.0	II-A-ア	SJ40	236	磨	4.3	22.6	I-B-ウ
SJ40	194	打	4.3	17.6	II-A-ア	SJ40(焼)	237	打	6.3	37.6	II-A-イ
SJ40	195	打	5.8	26.3	II-A-ア	SJ40(焼)	238	磨	2.7	6.6	I-B-ウ
SJ40	196	打	5.3	35.3	II-A-ア	SJ43	239	打	7.0	47.2	II-A-ア
SJ40	197	打	6.2	45.1	II-A-ア	SJ43	240	打	5.7	25.3	II-A-ア
SJ40	198	打	7.6	46.6	II-A-ア	SJ43	241	打	5.7	38.2	II-A-ア
SJ40	199	磨	4.4	16.4	I-B-ア	SJ43	242	打	5.8	39.5	II-A-ア
SJ40	200	打	5.7	24.0	II-A-ア	SJ43	243	打	6.3	34.9	II-A-ア
SJ40	201	打	6.4	40.8	II-A-イ	SJ43	244	打	5.7	34.6	II-A-ア
SJ40	202	打	6.1	41.5	II-A-イ	SJ43	245	打	5.1	40.2	II-A-ア
SJ40	203	打	5.1	30.3	II-A-イ	SJ43	246	打	5.9	41.8	II-A-ア
SJ40	204	打	5.5	22.4	II-A-イ	SJ43	247	打	5.4	26.6	II-A-イ
SJ40	205	打	4.8	22.2	II-A-イ	SJ43	248	打	6.8	41.4	II-A-イ
SJ40	206	打	5.6	20.4	II-A-イ	SJ43	249	打	6.5	31.5	II-A-イ
SJ40	207	打	5.1	22.9	II-A-イ	SJ43	250	打	5.2	23.0	II-A-イ
SJ40	208	打	4.9	18.4	II-A-イ	SJ43	251	打	6.3	34.1	II-A-イ
SJ40	209	打	5.1	21.7	II-A-ウ	SJ43	252	打	6.1	31.6	II-A-イ
SJ40	210	打	4.5	23.5	II-A-イ	SJ43	253	打	5.3	33.2	II-A-ウ
SJ40	211	打	6.1	25.5	II-A-ウ	SJ43	254	打	4.8	27.6	II-A-ア
SJ40	212	打	4.4	28.2	II-A-ウ	SJ43	255	打	5.5	21.7	II-A-イ
SJ40	213	打	4.0	17.1	II-A-ウ	SJ43	256	打	5.6	22.2	II-A-イ
SJ40	214	打	4.8	22.3	II-A-イ	SJ43	257	打	6.3	39.3	II-A-イ
SJ40	215	打	5.9	28.3	II-A-イ	SJ43	258	打	5.8	28.1	II-A-ウ

第26表 遺構出土土製円盤観察表(2) (第352~356図)

遺構名					非定形品は()つき、単位はcm/g (小数点第一位まで)						
遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分類
SJ43	239	打	5.9	27.8	II-B-ア	SJ43	320	打	6.0	27.5	II-A-ウ
SJ43	260	打	5.3	24.8	II-B-ア	SJ43	321	磨	8.2	72.5	I-B-ウ
SJ43	261	打	7.2	51.7	II-A-イ	SJ43	322	磨	5.0	20.4	I-B-ウ
SJ43	262	打	6.5	35.3	II-A-イ	SJ43	323	磨	5.3	21.8	I-B-ウ
SJ43	263	打	5.4	30.4	II-A-イ	SJ43	324	磨	3.4	9.5	I-B-ウ
SJ43	264	打	5.2	22.1	II-A-イ	SJ43	325	磨	2.1	3.3	I-B-ウ
SJ43	265	打	5.8	32.6	II-A-イ	SJ43(焼)	326	打	6.4	34.4	II-A-イ
SJ43	266	打	5.9	31.2	II-A-イ	SJ43(焼)	327	打	7.0	48.6	II-A-イ
SJ43	267	打	5.6	36.1	II-A-イ	SJ43(焼)	328	打	6.3	41.0	II-A-イ
SJ43	268	打	7.1	46.7	II-A-イ	SJ43(焼)	329	打	6.2	35.9	II-A-イ
SJ43	269	打	7.6	57.0	II-A-イ	SJ43(焼)	330	打	5.2	30.7	II-A-イ
SJ43	270	打	5.1	23.7	II-A-イ	SJ43(焼)	331	打	4.7	19.3	II-A-イ
SJ43	271	打	6.6	33.6	II-A-イ	SJ43(焼)	332	打	7.3	37.6	II-A-ア
SJ43	272	打	5.0	25.0	II-A-イ	SJ43(焼)	333	打	4.4	19.6	II-A-イ
SJ43	273	打	5.2	28.0	II-A-イ	SJ43(焼)	334	打	7.1	63.2	II-A-イ
SJ43	274	打	5.9	30.2	II-A-イ	SJ43(焼)	335	打	6.8	50.4	II-A-イ
SJ43	275	打	5.2	25.5	II-A-イ	SJ43(焼)	336	打	5.6	26.5	II-A-イ
SJ43	276	打	7.1	59.4	II-A-イ	SJ43(焼)	337	打	5.7	33.6	II-A-イ
SJ43	277	打	6.1	35.4	II-A-イ	SJ43(焼)	338	打	5.1	28.4	II-A-イ
SJ43	278	打	8.0	49.9	II-A-イ	SJ43(焼)	339	打	6.2	30.9	II-A-イ
SJ43	279	打	5.3	33.6	II-A-イ	SJ43(焼)	340	打	5.4	29.8	II-A-イ
SJ43	280	打	6.1	35.2	II-B-イ	SJ43(焼)	341	打	6.1	38.8	II-A-イ
SJ43	281	打	5.5	22.1	II-A-イ	SJ43(焼)	342	打	7.3	62.8	II-A-イ
SJ43	282	打	6.5	39.5	II-A-イ	SJ43(焼)	343	打	6.5	37.6	II-A-イ
SJ43	283	打	6.3	39.1	II-A-イ	SJ43(焼)	344	打	5.8	31.1	II-A-イ
SJ43	284	打	5.5	35.0	II-A-イ	SJ43(焼)	345	打	5.2	25.2	II-A-イ
SJ43	285	打	7.2	59.3	II-A-イ	SJ43(焼)	346	打	7.4	45.1	II-A-ウ
SJ43	286	打	6.0	44.8	II-A-イ	SJ43(焼)	347	打	7.0	49.6	II-A-ウ
SJ43	287	打	5.3	28.0	II-A-イ	SJ43(焼)	348	打	4.9	22.0	II-A-ウ
SJ43	288	打	5.7	31.9	II-A-イ	SJ43(焼)	349	打	8.2	59.5	II-A-ウ
SJ43	289	打	8.7	62.1	II-A-イ	SJ43(焼)	350	打	6.3	34.8	II-A-エ
SJ43	290	打	4.9	26.9	II-A-イ	SJ43(焼)	351	打	6.4	46.3	II-A-ウ
SJ43	291	打	5.3	27.6	II-A-イ	SJ43(焼)	352	打	4.7	24.9	II-A-ウ
SJ43	292	打	4.5	27.1	II-A-イ	SJ43(焼)	353	打	4.5	20.0	II-B-ア
SJ43	293	打	6.7	50.4	II-A-イ	SJ43(焼)	354	磨	6.3	24.2	I-B-ア
SJ43	294	打	7.4	60.1	II-A-イ	SJ43(焼)	355	磨	6.7	34.9	I-B-ウ
SJ43	295	打	7.7	46.9	II-A-イ	SJ43(焼)	356	磨	6.2	30.3	I-B-ウ
SJ43	296	打	5.9	38.0	II-A-イ	SJ43(焼)	357	磨	4.1	16.9	I-B-イ
SJ43	297	打	6.6	41.1	II-A-ウ	SJ43(焼)	358	磨	6.4	31.6	I-B-ウ
SJ43	298	打	7.2	47.4	II-A-ウ	SJ43(焼)	359	磨	4.7	17.1	I-B-ウ
SJ43	299	打	4.6	18.5	II-A-ウ	SJ44	360	打	5.9	37.4	II-A-ア
SJ43	300	打	6.8	37.6	II-A-ウ	SJ44	361	打	6.0	40.0	II-A-ア
SJ43	301	打	5.6	33.8	II-A-ウ	SJ44	362	打	7.2	53.4	II-A-ア
SJ43	302	打	8.0	66.9	II-A-ウ	SJ44	363	打	5.7	31.4	II-A-ア
SJ43	303	打	5.0	25.4	II-A-ウ	SJ44	364	打	6.5	33.9	II-A-ア
SJ43	304	打	4.5	22.1	II-A-ウ	SJ44	365	打	6.1	25.4	II-A-イ
SJ43	305	打	5.1	25.3	II-A-イ	SJ44	366	打	7.4	40.1	II-A-ア
SJ43	306	打	4.9	22.6	II-A-エ	SJ44	367	打	5.5	35.8	II-A-ア
SJ43	307	打	5.0	24.3	II-A-イ	SJ44	368	打	4.5	18.2	II-A-イ
SJ43	308	打	7.9	49.9	II-A-イ	SJ44	369	打	6.6	13.0	II-A-イ
SJ43	309	打	6.3	38.8	II-A-エ	SJ44	370	打	5.1	26.2	II-A-イ
SJ43	310	打	5.9	30.6	II-A-ウ	SJ44	371	打	5.5	32.4	II-A-イ
SJ43	311	磨	5.3	9.4	I-B-ウ	SJ44	372	打	4.9	27.6	II-A-イ
SJ43	312	打	5.8	30.3	II-B-ウ	SJ44	373	打	6.5	50.3	II-A-イ
SJ43	313	打	6.7	45.0	II-B-イ	SJ44	374	打	5.2	34.3	II-A-ウ
SJ43	314	打	5.6	26.2	II-A-ウ	SJ44	375	打	5.7	35.5	II-A-イ
SJ43	315	打	6.0	32.0	II-A-イ	SJ44	376	打	5.7	30.6	II-A-イ
SJ43	316	打	7.4	56.8	II-A-ウ	SJ44	377	打	6.1	27.1	II-A-エ
SJ43	317	打	4.1	18.5	II-B-ウ	SJ44	378	打	8.0	50.1	II-A-イ
SJ43	318	磨	4.2	19.8	I-B-ウ	SJ44	379	打	5.0	26.3	II-A-イ
SJ43	319	磨	4.1	17.5	I-B-ウ	SJ44	380	打	6.1	31.3	II-A-イ

第27表 遺構出土土製円盤観察表(3) (第357~359・367・368・371図)

遺構名						非定形品は()につき。単位はcm/g (小数点第一位まで)					
遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分組	遺構名	番号	打製・磨製	最大径	重量	分組
SJ44	381	打	9.3	101.1	II-A-I	SJ47	431	磨	5.5	20.3	I-B-U
SJ44	382	打	5.4	42.6	II-A-I	SJ55	432	打	6.5	42.5	II-A-I
SJ44	383	打	6.3	48.8	II-A-I	SJ55	433	磨	5.3	31.2	I-B-U
SJ44	384	打	7.4	60.4	II-A-I	SJ61	434	打	6.5	29.6	II-A-A
SJ44	385	打	7.5	40.5	II-B-I	SJ61	435	打	5.1	24.1	II-A-I
SJ44	386	打	5.2	35.0	II-A-I	SJ61	436	打	4.2	16.3	II-A-I
SJ44	387	打	5.6	24.9	II-B-I	SJ61	437	打	4.7	18.3	II-A-I
SJ44	388	打	6.7	42.9	II-A-I	SJ61	438	打	6.0	28.2	II-A-I
SJ44	389	打	6.5	35.0	II-A-I	SJ61	439	打	5.2	30.6	II-A-I
SJ44	390	打	5.3	30.3	II-A-I	SJ61	440	打	5.2	22.1	II-A-I
SJ44	391	打	4.6	22.8	II-A-I	SJ61	441	打	6.1	13.4	II-A-I
SJ44	392	打	6.1	44.1	II-A-I	SJ61	442	打	5.8	20.7	II-A-I
SJ44	393	打	7.5	64.0	II-A-I	SJ61	443	打	4.5	16.7	II-A-I
SJ44	394	打	5.2	25.4	II-A-E	SJ61	444	打	3.5	15.0	II-A-I
SJ44	395	打	5.4	22.4	II-A-I	SJ61	445	打	5.0	21.8	II-A-I
SJ44	396	打	4.9	20.5	II-A-I	SJ61	446	打	5.9	26.9	II-A-U
SJ44	397	打	6.0	34.8	II-A-I	SJ61	447	磨	3.1	9.0	I-B-U
SJ44	398	打	6.2	35.0	II-A-U	SJ61	448	磨	4.8	17.6	I-B-U
SJ44	399	打	6.6	44.4	II-A-U	SJ64	449	打	6.3	33.1	II-A-A
SJ44	400	打	8.5	71.5	II-A-I	SJ64	450	打	6.6	37.3	II-A-I
SJ44	401	打	5.2	29.0	II-A-I	SJ64	451	打	5.7	25.1	II-A-U
SJ44	402	打	5.5	32.4	II-A-U	SJ64	452	打	5.7	31.7	II-A-U
SJ44	403	打	7.2	36.0	II-A-E	SJ64	453	打	7.0	48.8	II-A-I
SJ44	404	打	6.5	40.3	II-A-U	SJ64	454	打	6.0	42.5	II-A-I
SJ44	405	打	7.1	47.0	II-A-U	SJ64	455	磨	4.1	14.8	I-B-U
SJ44	406	打	6.0	31.9	II-A-U	SJ64(焼)	456	打	6.6	54.8	II-A-I
SJ44	407	打	5.3	27.5	II-A-U	SJ64(焼)	457	打	7.2	53.7	II-A-U
SJ44	408	打	5.5	25.6	II-A-E	SJ64(焼)	458	磨	5.7	28.7	I-B-I
SJ44	409	打	5.8	33.1	II-B-I	SJ65	459	磨	4.0	17.4	I-A-A
SJ44	410	打	6.0	36.8	II-A-E	SJ65	460	磨	3.5	14.0	I-A-I
SJ44	411	打	7.2	36.0	II-A-U	SJ65	461	磨	4.1	12.3	I-A-A
SJ44	412	磨	4.2	22.2	I-B-I	SK282	7	磨	5.1	23.1	I-B-U
SJ44	413	磨	4.3	14.4	I-B-I	SK288・289	8	磨	4.5	20.5	I-B-U
SJ44	414	磨	4.5	19.8	I-B-I	SK288・289	9	磨	5.1	22.6	I-B-A
SJ44	415	磨	4.1	14.8	I-B-U	SK301	10	打	4.9	23.8	II-A-E
SJ44	416	磨	7.1	37.2	I-B-I	SK304	11	打	6.2	33.4	II-A-A
SJ44	417	磨	4.9	20.3	I-B-U	集中12	3	打	5.2	30.9	II-A-A
SJ44	418	磨	4.1	10.1	I-B-U	集中12	4	打	4.5	21.7	II-A-I
SJ44	419	打	5.5	24.6	II-B-U	焼土跡26	3	打	6.0	23.6	II-A-I
SJ44	420	磨	2.9	6.8	I-B-U	焼土跡27	4	打	6.8	48.3	II-A-A
SJ44	421	磨	4.3	14.4	I-B-U	焼土跡27	5	打	5.2	31.3	II-A-A
SJ44	422	打	4.0	21.8	II-A-U	焼土跡27	6	打	5.8	32.4	II-A-A
SJ44(焼)	423	打	5.4	24.5	II-A-U	焼土跡27	7	打	5.5	21.2	II-A-I
SJ44(焼)	424	磨	5.9	32.2	I-B-U	焼土跡27	8	打	6.3	41.4	II-A-I
SJ44(焼)	425	磨	4.6	21.7	I-B-I	焼土跡27	9	打	3.5	14.2	II-A-I
SJ44(焼)	426	磨	4.3	16.7	I-B-U	焼土跡27	10	磨	4.9	17.8	I-B-I
SJ45	427	打	5.9	34.9	II-A-I	焼土跡27	11	打	5.3	24.3	II-A-U
SJ45	428	打	5.1	26.5	II-A-I	焼土跡27	12	磨	4.3	10.7	I-B-U
SJ46	429	打	4.0	20.8	II-A-I	焼土跡27	13	磨	3.0	5.9	I-B-U
SJ47	430	打	6.8	35.2	II-A-I	焼土跡27	14	磨	2.8	5.8	I-B-U

3. 石器

尖頭器(第373図1)

1は第43号住居跡から出土した。基部側の大半と先端部を欠損する。柳葉形の尖頭器で、表面に主要剥離面を残し、主に表面の細かな剥離によって紡錘形のプロポーションをつくりだしている。

石鏃(第373図2~22)

2~9は凸基有茎の鏃である。

2は基部を欠損する。両側縁が緩やかな外反りのカーブを描き、先端は鈍角である。3は甲高で、表面に広く主要剥離面を残す。4は逆刺の直上にある。

くびれを持つ。5は茎と先端を欠損する比較的大形の鎌である。

6は鎌身と茎の大きさが拮抗した十字形のプローションである。7は裏面右側縁がほぼ無加工で、主要剥離面を残している。8・9も茎に対し鎌身が比較的小さい。8は両側縁が丸みを帯び、9は側縁直線で左右がやや非対称である。

10～12は平基有茎の鎌である。

10は二等辺三角形の鎌身で、茎を欠損する。11は茎が短く鈍角で、左側縁の逆刺との境が不明瞭である。12は端正な左右対称のプローションで、裏面に主要剥離面を残す。

13・14は円基の鎌である。13は全体に丸みを帯びた水滴形の鎌で、先端部は鈍角かつ肉厚である。14は左逆刺部を広く欠損する。裏面に広く主要剥離面を残して、両面からの細かな調整剥離で鎌身を形成している。残存する右逆刺部表面に細かな剥離が集中しており、破損後に茎を再生しようとした可能性がある。

15は平基の鎌で、非常に小型の正三角形の鎌身である。

16～22は凹基無茎の鎌である。

16は先端部を欠損する非常に肉厚の鎌である。基部の挟入が緩やかで、鎌身の左側縁がほとんど無加工であり、未成品の可能性もある。

17も基部の挟入が緩やかである。鎌身は左右対称の端正なプローションを持ち、先端は鋭角である。18は先端部および右逆刺部を欠損する。

19・20は基部に浅いV字の挟入を持つ。19は完形、20は先端部を広く欠損し、両側縁にくびれを持つ。

21は基部がV字に深く挟入する。逆刺は鈍角で、鎌身も左右非対称である。

22は残存状態が悪いが、凹基の鎌と考えた。右逆刺部側の鎌身の大半と、左逆刺部を欠損する。背面に広く主要剥離面を残している。

石錐 (第373図23～28)

23は逆水滴形の石錐である。錐部は鈍角かつ肉厚、つまみ部は薄手で、末端部左右側縁に挟りを持つ。24も逆水滴形だが、右側縁中段のみ直線形である。先端部は鈍角となっている。

25はつまみ部が不明瞭な棒状の石錐で、断面台形、先端部のみ裏面からの細かな剥離で刃付けをしている。

26はT字型の石錐であったとみられるが、つまみ部の右側縁を欠損する。裏面に主要剥離面を残し、表面のみの調整剥離により成形している。非常に肉厚で、錐部も鈍角である。

27はつまみ部のみ残存する。やや末広りの楕円形で、右側縁に挟りを持つ。28はT字形の石錐である。つまみ部は横楕円形で左右対称、棒状の非常に長い錐部を持つ。

スクレイパー (第374図29～33)

29は縦長の剥片の下方両側を簡易に片面加工して刃部を作り出している。裏面に主要剥離面を残している。30は楕円形のスクレイパーであったとみられるが、短軸方向に折損している。表面に自然面を残し、裏面を中心に細かな剥離を加えて刃部をつくり出している。

31はやや縦長の六角形で、下縁および右側縁に細かな調整剥離を施して刃部としている。32は二等辺三角形ないし水滴形で、表面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。刃部は左側縁上方を中心に両面加工でつくられている。

33は裏面からの加工でいびつな三角形のプローションをつくり出し、下縁のみ両面加工で刃部としている。

二次加工剥片 (第374図34～第375図42)

34～37は、いずれも縦長の剥片を使用し、裏面に主要剥離面を持つ。

34は薄手で全体に裏面側への反りを持ち、下縁および右側縁を中心に加工を持つ。35は上面および右側縁に自然面を残し、左側縁に両面加工の刃

部を持つ。

36は断面三角形で、右側縁下方裏面に刃こぼれを生じている。37は台形の剥片であったとみられるが、左側縁下方を欠損している。破断面にも細かな剥離が生じており、破損後も使用が続けられたものと考えられる。

38・39は上端を欠損する。いずれも裏面からの細かな調整剥離で楕円ないし水滴形のプロポジションをつくり出している。刃部は下端および左側縁下方に存在する。

40は横長の剥片を縦置きに使用している。不整な長方形で、右下方に抉りを持つ。左上コーナ部分に片面加工の刃部を持つほか、下縁部にも刃こぼれを生じている。

41は横長の剥片を横置きに使用する。水滴形のプロポジションで、表面に節理面、裏面に主要剥離面を残し、表面の剥離で下縁部と右側縁を刃部としている。

42は横長の剥片を使用したものとみられる。小破片であり全容を知り得ないが、残存する両側縁に剥離と刃こぼれが存在する。

礫器 (第375図43・44)

43は楕円形の扁平礫を使用している。裏面の長軸両端に剥離が集中しており、側縁部には叩打痕を、また表裏面に擦痕を残している。多用途石器の一種と解される。

44は長方形の扁平礫の長軸一端に両面加工の刃部をつくり出したものである。

打製石斧 (第375図45～第378図74)

45～50は不定形の石斧を一括した。

45は小型楕円形の石斧である。基部側左側縁を欠損する。刃部は裏面側の一回の剥離と、表面側の細かな数回の剥離で形成しており、刃部欠損した石斧からの再加工品とも考えられる。

46は楕円形の石斧で、基部側左側縁を欠損する。両側縁に細かな剥離を施して成形する一方、刃部の加工は比較的簡素である。47は破損した石斧の

基部とみられる。

48は長楕円形の石斧で、表面に自然面を残す。調整剥離は基部側両側縁にほぼ限定され、刃部は無加工で使用している。49は不整楕円形で、表面に自然面を残している。丸く張り出した右側縁に細かな叩打が集中しており、刃部の加工は簡素である。表面の自然面から剥離面にかけて擦痕を残している。

50は三角形の小型の石斧で、表面に自然面を残す。刃部以外にはほぼ裏面のみの加工で、大型のスクレイパーとも解される。

51～64は短冊形の石斧である。51～53は長楕円形の礫を素材としたものとみられる。51は棒状の石斧で、表面は無加工の自然面である。

52は表側に自然面を残し、裏面からの調整剥離によって刃部をつくり出している。53は裏面がほぼ無加工の自然面で、表面のみ周縁からの打撃で形成した亀の甲形の石斧である。54は小型扁平の石斧でスクレイパーと考えるべきかもしれない。

55～59は板状節理の扁平礫を素材とする。55は表裏に節理面を残し、裏面には擦痕と複数の円孔を持つもので、石皿片からの再製品とみられる。56は刃部を欠損する。表面に自然面と節理面、裏面に節理面を残す。両側縁両面に剥離を、基部末端に叩打痕を残す。

57は表面に節理面を残している。剥離は表面の両側縁に集中し、刃部の加工は簡素である。58も表面に節理面、裏面に打割面を残し、刃部を欠損する。

59も表裏に節理面を残している。両側縁は表面側、刃部は両面加工で形成している。節理面に擦痕を残す。

60は刃部右側縁を欠損する。左右対称、末広がりプロポジションで、両側縁と基部に細かな叩打による潰し加工を施している。61は表面の一部に自然面を残す。両側縁の中段にわずかにくびれを持つ。62は基部側の三分の程度を欠損する。

小型扁平な石斧だが、両面とも細かな調整剥離を施す精緻なつくりである。

63はやや寸詰まりの石斧で、両側縁部の調整剥離に比べ刃部の加工は簡素で、基部に叩打痕を持つ。再生品であるかもしれない。

64は両側縁中段がくびれ、基部の左側縁が大きく張り出す。分銅型の石斧の刃部を破損したために基部側を刃部として再生した可能性がある。表面に自然面を残している。65は撥形の石斧である。基部から胴部中段にかけては細身で、刃部のみ大きく楕円形に張っている。

66～74は分銅形の石斧である。

66は刃部のみ残存する。表面に打割面、裏面に自然面を残し、両側縁が深くくびれている。67は刃部右側縁を欠損する。刃部表面に自然面を残している。また、胴部中段の表裏に装着痕と思しき擦痕がみられる。

68・69は基部側二分の一程度を欠損する。68は表面に自然面を残している。70は表面に節理面を残し、胴部中段がくびれて細かな潰し加工を残している。

71は基部側三分の一程度を欠損する。薄身の石斧で、表裏に打割面を残す。72は基部を欠損する。表面に自然面を残し、両側縁が深く挟入する。

73は表裏に打割面を残す薄身の石斧である。74は表面に自然面、裏面に打割面を残す。基部側から1回、両側縁に2～3回の剥離で成形した簡素なつくりで、刃部はほとんど無加工である。

磨製石斧 (第379図～第380図)

75は完形品だが、刃部と胴部が割裂した状態で出土した。断面丸棒状で、刃部は楕円形、全体に成形時の叩打痕と擦痕を残す粗いつくりである。76は刃部および左側縁部を欠損する。断面丸棒状、基部を中心に叩打痕を残している。

77は定角形の石斧であったとみられるが、胴部中段右側縁のみ残存する。78は刃部欠損し、裏面刃部側から中段にかけて広く欠失する。やはり定

角形の石斧で、基部末端が三角形に突出する。

79は小型扁平なくさび状の石斧で、基部を欠損する。80～85は定角形の石斧で、80は刃部のみ、81は刃部右側縁部のみ、82は胴部中段のみが残存する。

83は刃部のみ残存する。表面中央部に叩打痕が集中しており、敲石として再使用されているものとみられる。84は完形品だが、基部に叩打痕が集中し、原形が失われている。柄への装着に伴うものか、あるいはくさび的な使用方法を示すものであろうか。85は刃部右側縁のみ残存し、刃こぼれが著しい。

86～88は小型の石斧である。86は完形品で、定角形の精緻なつくりである。基部に叩打痕が集中している。87・88は断面長方形の扁平な石斧で、刃部欠損する。

砥石 (第380図9～第383図132)

主として砂岩系の石材を使用しており、石器や骨製品、玉類の制作に使用したと思われる。また、敲石や凹石に転用される例も多く、多用途石器としての性格も強い。

89～95は原礫をそのまま、あるいは荒割りするなどして使用するものである。89は原礫をほぼそのまま使用するもので、溝状の使用痕を残す。90は扁平な礫の両面に石皿に似た片減りの使用痕を持つ。

91は打割した礫の表裏2面を使用し、1面を凹石としても使用している。92は板状の石材を荒割りして表裏2面使用しており、特に表面は徹底した使用により光沢を生じている。

93～95はスタンプ形石器に似る。93は板状の原礫を荒割りしたもので、1面のみ使用する。94は三角錐状の石材の長軸側2面を使用しており、徹底した使用により光沢を生じている。95は多孔質の安山岩を使用し、片面を凹石としても使用している。

96は、母岩から板状にはぎ取った礫を整形して

使用しており、側縁部中段に挟入をつくりだしている。

97～113は薄板状の石材を使用するものである。97は板状節理の片岩を整形して両面使用するもので、石皿片を転用した可能性がある。

98・99は扁平な円礫を両面使用するもので、一側縁を敲石として使用している。99は粗い線状の擦痕が顕著である。

100は長方形の礫を両面使用するが、長辺側の中段に挟りをつくり出しており、編み物などの石錘に転用した可能性がある。

101は節理に沿って剥ぎ取った石材を台形に整形して両面使用する。102は扁平な円礫を両面使用し、長軸一端を敲石に転用している。103はごく粗粒かつ硬質の石材を整形して両面使用しており、表面は徹底した使用による光沢を持つ。

104～112は断面紡錘形の石包丁様石器と呼ばれるものである。104は硬質の石材を使用し、表裏に光沢を持つ。

105・106は小破片である。105は三味線胴形の砥石であったとみられるが、コーナー部分のみ残存する。106は棒状の砥石の中段部分のみが残存したものであろう。

107～110は扁平棒状の砥石である。107は表裏面のほか、長軸側両端も使用している。また、両側縁の中段に挟りをつくり出しており、石錘としても使用している。108も長軸末端を使用しているが、一端を折損している。

109は硬質かつ緻密な石材で、石棒・石剣類を転用した可能性がある。裏面に側縁方向からの剥離を残すが、この剥離面も使用により磨滅している。110は裏面に浅い溝状の使用痕を残す。また、両側縁に浅い挟入を持っており、石錘としても使用された可能性がある。

111は棒状の砥石の破片とみられるが、長辺側の側縁中段に挟りをつくり出し、この部分から折損したものであろう。裏面を凹石として使用して

いる。112は水滴形の礫を使用し、敲石として転用している。

113～132は有溝砥石である。骨角器や玉類の製作に使用したものであろう。113は敲石に転用しており、すべての側縁に剥離と叩打痕を生じている。114は小破片だが、棒状の砥石であったものとみられる。

115は石皿風の片減りの使用面を持つもので、表面に2条の溝を持つ。

116～131は扁平棒状の砥石で長軸に沿った溝を持つものである。大半が石包丁様石器を転用したものである。116は片面にごく浅い溝を持つもので、長辺中段に挟入を持つ。石錘としても使用したものか。

117は両面に単独の明瞭な溝を持つ。118は硬質な礫岩を使用する。表裏とも長軸中段の使用面に著しい磨滅がみられ、それぞれ複数の溝を持つ。

119は両面とも砥石として使用が徹底され、中段から折損した状態で出土した。両面とも明瞭な溝を持つ。120・121は一端折損し、120は側縁に挟入を持つ。

121は粗粒の石材を使用し、両面に複数の溝を持つ。122・123は小破片で両面に溝を持つ。124は非常に粗粒の石材を使用し、長辺中段に挟入を持つ。125～128は小破片である。

129・130は細身の撥形で、両面に非常に深い溝を持つ。130は一端を折損する。131もこれに類似した破損品の可能性がある。

132は楕円形の軽石製品の一面に溝を持つもので、特異な砥石である。長軸一端に叩打痕を残している。

敲石（第384図133～第385図159）

硬質かつ緻密で重量のある石材を使用する傾向にあり、磨石・凹石・石斧など他の石器からの転用が頻繁に行われている。磨石からの転用は特に頻繁で、大半が一部に磨面を残している。

使用痕には、大小の剥離を繰り返すものと、あ

ばた状の叩打痕が密集するものの二通りあり、前者は大きな振り幅の力強い打撃に伴うもの、後者は至近距離の細かな接触を繰り返す動作の結果であろう。また、剥離を伴う打撃については、石器の長軸に平行するものと、これと直交するものが存在し、石器の持ちかたと動作方向の違いを反映するものであろう。

使用痕にみられるこうしたバリエーションは、打撃の所作の違いを反映するものであり、敲石と呼ばれる石器群にいくつかの異なった用途が存在したことを示すものと考えられる。

133は楕円形の磨石を転用したもので、すべての側縁に叩打痕を持ち、表裏に磨面を残している。134は棒状の磨石からの転用で、残存するすべての側縁に剥離や叩打痕を残している。141は棒状の礫の長軸末端と側縁部に剥離を残す。

135・136・138～140・142～145などは棒状の磨石の長軸側一端または両端を使用面とするものである。139は反対側の長軸末端の側縁部に細かな叩打痕が集中する。

137・146・147～149は礫の側縁に細かな叩打痕を残すものである。150～157は断面定角形のカツオブシ形の磨石を転用したもので、長軸側一端または両端を使用面とする。150・151・154・156は磨製石斧を転用した可能性がある。150は凹石としても使用している。

153は小判形の磨石の両端および側縁部に細かな叩打痕が集中する。158・159は小型の敲石で、棒状の礫の末端に叩打痕が集中する。

凹石（第386図160～第387図181）

石材の平坦面に凹孔を持つもので、掲載したものはすべて磨石からの転用、または共用である。2種類の石器を用いた作業そのものの親和性を示すものであろう。

また、使用痕についても、明瞭な凹孔となるものから、凹孔の形成過程を示すとみられる細かな叩打痕の集中まで幅があり、この種の石器を磨石

と完全に分離することは不可能といえる。

使用する石材も多孔質のものを含む安山岩が主体で、この点でも磨石と共通している。

160～165・167・168・171・175・176・179～181は円形の磨石の片面ないし両面に凹孔を持つもので、大半が両面使用している。長径と短径の差が少ない、真円に近い石材が好まれる傾向が見て取れるが、176・179・181は磨石としての使用面が側縁部にも存在するためにいびつなプローションとなっている。

160は表裏以外に側縁部にも複数の凹孔を形成し、161は表裏にそれぞれ複数の凹孔を形成している。いずれも多孔質の安山岩であり、他の単孔型の凹石にはあまり使用されない石材である点は注目される。

166・169・170・173・177・178は扁平な礫を長方形に整形した磨石に凹孔を伴うものである。長軸一端を敲石として転用する例がしばしばみられるが、この場合の使用痕はあばた状の叩打痕が密集するタイプには限定される。

172・174は楕円形の自然礫を整形せず使用するタイプの磨石の表裏2面に凹孔を持つ。

磨石（第387図182～第391図231）

前項で述べた通り、敲石や凹石との境界は極めてあいまいである。敲石として使用される場合の使用痕は凹石と同様、あばた状の叩打痕が密集するタイプが大半であるが、183・184は複数の剥離を伴っている。

石材は大半が安山岩で、砂岩系の石材や閃緑岩がこれに次ぐが、182は硬質の緑色岩を使用する。194は大量の金雲母結晶を含む特異な深成岩である。

182～190・194などは不整楕円形の自然礫を整形せずに使用する。191～193・195・196・200～202・212・214・221・223などは原礫を長方形に整形して両面用いるもので、断面長方形や定角形となる。

203～206などは扁平礫の両面を使用面とする。
220・222・224～231は原礫を円形に、211は三角形に整形して両面使用するもので、断面長方形となる。

スタンプ形石器（第392図232・233）

長楕円形の石材を短軸方向に打割して、打割面を使用面とし、残る一端に側面からの打撃を繰り返して「握り」をつくり出すものである。早期前半の撫糸文系土器や、中期後半の加曾利E式期に特徴的にみられる石器である。

232は典型的なもので、扁平な礫の両側縁に打撃を繰り返して握りを形成し、下方の打割面を磨石としている。磨石を転用している可能性がある。233はさらに徹底した剥離によって棒状の握りをつくり出し、下面のみ平滑な磨面となっている。

石皿（第392図234～第397図263）

ほとんどが自然礫を特に整形せずに片面ないし両面使用するものである。表裏に凹孔を形成するものがしばしばみられ、使用時における凹石との親和性が伺われる。

234は楕円形の扁平な原礫の表裏に凹面を形成するもので、全体の三分の一程度が残存するものとみられる。整形は行っていない。235は扁平な板石の表裏両面を使用する。整形はしておらず、凹面も形成しない。表裏に複数の凹孔を持つ。

236は扁平な板石を表裏使用するもので、表面のみごく浅い凹面を形成するものとみられる。側縁部に複数回の打撃が加えられていることから、台石に転用された可能性が考えられる。

237は楕円形の礫の表裏を使用するもので、成形はしていない。全体の三分の一程度が残存するものとみられる。表面のみ非常に深い凹面を形成しており、表裏に凹孔を持つ。

238は楕円形の礫の表裏を使用するもので、成形はしていない。全体の四分の一程度が残存する。表裏とも明瞭な凹面を形成し、小規模ながら多数の凹孔を持つ。

239は小破片で原形は不明だが、自然石の表裏使用したものであろう。両面にごく浅い凹面を形成し、表面に明瞭な凹孔を持つ。

240・241は全形不明ながら、比較的小型の石皿であったとみられる。240は表面のみ平滑な凹面を形成し、裏面は多数の凹孔が密集するいわゆる蜂の巣石となっている。241は両面使用するが凹面を形成しない。

242は楕円形の礫を整形せずに使用し、表を凹面、裏面を蜂の巣石とするタイプである。凹面にも1箇所の凹孔が存在する。243は小破片で全形不明だが表裏にごく浅い凹面を形成している。

244は表面に深い凹面を形成し、裏面は蜂の巣石とする。側縁を平坦に整形しており、長方形の石皿であった可能性がある。245は非整形の礫の表裏を使用するもので、表面のみごく浅い凹面を形成する。両面に明瞭な凹孔を持つ。

246は非整形の礫の表裏にごく浅い凹面を形成している。247は扁平な礫の表裏を使用するもので、成形はしておらず、両面とも緩やかな凸面となっている。

248は自然礫の両面を使用するもので、表裏にごく浅い凹面を形成している。裏面に赤変がみられ、顔料が付着している可能性がある。

249・250は完形資料で、扁平な礫の両面を使用する。整形はしておらず、両面とも緩やかな凸面である。249は裏面に2箇所の凹孔を持つ。251は全形不明だが表面のみ深い凹面を形成する。

252～254は側縁を平坦に整形しており、長方形の石皿であったと考えられるものである。252は有脚の石皿のコーナー部分で、表面に浅い凹面を形成し、裏面に低い脚を持つ。また、表裏に凹孔を持つ。

253は表面に側壁を持つ凹面を形成しており、裏面も浅い凹面となっている。254は表裏両面にごく浅い凹面を形成する。

255～259は板状節理の礫を使用する。255は表

裏に浅い凹面を形成し、側縁を平坦に整形している可能性がある。256は小破片で表面に凹面を形成し、裏面は剥落している。

257は風化が著しく擦痕が不明瞭だが、片面使用した石皿と考えた。258は全形不明で、表裏使用し、表面のみ凹面を形成する。凹面に赤変がみとめられ、顔料が付着している可能性がある。

259は表面に使用面を残し、裏面は剥落している。使用面に赤変がみとめられ、顔料付着の可能性はある。

260は表面に明瞭な凹面を形成する。裏面は節理面で、剥落している可能性がある。261は表面に浅い凹面を形成し、裏面にも擦痕を持つ。

262は周縁を荒割りしていびつな平行四辺形に整形したものとみられる。凹面は形成しないが表裏使用しており、表面には粗い線状の擦痕が顕著である。263は被熱による風化が激しいが表裏使用し、表面に明瞭な2箇所の凹孔を持つ。

台石 (第398図264・265)

264は平坦な表裏を使用面としている。両面とも極めて平滑で光沢を生じている。磨製石器の製作時の作業台として使用したもののか。

265は枕状の石材の一部に平滑面をもつもので、やはり作業台と考えた。

軽石類 (第399図266～277)

遺跡から出土した軽石を一括した。石材の性質上、人工的な穿孔など見分けが付きにくい、自然礫の可能性もあるものも含め掲載している。

266・268は円礫の両面に凹孔を持つものである。非常に脆弱な素材であるため、凹石としたものとは用途が異なる可能性が高い。

271は側縁の一部に擦痕を伴う平坦面を持つ。276は断面紡錘形に整形しており、一端に貫通孔を持つ。277は楕円形の礫の一面に舟状の深い凹孔を形成している。

石錘 (第400図278～288)

278・279は礫の長軸両端に擦り切りによる挟入

を設け、表裏に擦り切りによる溝を切つて両者を連繫する。280・282・285は長軸両端に細かな剥離を加えた後に擦り切りで挟入を設けている。280は右側縁部にも複数回の打撃を加えており、左右のバランスを取ろうとする意図が伺える。

281は長軸上端に表裏各一回ずつの剥離を加えた後に擦り切りの挟入を設けている。下端は原礫の凹みをそのまま利用して擦り切りの挟入を設けており、加工に適した形状の礫を選択していることが伺われる。

283は上下とも擦り切りによる幅広の挟入で、上側のみあらかじめ打撃を加えている。

284・286・288は下半を欠失する。284・286は上端部に剥離→擦り切りの順序で挟入を形成し288は剥離で生じた凹みをそのまま使用している。286・288は裏面が剥落している。

287は長辺側の左右に数回の剥離による凹みを持つ。また、長軸下端には細かな剥離の凹みが、上端には摩耗による凹みが存在することから、十字に紐を掛けていたものと考えられる。

石棒 (第400図289～第401図301)

289・290は完形品である。289は両頭の石棒である。上下にごく浅いくびれを設けて頭部の表現としている。両側縁に緩やかな後縁を持つ。

290は扁平板状の石材を紡錘形に加工し、上方の側縁のみ細かな叩打でくびれを設けて頭部を表現している。比較的簡略な造りの石棒といえる。

291・292は石棒頭である。291は胴部との境に明瞭な段を持ち、入念に面取りして球状の頭部をつくり出している。292は大型の石棒頭で、両側縁のみ叩打と研磨による緩やかな段を形成しており、裏面が剥落する。

293も大型の石棒で、胴部から頭部の境付近が残存する。節理に沿って長軸方向に剥離しており、全周の四分の一程度が残存しているものとみられる。叩打・研磨によるごく緩い段を持つ。

294～297は胴部の断片である。294・295は緻密な石材を用いた精製品で、294は強い火熱を受けて風化し、下端部は表面が溶解し発泡している。296・297は板状節理の石材を用いている。296は接合資料で、破断面が磨滅している。

298～301は基部およびその周辺である。298は緻密な石材を用いた精製の石棒で、残存する下端部に3条の沈線を巡らせており、石棒基部の装飾と考えた。表面中央部に若干の平坦面を残す。

299・300は片岩製の石棒で、下端に原礫の凹凸を残している。301は精製品とみられ、胴部中段から基部付近にかけて残存する。残存する上端から10cm位までは叩打整形の後に入念な研磨を施しているが、それ以下ではあばた状の叩打痕を残している。使用時に目に触れる部分と触れない部分の境界を示す可能性がある。

石剣 (第401図302～第402図312)

石棒のうち、両側縁に稜線をつくり出しているもの、胴部著しく扁平なものを石剣とした。

302～304は完形品である。302・303は紡錘形の胴部を持ち、明瞭な段によって頭部を表現している。表面は良好に研磨している。302は長方形の頭部で、裏面は被熱により赤変している。303は胴部と頭部で断面の長軸方向が直交している。基部付近に強い被熱の痕跡がみとめられる。

304は表裏に平坦面を残し、側縁部の稜線をほとんど持たない。頭部は両側縁からのごく弱いくびれによりかろうじて表現している。胴部中段以下が被熱により風化しており、それ以外の部分にも煤とみられる黒色の付着物が存在する。

305・306は頭部に線刻文を持つ石剣である。305は基部欠損し、裏面が剥落している。表裏に若干の平坦面を残すが、胴側縁部の稜線は存在しない。頭部と胴部は明瞭な二重の段によって区分しており、半球状の頭部の頂部に円文、左右に三角文を描いている。全面にわたり良好に研磨している。また、全体に被熱による風化が生じている。

306は頭部～胴部中段まで残存する。全体に扁平で、側縁部の稜線は存在しない。頭部と胴部は両側縁の緩やかにくびれて区分し、1条の沈線を巡らせている。楕円形の頭部には鋸歯文を巡らせ、上下を沈線で区画している。全面を良好に研磨し、頭部は光沢を持つ。胴部は被熱により赤変しており、頭部に黒色の付着物が存在する。

307は頭部～胴部中段まで残存する。扁平で、裏面に広く平坦面を残している。頭部と胴部の境は側縁からのごく緩いくびれで表現しており、頭部は菱形に成形している。

308～310は胴部の断片である。308は裏面が節理に沿って割れており、全周の三分の一程度が残存するものとみられる。扁平で、表面に平坦面を残している。残存部分の上端に若干のくびれが存在し、頭部へと移行していた可能性がある。

309は断面レンズ状で、両側縁に明瞭な稜線を持つ。310は断面楕円形でほとんど稜線を持たない。断面を含め全体が被熱により赤変する。

311は胴上半部～基部にかけて残存している。断面紡錘形だが、両側縁はやや丸みを帯びている。裏面に若干の平坦面を残し、基部は緩やかに先細りして集束している。全体に被熱により赤変しており、裏面に黒色の付着物が存在する。

312は基部の断片で、節理に沿って裏面が剥落し、全体の四分の一程度が残存する。

独鈷石 (第403図313～317)

313は完形品である。長楕円形のプローションで、中段からやや上方に偏って明瞭な袈入が胴部全周する。断面は楕円形である。下端部には石斧の刃部を思わせる鋭角な稜線を持つ。全体に叩打整形に伴うあばた状の痕痕を残しているが、袈入部から上端にかけて表裏に原礫面に由来する平滑な面を残しており、本資料が扁平な川原石を素材としていることがわかる。全面が被熱により赤化している。

314は長軸一端を三分の一程度欠損するものと

みられる。長楕円形のプロポーシオンで、中段に明瞭な挟入が表面を除き全周している。また、挟入部の上下がわずかに左右に突出している。上端にはやや丸みを帯びた稜線を持ち、これと直交方向に走る線状の擦痕を残している。表面側の破断面に下方から数度の打撃を加えており、再生を試みた可能性がある。表面が被熱により赤化し、表面には煤と思われる黒色の附着物が存在する。

315は板状節理の棒状礫の長辺中段に挟入を持つものである。粗製の独鈞石とも解することができるため、掲載した。

316は胴部中段部分の破片である。全形を知り得ないが、挟入が胴部を全周し、それ以外の部分には入念な研磨が施されて光沢を生じている。複雑に切り合う破断面から、多方向から繰り返し打撃を加えて破砕していることがわかる。敲石への転用か、あるいは破壊・分割すること自体に意味があった可能性もある。

317は胴部と挟入部の境の小片で、錨状の突起が巡っている。

石冠 (第404図318)

無頭の石冠である。両端丸みを持つ半月形で、底面に反りを持つ。全体を平滑に研磨しており、両端部付近にそれぞれ4条の沈線を巡らせる。

岩版 (第404図319)

線刻を持つ軽石製品である。原礫を楕円形に整形して米字状の線刻を施し、さらに左右それぞれの線刻の末端を結ぶようにして弧状の線刻を巡らせている。遮光器土偶の顔面表現を簡略に表現したものとも解される。

垂飾 (第404図320～327)

320は異形の勾玉である。原礫を逆台形に整形して一側縁に2段の挟入を設け、二方向から貫通孔を穿っている。ヒスイとみられる緑色の石材を用いているが、著しく被熱して白化し、亀裂を生

じている。

321は勾玉である。ややいびつなプロポーシオンだが良好に研磨しており、一方向から穿孔している。表面に細かな亀裂が多く走っており、被熱している可能性がある。白い斑紋の入った緑色の石材を使用している。

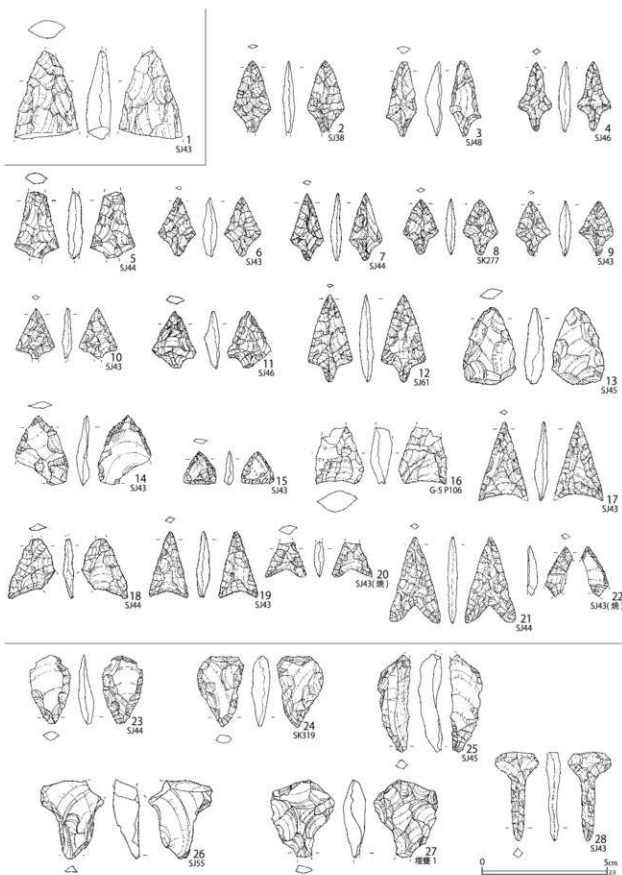
322は異形の玉である。扁平で、左側縁は緩やかなカーブを描き、下端は挟入する。上端は二叉に突出し、右側縁には二叉の突起を上下2段つくり出している。一方向からの貫通孔を穿つ。白色半透明の石材で、部分的に暗緑色の斑紋が入っている。

323は異形の勾玉である。丸みをおびた半円形で、垂直な右側縁の上方に1本、下方に2本の挟入を設け、長軸中央に一方向から穿孔している。ヒスイとみられる緑色の石材を用いているが、著しく被熱して白化し、亀裂を生じている。

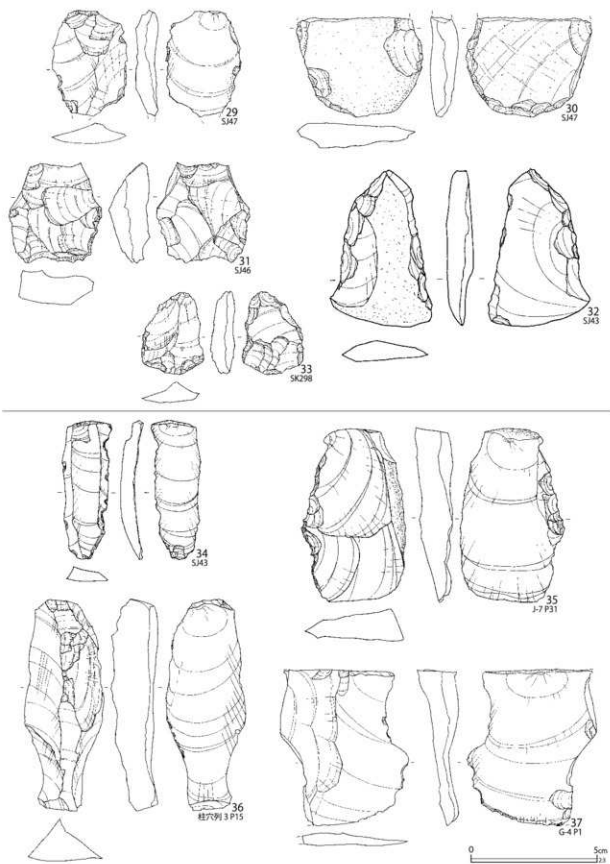
324・325は「ノ」の字状の玉である。棒状でごく緩やかなカーブを描いており、両端に二方向からの貫通孔を穿っている。324は両端を四角く面取りしており、325は上端を面取り、下端は破断面を残している。環状や弧状の装飾品が破断したため穿孔して紐で綴り合せたか、あるいはそのまま紐を通して着用したものであろうか。324は胎色半透明、325は青黒色の縞を持つ灰色半透明の石材を使用する。

326は水滴形の玉で、一端を剣先状にとがらせ、もう一端を二方向から穿孔している。全体が緑色の、ヒスイらしき石材を使用している。

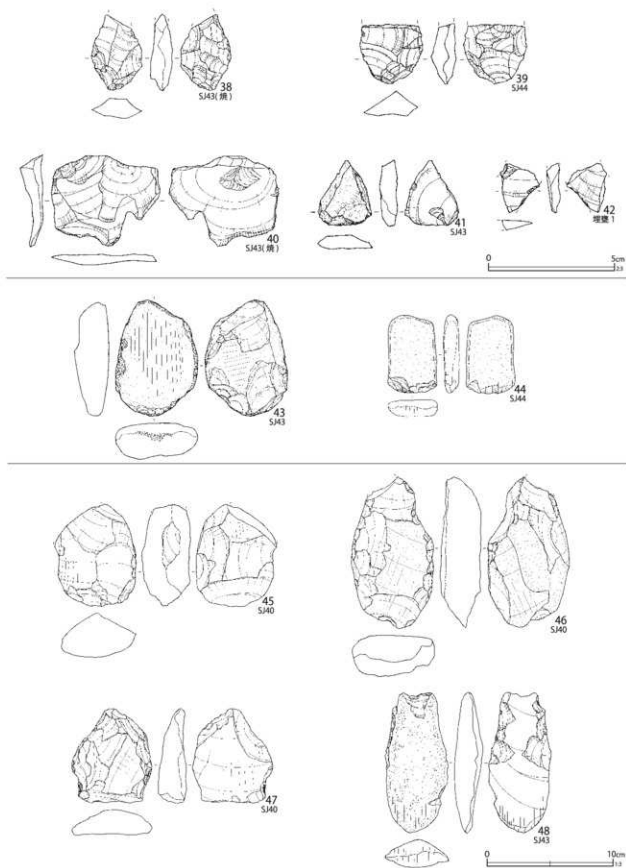
327も水滴形の玉で、右側縁のみ上方に2本、下方に1本の線刻を施している。長軸や上寄りに二方向から穿孔している。ヒスイとみられる緑色の石材を用いているが、著しく被熱して白化し、亀裂を生じている。



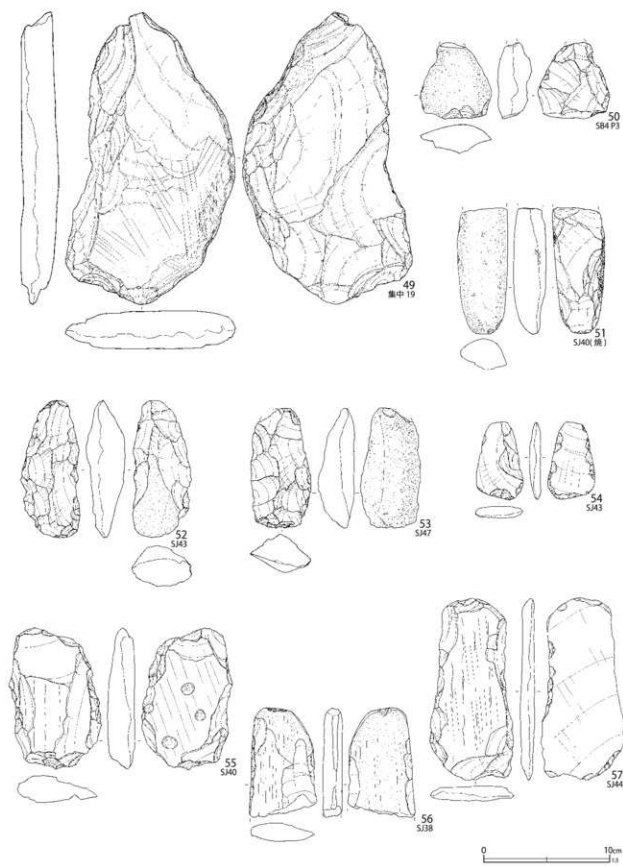
第373図 遺構出土尖頭器・石鏃・石錐



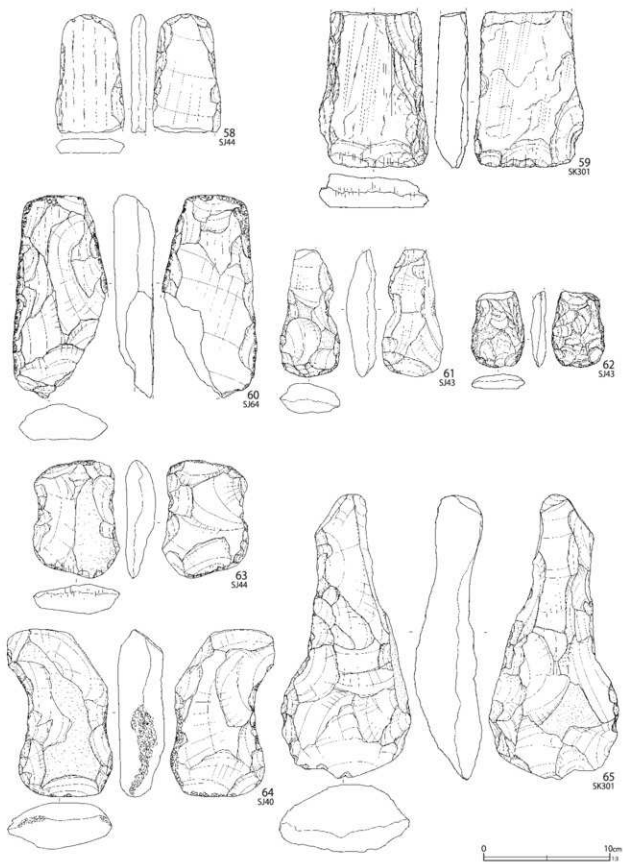
第374図 遺構出土スクレイパー・二次加工剥片



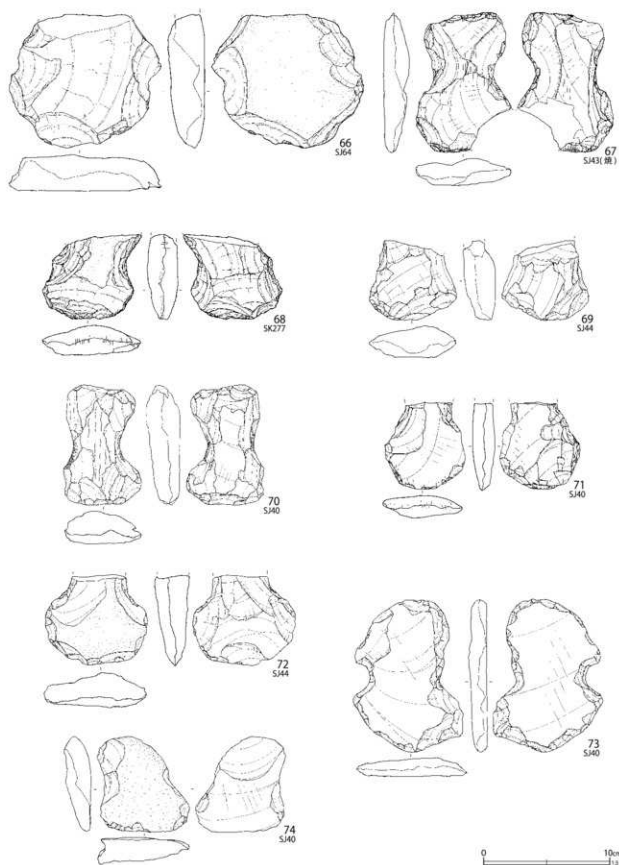
第375図 遺構出土二次加工剥片・礫器・打製石斧



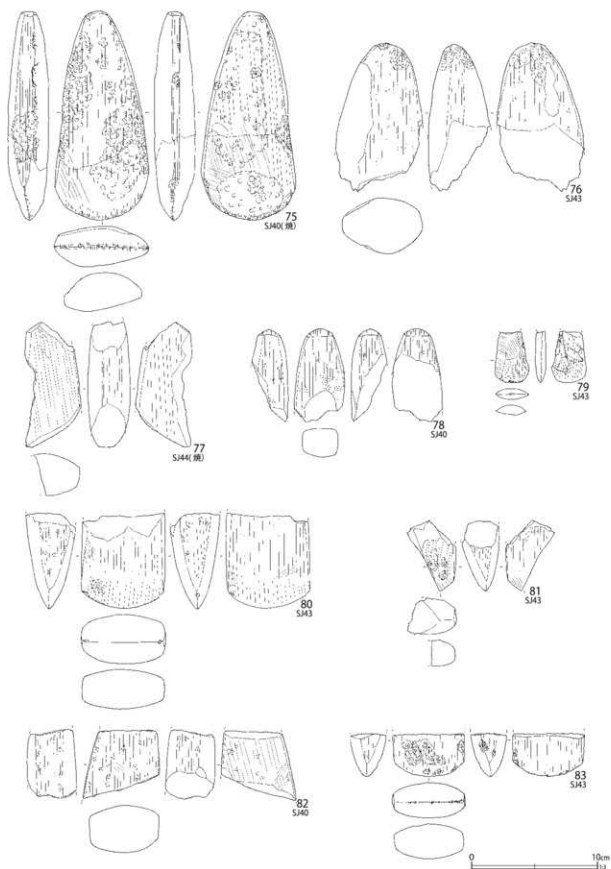
第376図 遺構出土打製石斧（1）



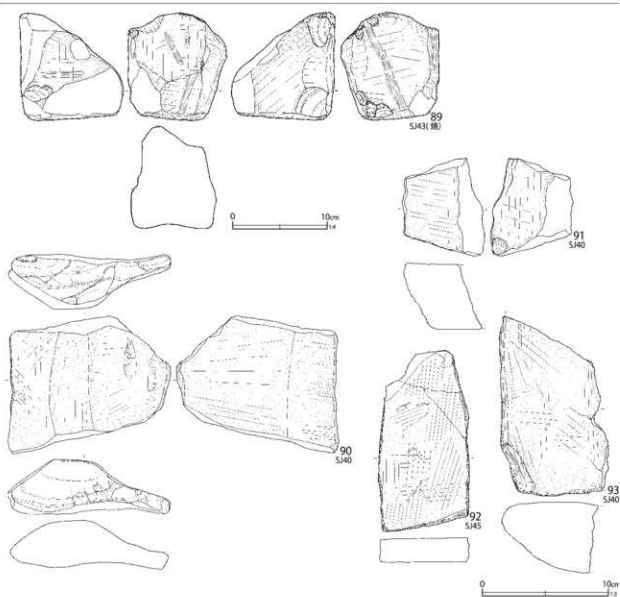
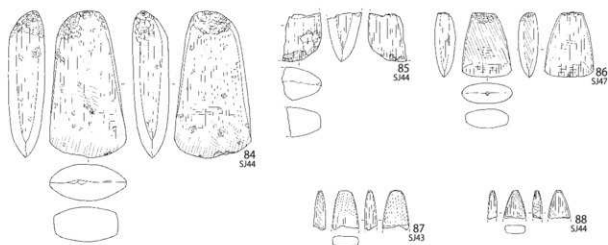
第377図 遺構出土打製石斧（2）



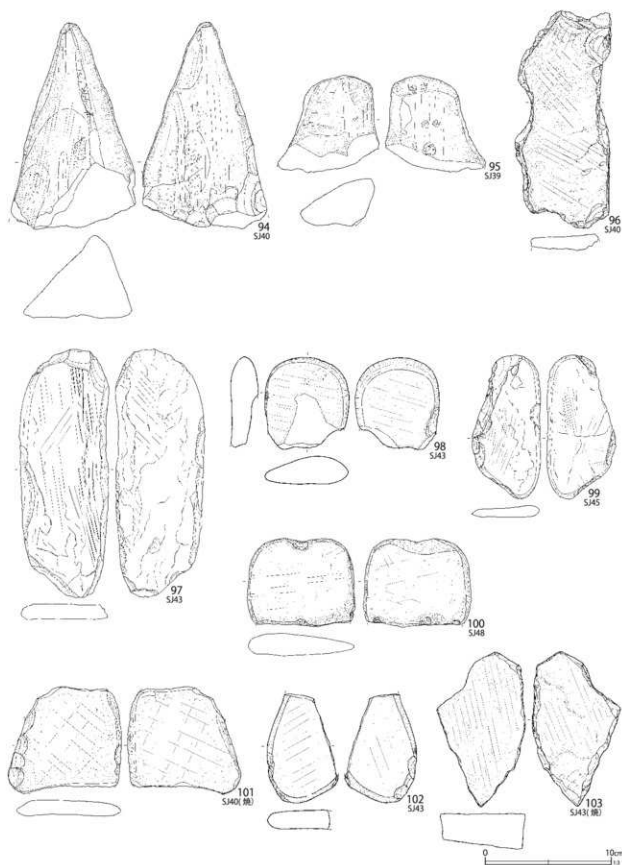
第378図 遺構出土打製石斧 (3)



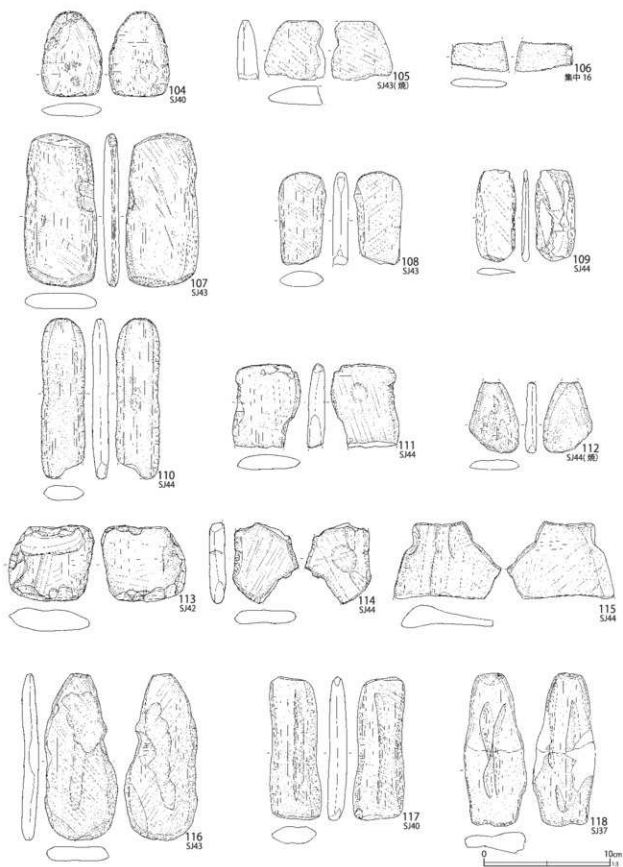
第379図 遺構出土磨製石斧



第380図 遺構出土磨製石斧・砥石



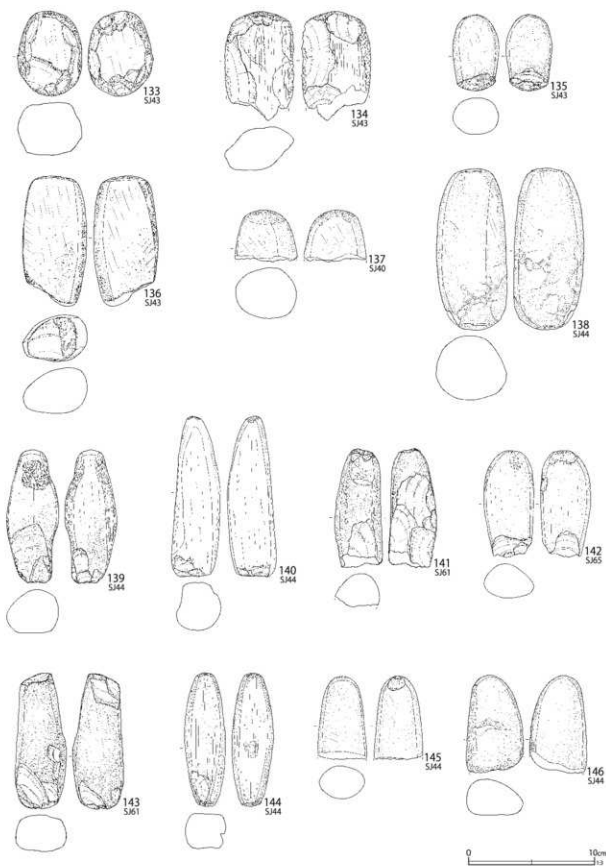
第381図 遺構出土砥石 (1)



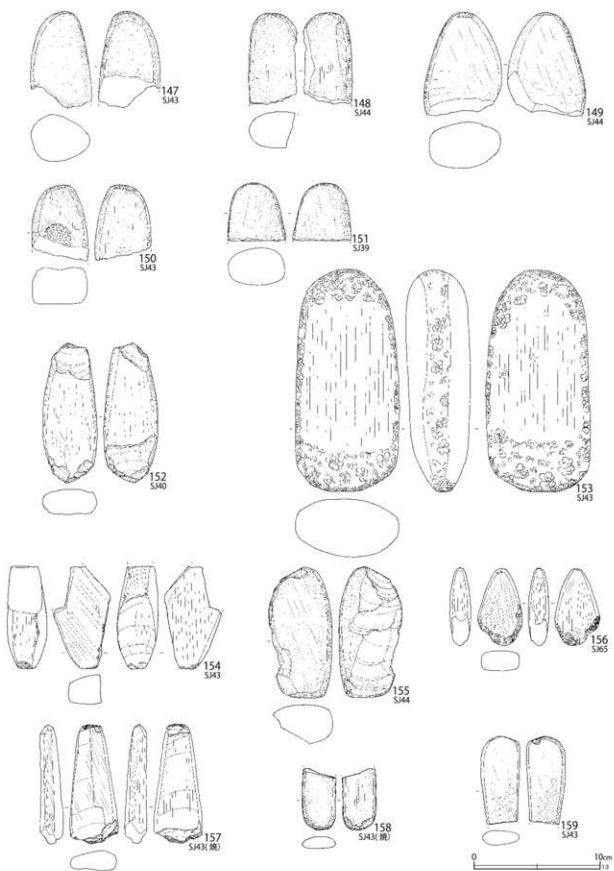
第382図 遺構出土砥石 (2)



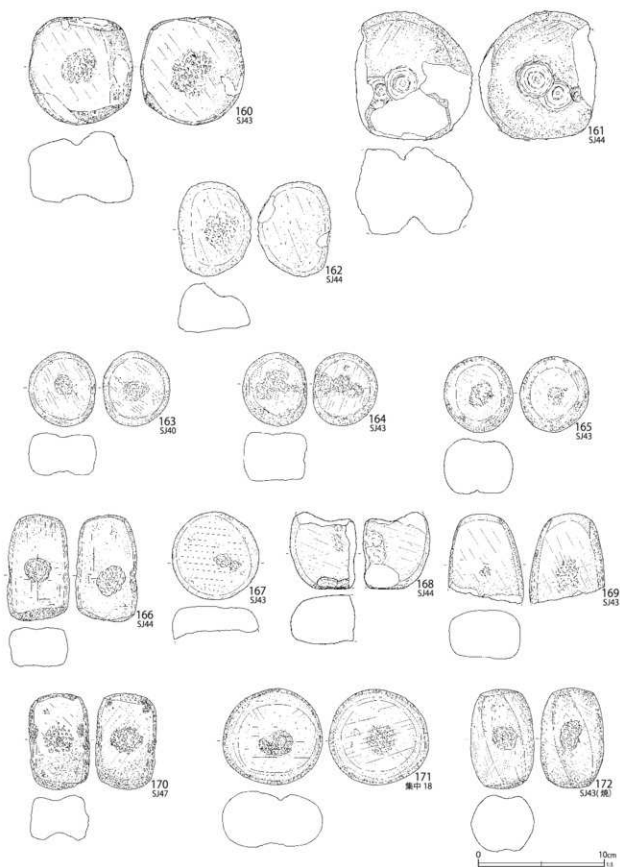
第383図 遺構出土砥石 (3)



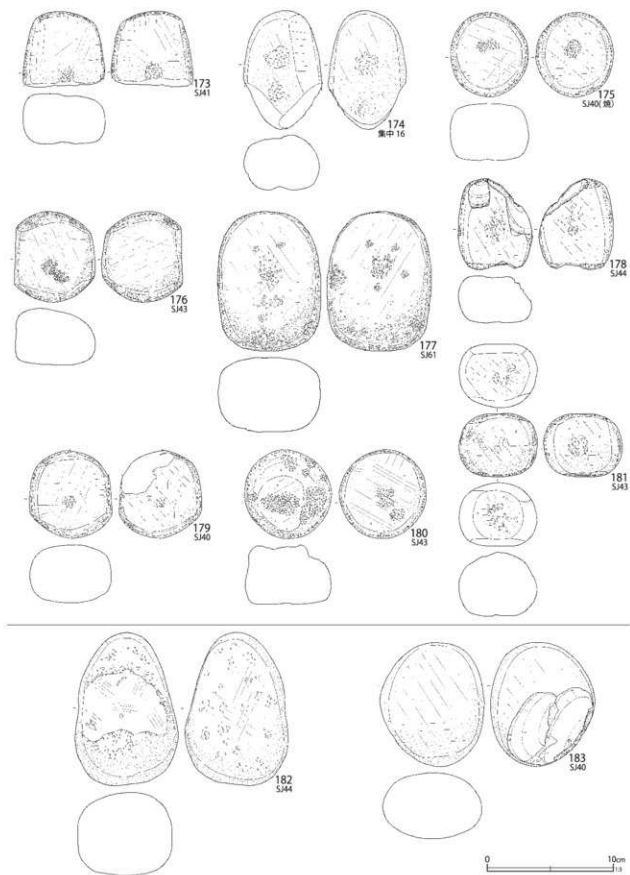
第384図 遺構出土敲石 (1)



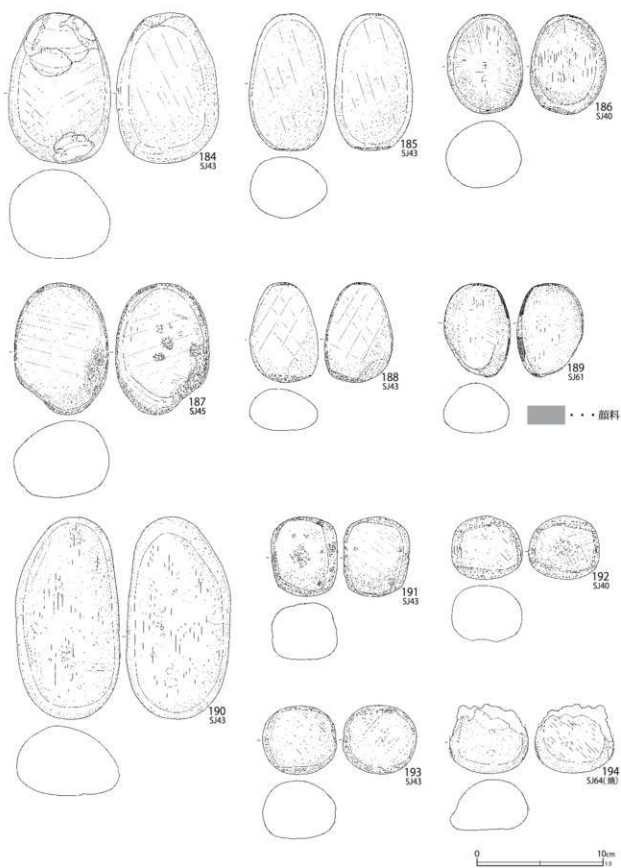
第385図 遺構出土燧石(2)



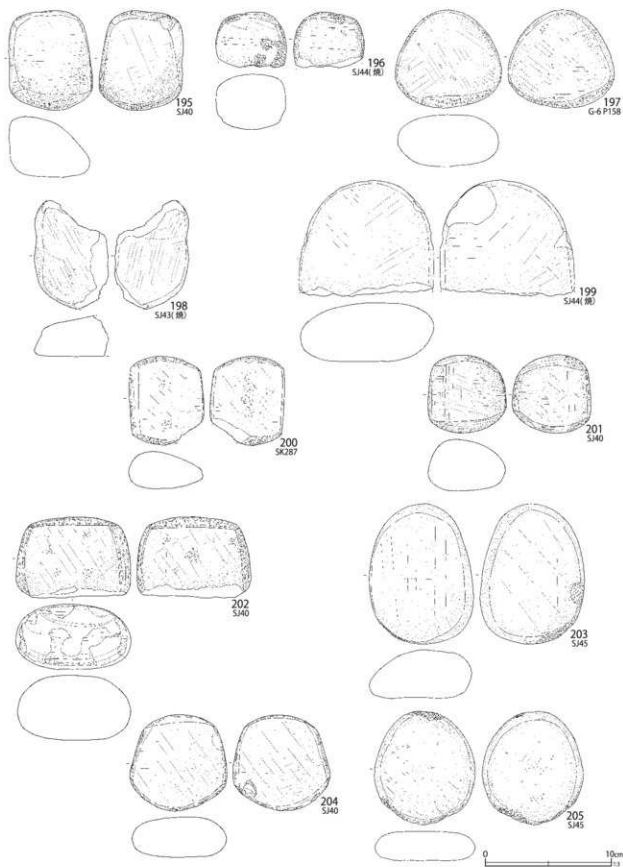
第386図 遺構出土凹石



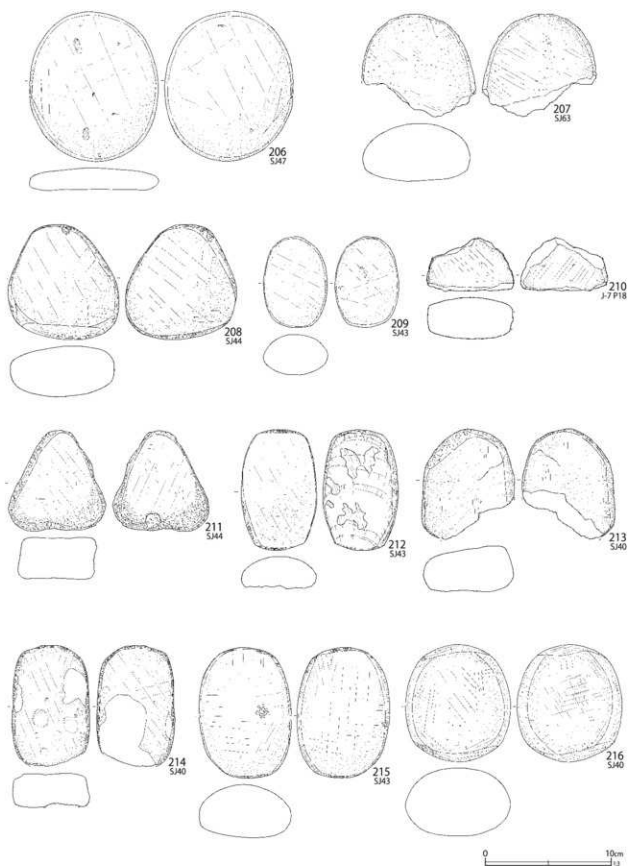
第387図 遺構出土凹石・磨石



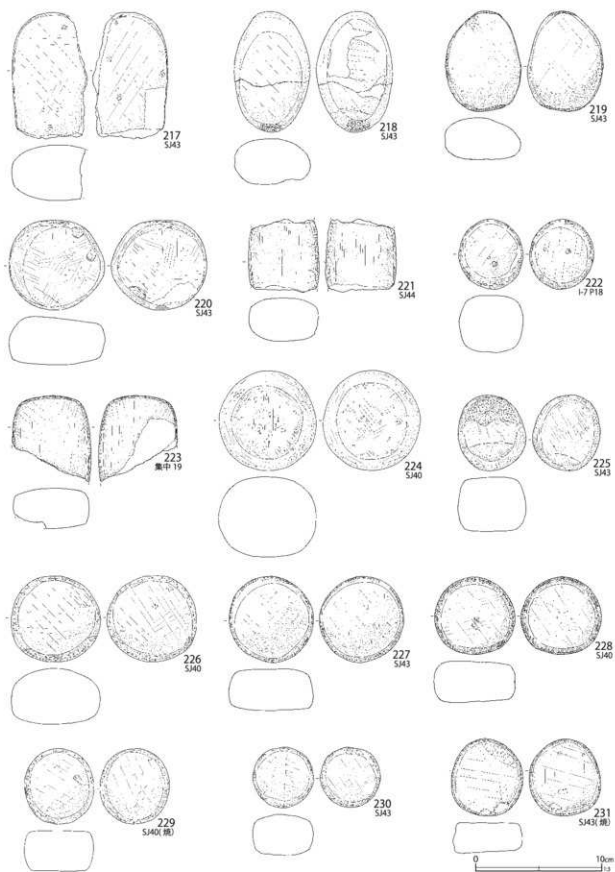
第388図 遺構出土磨石(1)



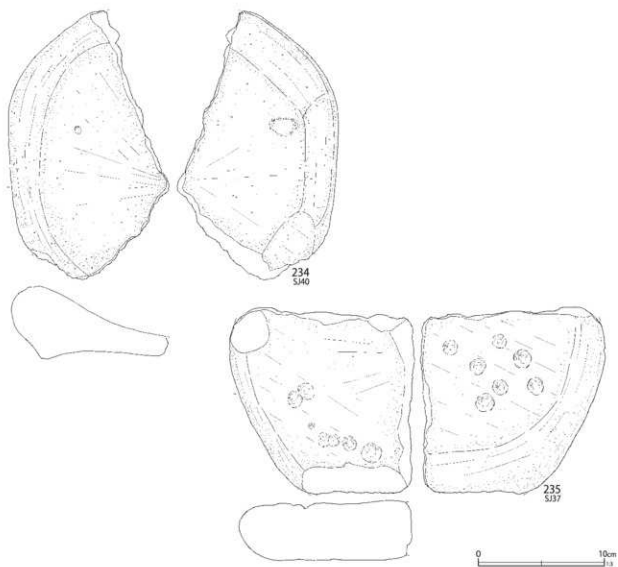
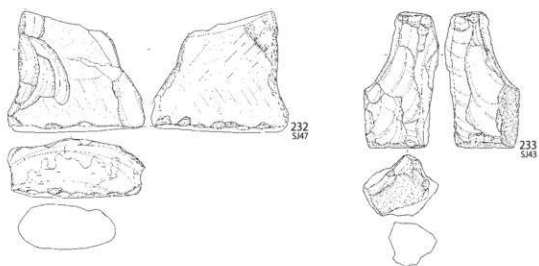
第389図 遺構出土磨石 (2)



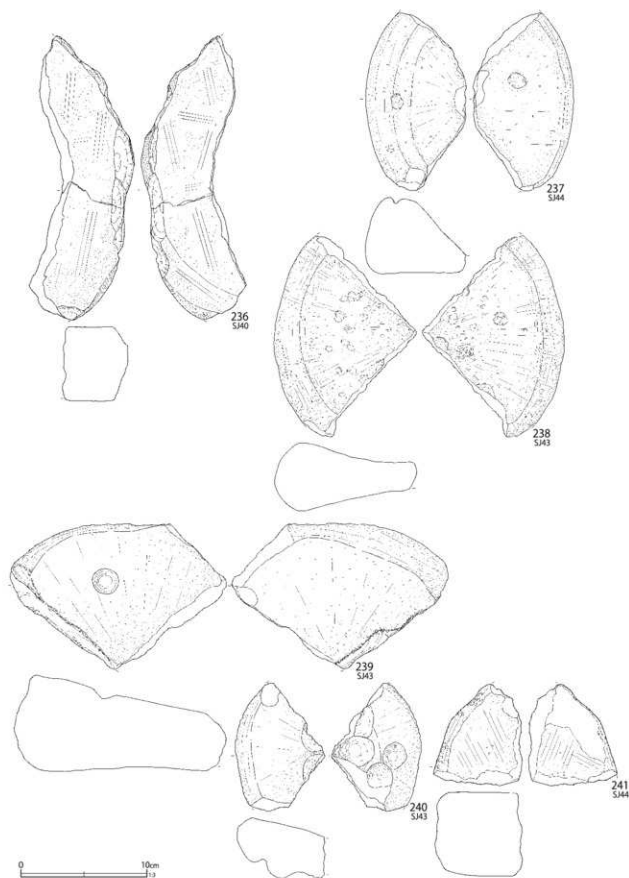
第390図 遺構出土磨石 (3)



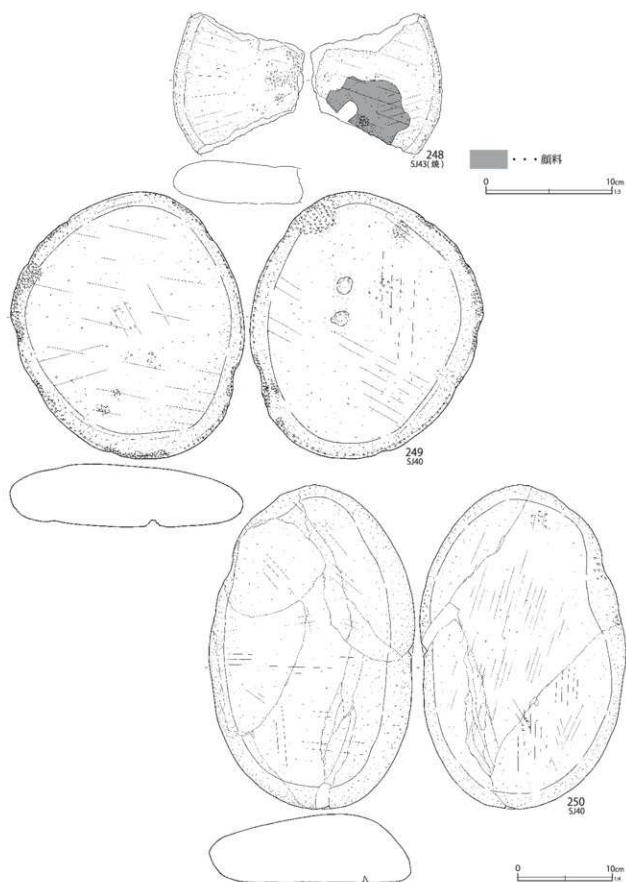
第391図 遺構出土磨石(4)



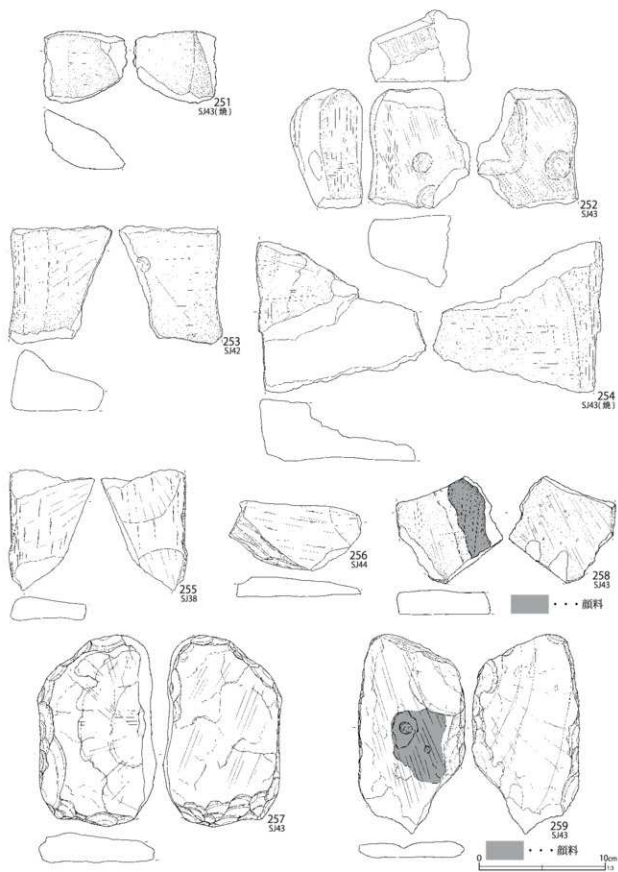
第392図 遺構出土スタンプ形石器・石皿



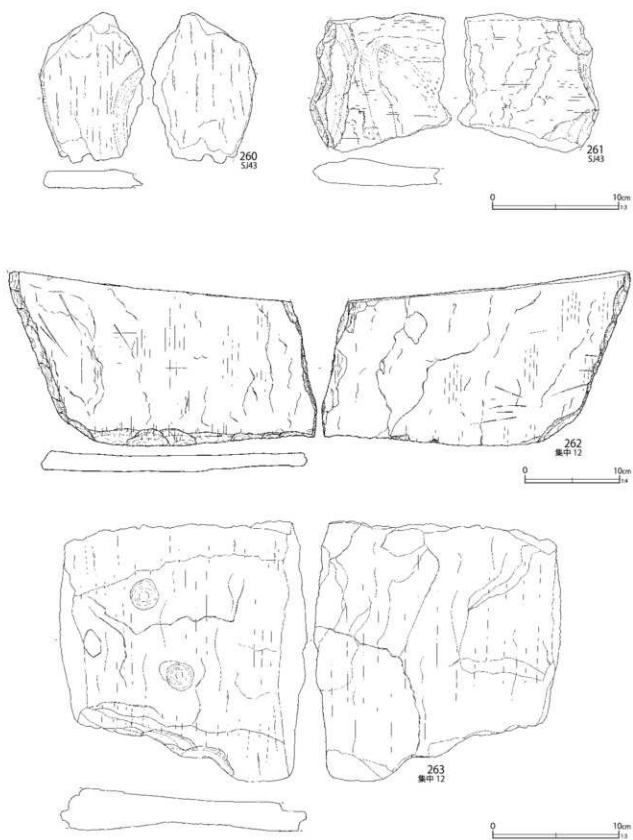
第393図 遺構出土石皿（1）



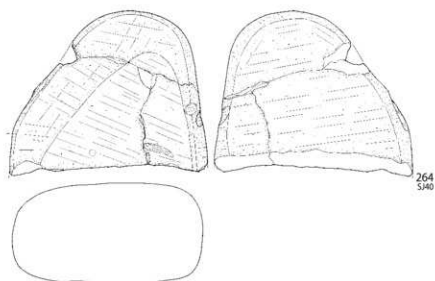
第395図 遺構出土石皿 (3)



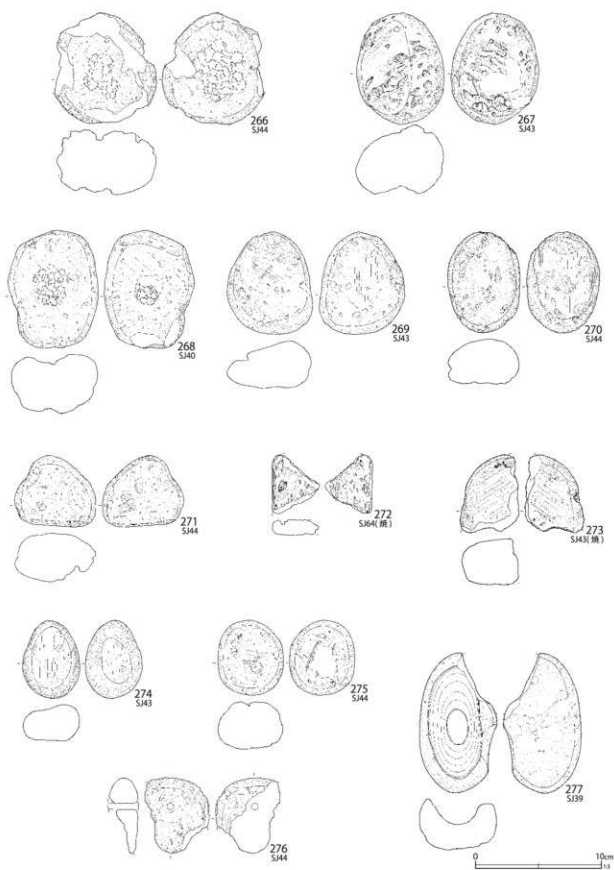
第396図 遺構出土石皿 (4)



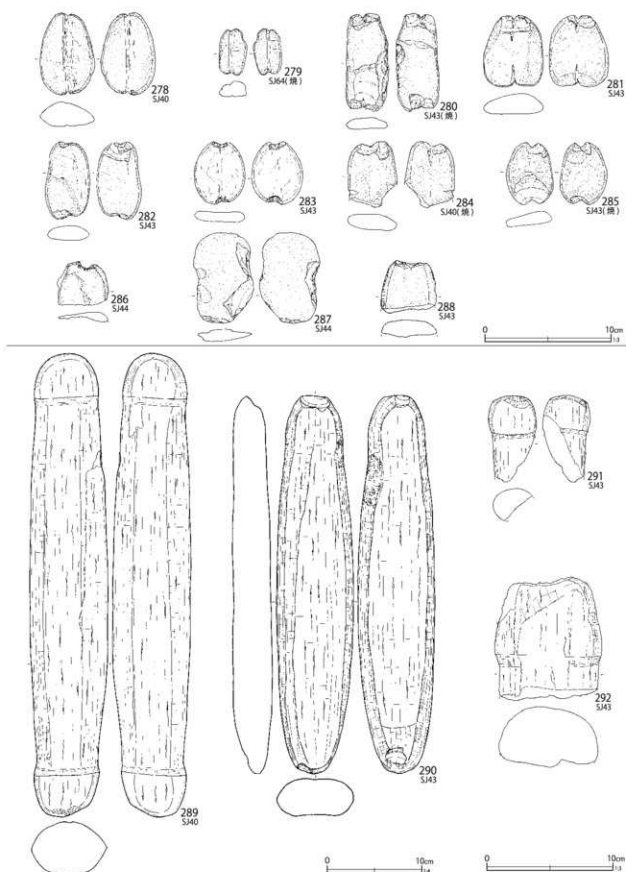
第397図 遺構出土石皿（5）



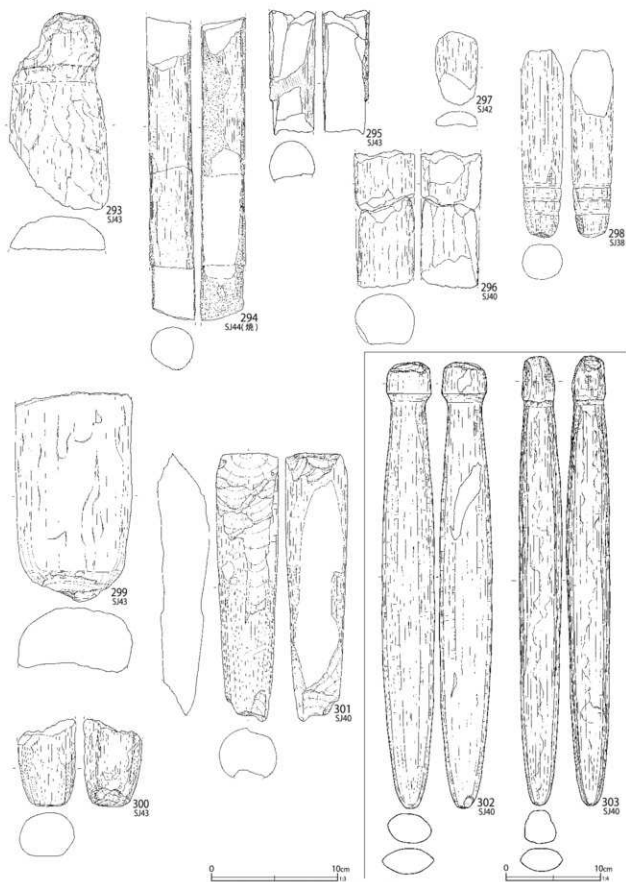
第398図 遺構出土台石



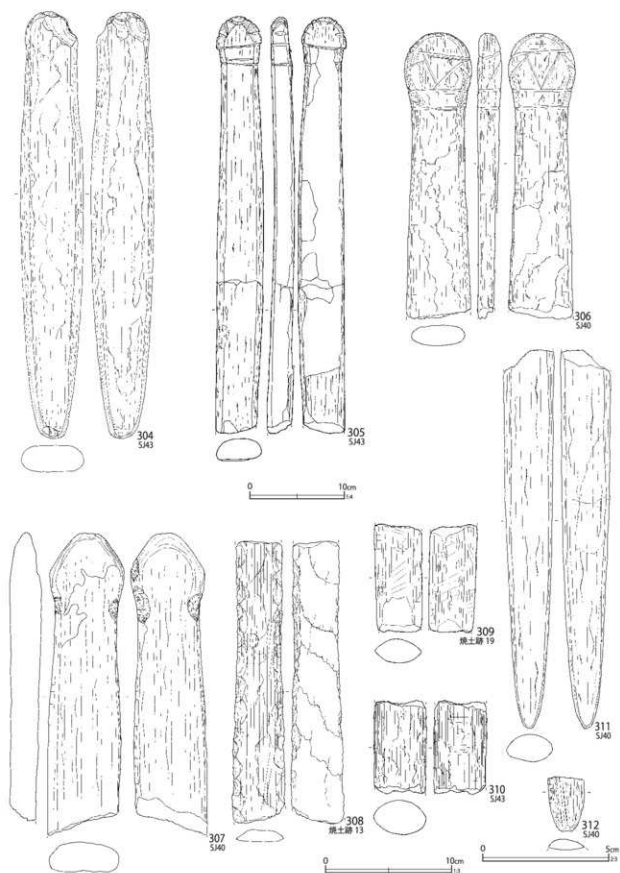
第399図 遺構出土軽石類



第400図 遺構出土石錘・石棒



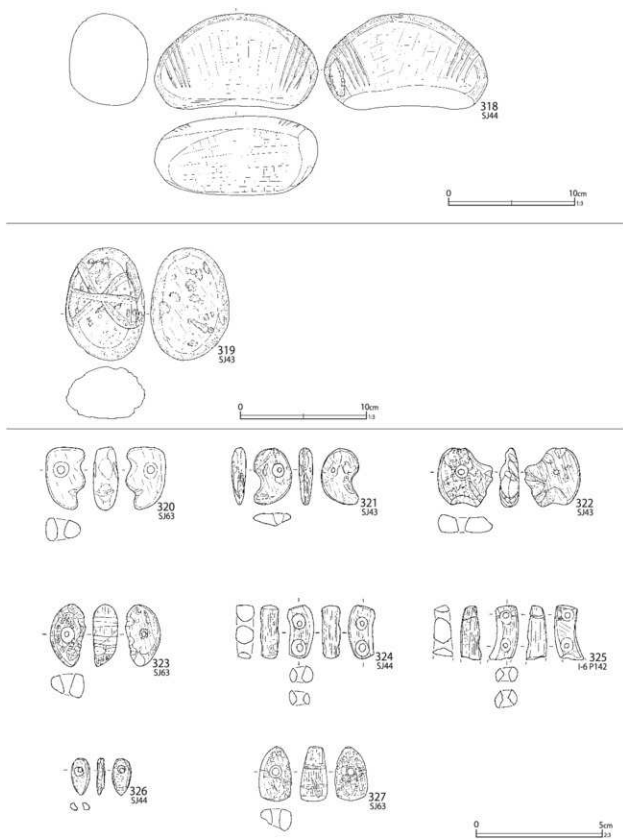
第401図 遺構出土石棒・石剣



第402図 道構出土石剣



第403図 遺構出土独貼石



第404図 遺構出土石冠・岩版・垂飾

第28表 遺構出土石器観察表(1)(第373～376図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	欠損	被熱	備考	図版
1	SJ43	尖頭器	ホルンフェルス	[3.5]	[2.6]	1.0	7.8	○			256-1
2	SJ38	石鏃	チャート	[2.8]	1.5	0.5	1.4	○			
3	SJ48	石鏃	チャート	3.0	1.3	0.7	1.5		○		
4	SJ46	石鏃	チャート	2.7	1.3	0.5	0.9				
5	SJ44	石鏃	チャート	[2.7]	1.8	0.6	2.3	○			
6	SJ43	石鏃	黒曜石	2.3	1.5	0.5	1.1				
7	SJ44	石鏃	チャート	2.7	1.3	0.4	1.0				
8	SK277	石鏃	チャート	2.2	1.4	0.4	0.8				
9	SJ43	石鏃	チャート	2.2	1.4	0.5	0.9				
10	SJ43	石鏃	チャート	[2.0]	1.5	0.4	0.8	○			
11	SJ46	石鏃	チャート	2.3	1.7	0.6	1.5				
12	SJ61	石鏃	チャート	3.4	1.8	0.6	2.1				
13	SJ45	石鏃	ホルンフェルス	3.1	2.1	0.8	4.9				
14	SJ43	石鏃	黒曜石	2.7	[2.1]	0.5	1.6	○			
15	SJ43	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.4	0.5				
16	G-5 P106	石鏃	チャート	[2.2]	1.9	0.8	3.3	○		未製品	
17	SJ43	石鏃	チャート	3.1	1.9	0.5	2.0				
18	SJ44	石鏃	チャート	[2.4]	[1.9]	0.4	1.3	○			
19	SJ43	石鏃	チャート	2.7	1.6	0.5	1.2				
20	SJ43(焼)	石鏃	チャート	[1.4]	1.6	0.4	0.6	○			
21	SJ44	石鏃	チャート	3.4	2.0	0.4	1.7				
22	SJ43(焼)	石鏃	黒曜石	[2.0]	[1.1]	0.4	0.5	○			
23	SJ44	石鏃	チャート	2.7	1.7	0.6	2.2				
24	SK319	石鏃	チャート	2.8	1.9	0.7	3.5				
25	SJ45	石鏃	チャート	[3.9]	1.4	0.9	3.2	○			
26	SJ55	石鏃	チャート	[3.1]	[2.5]	1.1	7.2	○			
27	埋篋1	石鏃	ホルンフェルス	[3.1]	2.6	0.9	6.1	○			
28	SJ43	石鏃	頁岩	3.5	1.7	0.6	1.8				
29	SJ47	スクレイパー	チャート	[4.2]	3.0	0.9	9.8	○			256-2
30	SJ47	スクレイパー	チャート	[4.0]	5.0	1.1	29.1	○			
31	SJ46	スクレイパー	頁岩	4.0	3.7	1.6	20.0				
32	SJ43	スクレイパー	安山岩	6.3	4.0	1.2	25.9				
33	SK298	スクレイパー	頁岩	3.3	2.4	0.9	6.2				
34	SJ43	二次加工剥片	頁岩	5.5	2.0	0.9	6.3				
35	J-7 P31	二次加工剥片	安山岩	6.9	4.2	1.5	39.8				
36	柱穴13	二次加工剥片	黒曜石	8.4	3.2	1.8	35.2				
37	G-4 P1	二次加工剥片	頁岩	6.2	[5.1]	1.7	38.8	○			
38	SJ43(焼)	二次加工剥片	チャート	[3.0]	2.0	0.9	4.6	○			
39	SJ44	二次加工剥片	チャート	[2.4]	2.5	1.0	5.7	○			
40	SJ43(焼)	二次加工剥片	チャート	3.6	4.3	0.9	9.1				
41	SJ43	二次加工剥片	黒曜石	2.6	2.2	0.7	3.8				
42	埋篋1	二次加工剥片	黒曜石	[2.0]	[1.6]	0.5	1.1	○			
43	SJ43	礫器	砂岩	9.3	6.5	2.8	208.7		○	磨石の転用	257-1
44	SJ44	礫器	チャート	6.2	3.8	1.3	52.8				
45	SJ40	打製石斧	頁岩	[8.1]	[6.4]	3.9	250.2	○			
46	SJ40	打製石斧	頁岩	[12.1]	6.5	3.3	301.1	○			
47	SJ40	打製石斧	頁岩	7.5	6.3	2.2	114.1				
48	SJ43	打製石斧	頁岩	11.2	5.0	2.8	116.1				
49	集中19	打製石斧	頁岩	23.2	13.5	3.0	1069.8		○	未製品	257-2
50	SB4 P3	打製石斧	頁岩	[6.1]	5.6	2.7	94.5	○			

第29表 遺構出土石器観察表(2)(第376～381図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
51	SJ40(焼)	打製石斧	頁岩	[10.1]	4.0	2.6	164.2	○		蔵石の転用	257-2
52	SJ43	打製石斧	ホルンフェルス	10.9	4.7	3.2	150.5				
53	SJ47	打製石斧	シルト岩	9.6	4.8	2.9	126.3	○			
54	SJ43	打製石斧	緑泥片岩	6.2	3.7	0.9	25.9				
55	SJ40	打製石斧	緑泥片岩	11.3	7.3	2.2	253.7				
56	SJ38	打製石斧	緑色片岩	[8.7]	5.3	1.5	119.6	○			
57	SJ44	打製石斧	紅れん片岩	14.5	6.6	1.2	147.2				
58	SJ44	打製石斧	絹雲母片岩	[9.5]	5.4	1.2	107.1	○		石皿の転用	258-1
59	SK301	打製石斧	緑泥片岩	[12.4]	8.6	2.6	430.3	○			
60	SJ64	打製石斧	緑泥片岩	[16.1]	[7.5]	3.3	557.8	○			
61	SJ43	打製石斧	安山岩	[10.1]	4.7	1.9	113.1	○			
62	SJ43	打製石斧	ホルンフェルス	[6.1]	4.2	1.2	35.7	○			
63	SJ44	打製石斧	黒色ガラス質安山岩	9.4	6.9	2.4	165.0				
64	SJ40	打製石斧	安山岩	13.3	8.3	3.7	498.4				
65	SK301	打製石斧	ホルンフェルス	22.7	10.3	5.4	1041.0				
66	SJ64	打製石斧	ホルンフェルス	[10.5]	12.0	2.9	479.6	○		T-7と接合	258-2
67	SJ43(焼)	打製石斧	頁岩	11.1	[7.5]	2.1	164.5	○			
68	SK277	打製石斧	ホルンフェルス	[6.8]	[7.8]	2.4	134.0	○			
69	SJ44	打製石斧	頁岩	[6.3]	6.8	2.5	118.8	○			
70	SJ40	打製石斧	緑泥片岩	9.6	6.1	2.6	170.2				
71	SJ40	打製石斧	ホルンフェルス	[6.9]	6.3	1.8	96.6	○			
72	SJ44	打製石斧	ホルンフェルス	[7.2]	8.1	2.8	155.3	○			
73	SJ40	打製石斧	緑泥片岩	12.1	8.7	1.5	199.1				
74	SJ40	打製石斧	安山岩	7.7	7.3	2.1	106.4				
75	SJ40(焼)	磨製石斧	緑泥片岩	16.6	7.5	3.2	532.2	○		T-7と接合	259-1
76	SJ43	磨製石斧	緑色岩	[11.8]	[6.9]	[4.9]	448.7	○			
77	SJ44(焼)	磨製石斧	砂岩	[10.0]	[4.5]	3.4	184.2	○			
78	SJ40	磨製石斧	砂岩	[7.4]	[4.0]	[2.8]	86.7	○			
79	SJ43	磨製石斧	頁岩	[4.0]	2.7	0.9	14.4	○			
80	SJ43	磨製石斧	砂岩	[7.6]	[6.6]	4.0	268.3	○	○		
81	SJ43	磨製石斧	頁岩	[5.6]	[3.9]	2.9	53.0	○			
82	SJ40	磨製石斧	安山岩	[5.5]	[6.1]	3.9	186.4	○			
83	SJ43	磨製石斧	砂岩	[3.4]	5.7	2.8	74.5	○			
84	SJ44	磨製石斧	蛇紋岩	11.7	6.0	2.9	340.8				
85	SJ44	磨製石斧	緑色岩	[3.8]	[3.1]	2.7	39.3	○			
86	SJ47	磨製石斧	蛇紋岩	5.1	3.9	1.6	51.6				
87	SJ43	磨製石斧	蛇紋岩	[3.1]	[2.2]	0.9	9.9	○			
88	SJ44	磨製石斧	頁岩	[2.3]	[1.8]	0.8	4.6	○			
89	SJ43(焼)	砥石	砂岩	11.4	10.4	10.9	1405.4		○		259-2
90	SJ40	砥石	砂岩	10.9	12.9	4.8	569.5		○		
91	SJ40	砥石	安山岩	[7.8]	[6.5]	5.3	323.0	○	○		
92	SJ45	砥石	安山岩	14.5	7.2	2.1	408.7	○	○		
93	SJ40	砥石	砂岩	[14.2]	[8.6]	5.9	900.4	○	○		
94	SJ40	砥石	砂岩	[16.3]	[9.9]	6.6	738.6	○	○		
95	SJ39	砥石	安山岩	[7.7]	8.0	5.2	148.8	○			
96	SJ40	砥石	砂岩	17.2	7.5	[1.4]	198.0	○	○		260-1
97	SJ43	砥石	緑泥片岩	19.5	7.1	1.4	325.8				
98	SJ43	砥石	砂岩	[7.3]	6.7	2.3	138.2	○	○		
99	SJ45	砥石	頁岩	11.5	5.5	1.0	70.7				
100	SJ48	砥石	砂岩	7.1	8.6	1.8	169.9				

第30表 遺構出土石器観察表(3)(第381～385図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	欠損	被熱	備考	図版
101	SJ40(焼)	砥石	砂岩	8.5	9.0	1.3	93.7	○	○		260-1
102	SJ43	砥石	砂岩	[8.7]	[5.7]	1.7	116.6	○	○		
103	SJ43(焼)	砥石	安山岩	12.4	7.0	2.9	289.8	○	○	石皿の転用	
104	SJ40	砥石	砂岩	6.8	4.8	1.1	43.9	○	○		260-2
105	SJ43(焼)	砥石	砂岩	[4.7]	[4.8]	1.7	37.9	○	○		
106	集中16	砥石	砂岩	[2.5]	[4.6]	0.7	11.2	○	○		
107	SJ43	砥石	砂岩	12.2	5.8	1.3	103.0	○	○		
108	SJ43	砥石	砂岩	[7.4]	3.8	1.2	45.9	○	○		
109	SJ44	砥石	頁岩	7.3	3.1	0.5	19.4	○	○		
110	SJ44	砥石	緑泥片岩	12.8	3.5	1.3	76.0	○	○		
111	SJ44	砥石	砂岩	[6.7]	5.4	1.4	55.7	○	○		
112	SJ44(焼)	砥石	砂岩	[5.7]	3.9	0.9	22.1	○	○		
113	SJ42	砥石	砂岩	6.1	6.8	1.9	92.2	○	○		
114	SJ44	砥石	砂岩	[6.5]	[5.3]	1.3	42.5	○	○		
115	SJ44	砥石	砂岩	[6.2]	[8.5]	2.0	82.4	○	○		
116	SJ43	砥石	緑泥片岩	13.2	5.8	1.3	92.6	○	○		
117	SJ40	砥石	砂岩	11.4	4.1	1.5	83.1	○	○		
118	SJ37	砥石	砂岩	12.2	4.9	2.8	143.3				
119	SJ37	砥石	砂岩	[11.9]	4.4	1.3	59.8	○	○		261-1
120	SJ44	砥石	砂岩	[7.6]	4.0	1.2	35.1	○	○		
121	SJ44	砥石	砂岩	[5.5]	[3.8]	1.1	22.8	○	○		
122	SJ46	砥石	砂岩	[9.5]	4.3	1.3	52.2	○	○		
123	SJ61	砥石	砂岩	[3.8]	[3.9]	0.8	11.8	○	○		
124	H-6 P119	砥石	砂岩	[4.7]	3.4	1.0	18.2	○	○		
125	SJ43	砥石	安山岩	10.3	[5.9]	1.8	122.6	○	○		
126	SJ44	砥石	砂岩	[6.9]	3.9	0.9	21.5	○	○		
127	SJ43	砥石	砂岩	[5.1]	[4.0]	1.2	26.1	○	○		
128	SJ44	砥石	砂岩	[4.3]	3.2	0.8	10.1	○	○		
129	SJ45	砥石	砂岩	9.0	3.5	1.1	30.4	○	○	G-6 P123と接合	
130	SJ46	砥石	砂岩	[9.7]	[4.4]	1.6	41.4	○	○		
131	SJ48	砥石	砂岩	[4.7]	2.0	1.1	10.2	○	○		
132	SJ40(焼)	砥石	磐石	[8.2]	5.9	3.7	73.2	○	○		
133	SJ43	砥石	緑色岩	6.8	5.1	4.2	222.6		○	磨石の転用	261-2
134	SJ43	砥石	緑泥片岩	[8.7]	5.5	3.5	229.0	○	○	磨石の転用	
135	SJ43	砥石	緑色岩	6.1	3.7	3.1	109.2				
136	SJ43	砥石	緑色岩	10.2	5.1	3.7	331.5				
137	SJ40	砥石	安山岩	[4.2]	4.9	4.3	118.7	○	○		
138	SJ44	砥石	砂岩	12.8	5.7	5.2	518.7	○	○		
139	SJ44	砥石	砂岩	10.7	4.1	3.5	185.0				
140	SJ44	砥石	緑色岩	12.8	3.9	4.0	286.9				
141	SJ61	砥石	頁岩	[9.4]	3.8	[2.7]	128.5	○	○		
142	SJ65	砥石	シルト岩	8.5	4.0	2.7	135.9				
143	SJ61	砥石	頁岩	10.8	4.0	3.1	196.8				
144	SJ44	砥石	緑泥片岩	10.7	3.3	3.0	166.2				
145	SJ44	砥石	砂岩	[6.6]	3.9	3.0	104.0	○	○		
146	SJ44	砥石	砂岩	[7.7]	4.5	3.0	151.0	○	○		
147	SJ43	砥石	安山岩	[7.8]	4.9	3.8	168.5	○	○		262-1
148	SJ44	砥石	砂岩	[7.3]	[3.9]	3.0	140.4	○	○	磨石の転用	
149	SJ44	砥石	安山岩	[8.3]	6.2	3.7	270.4	○	○	磨石の転用	
150	SJ43	砥石	安山岩	[6.1]	4.5	2.9	116.8	○	○	磨石の転用	

第31表 遺構出土石器観察表(4)(第385～389図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	欠損	被熱	備考	図版
151	SJ39	蔵石	安山岩	[4.7]	4.6	3.0	97.2	○		磨石の転用	262-1
152	SJ40	蔵石	緑泥片岩	11.1	4.3	2.1	163.5			磨石の転用	
153	SJ43	蔵石	安山岩	17.6	8.3	5.1	1191.4		○	磨石の転用 鏡面状	
154	SJ43	蔵石	頁岩	[8.2]	[4.5]	3.3	175.2	○		磨石の転用	
155	SJ44	蔵石	砂岩	10.4	5.1	3.2	218.2			磨石の転用	
156	SJ65	蔵石	蛇紋岩	6.1	3.6	1.6	50.7			磨石の転用	
157	SJ43(焼)	蔵石	砂岩	9.6	3.9	1.9	84.4			磨石の転用	
158	SJ43(焼)	蔵石	砂岩	[4.9]	2.7	1.0	21.5	○	○		
159	SJ43	蔵石	頁岩	[7.0]	3.1	1.2	47.2	○			
160	SJ43	凹石	安山岩	8.6	8.3	5.9	330.3				262-2
161	SJ44	凹石	安山岩	[10.2]	[9.3]	7.0	646.8	○			
162	SJ44	凹石	安山岩	7.6	5.8	4.2	212.3	○			
163	SJ40	凹石	安山岩	5.9	5.4	3.4	153.5				
164	SJ43	凹石	安山岩	5.8	5.1	4.0	168.8				
165	SJ43	凹石	安山岩	6.0	5.5	4.4	206.1				
166	SJ44	凹石	安山岩	8.5	4.9	3.2	179.5				
167	SJ43	凹石	安山岩	7.1	6.9	[2.8]	156.9	○			
168	SJ44	凹石	安山岩	[6.1]	[5.3]	4.0	187.6	○	○		
169	SJ43	凹石	安山岩	[7.1]	5.9	4.0	241.3	○			
170	SJ47	凹石	安山岩	7.6	4.8	3.6	194.0				
171	集中18	凹石	安山岩	7.6	7.9	4.4	379.4				
172	SJ43(焼)	凹石	安山岩	8.0	5.0	4.5	297.2				
173	SJ41	凹石	安山岩	[6.0]	6.5	4.0	266.8	○			263-1
174	集中16	凹石	安山岩	[9.4]	6.2	4.8	336.4	○			
175	SJ40(焼)	凹石	安山岩	6.8	6.2	4.6	293.3		○		
176	SJ43	凹石	安山岩	7.2	6.4	4.6	343.0		○		
177	SJ61	凹石	緑色岩	11.1	8.2	6.5	918.6		○	鏡面状	
178	SJ44	凹石	安山岩	7.2	5.8	4.1	249.6		○		
179	SJ40	凹石	安山岩	7.0	6.6	4.6	336.6	○	○		
180	SJ43	凹石	安山岩	7.1	7.0	5.0	332.5		○		
181	SJ43	凹石	安山岩	5.0	6.2	5.0	234.8				
182	SJ44	磨石	緑色岩	12.1	8.2	6.6	1078.5				
183	SJ40	磨石	砂岩	9.8	8.3	5.5	557.1		○		
184	SJ43	磨石	閃緑岩	11.9	8.1	7.3	994.0		○		263-2
185	SJ43	磨石	安山岩	10.9	6.2	5.0	535.4			鏡面状	
186	SJ40	磨石	砂岩	8.0	6.1	5.3	372.1				
187	SJ45	磨石	閃緑岩	10.5	7.5	6.1	767.2		○	鏡面状	
188	SJ43	磨石	安山岩	7.9	5.4	3.9	173.9				
189	SJ61	磨石	安山岩	7.4	5.3	3.9	239.5			赤色顔料	
190	SJ43	磨石	安山岩	16.0	8.3	5.6	1079.0		○		
191	SJ43	磨石	安山岩	6.3	5.2	4.6	223.6				
192	SJ40	磨石	安山岩	5.0	5.6	4.5	178.9				
193	SJ43	磨石	安山岩	5.4	5.9	4.6	199.2				
194	SJ64(焼)	磨石	安山岩	[5.5]	6.3	4.1	195.6	○			
195	SJ40	磨石	安山岩	7.9	6.7	4.9	415.3		○		264-1
196	SJ44(焼)	磨石	安山岩	[4.4]	5.6	4.5	144.1	○			
197	G-6 P158	磨石	安山岩	7.8	8.4	4.3	389.0				
198	SJ43(焼)	磨石	安山岩	[8.6]	[5.9]	3.4	205.9	○	○		
199	SJ44(焼)	磨石	閃緑岩	[9.2]	10.7	4.8	716.7	○	○		
200	SK287	磨石	安山岩	7.1	5.9	3.0	197.0	○	○		

第32表 遺構出土石器観察表(5)(第389～395図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
201	SJ40	磨石	安山岩	6.2	6.2	4.1	221.8				264-1
202	SJ40	磨石	安山岩	6.4	9.1	5.2	482.3				
203	SJ45	磨石	安山岩	11.2	8.3	3.9	530.7		○		
204	SJ40	磨石	安山岩	7.6	7.7	3.4	309.2				
205	SJ45	磨石	安山岩	9.0	8.1	2.7	285.2		○		
206	SJ47	磨石	安山岩	11.9	10.2	1.9	340.7		○		264-2
207	SJ63	磨石	安山岩	[8.2]	9.0	4.8	389.9	○			
208	SJ44	磨石	閃緑岩	9.1	8.8	4.4	511.4				
209	SJ43	磨石	安山岩	7.2	5.1	3.2	160.5				
210	J-7 P18	磨石	安山岩	[4.3]	[6.9]	3.5	129.1	○			
211	SJ44	磨石	安山岩	8.0	7.7	3.4	262.9				
212	SJ43	磨石	安山岩	9.6	6.0	3.0	252.9		○	表面鏡面状	
213	SJ40	磨石	安山岩	[8.8]	7.4	3.7	309.1	○			
214	SJ40	磨石	安山岩	[9.6]	6.3	2.8	220.6	○			
215	SJ43	磨石	安山岩	10.3	7.3	4.3	548.2		○	鏡面状	
216	SJ40	磨石	閃緑岩	9.3	8.3	5.4	664.5	○			
217	SJ43	磨石	安山岩	[10.1]	[5.9]	4.5	458.0	○		鏡面状	265-1
218	SJ43	磨石	安山岩	9.6	6.0	3.9	303.7	○			
219	SJ43	磨石	安山岩	8.0	6.0	3.3	203.9	○			
220	SJ43	磨石	砂岩	7.1	7.6	4.0	295.6				
221	SJ44	磨石	安山岩	[5.8]	5.6	3.5	212.4	○			
222	I-7 P18	磨石	安山岩	5.6	5.1	4.5	176.7				
223	集中19	磨石	安山岩	[6.9]	6.3	3.2	184.0	○			
224	SJ40	磨石	安山岩	8.0	7.8	6.4	596.1				
225	SJ43	磨石	安山岩	6.0	5.4	4.3	190.9				
226	SJ40	磨石	安山岩	6.7	7.1	4.5	303.1		△		
227	SJ43	磨石	安山岩	6.8	6.7	3.5	250.1			鏡面状	
228	SJ40	磨石	安山岩	6.2	6.4	3.3	212.7				
229	SJ40(焼)	磨石	安山岩	6.0	5.5	3.2	177.6				
230	SJ43	磨石	安山岩	4.8	4.8	3.3	100.8				
231	SJ43(焼)	磨石	安山岩	6.1	5.7	2.4	132.7				
232	SJ47	スタンプ形石器	砂岩	[9.6]	[10.9]	4.7	650.3	○	○		265-2
233	SJ43	スタンプ形石器	安山岩	10.7	6.0	4.9	319.9				
234	SJ40	石皿	安山岩	[21.3]	[12.9]	6.0	1519.6	○			
235	SJ37	石皿	安山岩	[14.8]	[14.7]	5.4	1695.7	○			
236	SJ40	石皿	安山岩	[22.4]	[8.3]	6.0	1370.5	○	○	被熱による黒色化	266-1
237	SJ44	石皿	安山岩	[14.1]	[8.0]	6.7	910.2	○			
238	SJ43	石皿	安山岩	[15.9]	[11.3]	6.0	857.2	○			
239	SJ43	石皿	安山岩	[11.5]	[17.2]	7.7	1690.4	○	○		
240	SJ43	石皿	安山岩	[10.1]	[7.1]	5.5	250.3	○			
241	SJ44	石皿	安山岩	[8.1]	[7.0]	6.8	514.5	○			
242	SJ47	石皿	安山岩	[9.5]	[13.8]	9.2	776.6	○			
243	SJ47	石皿	安山岩	[10.4]	[8.8]	4.8	513.2	○	○		
244	SJ43	石皿	安山岩	[6.4]	[7.9]	5.3	203.8	○			
245	集中18	石皿	安山岩	[15.5]	[17.7]	11.7	3298.1	○	○		
246	集中18	石皿	安山岩	[10.9]	[11.7]	7.8	1220.0	○			267-1
247	SJ43(焼)	石皿	閃緑岩	[12.6]	[9.2]	3.8	521.6	○			
248	SJ43(焼)	石皿	安山岩	[11.2]	[10.4]	3.5	446.7	○	○	赤色顔料	
249	SJ40	石皿	安山岩	28.3	24.7	6.7	6934.7	○			
250	SJ40	石皿	安山岩	34.5	21.8	7.7	7690.3	○			267-2

第 33 表 遺構出土石器観察表(6)(第396～401図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	欠損	被熱	備考	図版
251	SJ43(境)	石皿	安山岩	[5.8]	[6.6]	4.8	120.0	○	○		268-1
252	SJ43	石皿	安山岩	[9.6]	[8.1]	5.7	404.0	○	○		
253	SJ42	石皿	安山岩	[9.4]	[8.2]	4.9	372.4	○	○		
254	SJ43(境)	石皿	安山岩	[12.0]	[13.5]	4.9	601.2	○	○		
255	SJ38	石皿	緑泥片岩	[9.7]	[6.8]	2.2	151.6	○	○		
256	SJ44	石皿	緑泥片岩	[5.6]	[10.5]	[1.6]	131.9	○	○		
257	SJ43	石皿	絹雲母片岩	15.3	[9.4]	2.5	496.8	○	○		
258	SJ43	石皿	安山岩	[8.6]	[8.4]	2.1	194.4	○	○	赤色顔料	268-2
259	SJ43	石皿	緑泥片岩	[15.9]	8.5	1.4	268.5	○	○	赤色顔料	
260	SJ43	石皿	緑泥片岩	[12.0]	[8.3]	1.7	189.9	○	○		
261	SJ43	石皿	緑泥片岩	[11.1]	[11.2]	2.5	360.7	○	○		
262	集中12	石皿	緑泥片岩	[18.5]	[32.7]	2.6	1838.9	○	○		269-1
263	集中12	石皿	緑泥片岩	[20.6]	[19.7]	3.3	1579.3	○	○		268-2
264	SJ40	台石	安山岩	[13.1]	[15.8]	8.2	2374.1	○	○	被熱による黒色化	269-2
265	SJ40	台石	安山岩	[25.0]	[10.2]	[7.5]	1713.3	○	○		
266	SJ44	軽石類	軽石	[8.8]	[8.0]	5.3	121.2	○	○		270-1
267	SJ43	軽石類	軽石	8.9	7.0	5.5	88.8				
268	SJ40	軽石(凹石)	軽石	9.4	7.1	5.0	156.7				
269	SJ43	軽石類	軽石	8.1	6.8	3.8	64.1				
270	SJ44	軽石類	軽石	8.0	5.8	3.7	58.8				
271	SJ44	軽石類	軽石	5.7	6.4	4.0	45.4				
272	SJ64(境)	軽石類	軽石	[4.7]	[3.8]	1.3	4.8	○	○		
273	SJ43(境)	軽石類	軽石	[6.2]	[4.7]	3.7	31.9	○	○		
274	SJ43	軽石類	軽石	6.2	4.5	3.0	29.2				
275	SJ44	軽石類	軽石	6.0	5.2	4.2	51.2	○	○		
276	SJ44	浮子	軽石	[6.0]	[5.1]	[2.3]	16.9	○	○		
277	SJ39	軽石類	軽石	11.1	6.2	4.5	98.4	○	○	舟形	
278	SJ40	石鐘	頁岩	6.6	4.3	2.1	68.9	○	○		270-2
279	SJ64(境)	石鐘	砂岩	3.7	2.2	1.2	13.4		○		
280	SJ43(境)	石鐘	頁岩	7.8	3.5	0.9	36.9			SJ44と接合	
281	SJ43	石鐘	頁岩	5.7	4.7	1.7	68.3				
282	SJ43	石鐘	頁岩	6.2	3.5	1.2	34.4				
283	SJ43	石鐘	緑泥片岩	5.0	4.1	0.9	28.1				
284	SJ40(境)	石鐘	頁岩	[5.3]	[4.0]	1.3	35.8	○	○		
285	SJ43(境)	石鐘	砂岩	5.0	3.7	1.3	24.9				
286	SJ44	石鐘	頁岩	[3.5]	[4.1]	[0.8]	12.1	○	○		
287	SJ44	石鐘	頁岩	7.2	4.7	1.6	57.8				
288	SJ43	石鐘	頁岩	[4.2]	4.5	[1.4]	36.0	○	○		
289	SJ40	石棒	緑泥片岩	49.0	8.1	5.9	4194.4		○		271-2
290	SJ43	石棒	緑泥片岩	39.8	8.1	4.1	2306.8		○		
291	SJ43	石棒	緑泥片岩	[6.9]	3.8	2.9	95.2	○	○		271-1
292	SJ43	石棒	緑泥片岩	[9.8]	8.5	[4.8]	562.2	○	○		
293	SJ43	石棒	絹雲母片岩	[15.6]	[8.0]	[2.9]	473.2	○	○		
294	SJ44(境)	石棒	シルト岩	[23.9]	3.7	3.8	329.8	○	○	B区J-8の2点と接合	
295	SJ43	石棒	シルト岩	[9.9]	3.7	[3.2]	128.2	○	○	J-7と接合 被熱による赤色化	
296	SJ40	石棒	緑泥片岩	[11.0]	4.8	4.0	364.4	○	○		
297	SJ42	石棒	緑泥片岩	[5.8]	[3.4]	[1.4]	36.2	○	○		
298	SJ38	石棒	シルト岩	[14.9]	3.4	3.0	222.7	○	○		
299	SJ43	石棒	緑泥片岩	[16.5]	9.3	[5.2]	1348.1	○	○		
300	SJ43	石棒	緑泥片岩	[7.0]	4.6	3.8	171.4	○	○		

第34表 遺構出土石器観察表(7)(第401～404図)

番号	遺構名	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重量/g	欠損	被熱	備考	図版
301	SJ40	石棒	シルト岩	21.2	5.0	[4.3]	512.4	○	○	被熱による黒色化	271-1
302	SJ40	石剣	緑泥片岩	47.1	5.6	3.2	1202.7		○		271-2
303	SJ40	石剣	緑泥片岩	47.4	4.5	3.6	962.2		○		
304	SJ43	石剣	緑泥片岩	33.9	5.0	2.5	633.8		○		272-1
305	SJ43	石剣	緑泥片岩	[43.9]	4.9	2.8	911.6	○	○		
306	SJ40	石剣	緑泥片岩	[22.6]	5.3	1.9	338.4	○	○		272-2
307	SJ40	石剣	緑泥片岩	[24.0]	6.0	2.5	623.0	○			
308	埴土跡13	石剣	緑泥片岩	[22.2]	4.2	1.0	148.8	○			
309	埴土跡19	石剣	緑泥片岩	[8.6]	3.8	2.0	102.6	○			
310	SJ43	石剣	緑泥片岩	[7.5]	[4.2]	2.8	142.1	○	○		
311	SJ40	石剣	緑泥片岩	[30.0]	4.0	2.3	405.8	○	○		272-1
312	SJ40	石剣	頁岩	[2.2]	[1.4]	[0.4]	1.7	○			272-2
313	SJ40	独鈷石	安山岩	21.9	9.9	6.0	1545.2	○	○		273-1
314	SJ40	独鈷石	砂岩	[15.8]	11.5	4.3	1042.8	○	○		
315	SJ44	独鈷石	緑泥片岩	[10.1]	3.4	2.0	79.0	○	○		
316	SJ43	独鈷石	砂岩	[11.3]	[8.0]	[4.5]	382.6	○	○		
317	SJ44	独鈷石	砂岩	[3.0]	[3.6]	[2.0]	14.2	○	○		
318	SJ44	石冠	安山岩	7.6	13.0	6.3	837.6				
319	SJ43	岩版	軽石	8.9	6.2	4.0	72.3				
320	SJ63	垂飾(勾玉)	ヒスイ	2.5	1.6	1.0	4.9		○		273-2
321	SJ43	垂飾(勾玉)	ヒスイ	2.2	1.5	0.5	2.8				
322	SJ43	垂飾(勾玉)	ヒスイ	2.3	2.1	0.7	6.1				
323	SJ63	垂飾(勾玉)	ヒスイ	2.5	1.4	1.0	4.9		○		
324	SJ44	垂飾	滑石	2.1	1.1	0.7	2.3				
325	F-6 P142	垂飾	滑石	[2.1]	[1.2]	0.8	2.4	○			
326	SJ44	垂飾	ヒスイ	1.5	0.8	0.3	0.5				
327	SJ63	垂飾(玉状)	ヒスイ	2.1	1.3	1.1	4.4		○		

4. 骨製品 (第405・406図)

南盛土の遺構から出土した骨製品は、合計39点である。

第43号住居跡のものをもっとも多く、ヤス状刺突具や鏃、管状垂飾が出土している。第40・47号住居跡にも同様の器種が伴っている。筭は、第282号土壌にまともてみられる。第37号住居跡では、弭形製品と垂飾が出土している。

以下、器種ごとに記載する。なお、素材の同定は、中村賢太郎氏によるものである。詳細は、第35表を参照されたい。

1は、ヤス状刺突具である。表面に骨稜、裏面に髓腔がみられる。断面形は、扁平な三角形である。先端の両側縁を折り込むように加工し、非常に先鋭である。

2～10は、鏃である。4～6・9・10は鹿角製である。3以外は、器体部と茎部の区別が明瞭である。2・4～7・9は両者を区別する部分が段となり、8・10はくびれる。3は、基部が緩やかに窄まる。断面形は、2・3が楕円形、4～9が三角形である。4・8・10の基部に黒色の付着物が観察される。7は被熱により黒色化している。

11は、刺突具の先端部の破片と考えられる。

12は、弭形製品である。上部が欠損し、縦に割れている。短型で、中央の穿孔が貫通し、溝は下段寄りに位置する。

13～19は、筭である。すべて頂部の破片で、先端部を欠損している。15は、くびれにより頭頂部、頭部、棒状部に区画している。頭頂部に横方向の線刻を2条施している。頭部は十字形状に加工し、穿孔している。孔の下方にV字状の切れ込みが表裏面ともに観察される。棒状部にも2条の線刻が

みられる。16は、くびれにより、頭頂部と頭部に区別している。頭頂部の中央に穿孔している。右側の円形部に横方向の線刻が4～5条みられ、欠損している左側も同様であったと推測される。頭部は、三角形の区画に線刻している。17は、くびれにより頭頂部、棒状部、頭部に区画している。頭頂部と頭部の中央に穿孔している。それぞれ左側の円形部に横方向の線刻を4条ずつ施しており、欠損している右側も同様であったと推測される。頭頂部直下の棒状部にも横方向の線刻が3条みられる。18は、くびれにより、頭頂部と棒状部に区別している。頭頂部は十字形状に加工し、穿孔している。棒状部に3～4条の横方向の線刻がみられる。19は、くびれにより、円形の頭頂部もしくは頭部を作り出している。穿孔、線刻はみられない。

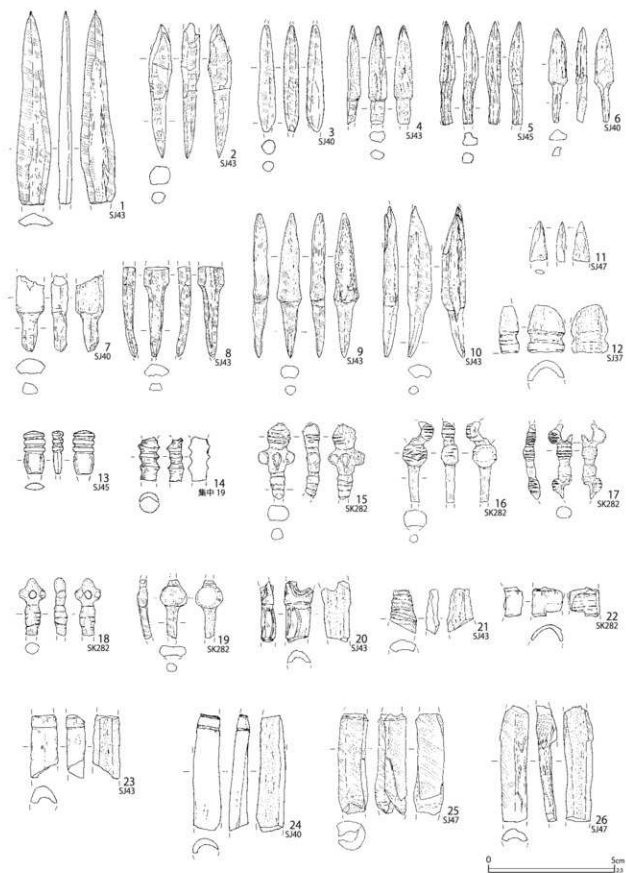
20～26は、管状垂飾である。20は、上部に穿孔している。その下の部位は、横方向の2条の線刻により区画し、その間を縦方向に線刻している。21は、横方向の線刻が4条みられる。22～26は、研磨による加工のみ施し、穿孔、線刻はみられない。25・26は研磨痕が顕著である。

27は、垂飾である。27は鹿角製で、頂部に穿孔している。

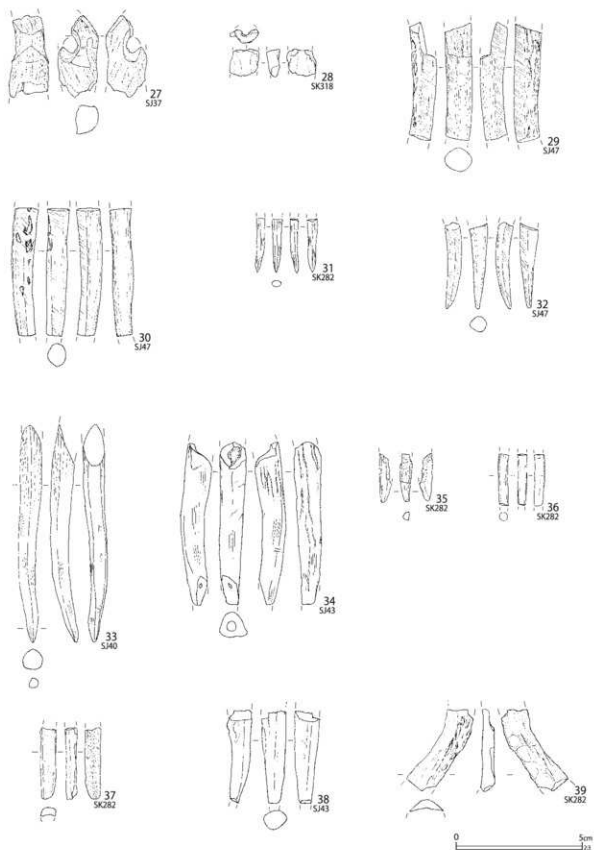
28は、穿孔品である。裏側が欠損しているが、菌冠の先端に穿孔がみられる。

29～33は、加工のある骨角である。主に縦と斜め方向に研磨している。29・30は鹿角製である。

34～39は、細部加工のない骨角である。装身具・刺突具の未製品と考えられる。39は鹿角の破片である。



第405図 遺構出土骨製品（1）



第406図 遺構出土骨製品(2)

第35表 遺構出土骨製品観察表 (第405・406図)

番号	遺構名	器種	素材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	図版
1	SJ43	ヤス状刺突具		[7.7]	1.3	0.5	4.1	368-1
2	SJ43	鏃		[5.4]	1.0	0.8	2.0	
3	SJ40	鏃		[4.2]	0.7	0.6	1.3	
4	SJ43	鏃	鹿角	[3.9]	0.8	0.5	1.0	
5	SJ45	鏃	鹿角	[4.1]	0.6	0.6	1.4	
6	SJ40	鏃	鹿角	3.8	0.8	0.5	1.0	
7	SJ40	鏃		[3.0]	1.1	0.7	1.2	
8	SJ43	鏃		[3.6]	1.0	0.6	1.1	
9	SJ43	鏃	鹿角	5.7	1.0	0.7	2.1	
10	SJ43	鏃	鹿角	[6.0]	1.0	0.5	3.2	
11	SJ47	刺突具		[1.6]	0.7	[0.4]	0.3	
12	SJ37内P7	弾形製品		[1.9]	1.5	[0.8]	1.1	
13	SJ45	筭		[1.7]	0.9	0.3	0.5	
14	集中19	筭		[1.7]	[0.8]	0.6	0.7	
15	SK282	筭		[3.0]	1.5	0.7	1.8	
16	SK282	筭		[3.2]	[0.9]	[0.7]	1.3	
17	SK282	筭		[2.9]	[1.0]	[0.7]	0.9	
18	SK282	筭		[2.6]	1.0	0.6	0.5	
19	SK282	筭		[2.3]	1.1	[0.6]	0.9	
20	SJ43	管状垂飾		[2.4]	1.1	[0.7]	1.0	
21	SJ43	管状垂飾		[1.8]	[1.1]	[0.6]	0.6	
22	SK282	管状垂飾		[1.2]	[1.2]	[0.8]	0.6	
23	SJ43	管状垂飾		[2.5]	1.1	[0.8]	1.4	
24	SJ40	管状垂飾		[4.6]	1.0	[0.8]	2.0	
25	SJ47	管状垂飾		[4.0]	1.2	1.3	5.3	
26	SJ47	管状垂飾		[4.9]	1.1	[0.8]	3.0	
27	SJ37	垂飾	鹿角	[3.3]	[1.6]	[1.6]	4.1	
28	SK318	歯牙穿孔品		[1.1]	[1.2]	[0.5]	0.5	
29	SJ47	加工のある骨角	鹿角	[4.7]	1.1	1.1	4.3	
30	SJ47	加工のある骨角	鹿角	[5.1]	0.9	1.0	4.3	
31	SK282	加工のある骨角		[2.2]	0.4	0.3	0.3	
32	SJ47	加工のある骨角		[3.4]	0.7	0.8	1.1	
33	SJ40	加工のある骨角		[8.7]	1.0	1.0	4.1	
34	SJ43	骨角		[6.4]	1.1	1.2	4.8	
35	SK282	骨角		[2.0]	0.5	0.5	0.4	
36	SK282	骨角		[2.0]	0.4	0.4	0.4	
37	SK282	骨角		[2.9]	0.6	[0.5]	0.8	
38	SJ43	骨角		[3.7]	1.0	1.0	2.7	
39	SK282	骨角	鹿角	[3.2]	[2.6]	[0.6]	1.6	

VI 調査のまとめ

長竹遺跡の調査区は堤防の拡幅工事に伴い、細長い帯状の調査区となっている。そのため環状盛土遺構の全容を解明することは不可能であるが、全体の5分の1の調査を行い、一定の成果を上げることができた。そこでこの成果を基に、南盛土の集落の変遷と「大形堅穴建物址」について総括する。

1. 集落の形成と住居跡の変遷 (第407図)

長竹遺跡南盛土からは、縄文時代早期末から遺物が出土したが、当該期の遺構は検出されなかった。長竹遺跡C区に当該期の遺構が検出されているので、活動範囲に入っているか、または、後期以降の遺構によって壊されたものと推察された。

調査の結果、集落の開始期は第Ⅰ期とした4軒の住居跡があった。第59・62号住居跡からは、後期前葉の堀之内2式土器が出土しており時期を特定できたが、第50・58号住居跡は出土遺物量が少ないため他の住居跡との重複関係と住居跡プランから推定した。後期前葉に属する合計4軒の住居跡は、互いに近接または重複しており、特に第59号住居跡は建て替えが行われていた。環状盛土内での位置は、環の内側からやや内縁側にかけて纏まっていた。また、円形プランを基調とし、入り口方向は内側(西側)に向いていた。

第Ⅱ期は7軒があったり、前時期よりやや増加していた。第41・49・60号住居跡は加曽利B式期の遺物が出土し、時期を確定できたが、その他の住居跡は、住居跡の重複と上層覆土中の出土遺物、住居跡プランから推定した。後期中葉に属する7軒の住居跡は大きく3グループに分かれていた。但し、第57号住居跡は方形プランであるので時期に疑問が残る。これらの内、第44c・49号住居跡は、第Ⅲ期まで継続する建て替え住居跡であった。環状盛土内での位置関係は、内縁側から中央にかけ

て纏まり、全体として外縁側へ範囲が拡張していた。住居跡のプランは、円形基調と「D」字型のタイプが構築されるようになった。また、入り口部は内側(西-南西)と外側(南-南東)を向くものの2種類に分かれていた。

第Ⅲ期は6軒があったり、前時期とほぼ軒数は平衡状態であった。すべての住居跡から曾谷式(高井東式)土器が出土し、後期後葉前半にあたる。合計6軒の住居跡は、大きく3グループに分かれ、第44b・49号住居跡は前時期からの建て替え住居跡であった。環状盛土内での位置は、中央に纏まっていた。住居跡のプランは「D」字型、隅円方形、方形の3形態が認められ、第Ⅳ期への移行期的な様相を示していた。また、入り口方向は第Ⅱ期と同様に内側(西-南西)と外側(南-南東)を向くものの2種類に分かれていた。

第Ⅳ期は7軒があったり、前時期と軒数は同じで集落内では隆盛期にあたる。すべての住居跡から後期安行式土器が出土し、後期後葉後半にあたる。

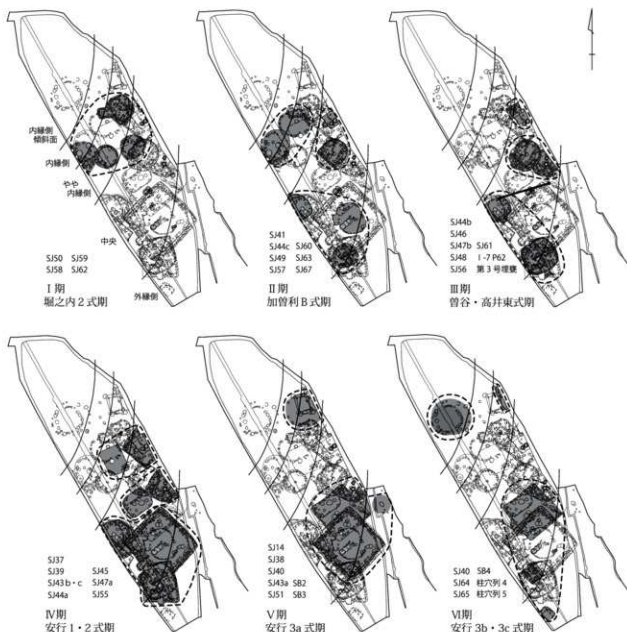
合計7軒の住居跡は大きく3グループに分かれ、「大形堅穴建物址」に属する第43号住居跡は、第44a・55号住居跡廃絶後短期間のうちに建てられたものと推察された。また、第44a・47a・55号住居跡は前時期からの建て替え住居跡であった。環状盛土内での位置関係はやや内縁側から外縁側にかけての最も高い場所に占地し、各住居跡ともかさ上げが行われた。特に、第43号住居跡は第Ⅴ期まで継続し、2回以上の拡張建て替えが行われていた。住居跡の入り口方向は、環の等高線方向に並行(南西)と環の外側(南)を向くものの2種類に分かれていた。

第Ⅴ期は住居跡5軒と掘立柱建物跡2棟があったり、住居跡は減少し、代わりに掘立柱建物跡が建てられていた。すべての住居跡から晩期安行3a式土器が出土し、晩期前葉前半にあたる。合計

5軒の住居跡は大きく2グループに分かれ「大型堅穴建物跡」である第43a号住居跡と第38号住居跡廃絶後、短期間のうちに第二の規模となる第40号住居跡が建てられたものと推察された。第40号住居跡は第43号住居跡を埋め立てて建てられており、同様に第Ⅵ期まで継続する建て替え住居跡であった。これとは別に第51号住居跡と掘立柱建物跡2棟が離れて建てられた。住居跡廃絶後に掘立柱建物跡は重複して建てられ、短期間に連続して建て替えられたものと推察された。環状盛土内で

の位置関係は内縁側からやや内縁側にかけての1グループと中央から外縁側にかけての1グループに分かれていた。入り口方向は環の等高線に並行（南西）と環の外側（南東）方向の2種類に分かれていた。

第Ⅵ期は住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟、円形の柱穴列2基があったり、集落の縮小期に入っていた。第40号住居跡は時期を確定できたが、第64・65号住居跡は他の住居跡との重複関係と層位的状況から推定した。第40号住居跡建て替えに伴うと



第407図 南盛土縄文時代後・晩期集落変遷図

考えられる晩期安行3b式土器が出土し、晩期前葉後半にあたる。これとは別に、掘立柱建物跡及び、柱穴列からは安行3c・3d式土器が出土しており晩期中葉に属すると考えられる。合計3軒の住居跡と掘立柱建物跡、円形柱穴列で、大きく3グループに分かれていた。第40号住居跡は入り口方向を変え、前時期から継続して建て替えられた住居跡であった。第64・65号住居跡は小形の住居跡で、柱穴配置、炉跡も不明瞭であった。これとは別に、前時期から引き続き重複して亀甲型の第4号掘立柱建物跡と円形柱穴列2基が離れて建てられた。円形柱穴列は重複しており、規模の大きなものから小さなものへ縮小していた。環状盛土内での位置関係は内縁側傾斜面の柱穴列グループとやや内縁側に位置する掘立柱建物跡、中央から外縁側に位置する3軒の住居跡に分かれていた。入り口部は外側（南東）から内側（南西）方向であった。

以上Ⅶ期に分けた住居跡等の変遷を後期前葉から晩期中葉にかけて集落の開始から収束までを提示したが、晩期中葉以降弥生時代中期に至るまでの土器が盛土包含層から出土している。当該期にあたる明確な遺構は検出されていないが、盛土遺構の内縁側傾斜面に多くの小形のピットが検出された。これらのピットの中には晩期中葉の遺物も出土している。また、ピットの掘り込み面が晩期前葉の包含層を切っている状況も確認された。例示としては積極性に欠けるが、晩期中葉以降の生活範囲として内縁側が使用された可能性も否定できない。

土壌との位置関係では、馬場小室山遺跡や井野長割遺跡のような大形土壌は検出されなかった。唯一後期前葉の袋状土壌である第326号土壌が径184mで最大であった。この土壌は第Ⅰ期住居跡群の北側に隣接していた。土壌墓との関係は、晩期の土壌墓群がA区北盛土内縁側傾斜面で纏まって検出されたが、南盛土においてはその延長線

上の内縁側傾斜面で、第310・311号土壌の2基が検出された。第37号住居跡上層から検出された第277号土壌は、晩期前葉から中葉にかけての埋葬土器と共に人骨が出土し、埋葬状況が明確な例として特筆される。また、中央から外縁側にかけての第43号住居跡内から検出された5基の土壌は住居跡の奥壁側に一部重複して検出された土壌であった。楕円形を呈し、第5号土壌からは後期安行式の深鉢形土器破片が出土した。土壌は本住居跡の床面を切って構築されており、住居跡廃絶時期との整合性はとれていないが、廃絶に伴う土壌墓の可能性が想定された。

この他、第Ⅲ期の第61号住居跡と第47b号住居跡との間で埋設土器を伴って検出された第3号埋葬、Ⅰ-7グリッドP53・62とその中間に位置するⅠ-7グリッドP40は列状の配置となり、住居跡間のグループを区画していたことが想定された。

集落全体の変遷については『長竹遺跡Ⅲ』のまとめで北盛土の住居跡等の遺構を踏まえたうえで改めて提示したい。

2. 「大形竪穴建物址」について（第408・409・410図）

第43号住居跡は南盛土で一辺12mをこえる最大規模の遺構で、遺構内から出土した遺物や付帯施設にも特異性が認められた。所謂「大形竪穴建物址」と呼ばれる遺構であった。

以下この呼称に従って、遺構の内容を他の類別と比較検討したい。本大形竪穴建物址は方形プランで主柱穴は4本、壁柱穴が周囲に廻り炉跡は主炉を中心として補助炉を2基付設し、三角形の配置となっている。また、入り口部は対ピットと周溝を「コ」の字状に張り出す構造となっている。遺物は、通有の土器・石製品と共に、耳飾りや土偶、動物形土製品、石棒、独鈷石、骨製品などの装飾品や祭祀用具が小・中形の住居跡と比べて多く出土した。また、大形竪穴建物址特有の出土遺物である異形台付土器、手燭形土器も出土した。さら

に本大形堅穴建物址は、2ないし3回の建て替えが行われており、継続期間も後期安行1式から晩期安行3a式まで長期間に及んでいる。

さらに、本大形堅穴建物址最大の特徴として床面全体に焼土が敷き詰められていた。焼土床面は最終段階に伴い、最終的には焼失によって廃絶されている。床面の主刃周辺や壁際の一部には敷物が敷かれていたことも判明した。また、焼土敷きの下層には、被熱による床面構土の赤色化も認められた。これらの状況から床面は建て替えに伴い随時張り替えられた可能性を指摘できる。

なお、本大形堅穴建物址廃絶後に構築された第40号住居跡は規模は一辺8m級であるが、内部施設や遺物の出土状況に多くの類似点が認められた。

それでは、本大形堅穴建物址について周辺遺跡の類例をあたり比較検討を加えたい。

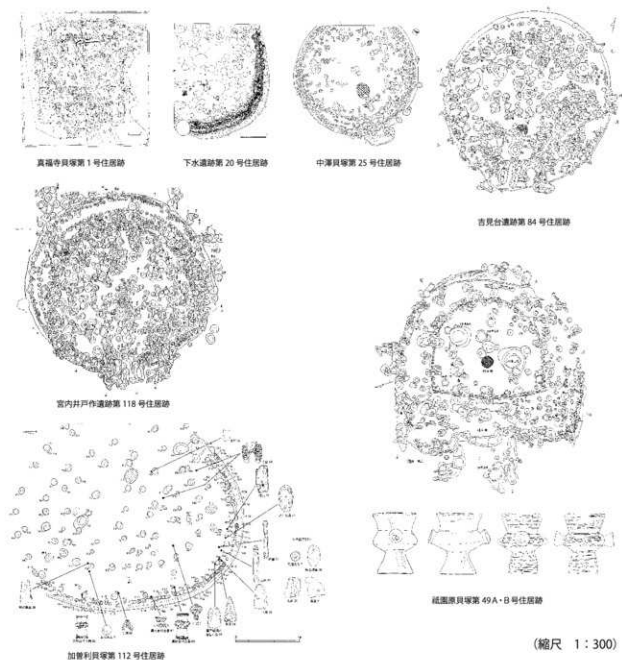
まず、大形堅穴建物址の立地とプランについてであるが、立地は南盛土南東側の台地縁辺部の環状盛土中央の最も標高の高い部分に位置している。開口部は北盛土との境界を示す窪地の北東側延長上で北西から南東方向に湾曲する支谷に向かって開口すると推定されるので、建物址は開口部付近に位置している。また中央窪地に向かっては南東側に面している。後期曾谷式の第44号住居跡、晩期安行3b式の第40号住居跡など、後期後葉から晩期前葉までやや大形の住居跡で一区画を占めていた。

大形堅穴建物址の立地について他の遺跡例にあたると、佐倉市宮内井戸遺跡第118号住居跡は、台地崖線上から南東部に向かって開口する先端部の景勝地に大形堅穴建物址が位置している。同市吉見台遺跡は3箇所に分かれて分布するが、第84号住居跡は北東側開口部の先端部の景勝地に位置している。また、市原市紙園原貝塚第49A・B・50号住居跡は台地西側に湾入する崖線端部の景勝地で、台地崖線方向の左側端部である。鎌ヶ谷市

中澤貝塚第25号住居跡は大柏川最上流部の舌状台地の東側崖線末端部のやや張り出した景勝地に位置している。我孫子市下ヶ戸宮前遺跡第6・11号住居跡は北西方向に突出した舌状台地の中央部に位置し、第14号住居跡は東側崖線開口部付近に位置している。この他、流山市三輪野山遺跡は、舌状台地崖線に向かう道路状遺構の左側に貫入する谷部正面（環状盛土遺構左側末端部）の景勝地に位置している。これらの大形堅穴建物址は後期中葉から晩期前葉にかけて建てられた建物址である。

他遺跡の立地と比較した結果、大形堅穴建物址の立地は、台地崖線末端部の一角を占め、纏まって建てられている例が多い。また、開口部付近の景勝地で南東側から北東側にかけて遷地する傾向が窺える。本遺跡ともおおむね符合することになり環状盛土遺構を含む大規模集落に一定の規範が働いていることが推察される。また、大形堅穴建物址が集落でも景勝地に建てられていることから、モニュメント的性格を備えた建物址としてとらえることも可能であろう。

大形堅穴建物址のプランについては、金子直行が長瀬町中野遺跡（金子2006）で晩期の住居跡と出土遺物をまとめている。それによると、晩期初頭を中心とした住居跡のプランは、4本主柱穴と入り口部をもつ安行系方形住居構造と、それとは系統を異にする柱穴配置が不明瞭な円形構造の2種類が併存し、それぞれの遺跡で異なった在り方を示しているとしている。その要因として、円形構造の住居跡が東北地方や山間地に多く分布することから、寒冷地に対応するための上屋葺き下ろし構造に対応し、安行系方形構造が主に大宮台地を中心とした台地部や低地部に分布することから、上屋を葺き下ろさず、壁立ち構造に対応するとする環境要因を挙げている。但し、円形プランでも安行系土器が出土しており、遺物からの差異は認められないとする見解を示している。



第408図 各地域の大形（竪穴）建物址

本大形竪穴建物址は、4本主柱穴で「コ」の字状張り出しの入り口部を設ける方形プランであるので安行系方形構造に属する。但し、壁面は浅いが立ち上がっており竪穴建物址である。大形竪穴建物址としての安行系竪穴方形建物址は県内には所在しないが、さいたま市岩槻区にある真福寺貝塚で検出された晩期前葉（安行3a式主体）の方形の住居跡は一辺8m級であるが、4本主柱穴で「コ」の字状張り出しの入り口部がもうけられ、

中央の主炉の周縁に複数の焼土跡が伴い、多量の耳飾りと土偶、土版、石剣、岩版、垂飾製品など祭祀的な性格を持つ特殊遺物が出土し且つ、住居跡の立地が北西側開口部北側先端部付近の盛土上部に位置していることから、本遺跡と同様の大形竪穴建物址と同様の性格を有する建物址として位置付けることが可能であろう。

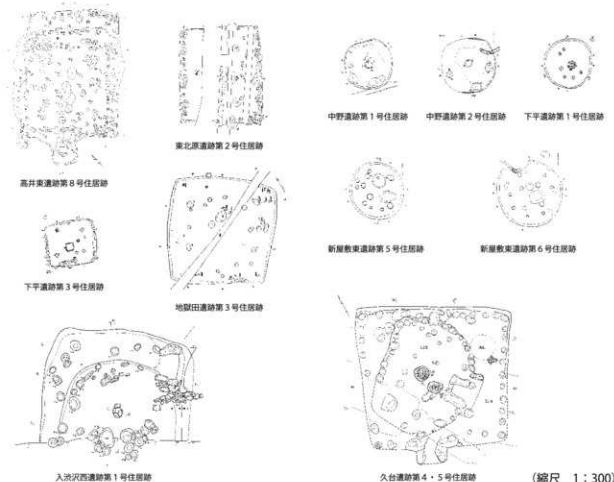
この他、安行系方形構造の住居跡は、桶川市高井東遺跡、伊奈町本上遺跡、さいたま市東北原遺

跡、蓮田市久台遺跡、久喜市地獄田遺跡、北本市宮岡氷川神社遺跡（一辺11m級の大形住居跡）など大宮台地を中心として分布している。一方金子も指摘しているように、長野町中野遺跡では隅円方形に近い円形プランとなる。小鹿野町下平遺跡では方形と円形プランの併存、深谷市新屋敷東遺跡では円形プランとなる。他県では、東北地方が主に円形プランを基調としているほか、長野県戸倉町円光房遺跡は円形プランとなる。群馬県月夜野町矢瀬遺跡第7号住居跡は、四隅突出型の特徴ある坪跡もつ住居跡であるが方形構造である。また、房総地域は、千葉市内野第1遺跡、我孫子市下ヶ谷戸宮前遺跡など方形ないしは隅円方形構造の住居跡も検出されているが、松戸市下水遺跡第20号住居跡など後期中葉から晩期にかけては大形竪穴建物址の多くが円形プランを踏襲するよう

である。この他、神奈川県横浜市葦蔵台遺跡では、後期中葉以降円形プランから隅円方形プランを経て後期後葉には方形プランへ移行し、晩期前葉末から中葉に入ると不正円形の不明瞭なプランに変化するようである。

このように大宮台地を中心とする地域には、安行系方形構造の住居跡が分布し、その周縁部には円形プランを主体とする遺跡や併存する遺跡が分布する状況が窺える。但し、土器型式との密接なつながりはつかめない状況である。

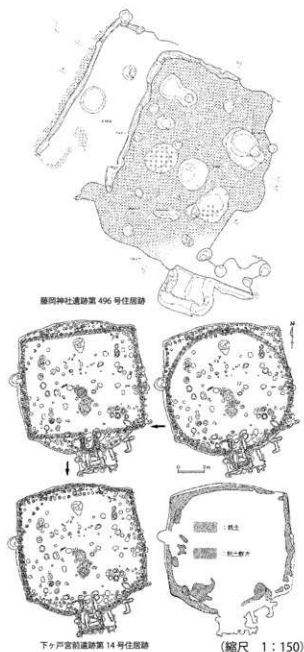
なお、長竹遺跡第44号住居跡のように後期中葉から後葉にかけての時期変遷のなかで建て替え住居跡のプランが「D」字型または、円形プランから隅円方形、方形へ移行する状況は多く認められるが、蓮田市久台遺跡第4・5号住居跡のように晩期前葉の方形構造の住居跡を縮小建て替えて



第409図 県内の縄文時代晩期前半における方形プランと円形プラン、折衷型住居跡・プラン変更住居跡

隅円方形に変更していたり、山間地の秩父市入波沢西遺跡の加曾利B1式の住居跡のように1軒の住居跡で外側を方形構造とし、内側を一段掘り下げて円形プランとする住居跡なども検出されている。集落内での円・方形の併存とは別に、住居跡構造としての折衷的な住居跡も少数であるが検出されていることは、単に地域的な相違や環境要因だけでとらえきれない複雑な状況を呈している。

次に焼土敷き床面が検出された住居跡である



第410図 藤岡神社・下ヶ戸宮前遺跡の焼失住居

が、栃木県栃木市藤岡神社遺跡の後期安行式の第496号住居跡から焼土敷き床面が検出されている。我孫子市下ヶ戸宮前遺跡第14号住居跡は安行2式から3a式の隅円方形プランの住居跡で、床面に被熱粘土層が1cmの厚さ（粘土が土器のように変化）で密着した状態で検出されている。また、時期は遡るが、春日部市神明貝塚遺跡の史跡整備に伴う発掘調査で、後期堀之内式期の住居跡から被熱赤化した床面が検出されている。（註1）

一般にこの時期の住居跡には壁周囲に焼土と灰の三角状の堆積層が多く検出されている。また、住居跡の防湿目的や、廃絶に伴う焼失によって、床面が焼土化する例は認められている。但し、本大形竪穴建物址や、下ヶ戸宮前遺跡のように粘土化した焼土が広範囲、且つ比較的均一に敷かれた状況を示す事例はまれである。

焼土敷き床面を検出する住居跡は大形竪穴建物址に限らず、藤岡神社遺跡のように一般的な住居跡からも検出されているので、特別な用途（儀礼的空間の場の創設）として限定することには無理がある。防湿効果など遺跡の環境条件などを含め総合的に検討して行く必要がある。

なお、分布については、検出例は少ないものの現利根川流域に分布している状況が窺える。

最後に内部施設と出土遺物についてであるが、「縄文時代後晩期における大形竪穴建物址の機能と遺跡群」（阿部2001）と題して阿部芳郎が関東地方の縄文時代後期中葉から晩期中葉の集落遺跡に検討を加えている。それによると、この時期の大形の竪穴構造の家屋の内部には、周縁炉が主炉を囲むように構築され、石棒や異形台付土器などの特殊遺物を用いた祭祀空間としてとらえている。また、集落内における占地の特異性と長期継続且つ、集中型の集落と関連付け、複数集団の統合的な祭祀空間として大形竪穴建物址が機能したとしている。

そこで、本大形竪穴建物址の各部施設と出土遺

物について改めて概要を述べる。

最終段階の内部施設は、入り口部が南東辺側住居内に入る状態で「コ」の字状のビット列配置となる。主炉は中央やや南側で中央軸線上に1基設けられ、4本の主柱穴間に2基の周縁炉（補助炉）が主炉と三角形を成す状況で配置されている。また主炉の周囲と主柱穴間の一部には炭化した敷物の痕跡が検出された。その下には焼土敷き床面がもうけられている。なお、焼土敷き床面は、全体では均一であるが、主炉の周縁部が最も厚く盛り上がった状態で、壁際にかけて薄く下がる状態で検出された。

遺物は、混入等が認められるが、いずれも最終段階の住居跡の床面付近に伴っていた。出土遺物は土器、土製品、石器、骨製品と多種にわたって出土した。出土状況は4本の主柱穴を結んだ炉跡を囲む方形区画より外側から壁際にかけて多く出土した。

炉跡4と炉跡8の間に位置して深鉢形土器2個体がつつまれた状態で出土した。また、入り口部周囲で纏まって出土した。耳飾りは北側コーナーから北西辺壁寄りにかけて、東側コーナーから南東辺壁寄りにかけて出土した。土偶、動物形土製品は、炉跡9の北側と北側コーナー寄り、南側コーナーから南東辺壁寄りにかけて出土した。

石棒、石剣は北側コーナーから1本、南側コーナー寄りから1本、北東・南東辺壁際寄り、P4脇寄りから欠損してそれぞれ1本ずつ出土した。石鏃は主炉奥側で2点が出土した。垂飾は北東辺壁際、南東辺壁際からそれぞれ1点が出土した。北西辺北側壁際からは、灰と焼土の盛り上がり層中から、2次焼成を受けた異形台付土器1点、磨石3点、石皿1点が纏まって出土した。最終段階の住居跡の焼失に伴う焼土・灰層で覆われていたことから、最終段階の住居跡に確実に伴う資料であった。骨製品についても焼失に伴う灰層から出土した。骨製刺突具は、北東辺壁際中央から3点が

並んで出土した。また、南東辺壁際から1点、南西辺入り口脇から2点出土した。

このほか覆土中から、早期から晩期中葉にかけての注口土器・台付鉢・鉢・深鉢形土器、土偶、異形土製品、耳飾り、土製円盤、手燭形土器、ミニチュア土器等の土製品、石鏃、二次加工剥片、打製石斧、磨製石斧、砥石、敲石、磨石、石皿、軽石類、石錐、独鈷石等の石器が出土した。また、焼土を含む床面及び直上からは、後期後葉から晩期前葉にかけての鉢・深鉢形土器等が出土した。

各遺物の出土傾向は、耳飾りが南東辺と北西辺の主柱穴と壁の間から間隔を開けて出土した。但し対では出土しなかった。土偶、動物形土製品は奥壁側の柱穴2・4周囲と、柱穴2・3の間から出土している。石棒類は北側コーナー寄りと西側コーナー寄り、柱穴2・3間から出土している。

全体の出土状況は、主炉を中心とし、主柱穴4本を結ぶ方形の内部空間からは希薄で、その外側から壁際に分布する。特に入り口側に深鉢等の容器類が纏まり、奥壁側に石棒、土偶等の祭祀用具が纏まる傾向が窺える。また、異形台付き土器は、北西辺北側壁際で石皿、磨石とセットで出土している。

内部施設は本大形竪穴建物址と類似する建物址例で方形プランと円形プランの相違はあるが、佐倉市吉見台遺跡第84号住居跡が円形プランの8本柱穴で炉跡が3基設けられている。同一建て替え住居跡で時期は後期中葉加曽利B式から晩期前浦式まで継続している。

千葉市加曽利貝塚第112号住居跡は楕円形プランで4列の壁柱穴配置となり、周縁炉が5基設けられている。加曽利B式の異形台付土器3点、石棒、石皿等が壁際から出土している。

鎌ヶ谷市中澤貝塚第25号住居跡は円形プランで6本柱穴の建て替えの大形竪穴建物址で、周縁炉が2基設けられ、本大形竪穴建物址と同じく3角形の配置である。時期は安行2式である。

市原市祇園原貝塚第49号住居跡は「D」字形プランの拡張住居跡で、5ないし6本柱穴である。炉跡は中央に1基設けられており北壁側中心に15cmの厚さで焼土が堆積し、住居跡内から2点の異形台付土器が出土している。時期は後期中葉加曾利B3式から後葉安行1式が中心となる。

周辺遺跡の大形竪穴建物址との比較検討から、方形と円形プランの相違にかかわらず主炉と周縁炉との配置の類似性が認められた。また、遺物は、祭祀関連遺物、特に異形台付土器や石棒等の祭祀関連特殊遺物が多く出土するなどの類似点も認められた。これらのことから、継続期間や占地の特異性など総合的に解釈して、阿部氏の指摘するように、屋内共同祭祀・儀礼空間としての場として使用された可能性が高まったと言える。但し、複数集団との関係については、遺物の種別や出土状況を詳細に検討していく必要がある。

註 1 春日部市教育委員会の御教示による。

3. 関東地方中西部の中央窪地型集落跡にみる諸属性と地域性

環状盛土や環状貝塚に代表される中央窪地型の集落の発掘調査で検出された諸事象については、第Ⅱ章3で略述した。これらを東関東一帯の大まかな地形区分ごとにまとめたのが第36・37表である。

ほぼ悉皆に近いかたちで調査を行った遺跡がある一方で、調査例数が少ない内容がほとんど明らかにされていない遺跡では今後項目が追加される可能性もあろう。また、調査成果が未報告である故の遺漏も存在しよう。

不完全なデータであることを前提にせざるを得ないが、それでも興味深い偏りを指摘することができる。

例えば、低地包含層や水場遺構、さらには谷の埋め立てといった低地経営に関わる事象は、大宮台地に特に濃密に分布している。これは集落の立地や地形的な制約によるものが大きいものとみら

れる。

祭祀遺物集中地点や完形土器集中地点といった、特定の遺物を集積する物送り場的な施設も大宮台地の個性とみることができよう。

また、長竹遺跡で観察された集中的な墓域の形成と、土壌内への完形土器の副葬行為は下総台地に濃密で、さらに大宮台地南端部にも飛び火し、現江戸川～鬼怒川筋を経由して館林台地の乙女不動原遺跡にも出現している。

大宮台地においてこれに対応する可能性があるのが、馬場小室山遺跡で検出された「積層墓」と考えることができ、現在の中川低地を挟んで、葬・墓制をめぐる異なる系譜が存在したものと考えることができる。

なお、大宮台地北東部に位置する高井東遺跡でも集落の切れ目において土壌群が検出されたが、形態や副葬品等、相違点が多い。

これと似た分布を示すのが大型住居跡、さらには長竹遺跡第43号住居跡に代表される焼土住居である。

住居跡の床面で焼土を検出する例は広く縄文時代後から晩期の集落遺跡でみとめられるところであるが、ここまで執拗な「火」へのこだわりは稀有といえる。石神貝塚や寺野東遺跡には焼土遺構が存在し、石神貝塚のものは住居床面への焼土の供給源と目されている。

長竹遺跡第43号住居跡や第536号土壌からは極度の火熱により器面が発泡・変形した土器が出土したが、これと同じものが祇園原貝塚でも出土している。また、長竹遺跡では石棒や石皿、玉類、玉斧等、特定の石器で強い被熱の痕跡を示す例が観察できた。

こうした火をめぐる儀礼の系譜はやはり中川低地の東岸を軸として南北に長く連なっているものと考えられる。

以上のように、現中川低地を挟んで中央窪地型集落跡を構成する諸要素において、地域性らしき

第 36 表 中央窪地型集落の属性表 (1)

	環状盛土 (貝塚)	斜面盛土	谷埋め立て	低地包含層	中央窪地	水場	焼土住居跡
長竹	○				○		○
後藤	○				○		○?
藤岡神社	○						○
乙女不動原							
寺野東	○			○	○	○	
高井東				○	○		
宮岡米川神社	○						
後谷	○			○	○	○	
赤城	○				○	○	
本上	○				○		
久台 (ささら)		○					
小林八東							
地獄田							
黒谷田端前							
真福寺貝塚	○			○			
雅楽谷	○			○	○		
前田							
清左衛門			○	○		○	
馬場小室山	○				○		
米川神社	○				○		
石神貝塚	○		○	○		○	○
宮合貝塚					○		
三輪野山貝塚	○	○			○	○	
曾谷貝塚	○				○		
姥山貝塚	○				○		
祇園原貝塚	○						○
西広貝塚	○						
山野貝塚	○		○		○		
針野長割	○	○	○				
宮見台	○				○		
加曾利南貝塚	○				○		

館林台地

大宮台地

下総台地

第 37 表 中央窪地型集落の属性表 (2)

	大型住居跡	墓域の形成	完形土器副葬	道路状遺構	祭祀遺物集中	完形土器集中	動物形土製品
長竹	○	○	○				○
後藤							
藤岡神社							◎
乙女不動原		◎	◎				
寺野東							
高井東		○					
宮岡水川神社	○						
後谷							
赤城					○	○	
本上							
久台 (ささら)							○
小林八束					○		
地獄田							
黒谷田端前						○	
真福寺貝塚		○?					
雅楽谷							
前田							
清左衛門							
馬場小室山							○
水川神社							
石神貝塚							
宮合貝塚		○	○			○	
三輪野山貝塚		◎		◎			
曾谷貝塚							
姥山貝塚							
祇園原貝塚	◎	◎					
西広貝塚		◎					
山野貝塚							
井野長割		◎		◎			
吉見台							◎
加曾利南貝塚	◎						

もの存在が指摘できた。

長竹遺跡の集落跡は、地形的には大宮台地本体と地続きでありつつも、北の館林台地や、そこから渡良瀬川水系へ中川低地東岸を介して接続する下総台地により近い様相を持っている可能性がある。

4. 動物型土製品について

長竹遺跡出土の土製品の中で注目されるのが一連の動物形土製品である。

現在整理中の包含層出土遺物を含めると非常にバリエーションに富んだ多数の動物形土製品が存在するが、今次報告においても遺構出土の動物型土製品および関連資料を報告した。なかでも第43号住居跡からは比較的纏まった資料が得られており、注目される。

第411図1・2は第43号住居跡から出土した2体の動物形土製品である。いずれも不整形だが、1は背鰭状の突起等の特徴からイノシシ、2はイノシシないし海獣と考えた。住居跡のからは安行2から3a式の土器が纏まって出土しており、本資料も同時期のものと考えられる。

イノシシ形の土製品は縄文時代の動物形土製品としては最もポピュラーなもので、東北地方の縄文時代後晩期を中心に多数の類例が報告されている。

形態やサイズは多岐にわたるが、頭と胴体の境界があいまいで、背鰭状の突起を持ち、短い四肢を持つ点が共通している。

埼玉県内の出土例としては、白岡市入耕地遺跡第2号住居跡出土の第411図3が知られている。共存する土器は堀之内から加曾利B1式で、本資料も後期のものと考えられる。

同遺跡からは他にも4の顔面や5の胴体が出土している。3は「海獣」と推定されているが、背鰭状の突起と短い脚と思われる部分を持っており、イノシシと考えて良いのではないかと。

このほか、未報告であるが吉見町三の耕地遺跡

からも3体のイノシシ形土製品が出土している。うち2体は後期中葉から晩期初頭の水場からの出土である。大きさは65～8cm程とのことで、比較的小型の個体であり、イメージとしては後出の藤岡神社のものに近いかもしれない。

下総台地の佐倉市吉見台遺跡からは2体のイノシシ形土製品が出土した。第411図7は無文で不整形であり、長竹遺跡の1・2に類似する。6は有文品で、上半身のみ残存する。やや細身で、弓なりに反った特徴的な胴部で、平行沈線や列点文が巡る。胴と頭の間にはごく緩やかな段を持ち、背鰭状の突起に加え頭部にたてがみ状の表現を持っている。

なお、同遺跡からは後出の大形土製品も出土している。

長竹遺跡の北の館林台地に位置する栃木県栃木市藤岡神社遺跡からは第411図8～11の4体のイノシシ形土製品が出土した。6～7cmと比較的小型であるが、無文で、顔の表現を持たない点は長竹例に類似する。10は細身かつ弓なりの胴体が吉見台の6に類似する。

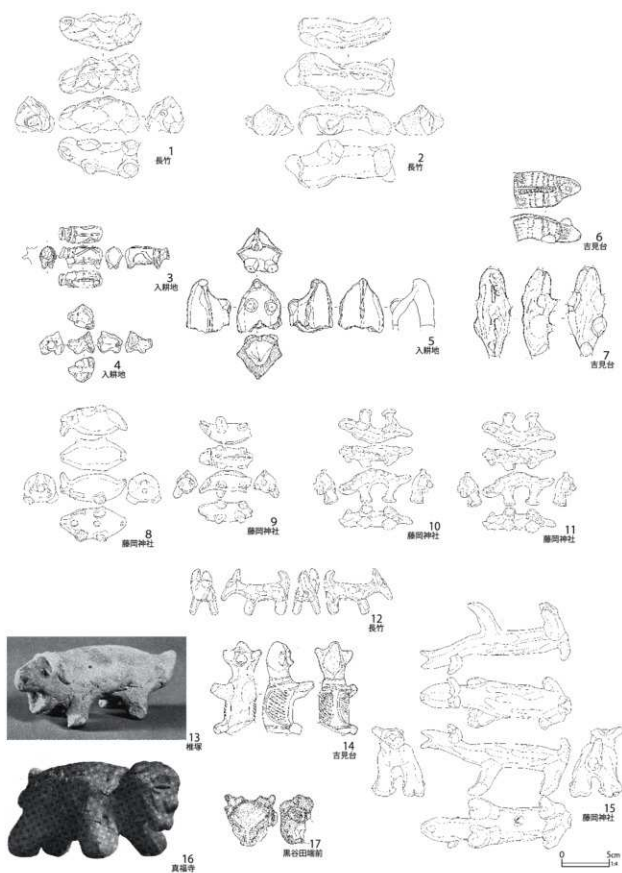
このように、動物形土製品は特定の遺跡から複数点が集中して出土する傾向がみられ、長竹遺跡もまた動物形土製品を他出する遺跡のひとつとみることができる。

第411図12は「長竹遺跡I」で既報告の大形土製品で、小型ながら写実的な表現を持った優品である。犬形の土製品は、イノシシ形のものと比べると出土点数も少なく、地域的にも偏りを持っている。

同図15は藤岡神社遺跡から出土した大形土製品である。長い耳とピンと丸まった尻尾、尻尾の下に盲孔を持つ点が長竹例に類似する。

四肢を踏ん張り、顔を突き出して激しく吠えている動的な表現が特徴的である。

13は霞ヶ浦南岸の稲敷市椎塚貝塚から出土した大形土製品である。ずんぐりしたプロポーション



第411図 動物形土製品集成 1

であるが耳の表現を持ち、巻き上がった尻尾と、なにより口を大きく開いて激しく吠えてる表現が藤岡神社例に類似している。

14は下総台地の佐倉市吉見台遺跡出土の犬形土製品とされたものである。胴部に擦り消し文様を持ち、首と腰に平行沈線文を巡らせる。眼の表現を持たず、鼻と口を頭部の下面に配置する等、写実的な表現とは言い難いが、頭部の左右に突き出した突起を耳と考えるなら、犬を象ったものと考えるのは妥当であろう。踏ん張った前肢、低く下げた頭、大きく開かれた口は、藤岡神社例に似る。

同遺跡は加曾利B式から安行1・2式を主体とする集落跡で、本資料も後期中葉から末葉のものであろう。

16はさいたま市真福寺貝塚出土の犬形土製品である。ずんぐりした胴体に太い四肢、細い首に逆三角形の頭部が付く。上部に突起で耳を表現するものの、平坦な顔の前面に目鼻が集中するありかたは人面の表現に近い。17はさいたま市黒谷田端前遺跡から出土した頭部で、16に類似するとされたものである。

以上、関東地方の犬形土製品について管見に触れた範囲で見てきたが、館林台地から現中川低地東岸を介して下総台地に至り、一部大宮台地の南端に侵入するという分布のありかたは、前段で触れた中央窪地型集落の一方の類型と重なっている。

藤岡神社例に代表される、四肢を踏ん張り、口を大きく開いて吠え立てる表現は多くの犬形土製品に共通しており、当時の家犬の狩猟犬としての性格をあらわにしている。この点、長竹例は前肢を踏み出しているものの顔の表現を持っておらず、どちらかというと静的な、やや異質なものとなっている。

また、16・17のように人面に近い顔面表現を持つものは大宮台地南端部に分布が限られ、この地域に特有のものであろう。

第412図1は蓮田市久台遺跡第4号住居跡から出土した中空の動物形土製品である。平面観楕円形、断面紡錘形の中空の胴部に鱗状の前肢を持ち、頭部と後肢を欠失している。

この種の土製品はそのプロポーションから「亀形」と表現される一方で、左右に突き出した鱗状の前肢と、腹面後方に揃った短い後肢の特徴から水鳥を象ったものとする説も根強く存在する。

同住居跡からは安行3aから3b式の土器が出土しているが、本資料はその文様構成から安行3a式に比定されている。

類似の土製品は破片ながら長竹遺跡でも出土しているが、すべて包含層中からの出土であるため、今回の報告には含めなかった。

2はさいたま市東北原遺跡第2号住居跡から出土した。北海道千歳市美々4遺跡出土のものと並んで著名な中空動物形土製品で、久台例もこれに酷似する。

長く突き出した首に逆三角形の頭部を配し、左右に離れた眼と平たい口を表現する。前肢は胴部中段の真横に配し、後肢は胴部下面に寄って、久台例にない種の表現を持つ。背面に安行3b式に共通の三叉文を描く。

3はさいたま市馬場小室山遺跡第3号住居跡出土の中空動物形土製品である。接合関係にはないが、同一個体とされている。前面に円孔を持つ中空の下半身を中心に、上半身の腹側、前肢等が出土している。後肢と尻尾が平坦面を構成して直立するポーズは、美々4遺跡のものに近い。縄文を持たず、沈線のみで粗雑な三叉文や弧線文を描いている。

同住居跡からは後期から晩期にかけての安行式の土器が出土しているが、上層の主体を占めるのは安行3c式である。

4も同じ住居跡の下層から出土したもので、上半身から頭部にかけて残存する。胴部は中空で断面楕円形、胸に円孔を持ち、顔を腹側に突き出す

等、一連の中空動物形土製品と似た造りを持つが、無文である。

頭部の先端に刺突と単沈線により小作りの眼・口・耳を配しているため、亀や水鳥というよりはイタチのような小動物を想起させる。

5は藤岡神社遺跡出土の頭部で、東北原例に類似する。藤岡神社出土資料は多種多様な動物形土製品を含んでいる点に特徴があり、この点で長竹遺跡と非常に近いありかたを示している。

中空動物形土製品の分布は、大形土製品のそれとはある意味対称的な様相を持っているということができる。

それは大宮台地を中心として、藤岡神社遺跡や長竹遺跡のような動物形土製品を多出する遺跡において、館林台地側でも若干の出土をみる。

これは中空みずく土偶とも共通の傾向を示しており、その成因には後期中葉以来の異形台付き土器の伝統や、東北地方からの大型遮光器土偶の



第412図 動物形土製品集成 2

製作技法のインパクトが想定される。一方で、美々4遺跡例との関係性は今後の課題となろう。

このように、後期中葉から晩期初頭にかけての時期に、関東地方中～東部にかけて、動物形土製品の量的な増加と多様化がみられた。

それはこの地域における中期大環状集落の解体と後期初頭の退潮期を経て、新たな秩序のもとで地域集団が再編と復興に向かった時期と重なっている。中央窪地型集落の出現は、その象徴といえよう。

また、これらの動物形土製品は、特定の遺跡から集中して出土する傾向がみられ、さらに形象する動物の種類において、地域性が存在する可能性が指摘できた。

動物形土製品の主流を占めるイノシシ形土製品は地域を問わず普遍的に存在するのに対し、犬形土製品は中川低地東岸から下総台地、さらに北の館林台地にかけて分布し、中空動物形土製品は大宮台地を中心に出土している。また、大宮台地南端部では両者が混在する状況が見て取れる。

これは、前段で述べた中央窪地型集落の地域性とも呼応し、その一部をなすものと考えることができよう。

5. 土製円盤について

今次報告（第440・441集）に係る遺構出土の土製円盤は、合計877点。その内訳は第413図のとおりである。

北盛土・南盛土とも、Ⅱ類＝打製品がⅠ類＝磨製品の約4～5倍と、量のうえで圧倒している。使用する土器片の時期は、時期判断可能な精製土器については安行1式が多く、粗製土器についても後期後葉から晩期初頭と考えられるものが大半である。

使用部位に関しては、磨製品では突起・隆帯等を持たない胴部破片＝ⅠBウ類が70%を超えるのに対し、打製品では各種の口縁部＝ⅡA類が90%に迫っている。

本文事実記載中でも述べたように、今次報告に係る土製品、特に土偶・耳飾りの中で、結髪や耳等の突出部分、突起・隆帯等を故意に取り除いたとみられるものが目についた。このため、当初は打製の土製円盤についても突起・隆帯を取り除く行為に意味を持つものと考えられた。

確かに、集計の結果をみると、ⅡAⅠ類の隆帯を持つ口縁部を使用するものが南盛土で約60%、北盛土で約50%となっており、圧倒的多数を占めている。

しかし、これに次ぐのが突起を持つⅡAⅡ類ではなく、単純な肥厚口縁であるⅡAウ類であり、特に北盛土では後者が25%と、前者の約15%を大きく上回っている点に注意したい。

粗製の紐線文系土器と精製土器とのそもそもの個体差を考慮するとしても、これは突起等の装飾を持つ破片を選択的に使用しているとは必ずしも言えない数字なのではないか。

また、隆帯を持つⅡAⅠ類にあっても、外面の隆帯そのものよりも肥厚し突出した口唇表面に執拗に打撃を加える例が目立っている。

第414図は、Ⅰ類・Ⅱ類それぞれの土製円盤の最大径と重量の分布を示したものである。

サイズの面では磨製品であるⅠ類が最小2cm・最大7cmの範囲に収まっており、9cm前後のイレギュラーなものも北盛土に3点存在する。

これに対し、打製品であるⅡ類では最小3cm・最大9cmと、Ⅰ類より一回り大きくなっている。分布の中心は、Ⅰ類では4cm台前半に存在するのに対し、Ⅱ類では6cm弱により広範に分布している。手に持ったときに、磨製品が指数本で支持する程度のサイズを中心に2cmとさらに小さなものまで存在するのに対し、打製品は手に握り込む程度の大型のものまで存在していることがわかる。

さらに、最大径／重量の分布の傾斜をみると、磨製品よりも打製品のほうが重量寄りに急な傾斜を描いていることがわかる。これは、サイズが同

土製円盤の分類

I 類：磨製タイプ

土器片の周縁を整形研磨して
円盤状に再加工したもの

II 類：打製タイプ

土器片の周縁部から中央部に
向かう複数回の打撃が観察で
きるもの、

あるいは突起・隆帯等を打撃
により人為的に取り除いたと
判断できるもの。

A：口縁部

ア：突起を持つ口縁

イ：隆帯を巡らせる口縁・折り返し口縁

ウ：断面肥厚する口縁

エ：その他の口縁

B：胴部

ア：突起を持つ胴部

イ：隆帯を持つ胴部

ウ：その他の胴部

C：底部

D：その他・不明

南盛土

I A ア	2	4.1%	II A ア	34	13.1%
I A イ	1	2.0%	II A イ	155	59.8%
I A ウ	0	0.0%	II A ウ	45	17.4%
I A エ	0	0.0%	II A エ	10	3.9%
I B ア	3	6.1%	II B ア	3	1.2%
I B イ	8	16.3%	II B イ	5	1.9%
I B ウ	35	71.4%	II B ウ	7	2.7%
I C	0	0.0%	II C	0	0.0%
I D	0	0.0%	II D	0	0.0%

49

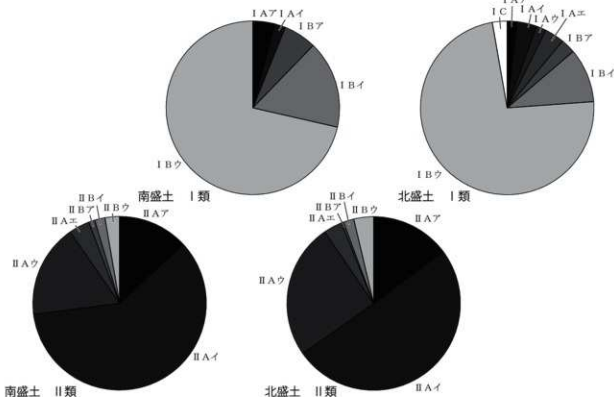
259

北盛土

I A ア	2	1.8%	II A ア	68	14.8%
I A イ	4	3.7%	II A イ	232	50.4%
I A ウ	2	1.8%	II A ウ	116	25.2%
I A エ	4	3.7%	II A エ	16	3.5%
I B ア	3	2.8%	II B ア	2	0.4%
I B イ	11	10.1%	II B イ	9	2.0%
I B ウ	80	73.4%	II B ウ	17	3.7%
I C	3	2.8%	II C	0	0.0%
I D	0	0.0%	II D	0	0.0%

109

460



第413図 土製円盤のタイプと比率

じであれば、打製品土製円盤は隆帯や突起を取り去ってもなお磨製品にくらべ「重たい」破片を使用していることを意味している。

要約するに、打製土製円盤の使用法は、
・多数の土器片のなかから比較的重量と厚み、隆帯や突起等の突出部を持つ破片を選んで、
・複数の指、ときに掌で握り込むように支持し、
・周縁部から破片の中心部に向かって剥離を伴うような衝撃が加わる

ものであると推定することができる。これは明らかに「叩打具」の特徴である。

縄文時代の叩打具にはいわゆる敲石が存在し、使用目的としては堅果等の食品加工や石器（骨角器）等の道具類の製作が挙げられる。

また、明確な証拠を残さないものの、抜歯や動物供犠等の儀礼的な行為においてもある種の叩打具が使用されたことは疑いない。

食品加工に関わる敲石（石皿・磨石・凹石とセットとなる）の使用痕はあばた状の細かい叩打が集中するもので、打撃＝剥離を繰り返す打製土製円盤のそれとは異なっている。したがって、使用法

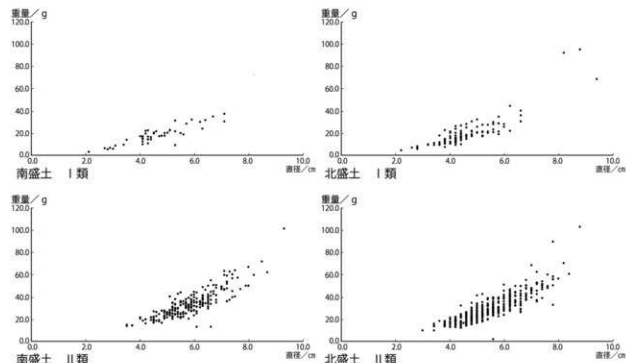
についても上記に挙げたなかで食品加工以外のものを想定すべきだろう。

打製土製円盤は土器片を特に整形することなく使用しており、その点でも円形を志向する磨製品とは明らかに異なっている。そこには使い捨て・大量消費的な性格が伺える。

つまり、通時代的に存在する恒常的なツールとしての叩打具（敲石や骨製品など）を使用できないような用途が、後期後葉に極めて短期間存在しており、打製土製円盤はそのため使用され、使用後すみやかに廃棄されたのではないのか。

一般的な叩打具を使用しなかった背景にはある種の禁忌が推察される。ここでは、打製土製円盤はなんらかの儀礼行為に用いられた使い捨ての叩打具である可能性を指摘しておきたい。

それがなぜ後期後葉、とりわけ安行1式期という限られた時期に高い頻度で出現したのか。現状ではその理由にまで踏み込む材料を持たないが、一連の焼土住居跡に象徴されるような火にまつわる儀礼の高揚との関りを想定することもできるかもしれない。



第414図 土製円盤の重量分布

引用・参考文献

- 赤熊浩一他 2014『長谷遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第413集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 阿部芳郎 2001『縄文時代後晩期における大形堅穴建物址の機能と遺跡群』『貝塚博物館研究紀要』第28号 千葉市立加曽利貝塚博物館
- 我孫子市史編纂委員会 原始・古代・中世部会編 2005『我孫子市史 原始・古代・中世編』我孫子市教育委員会
- 新屋雅明他 2007『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集
- 石井 寛 2008『華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41 横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会
- 上野修一・瓦吹 堅1992『ミミヅク土偶の変遷』『シンポジウム 縄文時代後・晩期 安行文化 発表要旨』埼玉考古学会
- 江坂輝彌他 1974『土偶芸術と信仰』『古代史発掘3』講談社
- 奥野友生 2010『久保地遺跡－第1・3地点』白岡町遺跡調査会調査報告書 第9集 白岡町遺跡調査会
- 奥野友生 2012『久保地遺跡－第4・7地点』白岡町遺跡調査会調査報告書 第10集 白岡町遺跡調査会
- 小倉和重 2009『宮内井戸遺跡—ちばりサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査（8）—』三葉地所株式会社・印旛郡市文化財センター
- 小栗信一郎他 2015『三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書』流山市埋蔵文化財調査報告 Vol55 流山市教育委員会
- 忍澤成規 1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ 市原市教育委員会・市原市文化財センター
- 金子直行 2006『調査の成果と提起する諸問題』『中野遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第322集
- 川島高宗 2015『生産と宴餐からみた上縄文時代の社会的複雑化』株式会社六書房
- 酒詰伸男 1962『埼玉県真福寺貝塚第2地点第1号住居址について』『人文學』第59号 同志社大学人文学会
- 岡本孝夫他 2004『下木遺跡—第1地点発掘調査報告書—』松戸市遺跡調査会
- 高橋龍三郎他 2014『縄文時代後・晩期社会の研究—千葉県印西市師戸 戸ノ内貝塚発掘調査報告書—』早稲田大学文学部考古学研究室調査報告 早稲田大学文学部学術院考古学コース
- 田部井 功 1974『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第25集 埼玉県遺跡調査会
- 千葉県史料研究財団編 2000『千葉県の歴史資料編考古1（旧石器・縄文時代）県史シリーズ9』千葉県
- 手塚達弥 2001『藤岡神社遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第197集 栃木県教育委員会 とちぎ生涯学習文化財団
- 中村和夫他 2013『地獄田遺跡』久喜市文化財調査報告第1集 埼玉県久喜市教育委員会
- 西野雅人他 2017『史跡 加曽利貝塚 経路報告書』千葉市教育委員会
- 橋本保司 1995『下平遺跡』『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』合角ダム水没地域総合調査会（小鹿野町教育委員会）
- 浜野美代子 1992『安行期の土偶』『シンポジウム 縄文時代後・晩期 安行文化 発表要旨』埼玉考古学会
- 林田利之 1999『吉見台遺跡A地点—縄文時代後・晩期を主体とする集落跡と貝塚の調査—』佐倉市・印旛郡市文化財センター
- 『馬場小室山道跡に学ぶ市民フォーラム』実行委員会編 2007『環状盛土遺構』研究の現段階—馬場小室山道跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域— 株式会社三陽社
- 古谷 涉他 2001『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』株式会社野村不動産・財団法人千葉市文化財調査協会
- 三宅敦久 1993『縄文時代後・晩期のムラ』『東国史論』第8号 群馬考古学研究会
- 柳田博之他 2015『馬場小室山道跡』さいたま市道跡調査会報告書 第163集 さいたま市道跡調査会
- 山形洋一 1985『東北原道跡発掘調査報告—第6次調査—』大宮市文化財調査報告第19集 大宮市教育委員会
- 弓 明義 1980『狩猟の折り』『企画展 最新出土品展』埼玉考古学会
- 宮崎朝雄 1976『黒谷田端前遺跡』岩槻市道跡調査会
- 渡辺清志 2000『浜平岩除／入沢西／入沢東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第243集

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ながたけいせき						
書名	長竹遺跡Ⅱ						
副書名	首都圏広域区域境防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						
シリーズ番号	第440集						
編著者名	吉田 稔 渡辺清志						
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船本4丁目4番地1 TEL. 0493-39-3955						
発行年月日	西暦2018（平成30）年3月22日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 道跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ながたけいせき 長竹遺跡 (第1-3・4次)	さいたまけいせき 埼玉県加須市大あかねのふのち 埼玉大越字樋ノ口 620-1・702-1 ほか	11210 039	36° 11' 13"	139° 36' 50"	20101201～ 20110331 20120406～ 20130331 20130401～ 20131031	3,321	堤防建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
長竹遺跡 (第1-3・4次)	集落跡	縄文時代	住居跡 掘立柱建物跡 土壇 柱穴列 埋壘 焼土跡 粘土塊 ピット 遺物集中	29軒 3棟 68基 3基 3基 25基 3箇所 1293基 6箇所	土器 土製品 石器 石製品 骨製品	縄文時代後・晩期に形成された環状盛土南側を調査した。盛土遺構の遺存状況は極めて良好であった。盛土の径は190mに及び、関東地方有数の規模である。第43号住居跡は一边12mの「大形堅穴建物跡」で床面が焼土で覆われていた。また多くの祭祀遺物が出土した。	
要約							
長竹遺跡は利根川沿いの埋没台地上に立地し、縄文時代から近世にわたる複合遺跡である。本書では縄文時代(第二期)後期から晩期にかけて形成された環状盛土遺構の南側から検出された遺構・遺物に関する報告書である。 盛土外径は想定190mにおよび、環の内側から外側に向かって形成されていた。環の内側の窪地は基盤土壇のローム層が間平されたような状況であった。後期前葉から晩期中葉にかけての遺構は、盛土の最も標高の高い範囲から集中して検出された。住居跡のうち、開始期にあたる後期前葉では環のやや内側から1軒のみ検出され、後期中葉から後葉にかけては環の外側に拡張し、軒数も増加していた。各住居跡は、同一地点での拡張建て替えが観察行われ、床面のなかげも行われていた。 最大規模を誇る一边12mの第43号住居跡は、後期後葉から晩期初頭まで継続して営まれた長期継続型の所謂「大形堅穴建物跡」であった。最低2回の拡張建て替えを行っていた。最終段階では複数の伊勢が備えられ、床面が焼土で覆われていた。また、遺物は一説の住居跡とは異なり、装飾品や祭祀用具、狩猟用具等が主に壁寄りから出土した。 晩期に入ると規模が小型化し、軒数も減少していた。住居跡のプランは、後期前葉の円形から後期中葉の「D」字型へ変化した。さらに後期後葉前半の隅円方形、後葉後半から晩期前葉までの方形へ変化するなかで、晩期ではプランが崩れ、不整形で柱穴入り口部の配置も規則的配置とならない住居跡が検出された。晩期中葉に入ると住居跡は検出されず、環の内側から検出された掘立建物跡や、円形柱穴列等が当該期の遺構として検出された。また、内縁傾斜面から、多数の小型ピットが晩期包居層から掘り当てられて検出された。 土壇は住居跡が密集する地域よりやや環の内側から検出され、袋状で貯蔵穴が想定される土壇も検出された。また、土壇高が3基検出された。北盛土で検出された土壇基群の延長線上に位置していた。第27号土壇は長方形で壮年女性の全身骨格が仰臥伸展形で検出された。頭位上からは、晩期の注口土器が完形で置かれていた。 遺物は、縄文時代早期から晩期中葉にかけての膨大な量が出土し、祭祀遺物、狩猟用具、加工具、装身具、日用雑器等に至るまで幅広く出土した。							

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第440集

長 竹 遺 跡 II

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

平成30年3月14日 印刷

平成30年3月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／巧和工芸印刷株式会社